福岡市埋蔵文化財調査報告書第730集

SUKI ZAKI KO FUN
鋤崎古墳

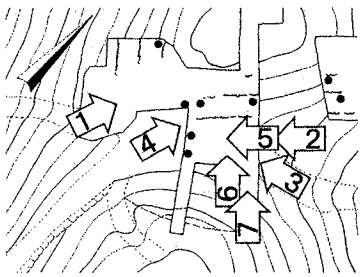
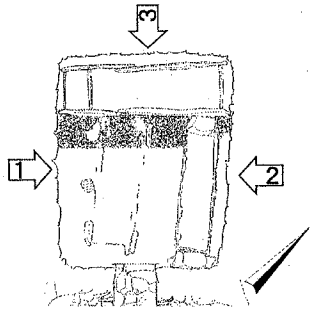
－1981～1983年調査報告－

2002
福岡市教育委員会

正　誤　表　　（福岡市埋蔵文化財調査報告書第730集　2002）

頁	行	誤	正
例言	2	西区今宿大字青木	西区今宿青木
例言	8	柳沢一男、	柳沢一男(現 宮崎大学教育文化学部)、
目次		第6章 まとめ……133	第6章 まとめ‥(柳沢一男)133
1	5	高く突帯を	高い突帯を
1	12	森貞治郎	森貞次郎
1	20	生田柾生	生田征生
3	表1 4	1979	1976～77
6	註 9	二宮忠司編 1981	二宮忠司編 1991
6	註 9	榎本義嗣・屋山洋編 1981	榎本義嗣・屋山洋編 1996
13	図8 バースケール	0＿＿＿＿0m	0＿＿＿＿4m
14	図9 バースケール	0＿＿＿＿0m	0＿＿＿＿4m
14	図10 バースケール	0＿＿＿＿0m	0＿＿＿＿4m
15	図11 バースケール	0＿＿＿＿0m	0＿＿＿＿4m
16	図12 バースケール	0＿＿＿＿0m	0＿＿＿＿4m
17	図13 バースケール	0＿＿＿＿0m	0＿＿＿＿4m
18	図14 バースケール	0＿＿＿＿0m	0＿＿＿＿4m
18	図15 バースケール	0＿＿＿＿0m	0＿＿＿＿4m
19	図16 バースケール	0＿＿＿＿0m	0＿＿＿＿4m
19	図17 バースケール	0＿＿＿＿0m	0＿＿＿＿4m
21	図18 バースケール	0＿＿＿＿0m	0＿＿＿＿4m
22	30	埴輪37周辺か等、	埴輪37周辺から、
22	38	(埴輪57)を	(埴輪59)を
22	図19 バースケール	0＿＿＿＿0m	0＿＿＿＿4m
23	図20 バースケール	0＿＿＿＿0m	0＿＿＿＿4m
24	12	(埴輪検63、64)	(埴輪63、64)
24	図21 バースケール	〔バースケール欠落〕	〔図20のスケールに同じ〕
27	14	外側を押さを置いている。	外側に礫を置いている。
28	3	焼土壙(図26、	焼土壙6(図26、
29	11	基部以下の	一段突帯以下の
29	28	中軸線を中に	中軸線を中心に
29	40	鰭付楕円形半截	鰭付半裁楕円形
30	5	得できないが、	特定できないが、
31	2	100箱ほどの	58箱ほどの
32	25	また、341、40	また、39、40
64	13	(図51下、	(図52下、
64	13	(図51上、	(図52上、
70	図56 遺物番号	32	33
70	図56 遺物番号	33	32
73	30	表7のとおり	表6のとおり
74	32	鏡面を下に向ける。	鏡面を上に向ける。
74	34	下に向けて置かれ	上に向けて置かれ
75	図62 遺物番号	32	33
75	図62 遺物番号	33	32
76	8	1号棺沿い鉄斧	1号棺に沿って鉄斧
77	21	長方板板革綴短甲	長方板革綴短甲
82	1	表8・9	表7・8
82	3	表8・9に示し	表7・8に示し
82	12	石材により3分類され	石材により4分類され

正　誤　表　　（福岡市埋蔵文化財調査報告書第730集　2002）

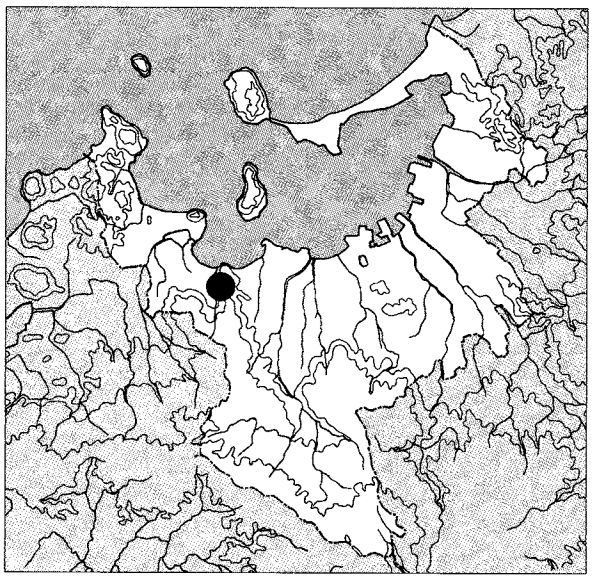
頁	行	誤	正
83	11	(A～B群)	(A～D群)
85	図68　遺物番号	80z	79z
85	図68　遺物番号	79z	80z
99	1	(図69、	(図81、
99	3	607が608の上に	47が48の上に
99	8	607は56.2×	47は56.2×
99	20	608は59.0×‥‥呈し、607と	48は59.0×‥‥呈し、47と
99	31	は607と同様で、	は47と同様で、
99	図81　バースケール	0 ＿＿＿＿＿ 40m	0 ＿＿＿＿＿ 40cm
105	39	B群は一人の作り手によるもので	B群は一人あるいはそれに近い人数の作り手によるもので
110	12	表12のとおりで	表11のとおりで
114	註　(3)	『古文化談義 第12集』	『古文化談叢』 第12集
119	6	3号棺棺内－仿製鏡	3号棺棺外－仿製鏡
図版 9	位置図	[右図]	〔削除〕
図版 12	説明　5	(北東から)	(北西から)
図版 12	説明　7	(南東から)	(南西から)
図版 12	説明　8	(南東から)	(南西から)
図版 12	説明　10	(南東から)	(南西から)
図版 22	説明　6	(北から)	(南から)
図版 22	説明　7	[欠落]	1～3段斜面の葺石（南東から）
図版 23	説明　1	(南西から)	(南東から)
図版 23	説明　2	(北東から)	(北西から)
図版 25	説明　3	(南東から)	(北東から)
図版 38	説明　3	棺内北小口部の鏡と棺外出土遺物(南西から)	棺内南小口と棺外出土遺物(北西から)
図版 38	説明　4	棺内南小口と棺外出土遺物(北西から)	棺内北小口部の鏡と棺外出土遺物(南西から)
図版 22	位置図		
図版 34	位置図		

福岡市埋蔵文化財調査報告書第730集

SUKI ZAKI KO FUN

鋤崎古墳

－1981～1983年調査報告－



遺跡略号　SUK-1
遺跡調査番号　8202

2002
福岡市教育委員会

序

九州北部の玄界灘に面した福岡市周辺地域は、早くから中国・朝鮮半島との交流の門戸として、交流の証となる遺跡が数多く残されています。本書に収められた鋤崎古墳も、４～５世紀における朝鮮半島と北部九州の交流史をたどるうえで重要な位置を占める一例です。

鋤崎古墳は福岡市西区今宿青木の山中にある墳長62mあまりの前方後円墳です。墳丘の遺存状態がよく、はやくに家形埴輪が採集されたこともあって、研究者のあいだで注目されてきた古墳でした。しかし、これまで調査のメスが加えられることもなく、詳細を知ることができませんでした。

福岡市教育委員会は将来にわたって保護・保存すべき遺跡の一つとして本古墳を取り上げ、1981～83年にわたって国庫の補助を受けて発掘調査を行いました。その結果、墳丘の形態や構造に関する詳細な知見とともに、わが国最古期の横穴式石室を確認することができました。

発掘調査終了直後に調査概報を作成しましたが、諸般の事情で正報告の作成が遅れていました。幸い、鋤崎古墳はその重要性から平成13年８月13日付けで国史跡に指定され、ここに本報告書を刊行することとなりました。

本書が日本古代史、東アジア交流史研究の学術資料として活用されるとともに、埋蔵文化財の重要性についていっそうの理解深化の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査から報告書刊行にいたるあいだに貴重なご助言・ご指導をいただきました諸先生、関係機関の各位、ならびに調査にあたって格別なご配慮をいただきました土地所有者のかたがたに、こころから感謝申し上げます。

平成14年３月29日

福岡市教育委員会

教育長　生田征生

例言

1．本書は、福岡市教育委員会が主体となり、1981～83年に重要遺跡確認調査として実施した、福岡市西区今宿大字青木に所在する鋤崎古墳の調査報告書である。
2．遺構実測は調査担当者のほか、調査参加者全員で行った。浄書は担当者のほか中村啓太郎、蔵冨士寛の助力を得た。
3．遺物の実測は、鏡を森下章司（大手前大学文学部）、鉄製品・埴輪・埴棺を加藤一郎（早稲田大学大学院生）の各氏が、玉を杉山富雄、短甲を比佐陽一郎、土師器・須恵器を久住猛雄がそれぞれ担当し、浄書は上記担当者のほか、大濱奈緒、松末香織の助力を得た。
4．遺構写真は一部を石丸洋氏（九州歴史資料館）に依頼したほか、柳沢一男、杉山富雄が行い、遺物写真は杉山が行った。
5．本書の執筆は、杉山、柳沢一男、森下章司、橋本達也（鹿児島大学総合研究博物館）、鈴木一有（浜松市立博物館）、加藤一郎（早稲田大学大学院生）、久住猛雄、比佐陽一郎、片多雅樹が担当した。なお英文要約の作成は林田憲三氏の助力を得た。それぞれの執筆分担は、文末と目次に記した。
6．本書の編集は柳沢の補助のもとに杉山が行った。
7．本書に収録した実測図・写真・遺物をはじめ、鋤崎古墳の調査にかかわる全資料は福岡市埋蔵文化財センターで保管されている。活用願いたい。

凡例

1．本書で使用する方位は磁針である（国土地理院第Ⅱ系座標北からの偏差は西偏６度20分）。
2．本書で使用する標高は、海抜である。
3．横穴式石室の説明で使用する方向は、石室入口部から奥壁側を見て右・左と呼ぶ。
4．挿図と写真図版に使用する遺物番号は同一である。
5．墳丘測量図、調査区平面図の等高線は、主曲線0.25m、計曲線１mの間隔である。

目　次

序言
例言
第１章 はじめに …… 1
第２章 古墳の位置と周辺の遺跡 ……柳沢 一男・杉山 富雄 … 2
第３章 調査の記録
　１ 調査の概要と経過 ……柳沢 一男 … 9
　　（１）調査の概要
　　（２）調査の経過
　２ 墳丘・外表施設の調査
　　（１）発掘調査前の墳丘観察……柳沢 一男 …11
　　（２）墳丘の調査……杉山 富雄 …11
　　（３）その他の埋葬施設……杉山 富雄 …25
　　（４）墳丘上の遺物出土状況……杉山 富雄 …29
　　（５）埴輪……加藤 一郎 …31
　　（６）墳丘出土土器……久住 猛雄 …58
　３ 横穴式石室の調査
　　（１）横穴式石室の調査……柳沢 一男 …62
　　（２）棺と副葬品……柳沢 一男 …69
　　（３）副葬品
　　　１）鏡……森下 章司 …78
　　　２）玉　類……杉山 富雄 …82
　　　３）銅　釧……加藤 一郎 …88
　　　４）竪　櫛……加藤 一郎 …88
　　　５）鉄　器……加藤 一郎 …88
　　　６）短　甲……比佐 陽一郎 …95
　　　７）土製板……加藤 一郎 …99
第４章 考察
　１ 墳丘と外表施設 ……柳沢 一男 …101
　２ 鋤崎古墳の埴輪の位置づけと諸問題 ……加藤 一郎 …105
　３ 鋤崎古墳出土の土師器について ……久住 猛雄 …109
　４ 横穴式石室の検討 ……柳沢 一男 …110
　５ ２号棺について ……加藤 一郎 …115
　６ 鋤崎古墳出土鏡の位置づけと特色 ……森下 章司 …118
　７ 鋤崎古墳の鉄製品が提起する諸問題 ……鈴木 一有 …120
　８ 素環頭鉄刀の把の構造について ……加藤 一郎 …122
　９ 鋤崎古墳出土短甲の意義 ……橋本 達也 …127
第５章 鋤崎古墳出土資料の自然科学的調査について ……比佐 陽一郎・片多 雅樹 …130
第６章 まとめ ……133
英文抄訳 ……136

挿　図

図１　鋤崎古墳の位置 …… 2
図２　今宿平野周辺の古墳分布 …… 2
図３　今宿平野の前方後円墳 …… 4
図４　鋤崎古墳周辺の地形 …… 7
図５　調査前の墳丘 …… 8
図６　調査経過 …… 10
図７　調査区の配置 …… 12
図８　Ｋ区 …… 13
図９　Ｎ区 …… 14
図10　Ｗ１区 …… 14
図11　Ｅ１区 …… 15
図12　Ｗ２区 …… 16
図13　Ｅ２区 …… 17
図14　Ｗ２区断面 …… 18
図15　Ｗ３区 …… 18
図16　Ｅ２区断面 …… 19
図17　Ｅ３区 …… 19
図18　Ｂ・Ｃ区 …… 21
図19　Ｓ区断面 …… 22
図20　Ｗ４区・Ｓ区 …… 23
図21　Ｅ４区 …… 24
図22　埴輪棺２ …… 26
図23　埴輪棺３ …… 27
図24　埴輪棺４ …… 27
図25　小石棺５ …… 28
図26　焼土壙６ …… 28
図27　遺構７ …… 28
図28　形象埴輪出土位置 …… 30
図29　円筒埴輪(1) …… 36
図30　円筒埴輪(2) …… 37
図31　円筒埴輪(3) …… 38
図32　円筒埴輪(4) …… 39
図33　円筒埴輪(5) …… 40
図34　円筒埴輪(6) …… 41
図35　円筒埴輪(7) …… 42
図36　円筒埴輪(8) …… 43
図37　円筒埴輪(9) …… 44
図38　朝顔形埴輪(1) …… 45
図39　朝顔形埴輪(2) …… 46
図40　鰭、楕円筒埴輪 …… 47
図41　靱形埴輪(1) …… 48
図42　靱形埴輪(2) …… 49
図43　家形埴輪(1) …… 50
図44　家形埴輪(2) …… 51
図45　家形埴輪(3) …… 52
図46　囲形埴輪、蓋形埴輪、不明形象埴輪 …… 53
図47　鰭付半裁楕円筒埴輪、壺形埴輪 …… 54
図48　壺形埴輪、円筒埴輪 …… 55
図49　墳丘出土土器(1) …… 59
図50　墳丘出土土器(2) …… 60
図51　石室崩壊状況 …… 63
図52　墓道・前庭部と閉塞状況 …… 65
図53　玄室内突起石配置状況 …… 66
図54　横穴式石室 …… 67
図55　玄室内の棺配置と別図の配置 …… 69
図56　玄室内の棺と遺物出土状況 …… 70
図57　１号棺 …… 71
図58　１号棺遺物出土状況 …… 72
図59　突起石から転落した素環頭鉄刀 …… 72
図60　玉Ａ・Ｂ群出土状況 …… 73
図61　副室内遺物出土状況 …… 74
図62　２号棺 …… 75
図63　３号棺 …… 76
図64　短甲の出土状況 …… 76
図65　鏡(1) …… 80
図66　鏡(2) …… 81
図67　玉類(1) …… 84
図68　玉類(2) …… 85
図69　玉類(3) …… 86
図70　１号棺棺内出土鉄剣・銅釧・竪櫛・刀子 …… 88
図71　１号棺副室出土鉄製品(1) …… 89
図72　１号棺副室出土鉄製品(2) …… 90
図73　１号棺上突起出土鉄製品 …… 91
図74　２号棺棺外出土鉄製品 …… 92
図75　３号棺内出土鉄製品 …… 93
図76　３号棺棺外出土鉄斧・鉄鎌 …… 94
図77　短甲部材(1) …… 96
図78　短甲部材(2) …… 97
図79　短甲部材(3) …… 98
図80　短甲部材の配置復元 …… 98
図81　土製板 …… 99
図82　鋤崎古墳墳丘復元 …… 102
図83　埴輪樹立位置復元 …… 104
図84　古式土師器高坏接合法分類 …… 109
図85　横穴式石室天井部の復元 …… 111
図86　鋤崎古墳に先行する横穴系墓室 …… 112
図87　鋤崎古墳の横穴式石室 …… 112
図88　鋤崎式の横穴式石室 …… 113
図89　２号棺(１) …… 116
図90　２号棺(２) …… 117
図91　素環頭鉄刀の把の構造 …… 123
図92　東大寺山古墳の青銅製環頭 …… 125
図93　画像石にみる素環頭鉄刀の佩用 …… 125
図94　木製剣装具の左右対称性 …… 125
図95　布留遺跡出土の木製把装具 …… 125
図96　鋤崎古墳出土長方板革綴短甲の関連型式展開模式図 …… 127

図　版

図版１　古墳遠景と墳丘
図版２　墳丘の調査
図版３　後円部頂面と横穴式石室の調査
図版４　横穴式石室の調査
図版５　横穴式石室内遺物出土状況
図版６　玄室内の棺と遺物の出土状況
図版７　玄室内の棺と遺物の出土状況
図版８　横穴式石室の構造
図版９　古墳遠景
図版10　調査前墳丘
図版11　墳丘の調査１
図版12　墳丘の調査２：後円部斜面
図版13　墳丘の調査３：東くびれ部（Ｅ２区-１）
図版14　墳丘の調査４：東くびれ部（Ｅ２区-２）
図版15　墳丘の調査５：東くびれ部（Ｅ２区-３）
図版16　墳丘の調査６：西くびれ部（Ｗ２区-１）
図版17　墳丘の調査７：西くびれ部（Ｗ２区-２）
図版18　墳丘の調査８：西くびれ部（Ｗ２区-３）
図版19　墳丘の調査９：前方部側面
図版20　墳丘の調査10：前方部隅角（Ｗ４区）
図版21　墳丘の調査11：前方部前面（Ｓ区-１）
図版22　墳丘の調査12：前方部前面（Ｓ区-２）
図版23　墳丘の調査13：前方部頂面（Ｂ・Ｃ区）
図版24　墳丘の調査14：後円部頂面（Ｋ区-１）
図版25　墳丘の調査15：後円部頂面（Ｋ区-２）
図版26　横穴式石室の調査１：天井石崩落状況
図版27　横穴式石室の調査２：３次埋葬墓道
図版28　横穴式石室の調査３：竪坑状墓道の調査
図版29　横穴式石室の調査４：２次埋葬墓道
図版30　横穴式石室の調査５：１次埋葬墓道
図版31　横穴式石室の調査６：１次埋葬墓道と前庭部
図版32　横穴式石室の調査７：遺物出土状況-１
図版33　横穴式石室の調査８：遺物出土状況-２
図版34　横穴式石室の調査９：遺物出土状況-３
図版35　横穴式石室の調査10：１号棺-１
図版36　横穴式石室の調査11：１号棺-２
図版37　横穴式石室の調査12：２号棺-１
図版38　横穴式石室の調査13：２号棺-２
図版39　横穴式石室の調査14：３号棺
図版40　横穴式石室の調査15：石室の構造-１
図版41　横穴式石室の調査16：石室の構造-２
図版42　横穴式石室の調査17：石室の構造-３
図版43　横穴式石室の調査18：石室墓壙の調査
図版44　付属埋葬施設の調査１
図版45　付属埋葬施設の調査２
図版46　鏡（１）
図版47　鏡（２）
図版48　鏡（３）
図版49　鏡（４）
図版50　鏡（５）
図版51　玉類（１）
図版52　玉類（２）
図版53　鉄器（１）
図版54　鉄器（２）
図版55　鉄器（３）
図版56　短甲
図版57　埴輪（１）
図版58　埴輪（２）
図版59　埴輪（３）
図版60　埴輪（４）
図版61　埴輪（５）・土師器
図版62　２号棺・土製板

表

表１ 今宿・飯氏地区大型墳一覧 …… 2
表２ 1982・3年の調査進行状況 …… 9
表３ 墳丘各部位標高と比高 ……25
表４ 埴輪観察表(１) ……56
表５ 埴輪観察表(２) ……57
表６ 主室内出土玉一覧 ……72
表７ 玉類計測表(１) ……86
表８ 玉類計測表(２) ……87
表９ 短甲地板計測値 ……95
表10 墳丘の平面規模 ……101
表11 天井石のサイズ ……110
表12 鋤崎式横穴式石室一覧 ……114
表13 西日本における古墳時代前期甲冑と長方板革綴短甲 ……128
表14 赤色顔料の蛍光X線分析結果 ……132
表15 青銅製品の蛍光X線分析結果 ……132

第１章　はじめに

調査から報告書作成にいたる経過

鋤崎古墳は、福岡市西区今宿青木字鋤崎424-5･6に所在する全長62mあまりの前方後円墳である。丘陵先端部に後円部を配し、前方部を丘陵高位側に向け、前方部前面を丘尾切断によってつくりだしている。くびれ部が細くしまり前方部先端があまり開かない墳形や、突出度が高く突帯をもつ円筒埴輪や家形埴輪の一部が採集され、古式の前方後円墳として注目されてきた。しかし、これまで墳丘測量図もなく、採集された埴輪を除いて古墳の詳細はまったく不明のままであった。

福岡市教育委員会は、市域内に存在する埋蔵文化財のなかで、将来にわたって保存の必要があるとみとめられる遺跡・古墳について、基礎資料の収集・作成をすすめている。本古墳もその一つとして以前から計画を重ねてきたもので、1981年度から３ヶ年にわたって調査を行った。実施にあたっては重要遺跡確認調査として文化庁から国庫の補助を受けた。

調査にあたって、福岡県教育委員会、九州歴史資料館から多大なご配慮を受けた。調査中は、森貞治郎・小林行雄・岡崎敬・横山浩一・小田富士雄・西谷正の諸先生から貴重なご指導・助言を受け、九州大学文学部考古学研究室の全面的なご協力をいただいた。また葺石の写真測量には奈良国立文化財研究所・同埋蔵文化財センターのご協力を得た。古墳所在地所有者の是松興産株式会社（是松上次代表)、仁田隆三氏には快く古墳への立ち入りと調査のご許可をいただいた。以上の多くの方々のご理解とご協力の下に、発掘調査を実施することができたことに、厚くお礼申し上げます。

調査組織

調査主体	福岡市教育委員会	
調査総括	文化課課長	甲能　貞行（前任）・生田　柾生
	埋蔵文化財第２係長	柳田　純孝（前任）・折尾　　学
調査庶務	埋蔵文化財第１係	古藤　国生・岡嶋　洋一
調査担当	埋蔵文化財第２係	柳沢　一男・杉山　富雄
調査補助	田崎博之・牟田慎郎・宮井善朗・古野徳久・土井基司（九州大学考古学研究室)、野村俊之（別府大学生)、赤司善彦（明治大学生)、南秀雄（京都大学大学院生）	

調査最終年度（1983）に調査概要を記した概報を刊行したが、その後、調査担当者は緊急調査におわれ整理期間の確保ができないまま、17年が経過した。その間、調査担当者の一名が転職し、報告書刊行の目途が立たない状況であった。

2001年、福岡市教育委員会は鋤崎古墳の国史跡指定のため文化庁と協議を重ね、本古墳と周辺の用地購入を行い、2001年８月13日付けで国史跡の指定を受け、同日告示された。

こうした動向を受けて、市教育委員会は2001年度事業として報告書を作成することとなり、杉山を担当として整理作業を行った。整理作業関係者はつぎのとおりである。

整理総括	埋蔵文化財課　課長	山崎　純男
	埋蔵文化財第２係長	力武　卓治
整理担当	主任文化財主事	杉山　富雄
整理補助	加藤　一郎（早稲田大学大学院生）	

整理報告書作成にあたって、柳沢一男（宮崎大学教育文化学部）の協力を受けたほか、鏡を森下章司（大手前大学人文学部)、橋本達也（鹿児島大学総合研究博物館)、鈴木一有（浜松市立博物館)、埴輪・鉄製品を加藤一郎（上記）の各氏に原稿執筆をお願いした。出土資料の自然科学的分析を比佐陽一郎・片多雅樹（市埋蔵文化財センター)、短甲の報告を比佐、土師器を久住猛雄（埋蔵文化財課）が担当した。

第２章　古墳の位置と周辺の遺跡

鋤崎古墳は九州北端の福岡県福岡市西区今宿青木に所在する。1941年（昭和16）に福岡市に合併する以前のこの地域は、今宿村として糸島郡に属していた。地勢的には標高419mの叶嶽から北の長垂丘陵に延びる山塊によって東の早良平野と画され、西に広がる糸島平野の北東端部にあたる。鋤崎古墳は叶嶽から北西に派生する丘陵尾根末端に位置する。鋤崎古墳のすぐ北側を東に延びる解析谷を貫いて、太宰府から肥前北部を経由して壱岐・対馬を結ぶ古代官道が設けられた。その点で鋤崎古墳付近は、糸島平野と早良平野を結ぶ交通要衝の地にあたる。

今宿青木を東端として西の周船寺付近までの地形は、博多湾に沿って形成された砂丘と、標高416mの高祖山に挟まれた東西３km、南北1.5kmほどの沖積低地と、八つ手状に解析された高祖山から派生する枝丘と谷地形からなる。この一帯を今宿平野と

図１　鋤崎古墳の位置

1 鋤崎古墳、2 野方古墳群A群、3 野方古墳群B群、4 野方古墳群D群、5 笠間谷古墳群、6 広石古墳群Ⅰ群、7 広石古墳群Ⅱ群、8 広石古墳群Ⅲ群、9 広石古墳群Ⅴ群、10 広石古墳群Ⅶ群、11 広石古墳群Ⅷ群、12 広石古墳群Ⅸ群、13 広石南古墳群A群、14 広石南古墳群B群、15 高崎古墳群、16 草刈古墳群、17 草場古墳群、18 長垂山古墳群、19 油坂古墳群A群、20 油坂古墳群B群、21 鋤崎古墳群A群、22 鋤崎古墳群B群、23 本村古墳群A群、**24** 本村A1号墳、25 相原古墳群A 群、26 相原古墳群B群、27 相原古墳群C群、28 相原古墳群D群、29 相原古墳群E群、30 相原古墳群F群、31 相原古墳群G群、32 相原古墳群H群、33 相原古墳群J群、34 谷上古墳群A群、35 谷上古墳群B群、**36** 谷上B1号墳、37 谷上古墳群C群、**38** 今宿大塚古墳、39 新開古墳群B群、40 新開古墳群C群、41 新開古墳群D群、42 新開古墳群E群、43 新開古墳群F群、44 女原古墳群A群、45 女原古墳群B群、46 女原古墳群C群、47 女原古墳群D群、48 女原古墳群E群、**49** 下谷古墳、**50** 若八幡宮古墳、**51** 山ノ鼻1号墳、**52** 山ノ鼻2号墳、53 徳永古墳群A群、54 徳永古墳群C群、55 徳永古墳群D群、56 徳永古墳群G群、57 徳永古墳群H群、**58** 丸隈山古墳、59 飯氏古墳群A群、**60** 兜塚古墳、61 飯氏古墳群B群、**62** 飯氏B14号墳、63 飯氏古墳群C群、64 飯氏古墳群D群、65 飯氏古墳群E群、66 飯氏古墳群F群、67 飯氏古墳群G群、68 飯氏古墳群I群、69 飯氏古墳群J群、**70** 飯氏二塚古墳、71 ウラタ古墳群、72 高祖東谷B古墳群、73 キド古墳群、**74** 飯氏鏡原古墳

図２　今宿平野周辺の古墳分布

呼び慣わしているが、砂丘後背地は江戸時代以降の埋め立てで耕地化した部分がおおく、弥生・古墳時代には博多湾が深く湾入していたと想定される。この平野周辺は縄文時代にさかのぼる遺跡は少ないが、弥生早期以降の遺跡は数多くの確認されている。

弥生時代の遺跡

博多湾に面した砂丘上の今宿遺跡群では、５次にわたる調査の結果、住居址などは未検出だが、前期から後期にわたる土器が出土し、継続して集落が営まれていたことがわかる。甕棺墓、土壙墓からなる墳墓群も全域に広がり、立会調査で前期から中期の甕棺等の出土があった(1)。北西部の調査では、土壙墓から細形銅剣と勾玉が出土した(2)。遺跡は砂丘東端まで広がり、前期から中期の甕棺、土壙墓からなる墓地を確認した(3)。砂丘の北西端に連なる今山遺跡では、産出する玄武岩を利用して前期末～中期に石斧を生産し、北部九州一円に供給している(4)。

山麓部と砂丘後背湿地の間は台地となり、弥生時代集落が立地する。台地上は調査が少ないうえに後世の開発による破壊が著しいが、中期～後期の集落が散見される。鋤崎古墳と広い谷を隔てて西方の青木遺跡では、弥生時代中期～後期の集落が確認され、中期初頭の貯蔵穴、中期中頃の竪穴住居、後期の溝、甕棺墓、井戸を確認している(5)。西方の大塚遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居を確認している(6)。鋤崎遺跡では、谷に沿った狭い山麓裾の微高地でも中期の竪穴住居が確認され(7)、平野内には中期以降、広い範囲に集落が営まれていたことが予想される。

台地末端部には今宿五郎江遺跡があり、台地端部で後期の環濠の一部が確認されている(8)。台地落ち部では、微高地に掘建柱建物、土壙、井戸、低地部に溝が確認されている。中期から後期前半の遺物が出土し、大量の土器の他に小銅鐸、鋳造鉄斧等の金属製品、木器、石製品が出土した。木器には農耕具の他に漁撈具があり、石製品に多量の石錘を含むことと合わせて、農業生産のみでなく、前面の海域とかかわりをもった生活様態を知ることができる(9)。

今宿～飯氏地域の古墳時代首長墳系列

今宿平野の東端と南端を画する長垂丘陵西麓と高祖山の北麓には、総数300基を越える古墳が確認されている。ほとんどは６世紀中葉以降の群集墳だが、その中に13基の前方後円墳（帆立貝形を含む）が認められる。そのうち下谷古墳はすでに消滅したが、削平時に横穴式石室構築材と推測される大型転石が多量にみられた伝聞から、６世紀中葉以降の可能性が高い。また本村Ａ１号墳は墳丘を削平されているが横穴式石室の下部が畑地のなかに埋没している可能性がある。このほかに前方後円墳があ

表１　今宿・飯氏地区大型墳一覧

古墳名	所在地	墳形・規模	埋葬施設	埴輪	副葬品・その他	地図	調査年
鋤崎	今宿	前円・62	横穴式石室	○	鏡６、素環頭鉄刀、鉄鉾、長方板革綴短甲など	1	1981～83
本村Ａ１号	今宿	前円・約20?	横穴式石室		墳丘破壊	24	未
今宿大塚	今宿	前円・約64	横穴式石室？	○	二重周堀、円筒・朝顔形・形象埴輪	38	1979
谷上Ｂ１号	今宿	前円・37	横穴式石室		鉄鏃、大刀、馬具、管玉	36	1985
下谷	徳永	前円・？	横穴式石室？		1960年代に破壊・消滅	49	未
若八幡宮	徳永	前円・約47	木棺直葬		三角縁神獣鏡・方形板革綴短甲・銅製有孔円盤	50	1970
山ノ鼻１号	徳永	前円・50	竪穴系槨？			51	1989
山ノ鼻２号	徳永	前円・75	？			52	1990・91
丸隈山	周船寺	前円・約85	横穴式石室	○	鏡２、巴形銅器、鉄刀、鉄剣、鉄鏃、玉類	58	1984
飯氏鏡原	飯氏	前円・80？	？	○	墳丘削平。くびれ部付近調査。埴輪・須恵器	74	1998
兜塚	飯氏	帆貝・53＋α	横穴式石室	○	横矧板鋲留短甲、馬具・鉄鏃・玉類・須恵器	60	1995
飯氏二塚	飯氏	前円・約50	横穴式石室		鉄刀・鉄鏃・馬具・須恵器	70	1992・93
飯氏Ｂ14号	飯氏	前円・37	横穴式石室		鉄鏃、馬具、ガラス小玉、耳環	62	1996・97

った可能性もあるが現状では確認できていない。これまで前方後円墳とされてきた女原C14号墳は円墳と思われるので除外した。かつて丸隈山古墳の報告書作成時にこの地域の首長墳系譜に多少言及したが、その後の確認調査の所見によって、訂正すべき事柄が少なくない。

まず、前稿で若八幡宮古墳に先行する可能性のある古墳として山ノ鼻１号墳をあげたが、山ノ鼻１・２号墳が調査され、本地域の出現期様相を具体的に議論できるようになったことは重要である。

山ノ鼻１号・２号墳と若八幡宮古墳の３基の前方後円墳は、平野西寄りに突出する丘陵先端に位置し、半径300mの範囲に近接している。このなかでもっともさかのぼるのは山ノ鼻２号墳である。後円部の削平が著しく後円部の規模・形態にやや問題を残すが、くびれ部から撥形に開く前方部の形状は確実である。地山を削りだして墳丘基底面をつくりだし、葺石を構築しない[10]。出土遺物が皆無のため確定できないが、福岡平野の那珂八幡古墳の墳形とほぼ同形・同規模であるという[11]。築造時期は下っても２期のうちに収まり、１期にさかのぼる可能性が高い。

若八幡宮古墳は後円部に異形の木棺を直葬し、三角縁神獣鏡・銅製有孔円板・方形板革綴短甲を副葬する[12]。方形板革綴短甲は大阪府紫金山古墳出土例とともに最古例[13]で、出土した供献土器は布留

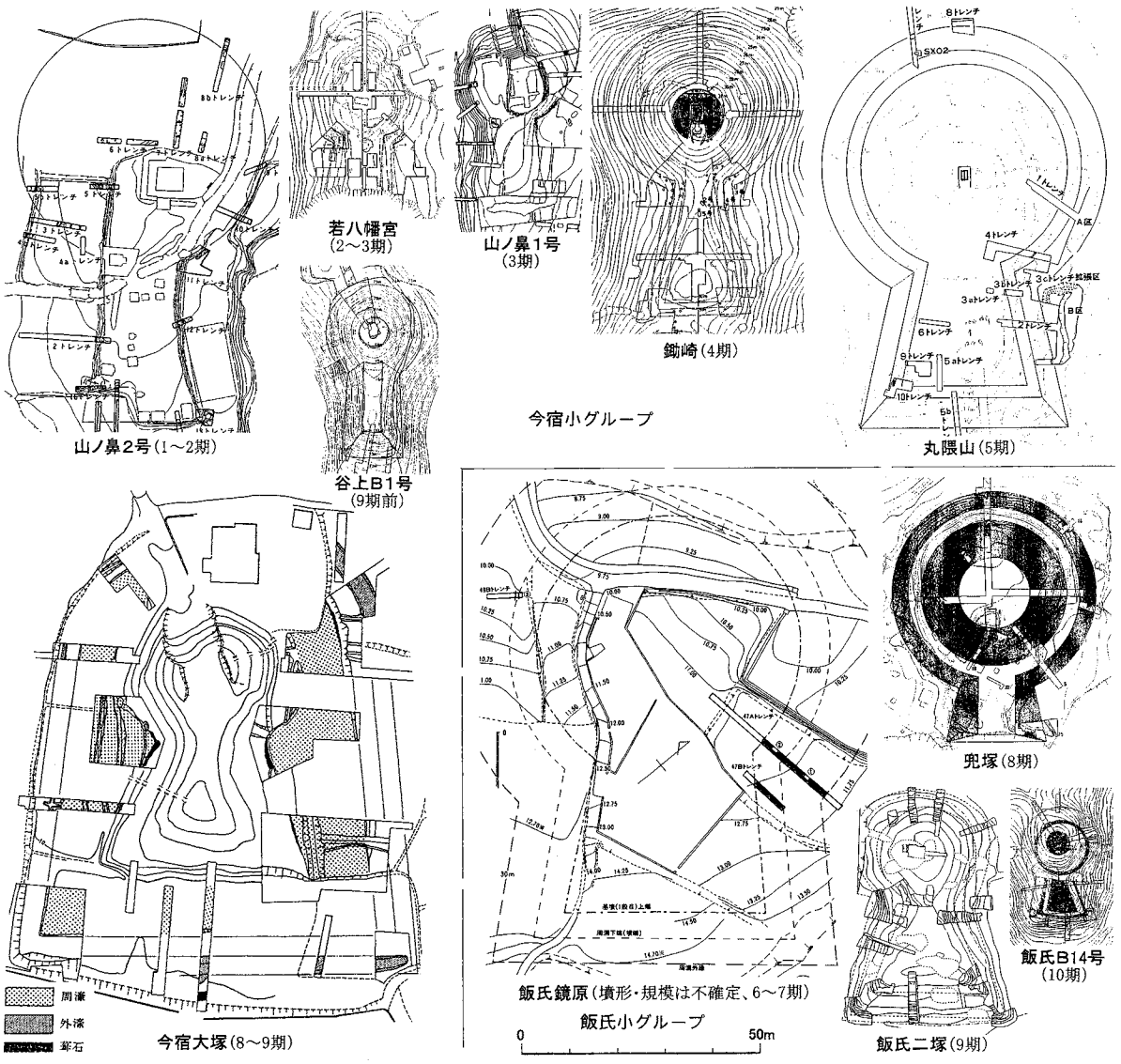


図３　今宿平野の前方後円墳

式１式新相に平行するという指摘から[14]、２期末～３期初頭に位置づけておきたい。

山ノ鼻１号墳は後円部上部の削平にともない埋葬施設が破壊されているが、攪乱土中に赤色顔料を塗布した玄武岩割石が認められ、竪穴式石槨であった可能性が高い。鼓形器台片や舶載獣帯鏡片が出土している[15]。土師器は若八幡宮古墳よりやや後出し布留２式と併行し、３期とみられる[16]。このように今宿平野では１～３期にわたって、３基の前方後円墳が近接して築造されている。鋤崎古墳は、この一群に後続し、墓域を東に移動している。

鋤崎古墳に続く丸隈山古墳は、西に３kmほど移動している。墳長85m、後円部３段、前方部は２ないし３段築成、外表に葺石を施し、１段テラスに円筒埴輪列がめぐる。円筒埴輪は川西編年Ⅱ～Ⅲ期、盾形・水鳥形の形象埴輪を伴う。埋葬施設は玄武岩割石積みの横穴式石室、玄室内に２基の箱形石棺がある。後円部の１段テラスを掘り込んで埴輪棺を設ける[17]。副葬品のうち、現在、２面の仿製鏡のほか、巴形銅器、鉄刀、鉄剣、鉄鏃、玉類が残る。５期とみてよいであろう。

丸隈山古墳の後、今宿平野側に６世紀を前後する今宿大塚古墳までの前方後円墳は未確認である。今宿大塚古墳は、墳長62m、２段築成で下段にのみ葺石を構築する。幅広い盾形周堀のほか、地形の高位側に外堤と外周溝がめぐる。埴輪は１段テラスと外堤に樹立する。円筒埴輪はＶ期、武人・馬形の形象埴輪を伴う[18]。８期～９期前葉であろう。

今宿地域で前方後円墳の築造が中断する時期、高祖山北西麓の飯氏地域で前方後円墳の築造が始まる。この地域は川原川に面して怡土平野北部に開けている。

この地域では新たに検出された飯氏鏡原古墳を含めて、同一丘陵上先端の半径400m内に近接して兜塚・飯氏二塚の３基の古墳が分布する。

そのうちもっともさかのぼるのは飯氏鏡原古墳である。墳丘の大半が削平されているが、くびれ部付近から埴輪が検出されており前方後円墳の可能性が高い。報告では80m前後の墳長が想定されているが周辺調査を行って規模を確定する必要があろう。埴輪は野焼き焼成と窖窯焼成のものが混じり、須恵器も細片のため時期を確定できないが、６～７期と推定されている[19]。

兜塚古墳は円丘部径約43m、現存する前方部長12m、墳長53m以上の帆立貝形古墳と推測され、Ｖ期の埴輪をともなう。円丘中央に前方部側に開口する横穴式石室がある[20]。石室入口部に短い羨道が接続する異形だが番塚式の特徴を備え、８期後葉とみてよいであろう。

この一群の南端に位置する飯氏二塚古墳は、墳長約50m、後円・前方部とも２段築成で葺石があるが埴輪をともなわない。後円部側面に開口する横穴式石室がある。石室の破壊が著しいがＭＴ15型式併行期の須恵器が出土し、横穴式石室の形態からみても９期と見てよい[21]。以上、飯氏鏡原古墳から飯氏二塚古墳の３基は連続する築造系譜と認められる。

飯氏二塚古墳を最後に墳長50mを越える前方後円墳は姿を消し、その後は20～40m程度の小型前方後円墳が丘陵上の群集墳地帯に築造されている。すでに消滅した下谷古墳は先述したようにＴＫ10型式以降の築造と思われる。今宿地域の谷上Ｂ１号墳は墳長37mでＴＫ10型式の早い段階に併行し[22]、本村Ａ１号墳はかつて存在した横穴式石室の形態・構造からＴＫ43型式と推測される[23]。飯氏地域の飯氏Ｂ14号墳は墳長約25m、前方部平面形が剣菱形である。出土須恵器はＭＴ85型式に併行する[24]。これらはいずれも群集墳のなかに営まれ、群集墳小グループの形成端緒に位置するものが多い。このように、６世紀前～中葉における墳丘規模の著しい縮小と古墳立地の転換は、前方後円墳が以前と異なる性格に転換したことを示している。

なお、これら前方後円墳群は今宿グループとして一括して捉えてきた[25]が、飯氏地域の一群は今宿首長系譜とは異なる系譜として区別すべきではないかと思われる。同様な指摘はすでに常松幹雄から

提出されているが[26]、理解に多少の違いもある。要点を記すとつぎのとおりである。

まず、兜塚・飯氏二塚古墳のあいだに、両者を凌駕する規模の今宿大塚古墳が今宿地域に築造されたことを重視したい。また飯氏出土と伝える石釧の存在から、飯氏鏡原古墳に先行し今宿の山ノ鼻１号墳～鋤崎古墳に併行する前方後円墳などの大型墳の存在が想定される。この推測に誤りなければ、飯氏地域では３～４期から９期にわたる１世紀半ほどのあいだに、４基の首長墳が継続したと想定しうる。

飯氏地域は西に広がる怡土平野部に開いた環境にあり、この首長系譜は今宿地域とは異なった基盤に成長した勢力であろう。５期をもって衰退した今宿系譜に替わり今宿平野部の覇権を確立したとみたい。したがって、これまで今宿系譜（グループ）と呼んできた一群を今宿小グループと飯氏小グループに区分したい。

本地域に所在する首長墳の概要は以上のとおりである。1980年以降の確認調査によって、首長系譜を構成する全古墳の墳形・規模・埋葬施設・築造時期のおおよそが判明した。こうした事例は全国的にも少なく、貴重である。調査成果を活かした保護・保存策が策定されることを期待したい。

本書に報告する鋤崎古墳は、山ノ鼻１号墳に続いて築造された首長墳とみて間違いないであろう。墳丘規模はさほど大きくないが、完成した３段築成の墳形、４段にわたる円筒埴輪列を巡らし、家形、靱形などの形象埴輪を伴う。九州における前期末～中期初頭の古墳としては定式化した古墳属性を備えた数少ない例である。一方、後円部最上段に構築された横穴式石室は、列島最古期に位置する。伝統的な竪穴系埋葬施設から外来系の埋葬製施設に転換した背景、古墳時代前半期の東アジアとの関係、対外交渉で九州北部勢力が果たした役割、葬送儀礼の変容など、多くの問題を提起している。

（柳沢 一男・杉山 富雄）

【註】

(1) 井沢洋一編 1994『今宿遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第389集
(2) 折尾学編 1981『今山・今宿遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集
(3) 池田祐司・久住猛雄編 2000『JR筑肥線複線化地内遺跡埋蔵文化財調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第654集
(4) 下条信行編 1967『今山遺跡（１）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第22集
(5) 佐藤一郎編 1987『青木遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第169集
　小林義彦編 1993『青木遺跡２』福岡市埋蔵文化財調査報告書第350集
(6) 佐々木達彦編 1984『今宿 高田遺跡』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第10集、福岡県教育委員会
(7) 長家伸編 1994『鋤崎遺跡１』福岡市埋蔵文化財調査報告書第388集
(8) 小畑弘己編 1986『今宿五郎江遺跡１』福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集
(9) 二宮忠司編 1981『福岡市 今宿五郎江遺跡 Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集
　榎本義嗣・屋山洋編 1981『今宿五郎江遺跡Ⅲ・徳永Ａ遺跡Ⅲ・丸隈山遺跡群Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第479集
(10) 小林義彦編 1993『山ノ鼻２号墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第353集
(11) 吉留秀敏 2000「筑前地域の古墳の出現」『古墳発生期前後の社会像』、九州古文化研究会
(12) 柳田康雄ほか 1971「若八幡宮古墳」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第２集、福岡県教育委員会
(13) 橋本達也 1996「古墳時代前期甲冑の技術と系譜」『雪野山古墳』考察編、雪野山古墳発掘調査団
(14) 久住猛雄編 1999『飯氏古墳群Ｂ群第14号墳調査報告書（2）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第615集
(15) 小林義彦編 1992『山ノ鼻１号墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第309集
(16) 註(13)文献。
(17) 柳沢一男編 1986『丸隈山古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書債146集
(18) 柳沢一男 1977「今宿大塚古墳」『福岡平野の歴史　緊急発掘された遺跡と遺物』、福岡市歴史資料館
(19) 註(13)文献。
(20) 杉山富雄編 1996『兜塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第474集
(21) 常松幹雄編 1995『飯氏二塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第435集
(22) 菅波正人編 1997『谷上古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第499集
(23) 早くに下條信行氏から教示を受けた。
(24) ①米倉秀紀ほか編 1998『飯氏古墳群Ｂ群第14号古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第584集、②註(14)文献
(25) 柳沢 1992「地域の概要一筑前一」『前方後円墳集成』九州編
(26) 註(21)文献、53頁

図４　鋤崎古墳周辺の地形

図５　調査前の墳丘

第３章　調査の記録

１　調査の概要と経過

（１）調査の概要

本調査は、古墳の保存策作定にあたっての基礎資料の整備を目的とした。したがって、古墳の保存状態の確認とともに、墳形・規模・外表構造の把握、築造時期の確定、さらに埋葬施設の確認も視野に含むものであった。

本章で記述するように、墳丘の調査は13個所の調査区を設定した。調査区によって段築・斜面葺石・樹立埴輪の遺存程度に多少の違いはあるが、全体のおおよそを把握しえた。墳丘外表構造と円筒埴輪列・形象埴輪の配列などは、当該期の基準資料となりうる内容であろう。

埋葬施設は、後円部頂面中央の窪みが墓室崩壊によるものと判明した段階で関係機関と協議し、その結果を受けて内部調査に踏み切ることとなった。検出された墓室は、日本最古段階の特異な構造の横穴式石室であった。玄室天井部の崩壊によって墓室内は未掘状態で保存されており、埋葬棺と各棺にともなう副葬品内容が明らかとなった。横穴式石室受容時の石室構造と棺の配置法や、副葬品構成から想定される埋葬観念・儀礼などを解明するうえで、貴重な資料となるであろう。

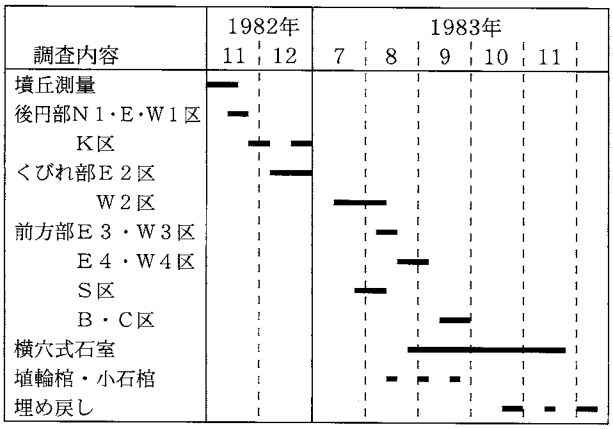
調査は1981～83年の３ヶ年にわたって実施した。初年度（1981）は、測量基準点の設置と古墳周辺域と墳丘の測量を業者委託した。発掘調査は82・83年の２年度にわたり、表２のように行った。

（２）調査の経過

1982年度

11月上旬に調査に入る。樹木の伐開と平行して墳丘測量図の補正を行う。

表２　1982・3年の調査進行状況



11月中～下旬、後円部にN・E１・W1トレンチ（本墳では、それぞれ「区」と名付けた）を設定し発掘を開始する。後円部の段築３段と、斜面の葺石を確認した。次いで後円部頂面（K区）の発掘に入る。表土下から礫敷面があらわれ、敷石上の広範囲に家形埴輪片の散乱を確認した（図６①、以下同）。また敷石周囲は一段低くなり、円筒埴輪列を構成する埴輪基部が倒れ込む状態で数本分検出された。

12月上旬、墳丘東側のくびれ部を中心に後円・前方部にまたがるＥ２区の発掘開始。斜面下部から、転落した葺石に混じり多量の埴輪を検出。円筒埴輪が主体だが、鰭付が含まれていることに驚く。前方部段築は３段、墳頂平坦面端、１・２段テラス、墳丘基底面の４段に円筒埴輪列がめぐることが判明。Ｅ２区の３ヶ所から埴輪棺が検出されたが、詳細調査は次年度に繰り越すことにした。

12月中～下旬、Ｅ２区調査と併行して後円部頂の敷石面実測図作成（②）。

12月30日、２年度調査終了。

1983年度

７月18日、調査に入る。西側くびれ部を中心としたＷ２区の調査開始。東側くびれ部と同じように３段築成を確認。円筒埴輪列の配列も等しいことが判明した（③）。

７月下旬、前方部前面構造確認のためＳ区の調査に入る。前方部南側の丘陵とのあいだを切断する切り通し状の地山開削面を確認し、１・２・３段斜面の葺石とテラスの埴輪列を検出。さらに、前方部の基底面の円筒埴輪列は、前面中央付近で鍵の手状に折れ曲がり、前面は埴輪列で囲まれた空間を構成することが判明。内部から土師器が出土。

８月上旬、前方部側面の墳端と段築確認のため、Ｅ３・Ｗ３区の調査を開始。

８月中旬～下旬、前方部隅角確認のためＷ４・Ｅ４区の調査に入る。隅角はすでに流出していたが、前方部側面の葺石を確認。

８月25日～９月５日、奈良国立文化財研究所の協力を得て葺石の写真測量を行う（④）。残念ながら図化予算がなく、その成果を本報告書に掲載できなかった。

８月17日、後円部埋葬施設の調査開始。墳頂面から0.6m下で崩壊した石室の天井石を検出し、露出した壁面から横穴式石室と判明した。

一方、石室前面から閉塞石と墓道を確認。羨道端を大型板石で閉塞後、背面に板石で厚い控積みを行いながら埋め戻された構造が明らかとなる。

９月上旬～中旬、横穴式石室の調査が進行し、玄室内に３基の埋葬棺を確認。副葬品が出土し始める（⑤）。石室の調査と平行して前方部墳頂平坦面のＢ・Ｃ区の調査を行う。その後、各調査区の細部調査と実測・写真撮影、埴輪の取り上げを行う（～11月上旬）。

９月下旬、玄室内の副葬品の全容がほぼ明らかとなる。写真・16㎜映画撮影後、副葬品出土状況の実測作業を行う。墓道の断ち割り調査で、下部から前庭部を伴う竪坑状墓道の存在を確認。

10月７日、市役所で記者発表を行う。列島最古の横穴式石室と報道され、８・９日に多くの見学者が訪れた。

10月中旬、副葬品取り上げ。下旬から石室実測図の作成（～11月下旬）。墳丘各調査区の調査を終了し、埋め戻しを行う。一方、横穴式石室の墓壙確認のため、石室周囲にトレンチを入れる。その結果、一辺８メートルの隅丸方形の二段墓壙と判明した。

12月上旬、横穴式石室の調査を終了し埋め戻しを行い（⑥）、２ヶ年にわたる全調査過程を終了した。

（柳沢　一男）

図６　調査経過

２　墳丘・外表施設の調査

（１）　発掘調査前の墳丘観察

標高419mの叶嶽から北西に派生した、標高26m（くびれ部基底面付近）の丘陵端上に位置し、樫などの常緑広葉樹林で覆われている。後円部を北西の丘陵低位側に、前方部を南東の高位側に向ける。墳丘の現状はわずかな窪みが墳丘各所に認められるが、周辺地形や墳丘に大きな地形改変がない良好な状態で遺存する。

後円部は墳丘斜面が全体に24°ほどの傾斜をなす。墳丘側面では標高24m付近で傾斜変換線が観察され墳端と予想されたが、背面側の北西部周辺は地山流出のためか傾斜がきつく判然としない。墳頂は標高31ｍを前後して直径12m前後の平坦面となる。中央がわずかに窪み既掘痕跡かと思われた。

くびれ部付近は等高線の25～26.5m付近に傾斜の緩い面が広がり、墳丘基底面の整地が予想された。前方部側面は前端に向かって次第に墳端の傾斜変換線が不明瞭となり、外方に開く26.5mの等高線付近が墳端かと想定される程度である。これに対して、前方部前面側は丘陵尾根線を切断する切り通し状の大きな窪みがあり、地山削り出しによる墳丘整形が予想された。

後円部頂の平坦面からくびれ部頂までの比高は約2.5mと大きいが、前方部頂面は前端に向かって次第に高まる。前方部標高は30.4m、後円部頂と前方部長の比高差は約１ｍと小さい。なお、後円部・前方部の墳丘斜面に明確な段築痕跡は認められなかった。

以上の観察所見から、墳長は約61m前後、後円部経約40m、同高５ｍ（くびれ部から）くびれ部幅12m、前方部前端幅28m、同高3.5m（くびれ部から）程度の規模が想定された。

（２）　墳丘の調査

１）　発掘調査区の位置（図７）

古墳長軸方向の調査(Ｎ区、Ｓ区、Ｂ区、Ｃ区)、墳丘横断方向の調査(Ｅ１区、Ｗ１区、Ｅ３区、Ｗ３区)についてはトレンチよる調査を行った。また、墳丘の主要部については面的に拡張した調査を行った。それぞれ、後円部墳頂部にＫ区、くびれ部にＥ２区およびＷ２区、前方部隅角部にＥ４区およびＷ４区を設定し、前方部前面でＳ区を拡張した。以下、調査区の配列に従い報告する。

２）　後円部の調査

Ｋ区（図８,図版24～26)

後円部墳頂部および主体部調査のための調査区。径14m、平面の面積で153㎡を調査した。前述のとおり、中央に窪みがあり、表土の黄褐色の粘質土を除去した地表下0.2mで敷石を検出した。石材は、拳大～枕大の花崗岩円礫・亜円礫を主とし、板状の玄武岩角礫が混じる。礫の広がりには疎密があり、分布の境界部も曖昧で、全体として墳頂平坦面の肩部あたりまで分布するが、西側では斜面にも分布する。詳細は第２節「横穴式石室の調査」の項で触れるが、礫は0.3～0.5mほどの盛土上に敷かれている。

中央部の窪みは、墳丘長軸方向に4.0m、横断方向に3.5mの範囲にあり、その底面は墳頂平坦面最高所31.3mよりも0.4mほど低い。墳頂平坦面南西部に拳大の礫が特に集中し、墳丘中軸線に対し斜め方向の縁辺を成す。対応する墳丘中軸線上の横断方向に玄武岩大礫の縁部が、前面に玄武岩板石が集中した状態で露出していたが、調査の結果石室閉塞の上端部であることがわかった。

石敷の礫の間と石敷の縁辺部から、埴輪が破片で出土した。器表が風化した個体が多く、家形埴輪の細片が顕著に含まれている。特に墳丘中央部から北西方向にかけて多く出土した。家形埴輪は、調

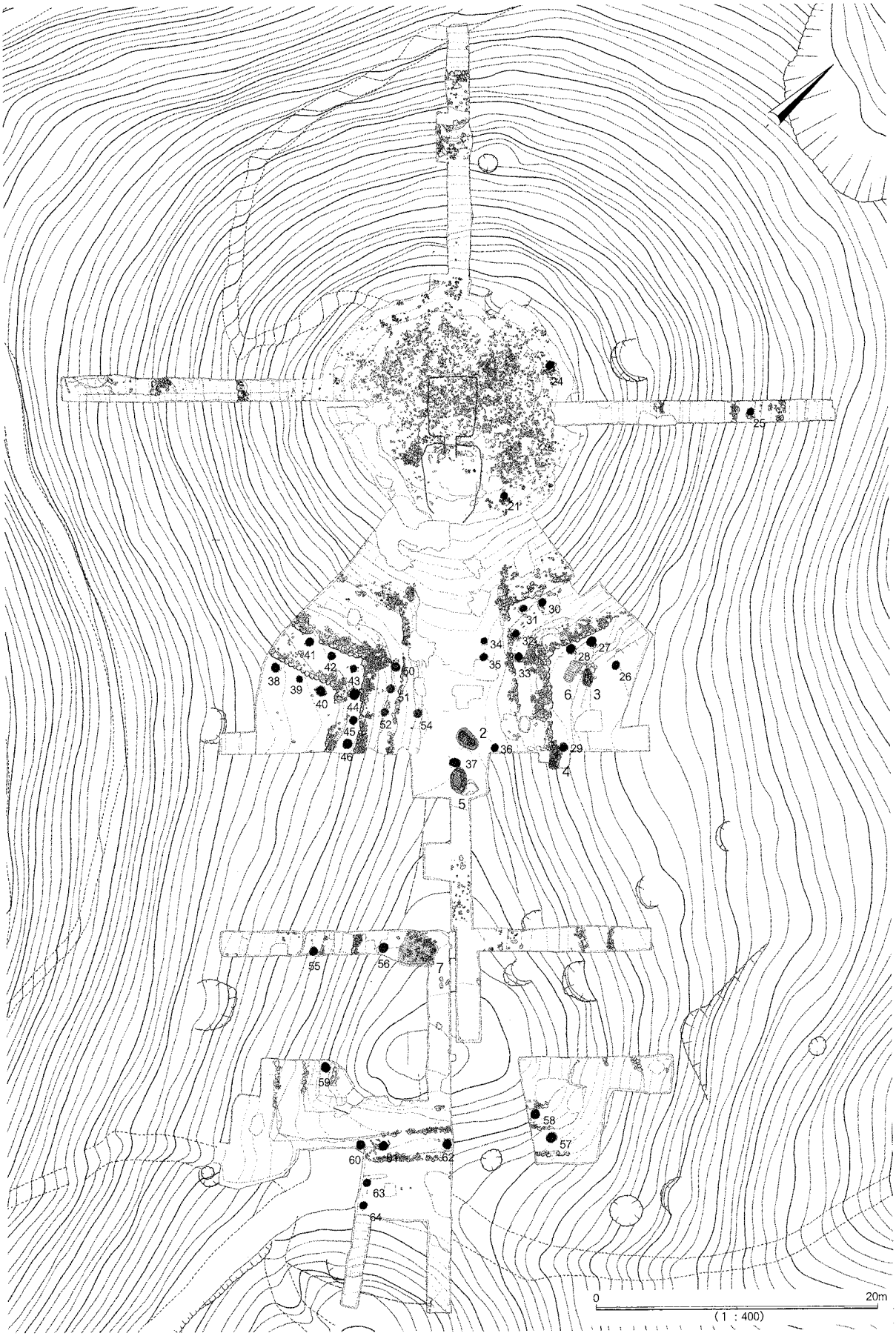
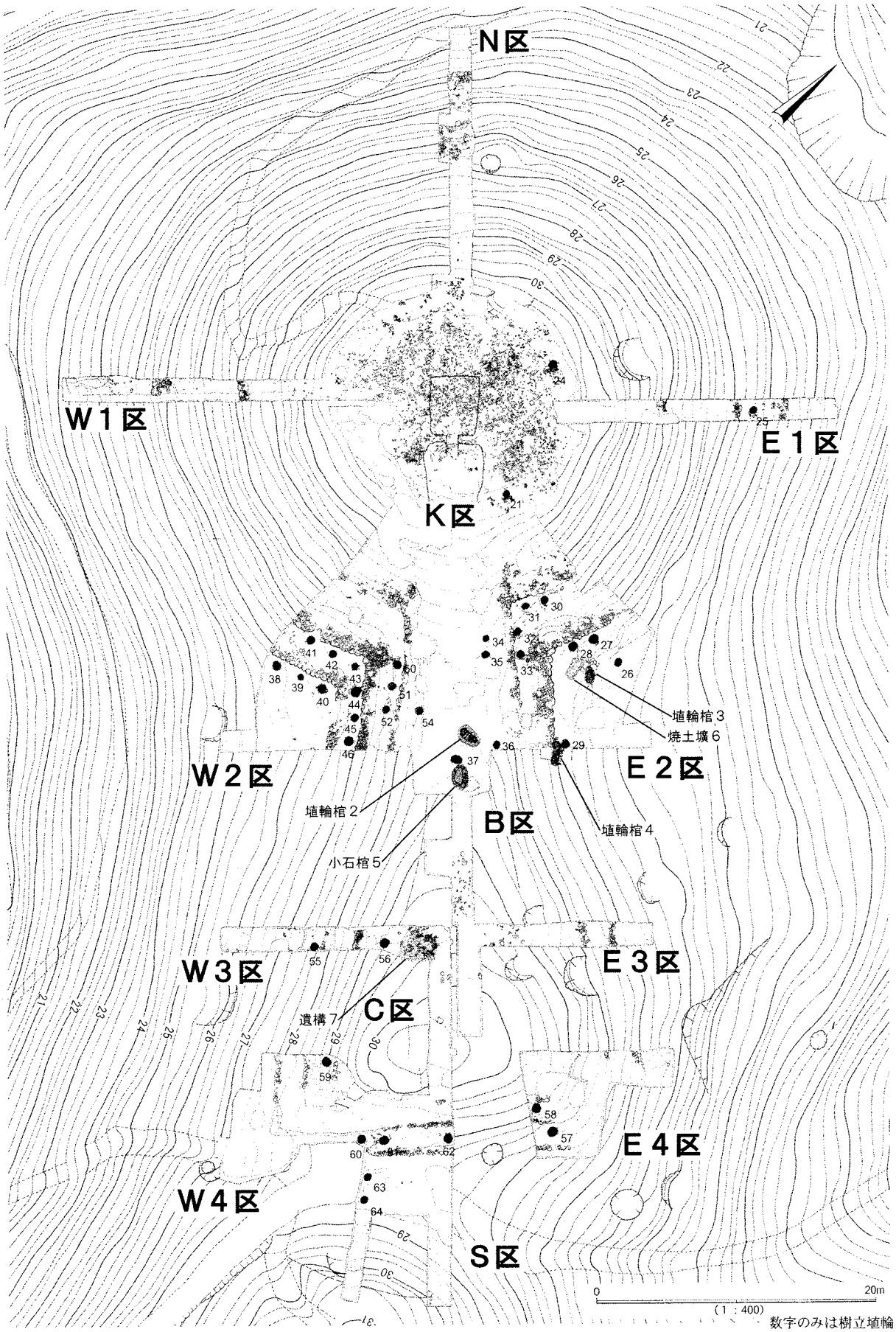


図７　調査区の配置

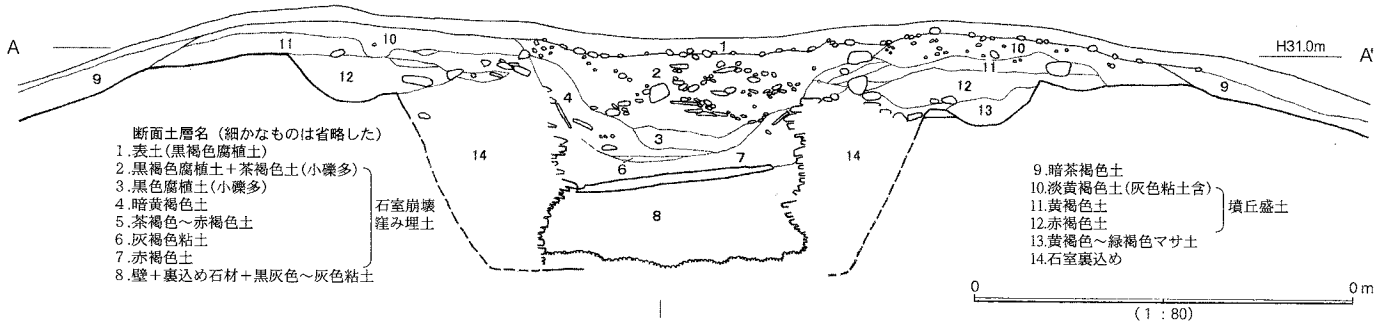
数字は遺構番号
● 樹立埴輪
● 埴輪棺・小石室
● 上記以外の遺構

全体図（図7，付図） 調査区・遺構番号



A
A'
24
21
31m
図中の番号は遺構番号
は輪輪片

図８　K区


A
A'
H31.0m
断面土層名（細かなものは省略した）
1.表土（黒褐色腐植土）
2.黒褐色腐植土＋茶褐色土（小礫多）
3.黒色腐植土（小礫多）
4.暗黄褐色土
5.茶褐色～赤褐色土
6.灰褐色粘土
7.赤褐色土
8.壁＋裏込め石材＋黒灰色～灰色粘土
石室崩壊
窪み埋土
9.暗茶褐色土
10.淡黄褐色土（灰色粘土含）
11.黄褐色土
12.赤褐色土
13.黄褐色～緑褐色マサ土
14.石室裏込め
墳丘盛土
0
0m
（1：80）

A
23m
25m
27m
28m
29m
A'
H 30.0m
29.0
28.0
27.0
26.0
25.0
24.0
▲1段
0
0m
(1 : 80)

図9　N区

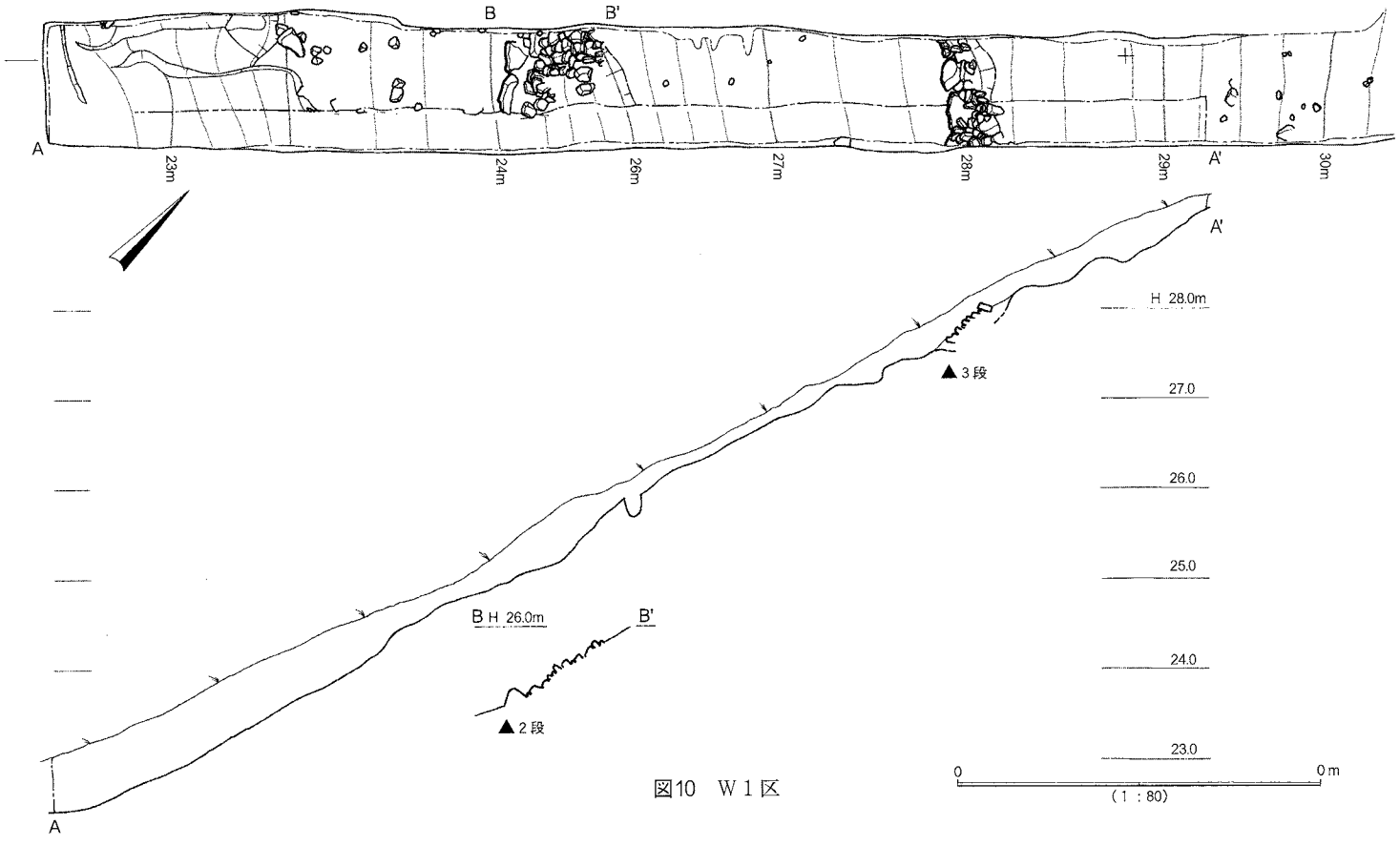

A
B
B'
23m
24m
26m
27m
28m
29m
A'
30m
H 28.0m
27.0
26.0
25.0
24.0
23.0
▲3段
B H 26.0m
B'
▲2段
0
0m
(1 : 80)

図10　W1区

査の進行に伴い、崩落した石室の覆土中からも多数検出されている。また、石敷縁辺部から斜面にかけて、円筒埴輪が個体ごとに割れて散乱たような状態で出土した。その位置は、径12mの円周付近にある。一部は樹立位置を推定できる(埴輪21・24ほか)。埴輪は容量20ℓのコンテナにして(以下おなじ)６箱ほど出土し、家形埴輪を主とした形象埴輪が顕著に含まれている。他に土師器、陶磁器等が少量出土している。

N区 (図９,図版12)

後円部墳丘中軸線に沿って設定したトレンチで、19㎡を調査した。傾斜は墳丘のうちで最も急である。明確に葺石が残るのは１段斜面のみで、基底部が遺存する。基底石は20～40cmほどの礫を用いており、現状は墳丘に埋め込まれたような状態でかろうじて原位置を保っている。葺石石材の多くは拳大の花崗岩亜円礫で、30cmほどの大きさのものも混じる。２段斜面葺石は樹根により攪乱されているが、前面のテラスがわずかに認められた。３段斜面葺石は確認できないが、わずかなに遺存するテラスから、おおよその位置を推測しうる。樹立埴輪は検出されなかった。調査区全体で埴輪破片がコンテナ2/3ほどの分量出土した。

W１区 (図10,図版12)

後円部西側面を横断する19㎡のトレンチである。１段斜面葺石は遺存しないが墳丘斜面端の傾斜変換点を１段斜面葺石位置と推定した。２段斜面葺石は、基底部が遺存する。30～40cmの礫を横置きに据え、上部に20～10cmほどの礫の小口を揃えて積み上げる。３段斜面葺石も基底部が遺存する。40cmほどの礫を横置きに据え、小形の礫を積み上げる。ここでは断面の観察から、地山を掘り込んで0.5mほどテラスを造成したうえで葺石を構築したことがわかる。裏込めは未確認である。本調査区で一部

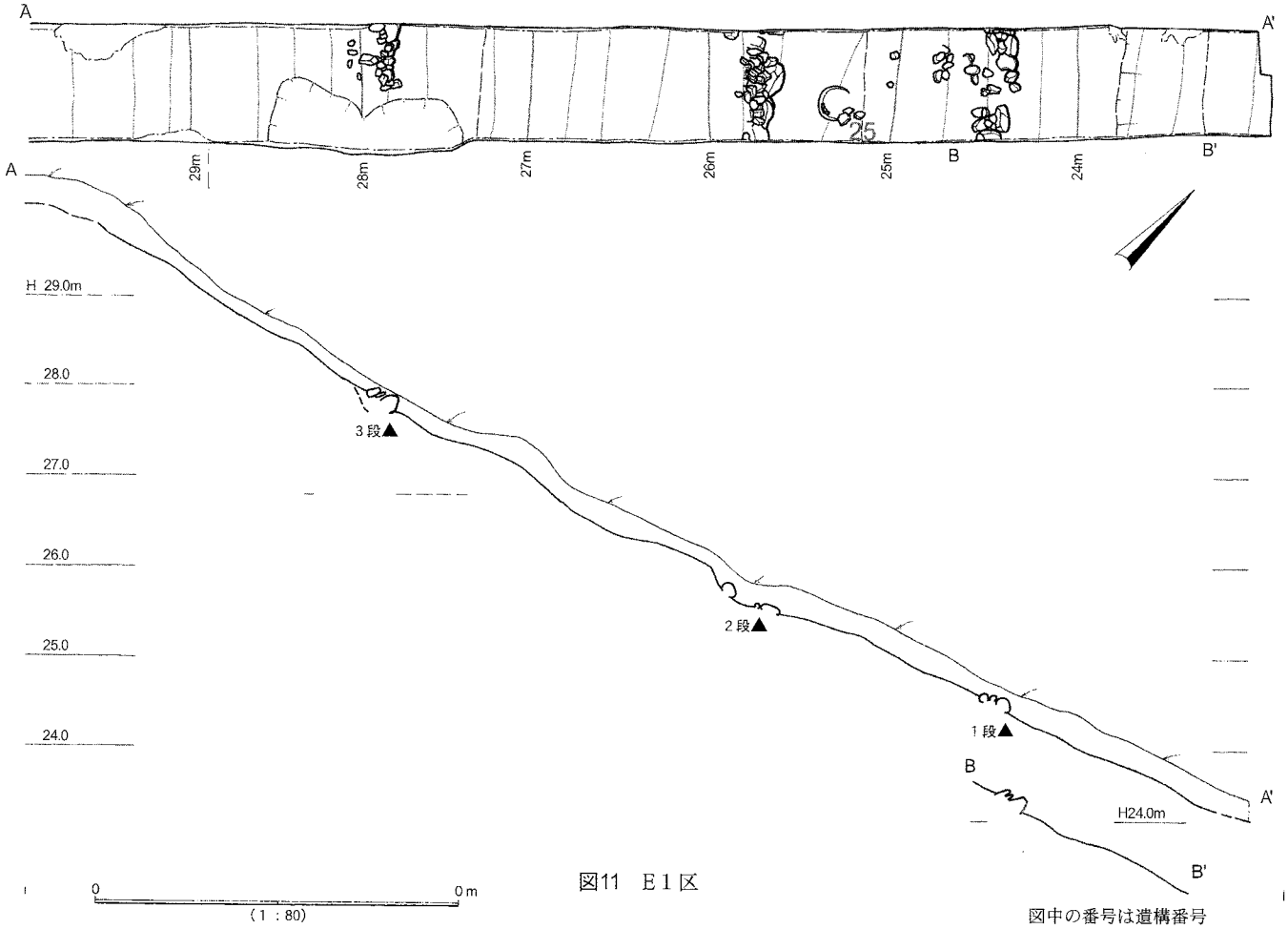


図11　E１区

図中の番号は遺構番号

30m
29m
26m
25m
27m
28m
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
38
39
40
41
42
43
44
45
46
50
51
52
54
▲1段
▲2段
▲3段
H 27.0m
26.0
25.0
0
0m
(1：80)
A　図中の番号は遺構番号

図12　W２区

29m
28m
27m
26m
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
A
A'
30
31
32
33
34
35
36
28
27
26
29
▲3段
▲3段
0
0m
(1：80)
H 28.0m
27.0
26.0
3段△
2段△
0
0m
(1：80)
図中の番号は遺構番号

図13　E２区

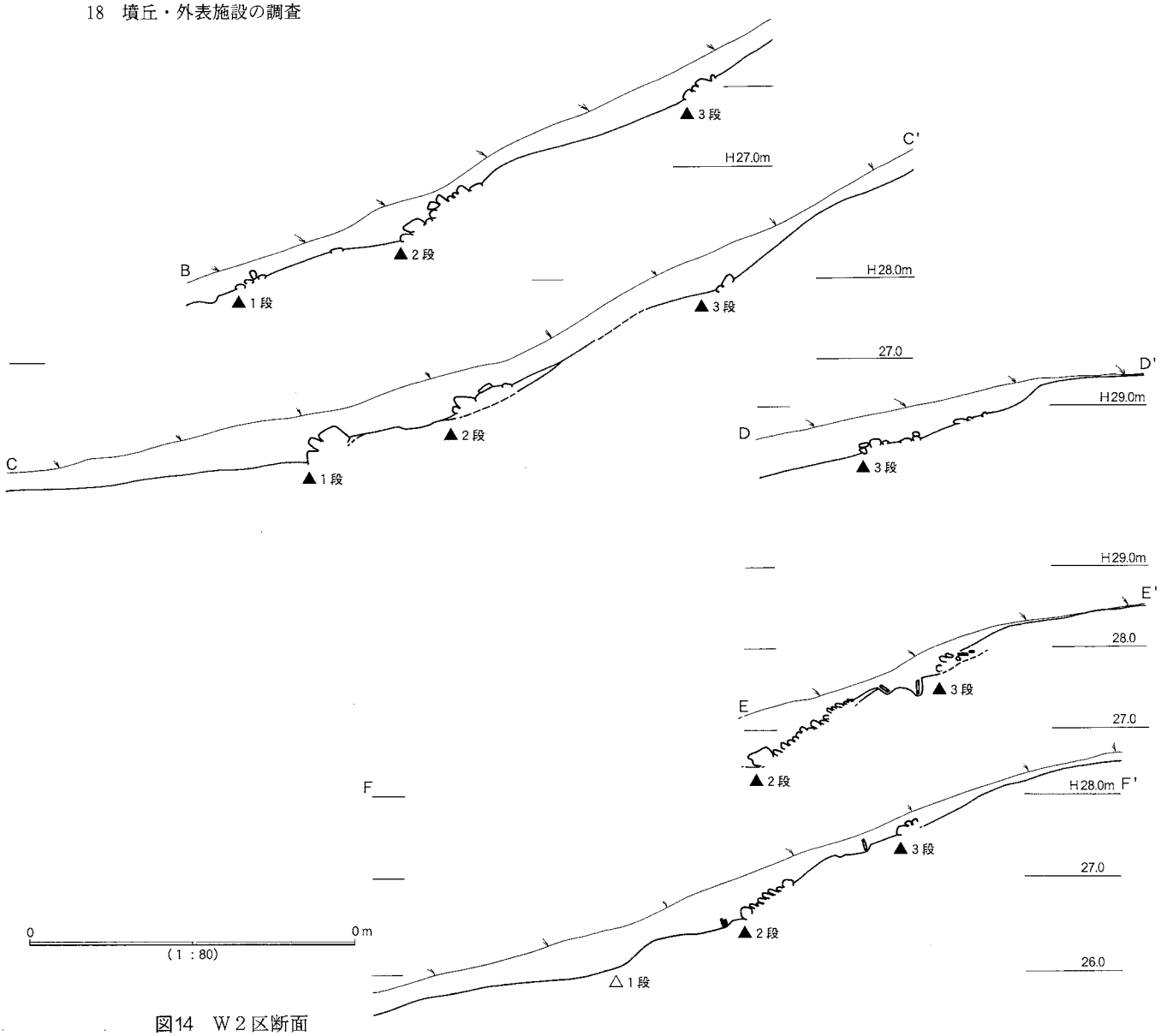


図14　W２区断面

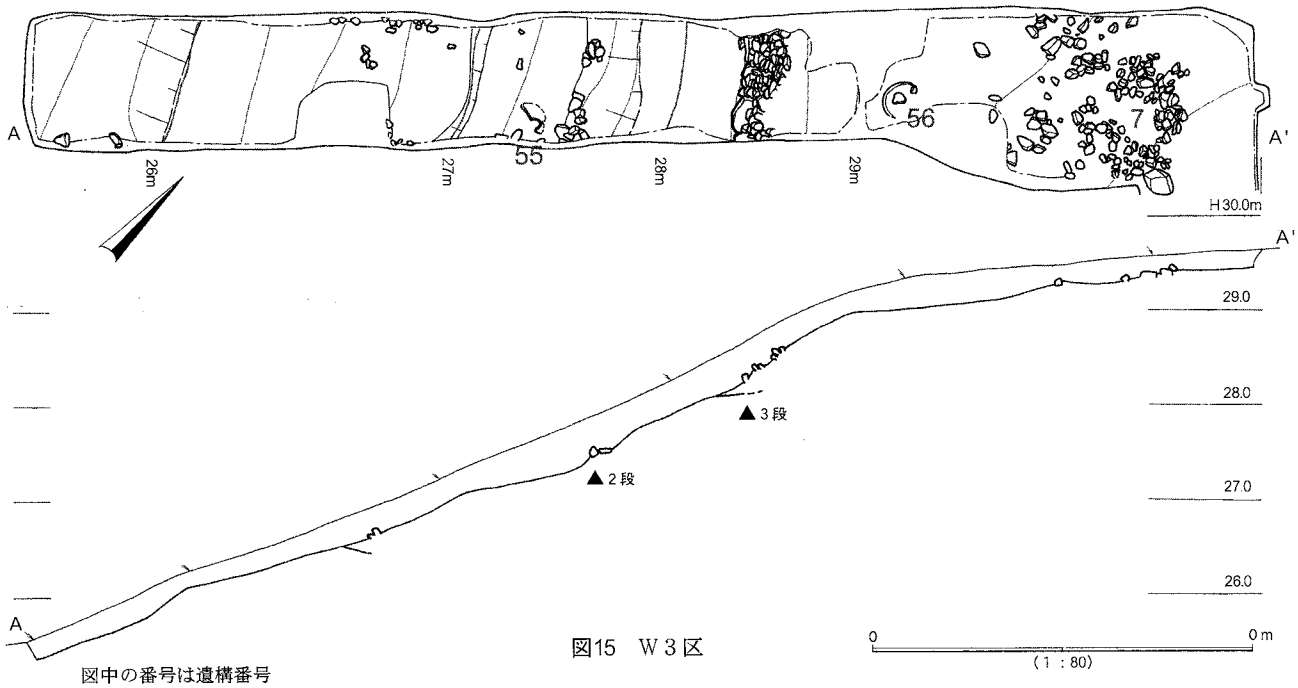


図15　W３区

図中の番号は遺構番号

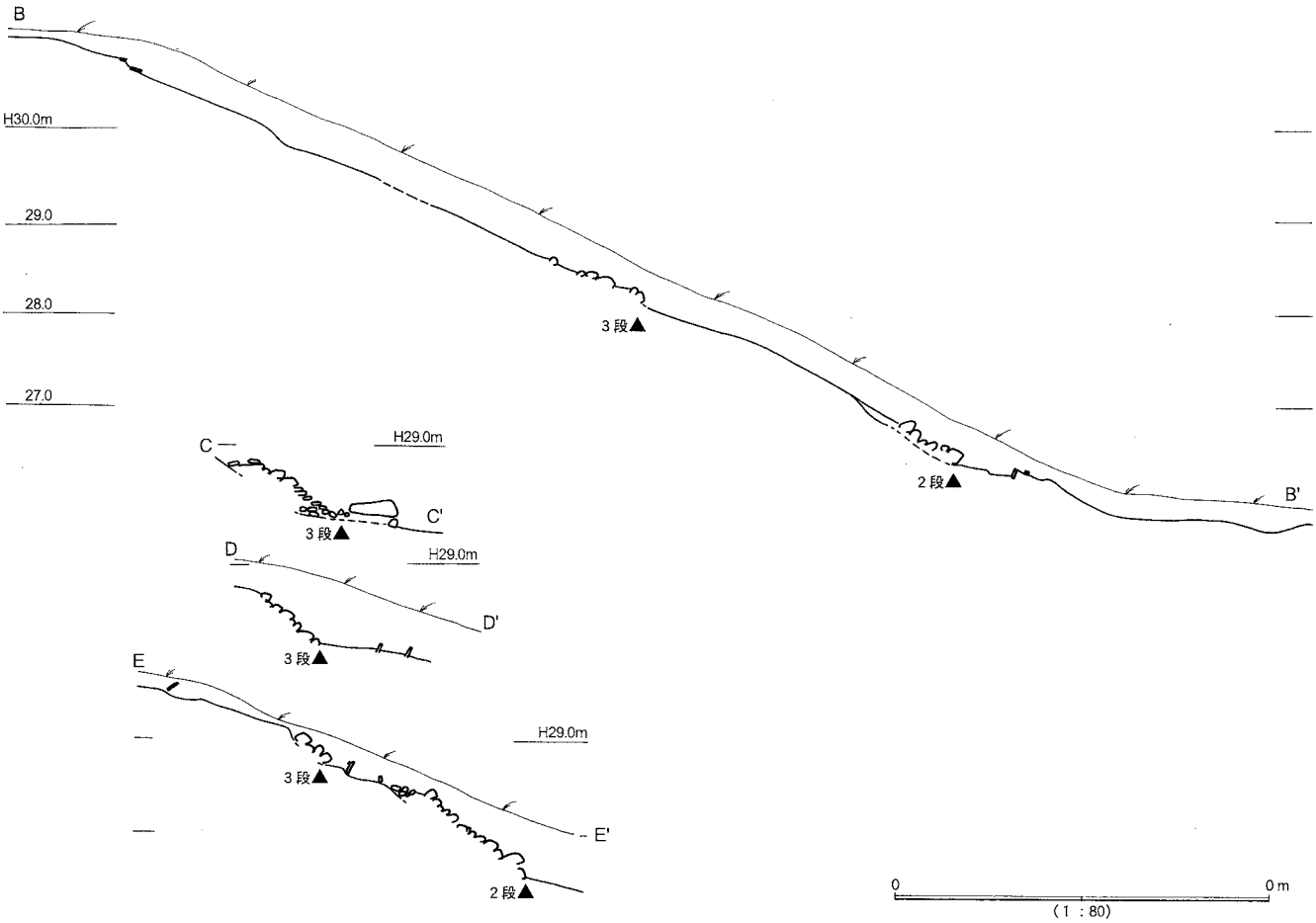


図16　Ｅ２区断面

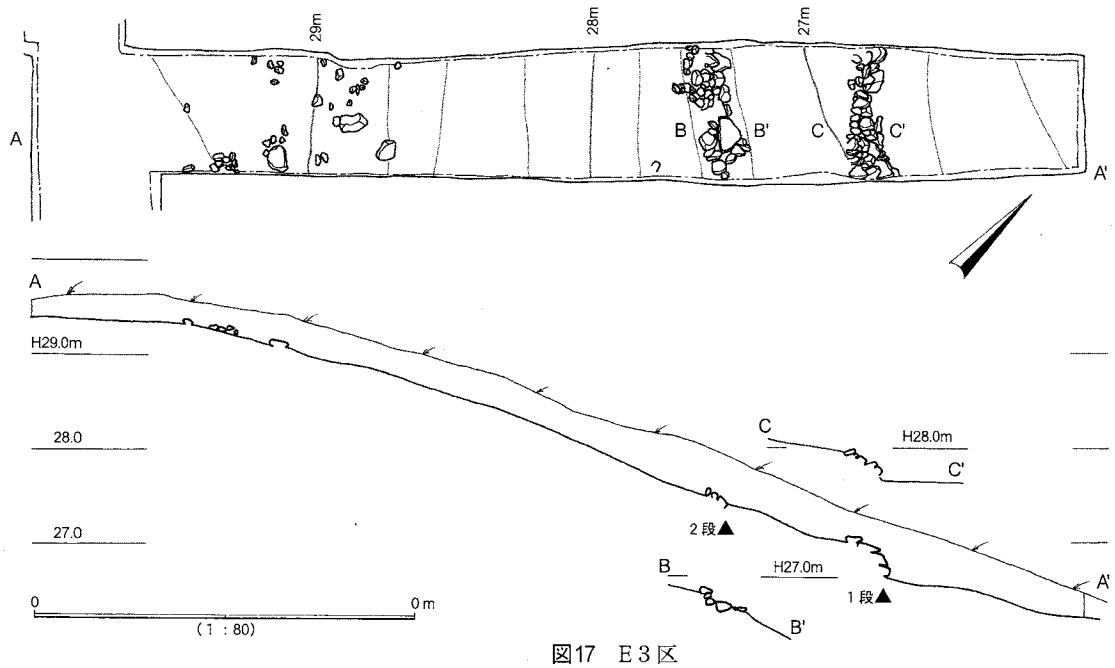


図17　Ｅ３区

を深掘りし墳丘断面を観察したが、盛土は認められなかった。これは、K区を除いた他の調査区でも同様である。樹立埴輪は遺存しないが、コンテナ1/3ほどの分量の破片が出土した。

Ｅ１区（図11、図版12）

後円部東側面を横断する18㎡のトレンチである。葺石は３段遺存する。１段斜面葺石は30cmほどの礫を基底面に横置きに据えるが、Ｎ１・Ｗ１区のような配置の規則性は認められない。２段斜面葺石は基底部が遺存する。30～40cmほどの礫を横置きに据え、10～20cmほどの礫の小口を揃えて積み上げている。１段テラスは判然としないが、２段斜面葺石から0.5mほどの位置に樹立埴輪が遺存する(埴輪25)。３段斜面葺石は、基底石に30cmほどの礫を用いる部分と、基底から直接10～20cmほどの礫の小口を揃え、そのまま葺石として積み上げる部分とがある。表土中から埴輪片がコンテナ1/3箱ほど出土した。

３）くびれ部の調査

Ｗ２区（図12・14、図版17・18）

西側くびれ部の後円部、前方部にまたがって設定し、くびれ部墳丘斜面とその基底面117㎡の調査を行った。

葺石は３段検出された。各テラスは土砂が流失し、緩い斜面となっている部分もある。１段斜面葺石は、0.5m～0.6mときわめて低く、葺石は横置きした基底石上に数段積み上げる程度である。基底石と上部の積み石は、折れ角を境に異なる。後円部側の葺石は、基底石に長さ30～40cmほどの方柱状石材の使用が顕著である。前方部側では基底石と上部の葺石との差が小さく、大部分は長さ10～20cmの円礫である。基底石から同じ大きさの石材の小口を揃えて積み上げる。

くびれ部は他の部位に比べ葺石の遺存状態が良く、１段テラスは樹立埴輪との関係からほぼ原状を留めていると思われる。１段斜面葺石の基底部から0.2mほど離れた後円部側の墳丘基底面に、樹立埴輪が遺存していた(埴輪38～40)。１段テラスの幅は、遺存状態の良い位置で計測すると、前方部側が0.9m、後円部側の折れ角付近で1.3mほどとなる。樹立埴輪６本を検出した(埴輪41～46)。

２段斜面葺石は調査区のほぼ全体にわたり遺存する。１段と同様、後円部側に大きな石材を使用し、折れ角を境に石材のサイズと積み方に違いがある。後円部側では、長さ20cmほどの礫が顕著である。前方部側では小口を揃えて積み上げた10cm台の礫が顕著である。樹立埴輪は、３本（埴輪50～52)を検出した。

３段斜面は折れ角周辺を除き、基底石のみが断続して残る。ここでは、後円部側から前方部側に回り込んだ位置まで比較的大形の石材を用いて葺石を積み上げている。前方部の墳頂面は、後円部中心から18mの位置で最も低くなり、標高28.4mを測る。前方部墳頂面も墳丘上面の流失により埴輪の樹立位置まで肩線が後退し、ゆるやかな稜線を成している。前方部墳頂面は、くびれ部頂から後円部頂に向かって３段斜面よりも一段高い後円部前面斜道をなす。斜道と葺石面のあいだは石垣状の石積壁を構成するが、上部は流失している。前方部墳頂面で樹立埴輪１本（埴輪54）を検出した。本調査区から出土した埴輪は、コンテナ13箱弱。円筒、朝顔のほかごく少量の靱形、家形、短甲形（？）などの形象埴輪片が含まれる。また、土師器、須恵器も少量出土した。

Ｅ２区　(図13・16、図版13～15)

東側くびれ部の後円部、前方部にまたがって設定し、120㎡を調査した。葺石は、２、３段斜面で検出した。１段斜面は転落した大量の礫が出土したが、葺石として原位置をとどめているものは確認できていない。

２・３段斜面の葺石はＷ２区と同様、くびれ部周辺の遺存が良好である。石材配置方法は、後円部

側と前方部側との差がＷ２区ほど顕著でない。特に大形の礫の比率が小さい。ただ、２・３段斜面葺石の折れ角周辺の基底石には、Ｗ２区の３段斜面葺石と同様、長さが30～50cmほどの比較的大形の礫を前方部側にまで用いる。後円部前面斜道側縁のみは、標高29.3ｍの位置まで遺存する。

墳丘基底面から１基(埴輪26)、１段テラスから３本(埴輪27～29)、２段テラスから４本(埴輪30～33)、前方部平坦面から３本(埴輪34～36)の樹立埴輪を検出した。他調査区と同様、基部または痕跡が遺存するのみである。他にコンテナ13箱余りの埴輪片が出土している。ごく少量の鞆形、家形、蓋形(？)、短甲形(？)といった形象埴輪片が出土している。土師器および須恵器も少量出土した。さらに、本調査では埴輪棺２～４、および焼土壙６を検出した。埴輪棺２は前方部頂部平坦面で、埴輪棺３はくびれ部折れ角の墳丘基底面、埴輪棺４は前方部側の２段テラスに位置する。焼土壙６は埴輪棺３に接した位置にある。

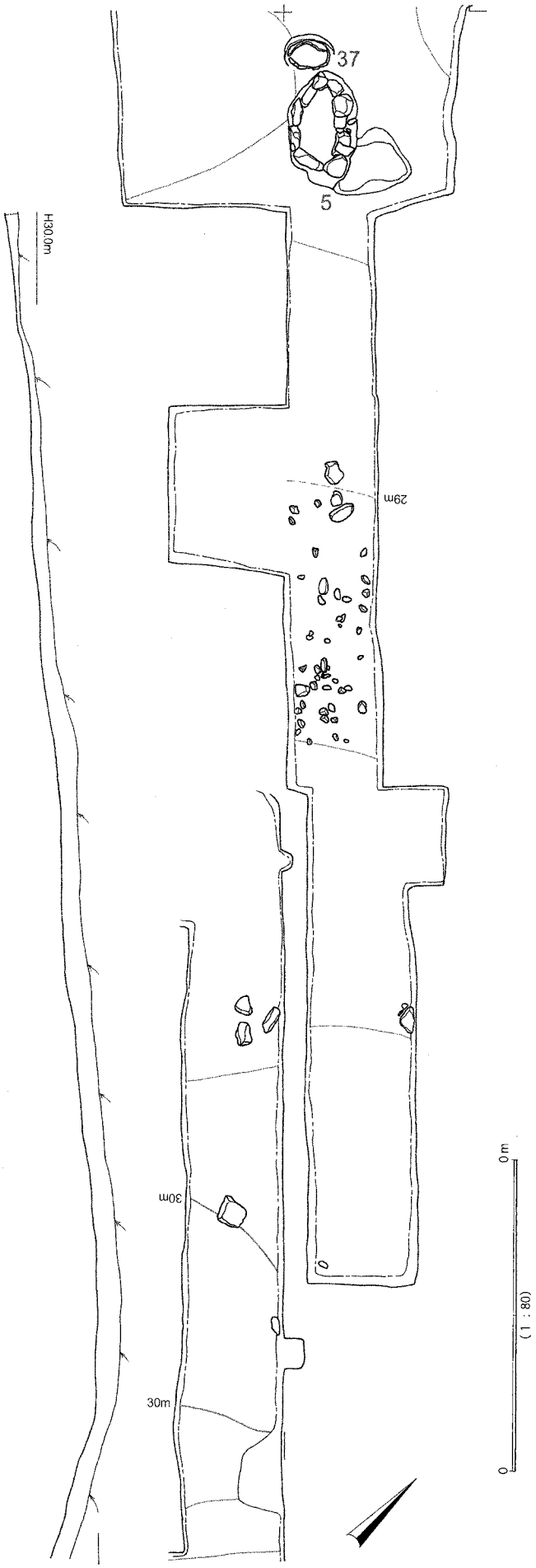
４）　前方部の調査

Ｗ３区　(図15、図版19)

前方部中央の西側面を横断する26㎡のトレンチである。墳丘基底面は不明確で、墳丘からの傾斜が、そのま調査区外に続く。２段斜面、３段斜面の葺石を検出した。２段斜面葺石は、基底石が滑り落ちたような状態で検出された。３段斜面葺石は明確に遺存している。大きめの石材を間を置いて横置きし、上部に10～20cmほどの礫を積む。１段テラスで樹立埴輪(埴輪55)、墳丘中心線から3.5ｍほどの墳頂部で樹立埴輪(埴輪56)を検出した。埴輪片がコンテナ2/3箱ほどの分量出土した。

Ｅ３区　(図17、図版19)

前方部中央の墳丘東側面を横断する25㎡のトレンチである。墳丘基底面が明瞭に残る。１段斜面、２段斜面葺石が遺存していた。１段斜面葺石は10～30cmほどの礫を横置きし、上部に10～20cmほどの礫を積み上げる。１段斜面葺石の



図中の番号は遺構番号

図18　B・C区

端部は、Ｅ２・Ｅ４区の葺石を結んだ線からはずれ、墳丘中軸線に平行している。これは調査前の墳丘形状に沿うが、本来の位置にあるものか、あるいは埴輪の出土状況にみられるように墳丘からの土砂の流出に伴い移動したものか判断できない。２段斜面葺石は基底石に１段斜面葺石より大振りの礫が混じるが、半ば崩落した状態で出土した。調査区からは、埴輪片がコンテナ１箱程出土した。

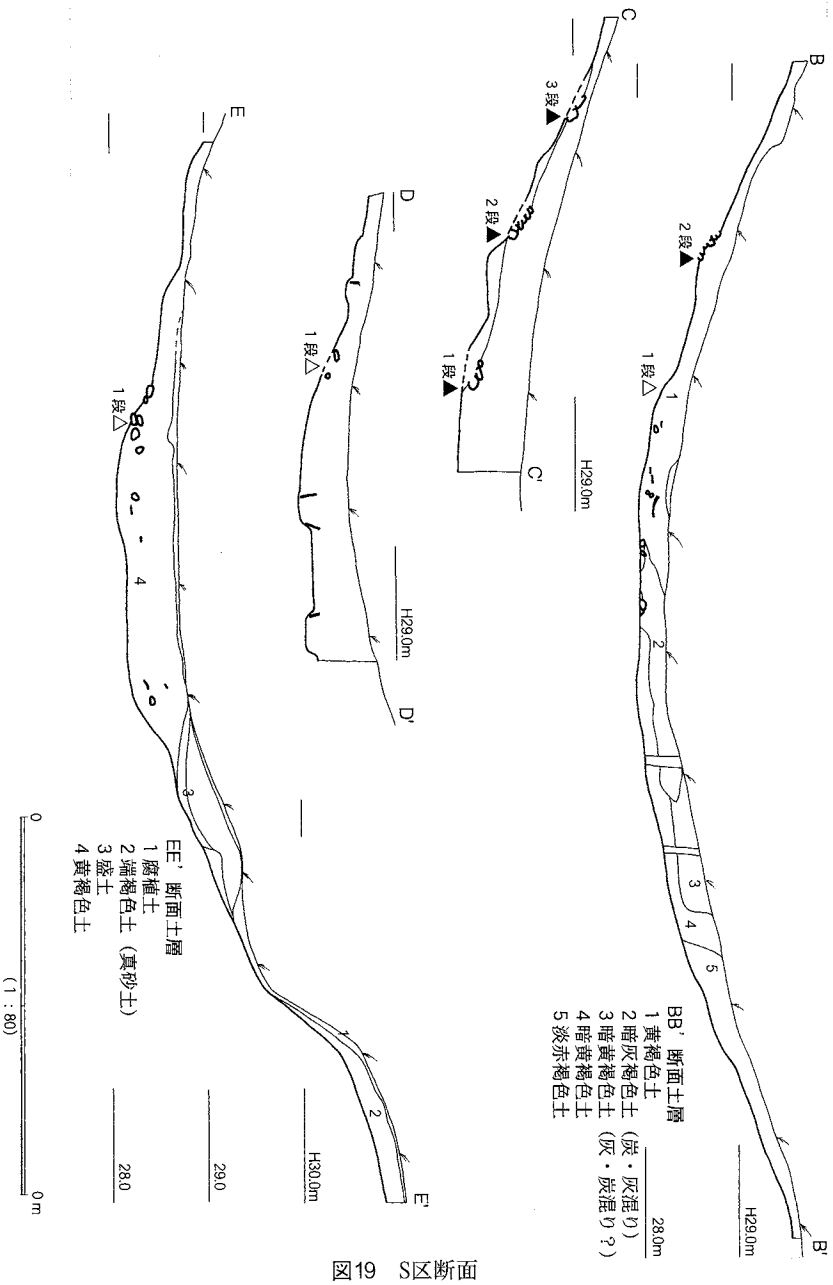


図19　S区断面

Ｂ区　(図18、図版23)

前方部中央部の墳頂面調査のため、墳丘中軸線東側に設定し、37㎡を調査した。墳頂面は平坦な尾根状で、前方部端に向って高くなる。後円部側端の調査面で標高28.5ｍ、前方部側端で標高29.8ｍを測る。中軸線上で樹立埴輪(楕円形埴輪37)、小石棺５を検出した。両者は接近した位置にある。調査区南半部では礫の散布がみられた。確認のため下位を掘り下げてみたが、遺構として確認することはできなかった。埴輪片がコンテナ１箱程出土した。特に楕円形埴輪37周辺か等、鞍形埴輪破片が集中して出土している。

Ｃ区　(図18、図版23)

前方部前端側の墳頂面を確認するため、Ｂ区に続けて21㎡を調査した。前方部頂の遺存面は標高30.1ｍを測る。前調査区北端の西側で礫群（遺構７）を検出した。Ｂ区の礫群に続き、部分的に密集する。埴輪片が小量だが、前方部頂面に集中して出土した。

Ｗ４区　(図20、図版20)

前方部西側隅角部のため設定し30㎡を調査した。葺石は３段確認した。後円部寄りに遺存する。西側斜面の葺石は、各段ともほとんど基底石のみが遺存する。２段テラス部で樹立埴輪１本(埴輪57)を検出した。埴輪片がコンテナ１箱ほどの分量出土した。

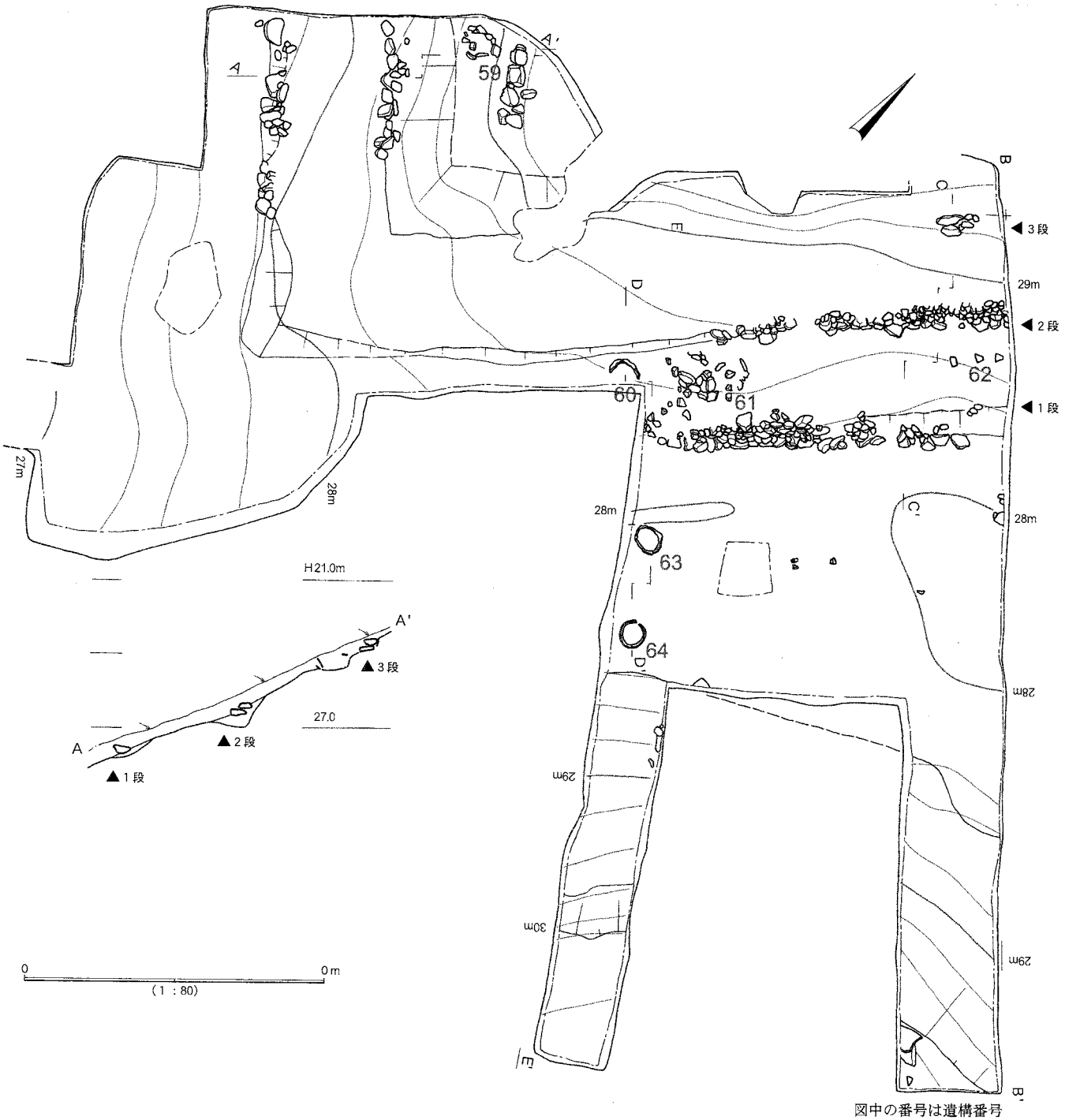


図20　Ｗ４区・Ｓ区

Ｅ４区　(図21、図版19)

前方部東側隅角部調査のため設定し、27㎡を調査した。前方部東斜面では、１・２段斜面葺石が後円部側寄りに、ほとんど基底部のみ遺存する。両段とも基底石は20～30cmほどの礫を用い、小口を揃えて据える。上部の石材は、それよりもやや小ぶりである。

前方部前面には３段の葺石が墳丘中軸線寄りに遺存し、テラスがわずかに認められる。葺石は基底石のみの遺存である。基底石は20～30cmほどの礫を横置きする。前方部前面部の葺石の１段、２段テラスで樹立埴輪をそれぞれ１本づつ検出した(埴輪58、57)。埴輪は、コンテナ２箱出土した。

S区　(図19・20,図版21・22)

前方部前面部の確認のため設定し、44㎡を調査した。前方部前面は、上端幅10m、底面幅4mの範囲を断面逆台形に尾根を断ち切って整形されている。切断部上端の標高は30.5mで前方部頂と等しく、掘削の深さは2.5mである。

2段テラスと3段斜面葺石はわずかに遺存するにすぎない、1段斜面葺石は墳丘中軸線とほぼ直交し、基底石底面はわずかに西側に向かって下降する。基底石に長さ20cm前後の小形の礫を横置きし、上部に10～20cmほどの礫を小口積みする。2段斜面葺石は、基底石に30cmくらいまでの大小の石材を用いる。その並び方は不揃いで、大形の石材を突出させている。また、E4区の基底線と結んでみるとわずかに湾曲している。3段斜面葺石はごく一部遺存し、30cmほどの基底石上に比較的大形の石材を積む。隣接するW4・E4区の葺石底面高を比較すると、各段とも0.5～0.6mほどS区が高く、丘尾切断部がS区を頂点にして東西方向にゆるく下降することを示している。

樹立埴輪は1段テラスから3基(埴輪60～62)、丘尾切断部底面から2基(埴輪検63、64)検出した。後者は前方部前面の空間を外方から区切るように、墳丘中軸線から5mほどの位置に南北に2基並んで配置されている。その内側の中央底部から、埴輪の他に土師器がまとまって出土した。調査区全体から埴輪片が6箱出土したほか、少量の古墳時代中～後期、奈良時代の土師器、須恵器が出土した。

(柳沢一男・杉山富雄)

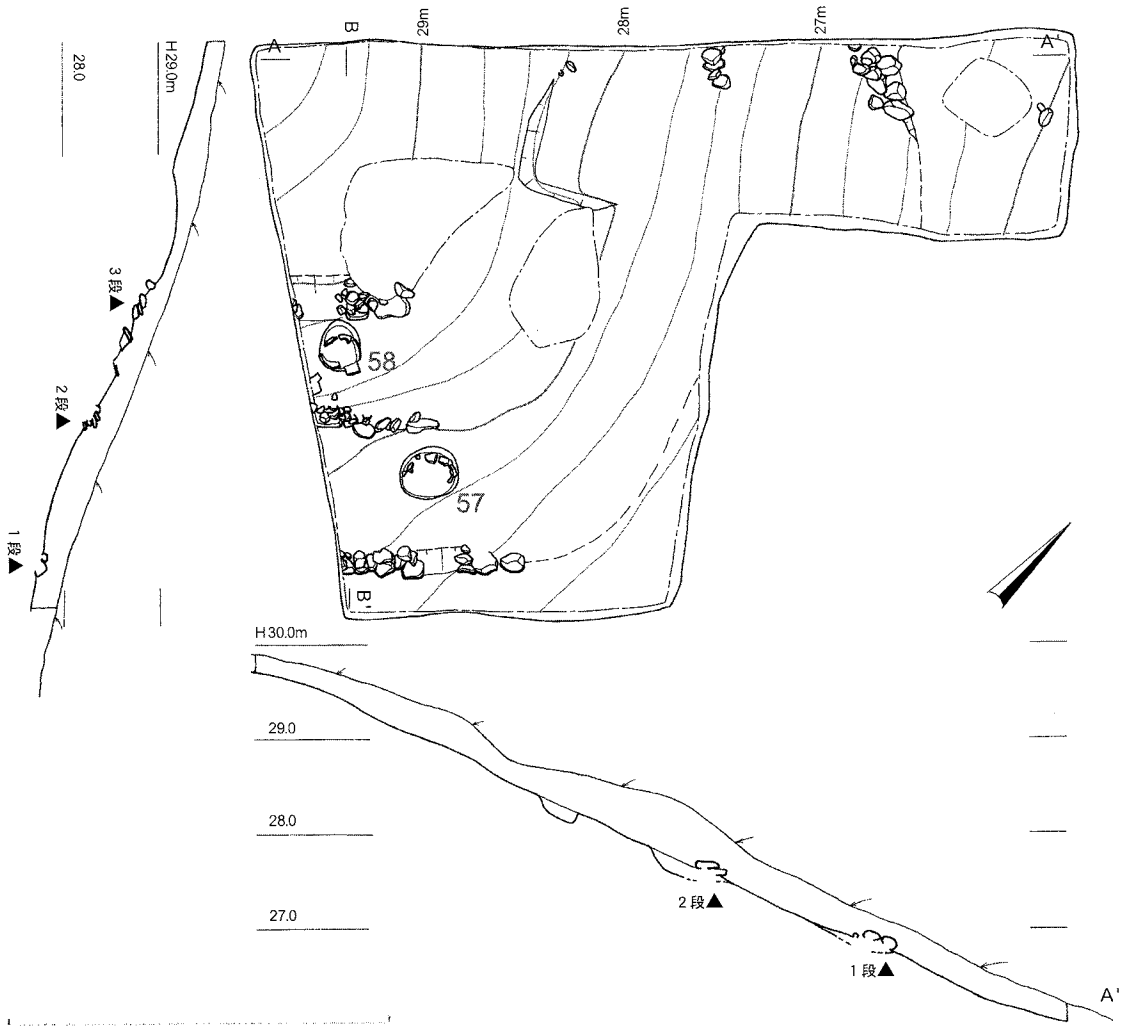


図21　E4区

表３　墳丘各部位標高と比高

※単位m

	後円端	後円側	くびれ	前方側	前側端	前面端
東/１段下	23.6	24.5	25.9	26.7	27.7	28.2
1段高	1.8	1.1	0.7	0.7	0.5	0.4
/２段下	(25.4)	25.6	26.6	27.4	28.2	28.6
2段高	2.1	2.1	1.2	0.6	0.5	0.6
/３段下	27.5	27.6	27.8	(28.0)	28.7	29.2
3段高	3.6	3.4	0.7	1.6	1.4	0.6
/頂面	31.3	31.3	28.5	29.6	30.1	30.1
基底-頂	6.7	5.8	2.6	2.9	2.4	1.8
西/１段下	23.6	(23.8)	25.8	26.6	27.6	28.2
1段高	1.8	1.4	0.8	0.8	0.6	0.4
/２段下	(25.4)	25.1	26.6	27.4	28.2	28.6
2段高	2.1	2.3	1.2	0.8	0.8	0.6
/３段下	27.5	27.5	27.8	28.2	29.0	29.2
3段高	3.8	3.8	0.7	1.4	1.1	0.6
/頂面	31.3	31.3	28.5	29.6	30.1	30.1
基底-頂	6.7	6.5	2.7		3.0	1.8

※東は墳丘東側面、西は墳丘西側面をしめす。後円端はＮ１区、後円側はＥ１・Ｗ１区、前方側はＥ３・Ｗ３区、前側端はＥ４・Ｗ４区の遺存最高位高、前面端はＳ区での計測値である。後円端と前面端の計測値は、東側・西側とも同数値を記した。括弧内は推定値。

（３）　その他の埋葬施設

埴輪棺２（図22、図版44）

前方部墳頂面が、くびれ部に寄って鞍部状を呈する、Ｅ２区の表土下0.2mから検出した。墳丘中軸線のやや東側に位置し、遺構長軸は後円部に向かって48°西に振れている。鰭付朝顔形埴輪(47)の口縁部と基部を打ち欠いた後、口縁部を前方部側に向けて墓壙底に据え、その基部側から円筒埴輪(４)の基部側を奥側にして入れ子に差し込み、さらに小口を半割した円筒埴輪(２)で塞ぐ。その上を鰭付円筒埴輪(11)を縦割りしたものなどを用いて覆う。検出時、本体部は上部が潰れているものの下部に落ち込んではおらず、ある程度埋没した後に上半部が潰れたかとも見える。このためか、上部を覆う埴輪の破損が著しく、細片化している。墓壙は楕円形状で、断面形が逆台形状を呈す。棺の長さ1.1m、径0.5m、現状の遺存高0.4m、墓壙の長さ1.4m、幅0.9m、深さ0.4mを測る。

墓壙、棺内のいずれからも埴輪以外の出土遺物はなかった。出土埴輪の個別は後述するが、なかには、直立させたときの上方を向く器表に剥離等が残る資料があり、これがある程度の径年変化を示しているものなのかもしれない。

埴輪棺３（図23、図版44）

Ｅ２区墳丘基底部、墳丘くびれ部１段斜面葺石基底部に接する位置の地表下0.3mほどの深さで検出した。遺構の長軸は墳丘中軸線にほぼ沿う。検出状態は、地山整形面まで掘り下げた状態であるためか、墓壙底部が残るだけで、その底に円筒埴輪(１)を横にして口縁部を北向きに据え、両小口となる埴輪口縁部、基部の開口部を別の埴輪破片を立てかけて塞いでいる。更に、それを押さえるよう外側に礫をおいている。南小口に玄武岩割石をたてかけ、北小口は葺石石材の利用と思われる大小の礫を積む。さらに、両側面も礫で囲む。墳丘側に玄武岩板石を立てかけ、外方には埴輪を固定するように埴輪の下に円礫を挟み込んでいる。 埴輪棺は、内部に空間が残っている時点で崩落したようで、内部に埴輪破片と礫が混じり合って棺底面にまで落ち込んでいる。これからすると、棺上部にも礫を配していたらしい。墓壙は調査面では不正な長方形の土壙として残る。底面が北側にやや高くなってお

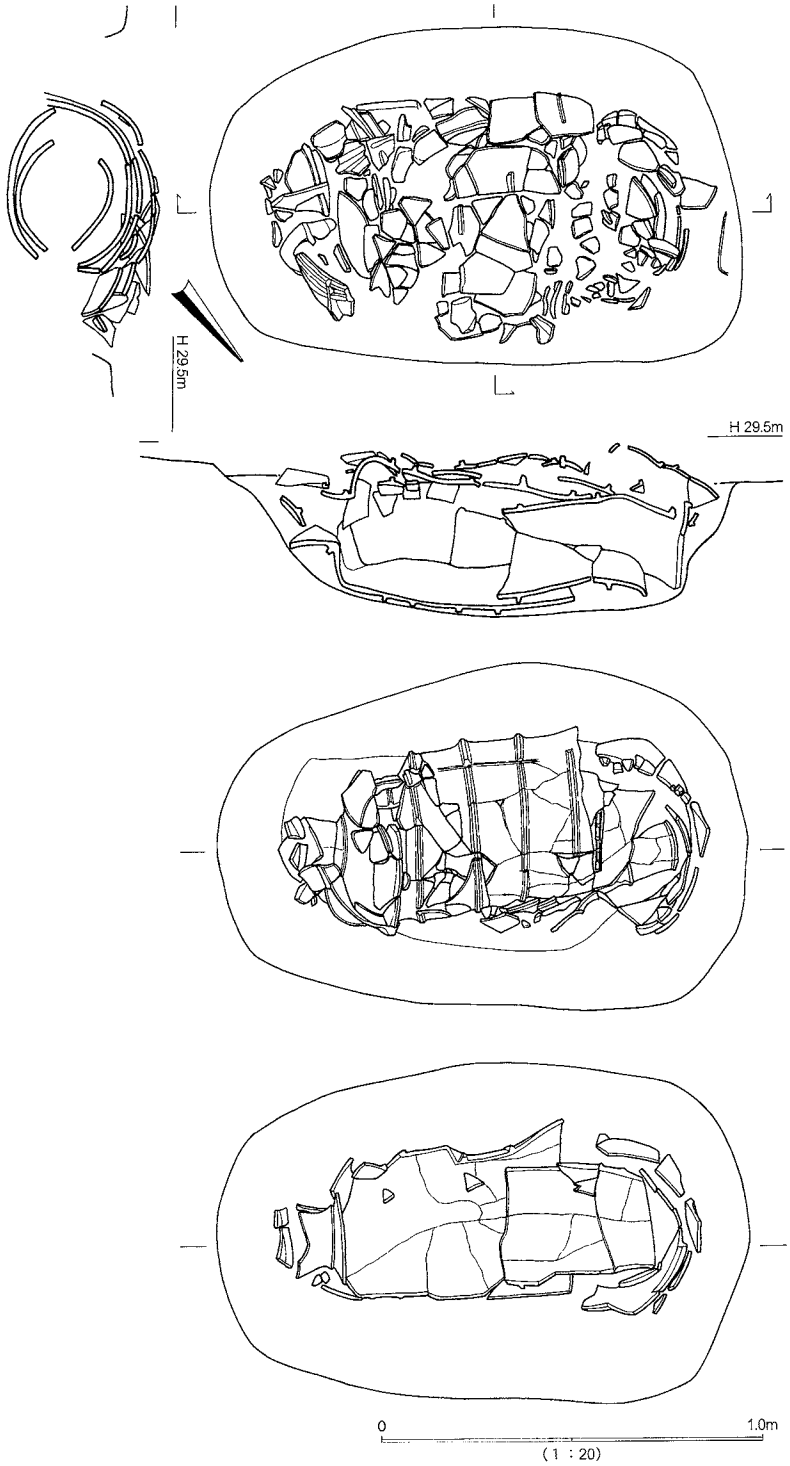


図22　埴輪棺２

り、残りのよい南端部で深さ0.2mほどが遺存している。棺は、長さ0.7m、径0.4m、墓壙は長さ1.2m、幅0.5mほどが遺存する。

棺内覆土と墓壙埋土から埴輪の破片が出土したほかは、遺物の検出はなかった。出土地点は転落してきた葺石石材、埴輪などが混じった表土が厚く覆っており、そのどの位置から築造されたのか、確認することができなかった。ただ、本体埴輪の外方に開く口縁部内面、外面の赤色顔料などの遺存状態は良好で、本来樹立していたとしてさほど経年変化が現れないうちに転用されたようにみえる。

埴輪棺４

(図24、図版45)

Ｅ２区の１段テラス上、埴輪棺２の直下２段斜面の葺石と樹立埴輪29との間に設けられた埴輪棺である。表土下0.2mほどの深さで検出した。葺石の基底石に沿いテラス下を浅く掘り窪めたうえで、口縁部、基部を打ち欠いた朝顔形埴輪の口縁部側を北に向けて据えている。基部側の小口は縦割りした円筒埴輪で塞ぎ、外側を押さを置いている。北小口側の状況は調査時に確認できなかった。

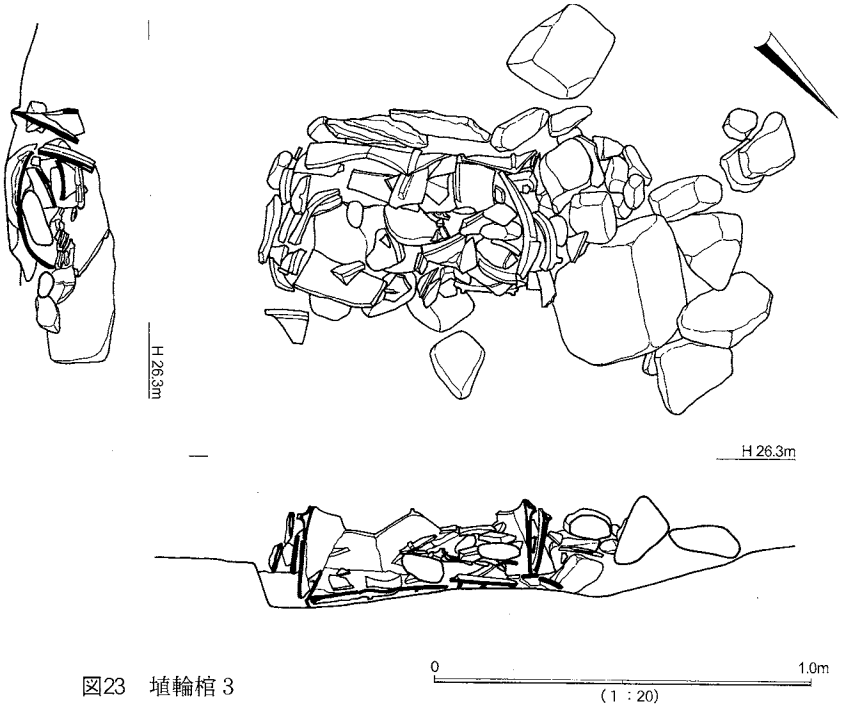


図23　埴輪棺３

本体上半部が潰れているが、破片は底部に落ちていないことから、半ば埋没した時点で崩壊したものであろう。本体の長さ0.9m、幅0.4mで、墓壙は明確でないが長さ1.1m、幅0.5mの範囲で皿状の窪みがある。棺内、土壙中から副葬品とみられる遺物は出土しなかった。

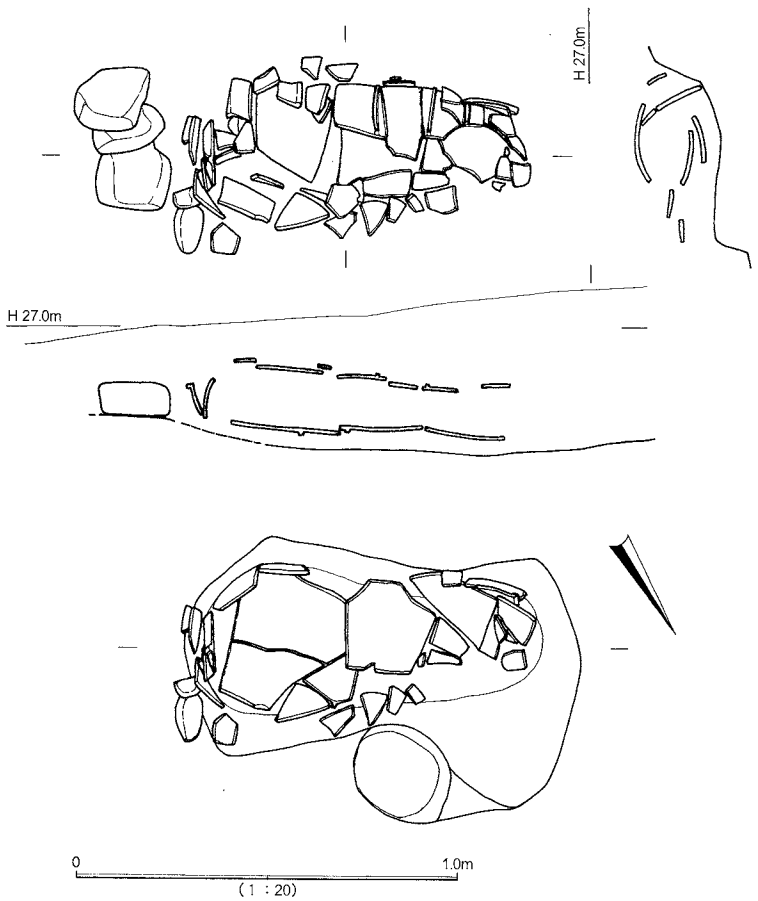


図24　埴輪棺４

小石棺５ (図25、図版45)

くびれ部に寄ったＢ区前方部墳頂面で検出した。墳丘中軸線に接して東側に位置し、楕円形埴輪37に隣接する。20～40cmほどの礫を用い、それの長辺側を揃えて平面形が舟形になるように並べ、壁としている。一部に２段ほど積まれているほかは、基底石のみが残る。また、小口にあたる部分には石材を立てて使用している。構築材と同様の石材が、棺に落ち込んだ状態で出土しており、壁の崩落したものか、あるいは周辺からも出土したことで、遺構を覆うような構造であった可能性もある。

掘形は不正な楕円形状で断面は皿形を呈し、墳丘面から0.2mほど掘り込まれている。掘形の長さ1.5m、幅1.0m、遺構内部の長さ1.0m、幅0.5m、壁の高さ0.3mほどの規模で遺存する。

遺物は遺構覆土、掘型埋土から形象

埴輪を含む埴輪片が小量出土した。

焼土壙(図26、図版44)

Ｅ２区くびれ部の１段テラスで検出した、いわゆる焼土壙である。遺構中軸線は墳丘中軸線と29°の角度に振れる。平面形は、南北方向に長い隅丸の長方形で、墳丘側の側面上部がやや崩れたように傾斜が緩くなっている。北側小口面とそれに接する西側長側面の北半部、および東側長側面の南端部が被熱のため赤化している。その厚さは1.5～2.5cmほどある。遺物は北小口の壁面に接して土器の細片が出土したのみである。長さ1.3m、幅0.6m、深さ0.5mを測る。他例からして本古墳との直接のかかわりの可能性は薄いといえる。

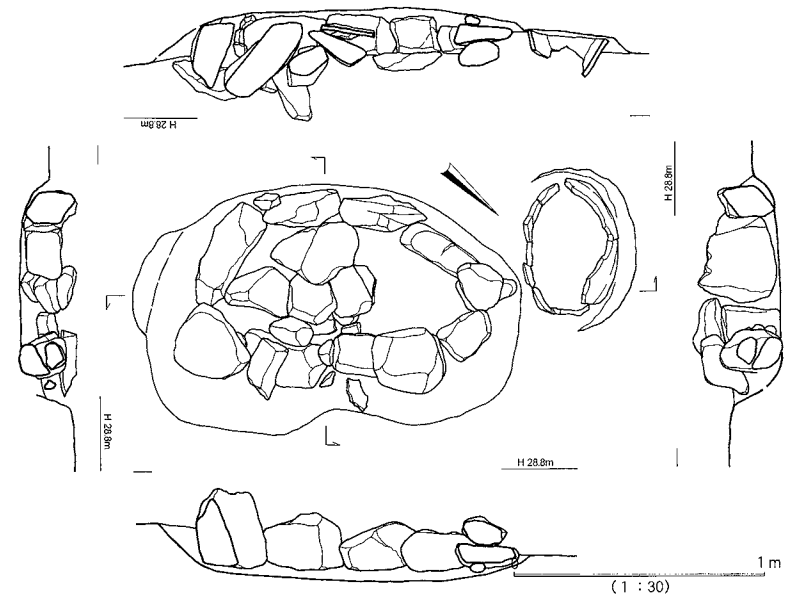


図25　小石棺５

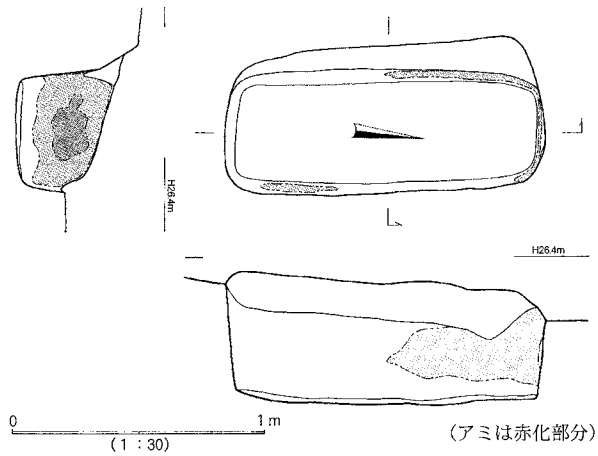


図26　焼土壙６

遺構 7 (図27、図版23)

前方部中ほどの墳丘頂面、Ｃ区とＷ３区が接する部分で検出した。前方部頂点から後円部に向かうなだらかな斜面となった、墳丘中軸線からはずれた西側に位置する。表土下約0.2m程の墳丘遺存面と思われる面上に花崗岩礫群が検出された。10～20cm程度の礫が多いが、40cm台の礫も混じる。石材は葺石に利用するものと変わらない。墳丘中軸線寄りの部分では重なり合って密集するが、他はまばらである。Ｂ区からもこれに続くようにして礫が散布しているのが検出されたが、こちらはいっそう疎らである。また、Ｃ区内で、大形の礫が数個認められている。礫群の下位に掘り込みなどがある可能性を考えて断ち割ってみたが、0.2mほどの位置で地山岩脈に当たり、人為的な痕跡を確認することができなかった。遺物は出土しなかった。　　（杉山 富雄）

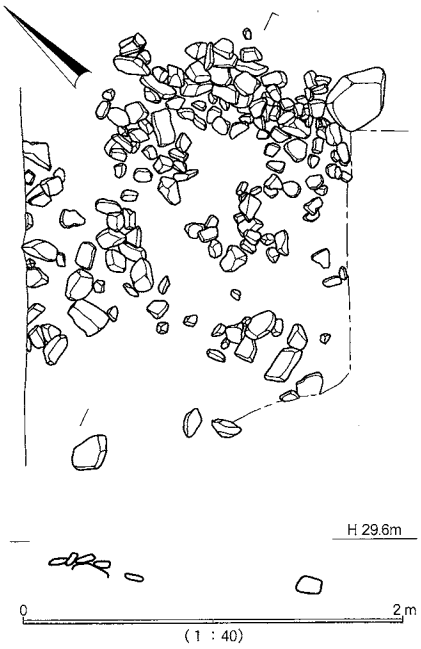


図27　遺構７

（4）墳丘上の遺物出土状況

墳丘上から出土した遺物のうち、本古墳に関わると思われる遺物には、埴輪と土師器がある。埴輪を大まかにコンテナを単位に計量してみると、総量で58箱ほどの分量となった。土師器は1箱に満たない分量である。

埴輪の出土量　出土総量の19％は、埴輪棺2～5に使用され、残り81％が、各調査区からの出土である。くびれ部の調査区では、墳丘東側E2区から23％、西側のW2区からは22％の分量出土した。次いで、後円部頂部のK区10％、前方部前方部端部S区12％となる。他調査区は、それぞれ1～3％程の分量である。以上、当然ながら、広い面積の調査区、加えて平坦部のある調査区からの出土量が多い。くびれ部両側のE2区、W2区を見ると、埴輪出土量がほぼ一致している。他区でもそれぞれ相応の分量が出土している。

樹立埴輪　原位置を留めて出土した埴輪(樹立埴輪)は37本である。いずれも基部以下の部位で、破損した状態で出土した。なかには埴輪が痕跡程度に残るのみで、わずかに掘形が確認できる程度の例もある。埴輪の据え付けは地山を円形に堀窪めた掘形に納めるものがほとんどであるが、なかには中央を掘り残したもの(埴輪43、50)、埴輪内側の底に礫を詰めるもの(埴輪43、44)などもある。出土埴輪の内容から円筒・朝顔形、鰭付きの円筒・朝顔、壺形埴輪が想定されるが、出土埴輪がどれに相当するかを判断することは難しい。1例であるがE2区1段くびれ部の埴輪43は鰭付きであり、鰭が墳端に平行するよう樹立されて、径が比較的大きいものであることが調査中の所見からわかっている。

埴輪の配列　くびれ部のW2区、E2区の両調査区では、各段テラスで埴輪の配列の状態が明瞭に観察された。また、他の調査区でも隣接する埴輪が遺存する部分がある。このように残るものから配列埴輪間の間隔を計測してみると、遺存数の多かったW2区では計測できた9箇所の各間隔が、1.4～1.5mの間に納まる。E2区ではとくに離れて小さい値があるが、一方の出土位置にやや疑問がもたれる例である。こうした不確定なものを除くと、1.4mを中心に前後0.1mの振れの中に多くが納まる。その間隔で少なくとも、古墳裾部から墳丘2段にかけては埴輪列が古墳をめぐっていた可能性が高い。K区では原位置を留める2本のほかに調査時の所見、実測図の埴輪の分布状況からすると、石敷の外縁に沿って基部破片が集中する部分が複数ある。このような部位が墳丘斜面にかかる径12mの円周付近に並ぶようにあり、円筒埴輪の樹立位置は、ほぼこの位置と推定する。

一方、S区裾部では墳丘中軸線から5m程はなれた位置で、中軸線に平行する2本の埴輪(63、64)が並び、墳丘前方部前面を外方から区画するような配列となっている。中軸線を中に未調査の東側にも同様な配列があるとすると、東西幅10m、南北4m程の区画が設定されていたことになる。また、B区の楕円形埴輪37は、前方部墳頂の平坦面の中程墳丘中軸線上に1本のみが配置されている。周辺では、靱形埴輪破片がまとまって出土している。

形象埴輪　形象埴輪は、コンテナ4箱弱、埴輪出土総量の6％強を占める。このうち、40％近くが墳頂部K区の敷石の間、あるいは石室崩落土中からの出土である。また、前方部S区裾から20％ちかく、前方部墳頂面B区から20％ちかくの分量が出土している。残りのほとんどが両くびれ部(W2・E2区)から、少量が後円部墳丘斜面の調査区(N・E1・W1区)から出土した。くびれ部の資料はB区の資料と接合するものがあり、本来の位置を示している。

各調査区出土の形象埴輪は以下のとおりである。〔 〕内は個体数。

K区　　家形〔7〕、囲形？〔1〕　盾形？〔1〕

E1区　家形（K区家形と同一個体）

W2区　家形〔1 前方部頂〕、靱形（B区靱形と同一個体）、鰭付楕円形半截〔1 基底面・墳丘斜面〕

Ｅ２区　　短甲形？〔１　後円部〕、　　蓋形？〔１ 基底面〕
Ｂ区　　靫形〔２　前方部〕
Ｓ区　　家形〔１　基底面〕、靫形〔１　基底面〕

土師器　Ｓ区裾部に集中して出土した。埴輪による区画内から、底部に沿うようなかたちで高坏、小形円底壺、二重口縁壺その他が出土した。他調査区では、位置を得できないがＫ区から高坏、壺の破片が、Ｅ２区から高坏、壺、Ｗ２区から細片が出土している。

（杉山 富雄）

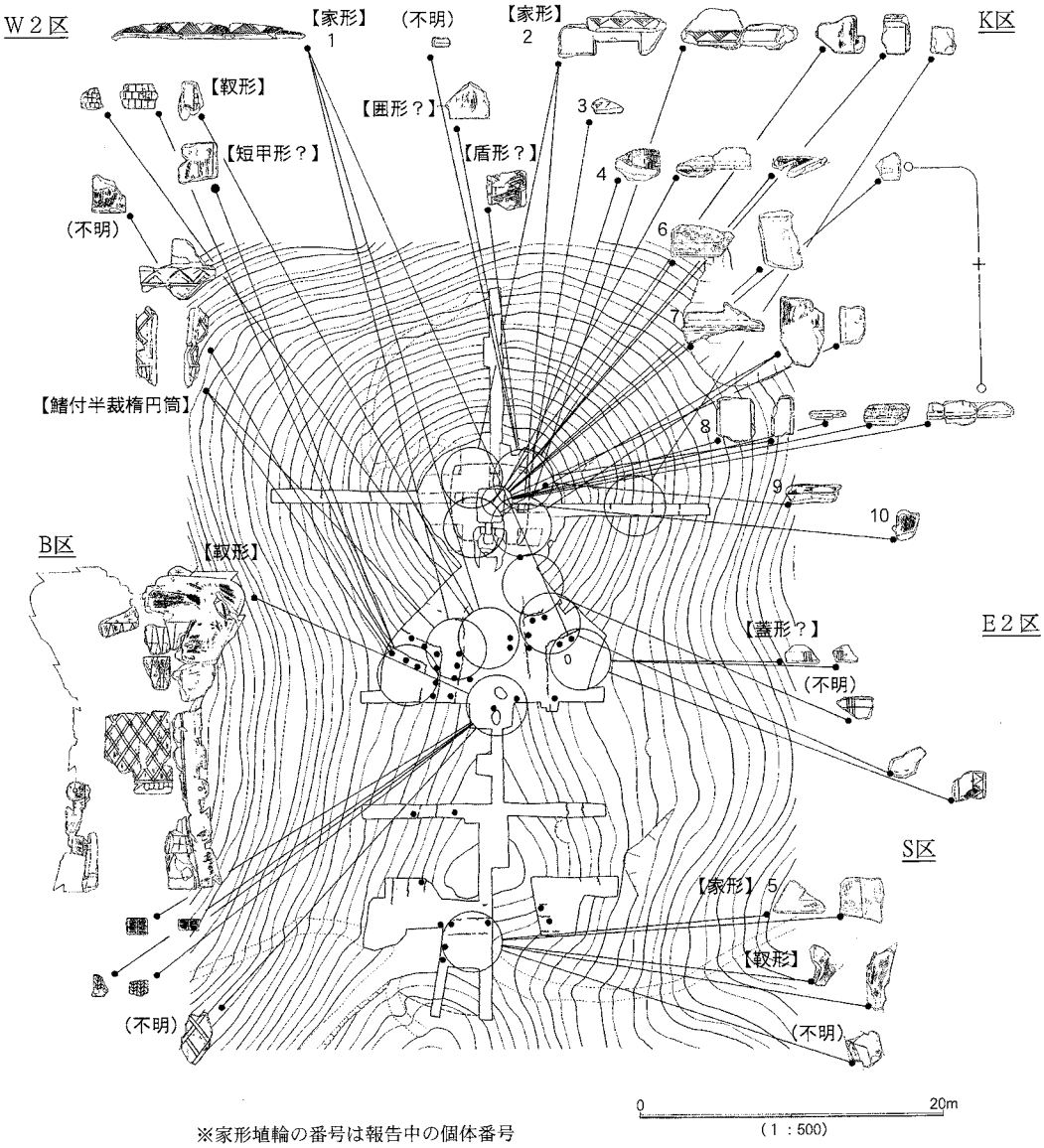


図28　形象埴輪出土位置

（５）埴輪　（図29～48、図版57～61）

埴輪はコンテナ100箱ほどの量が出土している。非常に短期間での整理作業であったため、その全容を示すことはむずかしいが、円筒埴輪・朝顔形埴輪については残存度の高いものを優先的に抽出・図化し、それに線刻などの特徴をもつものをくわえ、口縁部や突帯に関してはそのバリエーションを把握できるようにつとめた。形象埴輪については、器種ごとの現状での個体数が把握できるように、特徴的な破片を優先的に図化した。

以下に埴輪の概要について特徴的な点を中心に述べることとするが、紙幅の都合もあり、各個体の調整手法など一般的な観察項目については観察表を参照されたい。また、粘土の積上げが確認できた箇所は断面に破線で示したが、特に乾燥単位（小工程）と判断される箇所については実線で示したので留意されたい。なお、最終的に墳丘上の埋葬施設の棺として使用された埴輪についても本古墳の埴輪を転用したものと判断した。

円筒埴輪・朝顔形埴輪はおおまかにみて２群に分類できる。ひとつは器壁が薄くシャープな印象をうけるグループ（A群とする）であり、もうひとつは器壁が厚く重厚な印象をうけるグループ（B群とする）である。出土量はA群が大半を占めており、B群はごくわずかである。具体的に示すと、図化したものの中でB群に属するのは４、16、47、121、123のみである。

円筒埴輪・朝顔形埴輪

円筒埴輪では基部から口縁部までその全形のわかるものが２個体復元できた。１（図29）は４条５段構成の円筒埴輪で、第１段に半円形、第３・４段に逆三角形の透孔を２方向に穿つ。なお、図面には記されていないが、第２段にも逆三角形の透孔が１つある。また、第５段には非常に小さな三角形の透孔が現状で１つ確認できる。このような小さな透孔が確認できるのは破片も含めてこの個体のみである。第１～３突帯の上辺には突帯間隔を一定にするための工具痕がＬ字形に残っている。また、それに対応すると思われる凹線が第２突帯の剥離した箇所で微かに確認できる。なお、第１突帯の下部に工具あるいは爪があたったような痕跡が確認できるが、これは第１突帯の設定とは無関係で、突帯貼付時についた痕跡であると思われる。また、各突帯の形状があまり一致しないこともこの個体の特徴であるといえる。なお、第１段の高さは18.2cm、突帯間隔は12.4～13.1cmである。

２（図30）は３条４段構成で、第１段に半円形、第３段に逆三角形の透孔を２方向に穿つ。第１段には透孔の周囲などに線刻が施されているが、何を意図したものかは不明である。１と同様に、第１・２突帯の上辺には突帯間隔を一定にするための工具痕がＬ字形に残っている。なお、第１段の高さは19.8cm、突帯間隔は12.5～13.3cmである。

３（図30）、４～６（図31）、７～11（図32）、12～16（図33）、121・122（図48）は円筒埴輪の口縁部をふくむ資料である。鰭の接合が確認できたのは３、５、11、121の４個体で、どれも鰭の上端が最上部の突帯よりも高い位置に取付くのが特徴である。鰭の接合に際しては、接着力を高めるためや目印として数条の沈線を施す方法が本古墳では通有のようであるが、11のみ例外的に太目のヘラ状工具により乱雑に刻み目を施している。なお、鰭の接合部にあたる円筒本体の突帯は、接合に際して切除されるのが通有で、切除しないものがごく少数存在する。

３は突帯間隔が12.5cmで、円筒本体と鰭の胎土（色調）が異なるのが特徴である。４は突帯間隔が20.1cmで、突帯間隔を一定にするための工具痕が上から２つ目の突帯上辺にＬ字形に残り、突帯剥離部には凹線が確認できる。なお、上から２つ目の突帯の下辺には、突帯貼付時にもちいたと考えられる布の圧痕が明瞭に残っている。特異な点としては、１と同様に、上から２段目の乾燥単位（小工程）を境に胎土（色調）が異なることがあげられる。また、上から２段目にW字形に似た透孔を２方向に

穿つのは、この個体にのみ確認できる特徴である。４では、上から２段目において上から２条目の突帯貼付後のタテハケも観察できる。５、12などでは外面に横方向の擦痕が明瞭に観察できるが、これは赤彩時の工具痕と考えられる。

17～23（図33）は突帯である。17のような幅広で突出の弱いものから23のようなシャープなものまでさまざまなバリエーションのあることがわかる。なお、18～20では突帯下部にいわゆる「粘土補充技法」が確認できる。

24～27（図33）、28～34（図34）は円筒埴輪の胴部としたものである。ただし、これは便宜的なもので、朝顔形埴輪の円筒部が含まれる可能性があることに留意されたい。24はその傾きなどから口縁部直下の破片と推定される。突帯間隔は12.7cmで、外面にナデ状の記号があり、最上部の突帯は下稜のほうが突出する特異な形状を示す。なお、上から２段目の外面のタテハケ調整は、上から２つ目の突帯貼付後におこなわれていることが一部で確認できる。25は下稜に比べて上稜が発達した突帯と、赤彩時のものと思われる外面の横方向の擦痕が特徴である。胴部にみられる線刻としては、26、28～30にみられる受話器のような形をしたものが多く存在する。これらに共通する要素としては突帯間隔を一定にするための道具がもちいられているらしいことがあげられる。なお、30は朝顔形埴輪の肩部である可能性もある。

35～37（図35）、38～40（図36）、41～46（図37）は円筒埴輪の底部としたものである。これも胴部と同様、便宜的なものであり、朝顔形埴輪の円筒部が含まれる可能性があることに留意されたい。第１段の高さは18～19.5cmの間にまとまっている。それに対して、底径は28～35cmとばらつきが大きいのが特徴である。また、42のように器壁の薄いものが少量ではあるものの含まれている点には注意を要する。第１段の透孔は半円形のものを２方向に穿つのが通有であるが、39では例外的に片側のみ逆三角形の透孔をもつ。また、鰭をもつ個体として39～41があり、どれも鰭の下端が第１突帯よりも低い位置に取付くのが特徴である。外面調整の特徴としては、38、43などで第１段に横方向の板ナデのような痕跡を観察できる点が注目される。なお、底面は平滑なものが多く、板ナデのような調整痕が確認できる個体もある（39、41、43、46、123など）。第１段にみられる線刻は、透孔の周囲に施される例の多いことが特徴であろう。また、341、40・41の第１突帯上辺には突帯間隔を一定にするための工具痕がＬ字形に残っているが、鰭をもつ個体と共通する点が興味深い。

47（図38）、48～54（図39）は朝顔形埴輪である。47は第１段、口縁部、鰭を除いては残りが非常に良く、第１段に４つの半円形、第３段に２つの逆三角形、第５段に２つの半円形の透孔をもつことが確認できる。第１段に４つの透孔をもつのは、円筒埴輪の第１段が２つなのに対して異なる点である。全体の形状としては、下にいくほど径が若干大きくなる点と第４～５突帯の間隔が狭くなる点が特徴的である。第１～４突帯における各突帯間隔は13.5～14.5cmである。鰭は欠落しているものの、上端は第５突帯の上部に、下端は第２段中央部に取付くことが確認できる。また、突帯間隔を一定にするための工具痕が第１～３突帯の上辺にＬ字形に残り、第２突帯が剥離した箇所ではそれに対応すると思われる凹線も観察できる。なお、凹線は第１突帯の剥離箇所にもみられるが、これは上下に強く波打っており、突帯間隔（第１段の高さ）を一定にする意図でもちいたものではなく、あくまで目印的なものであろう。また、第４段の外面調整のタテハケは第４突帯貼付後に一部施されているようである。48は朝顔形埴輪の口縁部であるが、１次口縁と２次口縁とで胎土（色調）が異なる点が特徴的である。また、２次口縁の成形にあたっては４回の粘土の積上げをおこなっているようであるが、そのつど先端にナデを施し口縁端部のように整形しているようで、その箇所が剥離痕として明瞭に観察できる。50は朝顔形埴輪頸部周辺の破片である。現状での一番下の突帯の剥離箇所には突帯間隔を一

定にするための工具痕としての凹線らしきものがわずかに観察でき、それが正しいとすると、円筒部最上段の間隔が狭くなる47とはタイプが異なり、円筒部の突帯間隔が一定となるタイプの朝顔形埴輪が存在していたこととなろう。51、52は朝顔形埴輪としては異形であるが、山口県柳井茶臼山古墳などにみられるような肩部の破片となる可能性がある。53は朝顔形埴輪の肩部から頸部にかけての破片であるが、竹管文が外面に施されているのが特徴である。竹管文などのような山陰的な装飾方法が、比較的新しい時期まで残存することの傍証となる資料であろう。53は出土位置や色調などから48と同一個体である可能性がある。なお、竹管文の施された破片はこの他に3片確認している。54は肩部に三角形の透孔を確認することができる。

55・56（図40）は鰭である。56は突帯の痕跡からみて、47のような円筒部最上段の間隔が狭くなるタイプの朝顔形埴輪の鰭であると判断できる。その片面にはジグザグ状の線刻がみられる。56は突帯の痕跡が1箇所のみであり、円筒埴輪のものか朝顔形埴輪のものかは判断できない。

57・58（図40）はおそらく同一個体で、現状では楕円筒埴輪となる。ただし、その出土位置から59の靫形埴輪の円筒部となる可能性のあることが注意される。これに関しては、58が楕円の片側のみしか良好に残存していないことも示唆的である。また、楕円形という特異な形状を考えれば、出土位置・胎土は異なるものの105の鰭付半裁楕円筒埴輪と同一個体となる可能性も残されている。57は外面に2つ円形の刺突のあることが、58は内傾気味に立上ることがそれぞれの特徴である。58の内面には板状の工具があたった痕跡があり，これについては楕円形に成形する際、無理に屈曲させるために内面に工具をあてたものであると推測できる。

靫形埴輪

59（図41・42）、60～66（図42）は靫形埴輪と判断したものである。59はそれぞれ接合しないものの、6つの破片を復元的に図化することをこころみた。全体的な形状は、鰭飾りを多用する背板部や箱状の矢筒部をもつ点など、大和・新沢500号墳、室宮山古墳、河内・萱振1号墳でみられるような畿内における靫形埴輪に類似するものである。しかし、畿内でみられる一般的な靫形埴輪は背板部や矢筒部に直弧文が充填されるのに対して、59は背板部がほぼ無文で矢筒部には斜格子文などが充填されており、様相は大きく異なる。また、箱状の矢筒部だけでなく背板部にも鏃が表現され、さらにはその裏面にも鏃が表現されるなど畿内ではみられない表現がなされている。なお、表面の鏃身の部分には意図的に赤彩がなされており、それから判明する鏃の形式は矢筒部のものが柳葉式、背板部表面のものが方頭式で、背板部裏面のものが圭頭式となっている。靫形埴輪はあくまで実物を模倣したものであり、実物の靫や鏃をどこまで正確に表現したのかは注意を要するが、上記のような鏃の組成を九州的なものとしてとらえることも可能であるし、有稜系の鏃が含まれない点も示唆に富む。また、矢筒部の鏃は刃部より下の部分が肉彫状に表現されている点と、穿孔を模倣したのか刻印を模倣したのかは不明であるが円形の凹みのある点が注目される。なお、矢筒部に斜格子文などがもちいられることは、このタイプの靫形埴輪の規範からは逸脱したものであるが、実物の靫と比較してみるならば、原品を忠実に模倣したものともいえよう。その斜格子文の施された破片については裏面がすべて剥離面になっており、矢筒部を成形したのちに貼付けていることが確認できる。また、側面にも斜格子文の線刻が延長しているようである。

靫形埴輪の製作技法を考える際の重要な点の1つとして、背板部と円筒部との接合方法があげられるが、残念ながら遺存状況が悪く、決定的なことは判断しかねる。図41の各断面図に示したように、高さによって円筒部への取付きかたが変化するようにも考えられる。あるいは円筒部は途中で途切れている可能性もある。また、断面図を実測した一番低い箇所であるEE´間の断面を参考にするならば、

楕円筒埴輪の平坦部に背板部を貼付けたことも考えられそうである。となると、さきに述べた58の楕円筒埴輪がこの靱形埴輪の円筒部となる蓋然性も高まってくる。ただし、このような接合方法は畿内の資料ではみられない点に注意しておく必要があろう。

60、61は靱形埴輪の背板部の破片であると判断した。図化していないが、59に接合しない円形の紐通し孔と考えられる破片が存在することからも、靱形埴輪は最低でも59ともう1個体存在していたものと思われる。62は矢筒部の破片である。63、65、66は裏面がすべて剥離面となっており、沈線により方形の区画が描かれていることから、矢筒部の横帯を表現したものではないかと思われる。

家形埴輪

67～73（図43）、74～81（図44）、82～91（図45）は家形埴輪と判断したものである。

図43に示したものは軒先に鋸歯文が描かれたもので、最低でも３個体は存在する。１つ目は５の屋根の平面形が隅丸の長方形となる個体である。このような形態は老司古墳の家形埴輪の影響下に成立したものかもしれない。67は鋸歯文の施されていない区画に赤彩を施し、視覚的な効果を高めていることも特徴的である。なお、どのような壁体が伴うのかは不明である（家形埴輪１）。２つ目は69に代表されるような、軒先の突帯上に鋸歯文を施し、壁に段差のある個体である。69は右側が隅柱となり、軒先もやや上方に屈曲していくようであるので、切妻造となるようである。68、71～73はこれと同一個体あるいは同じタイプの別個体になると思われる。71は下端が剥離面となっていることが、72は屋根部との接合面に刻み目の施されていることが、73は妻側の破片らしいことがそれぞれ留意すべき点である（家形埴輪２）。３つ目は70の寄棟造あるいは入母屋造となるであろう個体である（家形埴輪３）。

図44の上半に示したもの（74～77）は屋根部に網代の表現をもつ切妻造の個体である。これについては現状で１個体と判断している。74、75、77にみられるように棟や破風には鰭飾り表現がもちいられ、装飾効果を高めている。また、74～76の屋根部には縦方向の剥離痕が観察でき、その部分に突帯が貼付されていたことが確認できる（家形埴輪４）。

図44の下半に示したもの（78～81）は焼成が良好で堅緻なもので、寄棟造のもの（78　家形埴輪５）と切妻造のもの（79　家形埴輪６）の少なくとも２個体が確認できる。80、81はどちらも隅柱の部分で壁に段差をもつが、寄棟造のもの（78）と切妻造のもの（79）のどちらに帰属するのかは不明である。

図45の上段に示したもの（82～84）は壁に段差のない個体で、現状で１個体と判断する。82は基部の破片であるが、その成形方法において横方向に寝かせた粘土帯をもちいているのが特徴的である。その横方向に寝かせた粘土帯の下面に接合時に施された数条の沈線がみられることから、まず横方向に寝かせた粘土帯を廻したのち、順序はさだかでないが、壁体あるいは基部を接合したものと判断できる。基部には家形埴輪によくみられる半円形の透孔もみられる。83は妻側、84は平側の破片である（家形埴輪７）。

図45の中段に示したもの（85～89）は器壁が薄く壁に段差のある二階建の個体で、現状では1個体と判断する。88、89から二階建と判断したわけであるが、二階部分の壁体を積上げる際、通常は壁体を積上げたのちに庇状の突帯を付加するのに対し、これらの破片ではL字状に折曲げた粘土帯を一気に積上げているのが特徴的である。87は裾廻りの基壇状の突帯と思われるが、鰭飾り的な装飾を施している可能性がある。したがって、図44に示した74～77の屋根に網代の表現をもつ切妻造の個体とこの器壁が薄く壁に段差のある二階建の個体は同一個体である可能性がある。網代の表現をもつ切妻造の個体には屋根部以外の破片が存在しないことや、この個体と同様に色調も黄白色でよく似ている点も

示唆的である（家形埴輪８）。

図45の下段に示したもの（90、91）は上記の個体に含まれないと判断したもので、それぞれ別個体なので２個体分である。90は棟の破片（家形埴輪９）で、91は壁に線刻がある（家形埴輪10）。

以上、家形埴輪について述べたが、少なくとも９個体は存在していたと判断される。

その他の形象埴輪

92は囲形埴輪と思われる破片である。囲形埴輪でないとすると、基部の高い家形埴輪が該当するであろう。

93（図46）は蓋形埴輪の笠部と思われる破片である。ただし、これに対応すべき立飾りは現状では確認されていない。

94～104は器種の特定できない形象埴輪である。94は剥離面があり装飾的に用いられたものであろう。95はこれと同一固体と思われる。99は盾形埴輪とも考えられるが断定するには至らない。100は右側の線刻が短甲の引合板に対応するとも考えられるが、帯金の表現がなく、短甲形埴輪と断定するには至らない。101は短甲形埴輪の草摺部に相当するとも考えられるがこれも断定するには至らない。

鰭付半裁楕円筒埴輪

105は鰭付半裁楕円筒埴輪としたものである。３片は接合関係にはないが、色調や線刻の特徴から同一個体と判断した。口縁部の形態は粘土帯を貼付けたいわゆる貼付口縁といわれるものである。左右の鰭の裏面には線刻は施されず、その円筒部の上半は切取られ、半裁された状況になっている。鰭付半裁楕円筒埴輪とされるものは大分県小熊山古墳で確認されているが、本古墳例との系譜的な関連はなさそうである。

壺形埴輪

106～120は壺形埴輪と思われる破片である。口縁部については朝顔形埴輪、円筒埴輪のものがふくまれる可能性があるが、116のように胴部にケズリがみられるものや、118などのように穿孔ではない筒状成形の底部の存在から、ごく少数ではあるものの壺形埴輪も確実に存在していたようである。また、壺形埴輪の大きさには大中小の３つのサイズがあったようである。

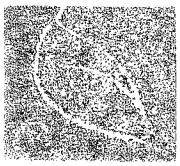
（加藤　一郎）

第２突帯剥離部

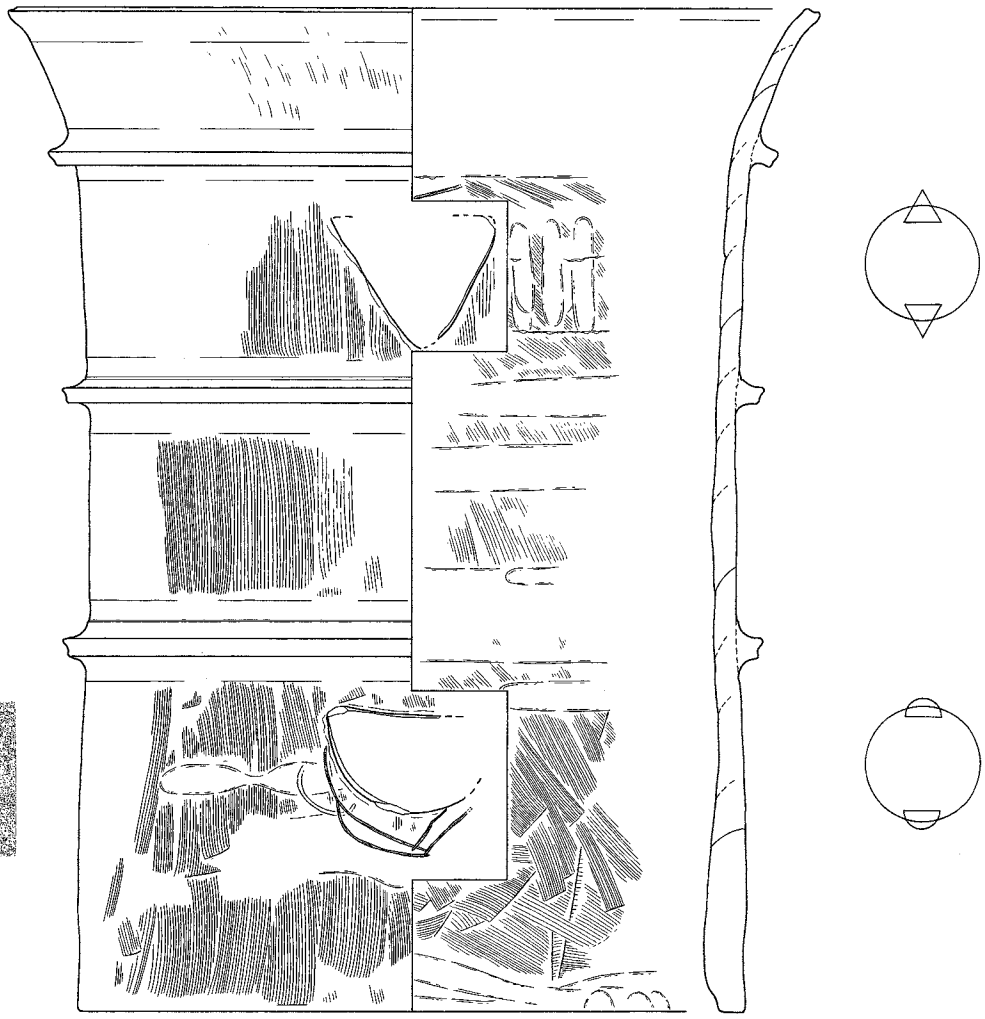
第１突帯剥離部

1

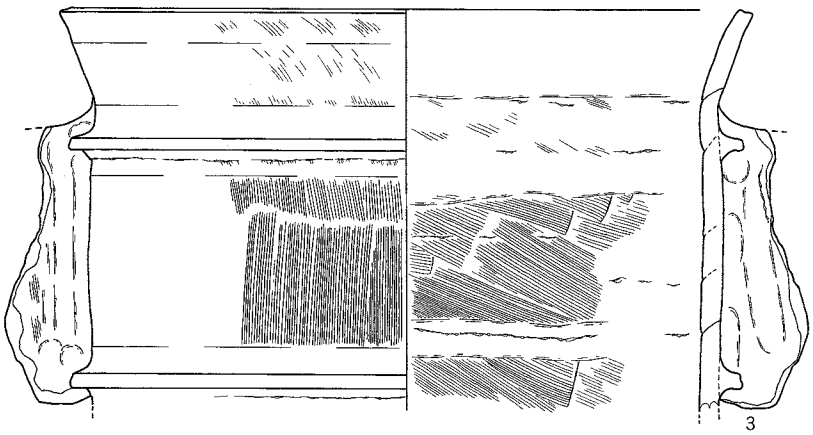
図 29　円筒埴輪（１）



線刻



2

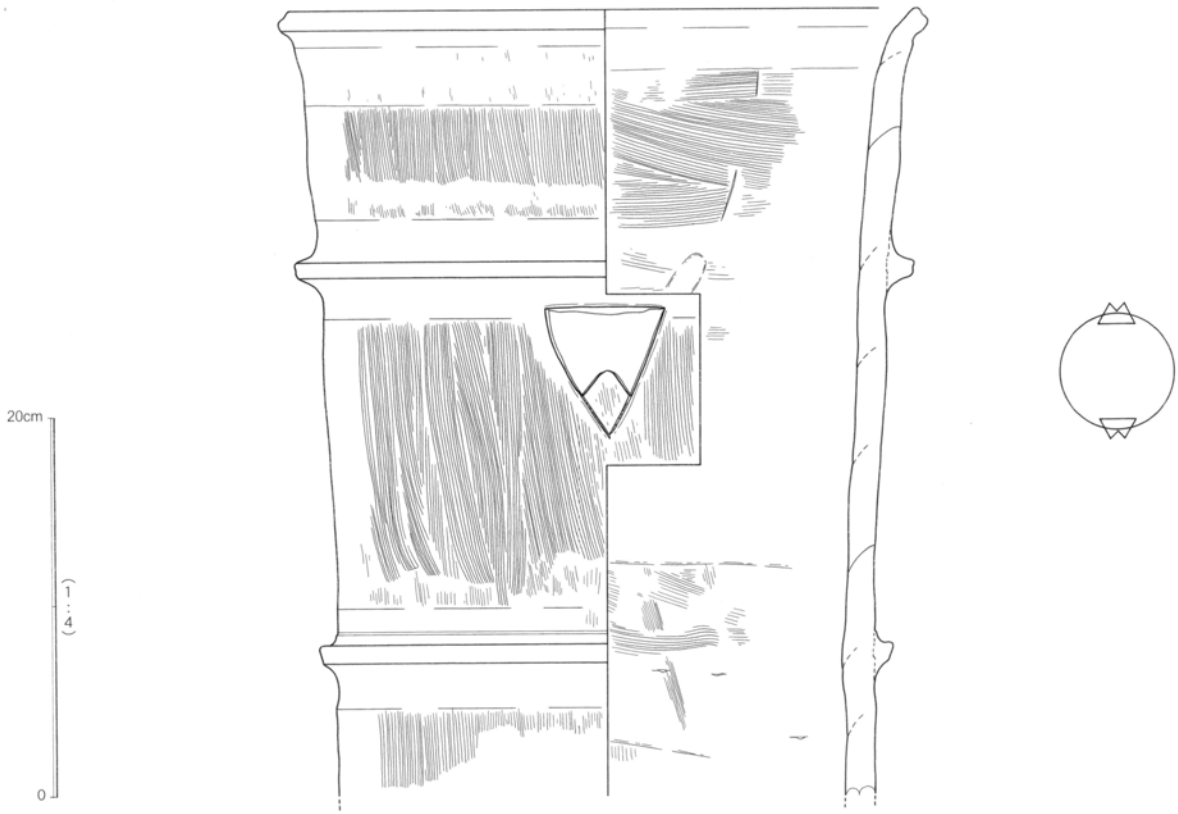


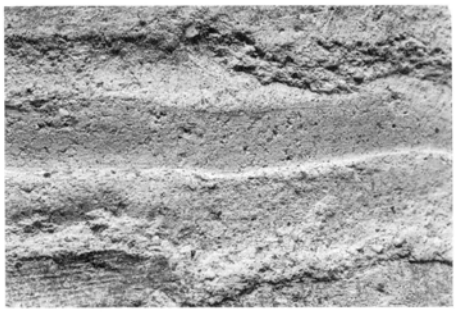
3

0　20cm

（１：４）

図30　円筒埴輪（２）

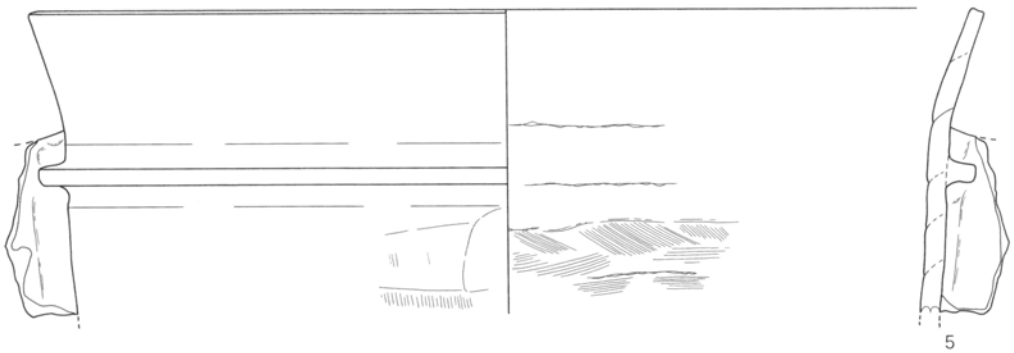




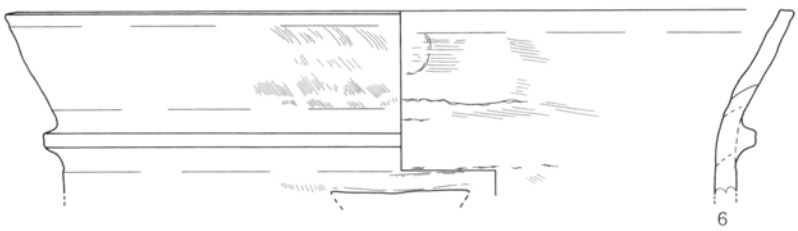
突帯設定の工具痕

布の圧痕

4



5



6

図31　円筒埴輪（3）

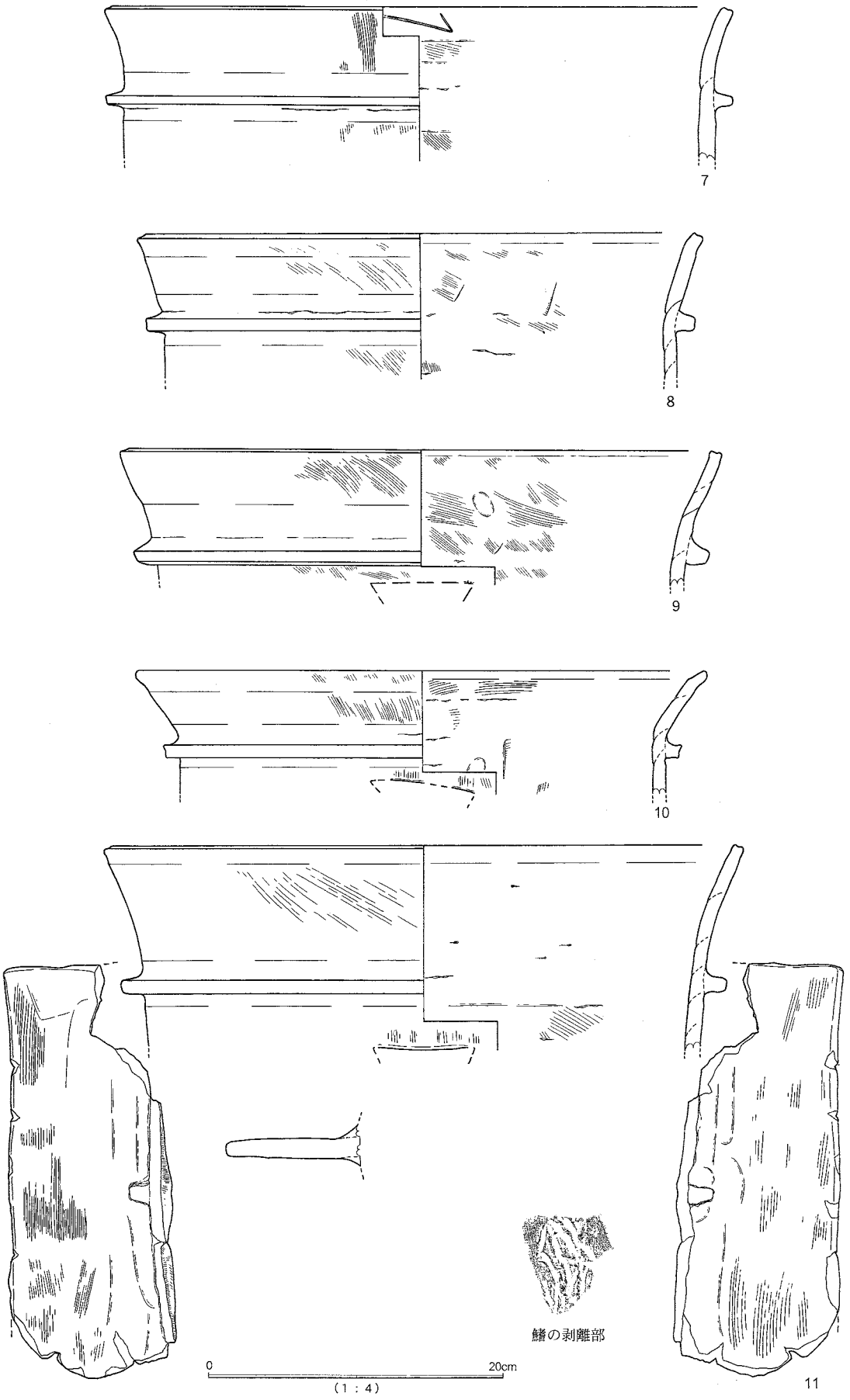


図32　円筒埴輪（４）

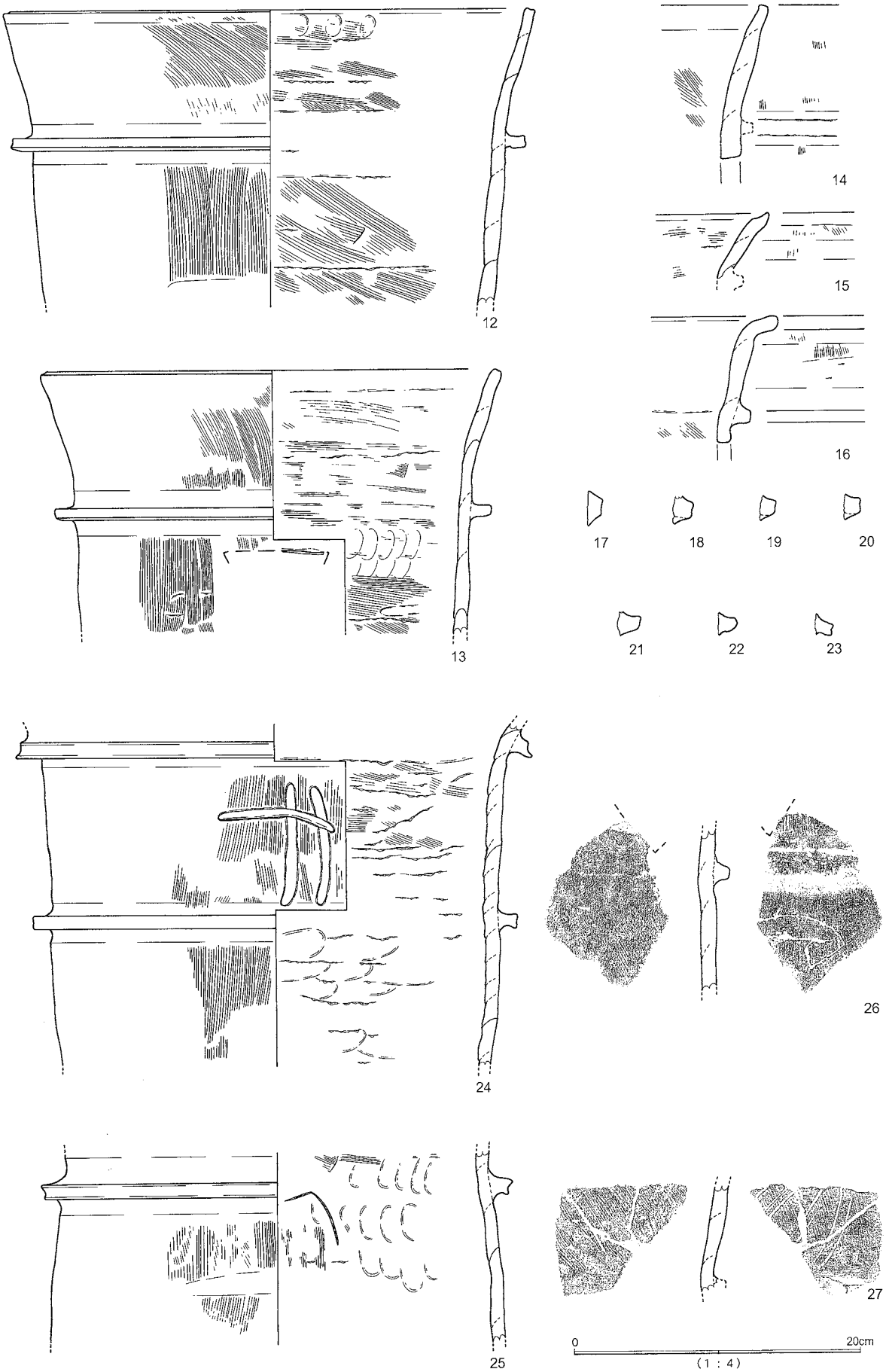


図33　円筒埴輪（5）

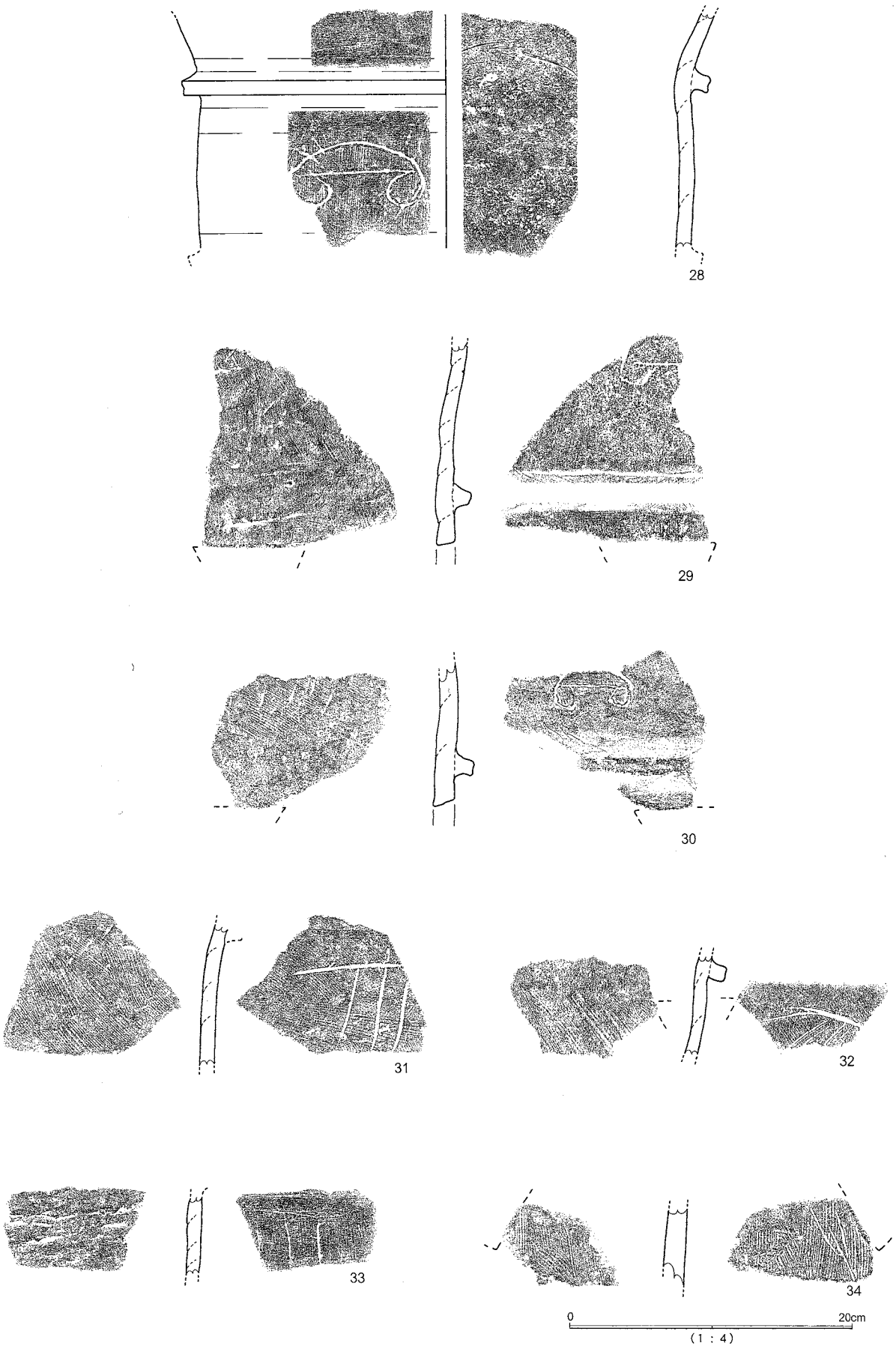
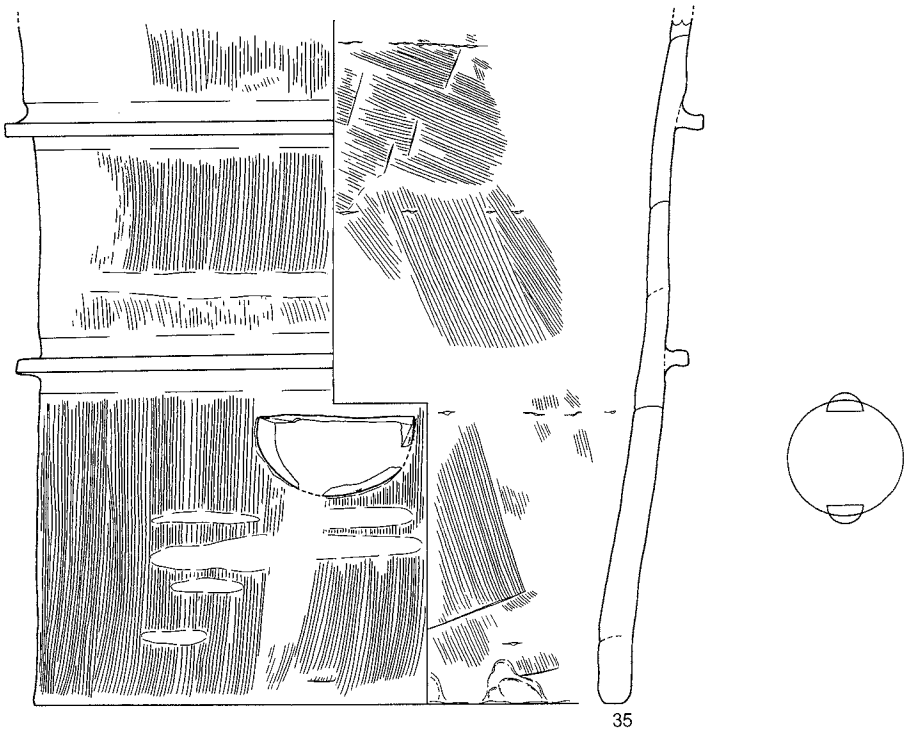
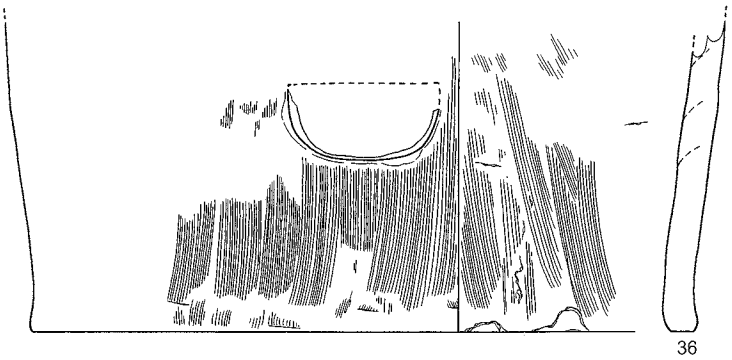


図34　円筒埴輪（6）





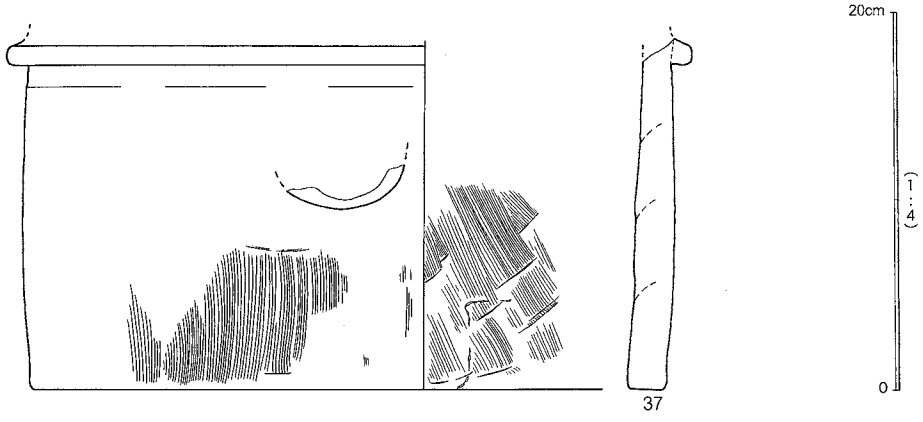
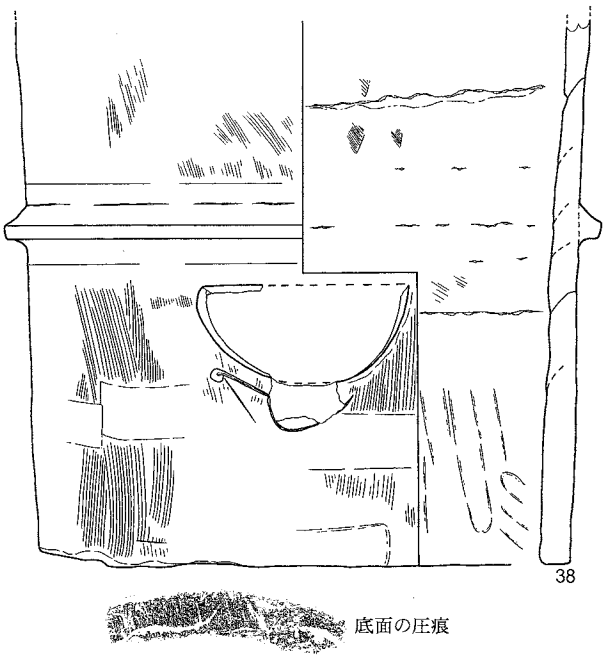
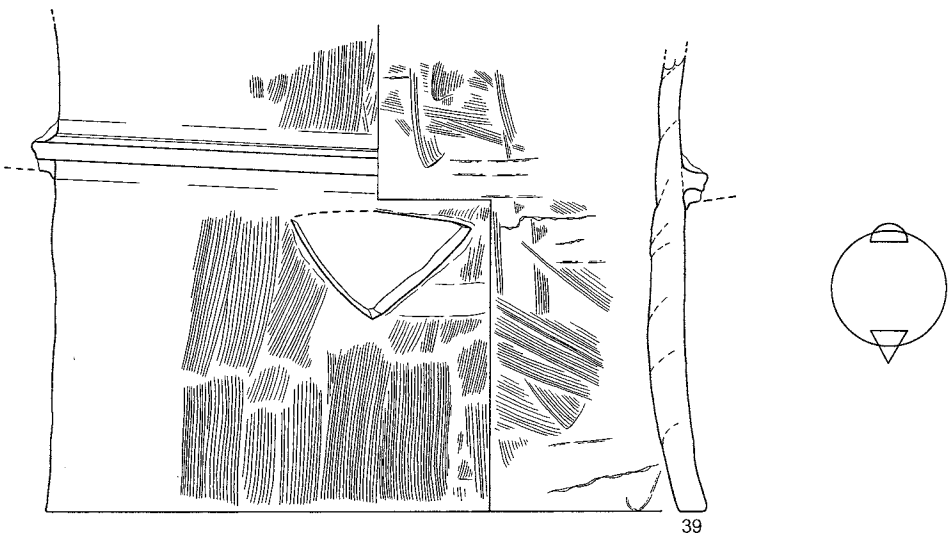


図35　円筒埴輪（7）





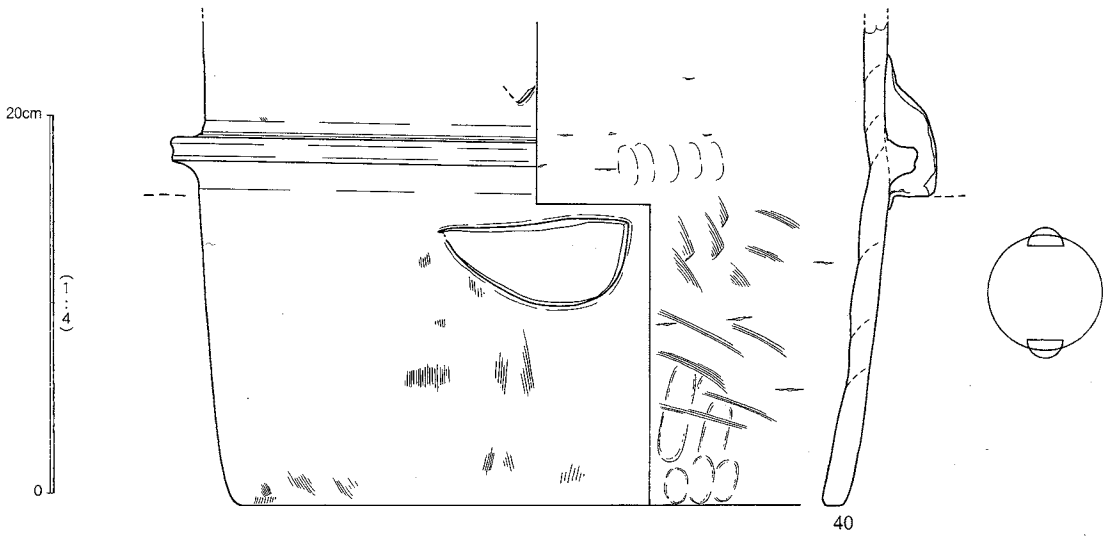


図36　円筒埴輪（8）

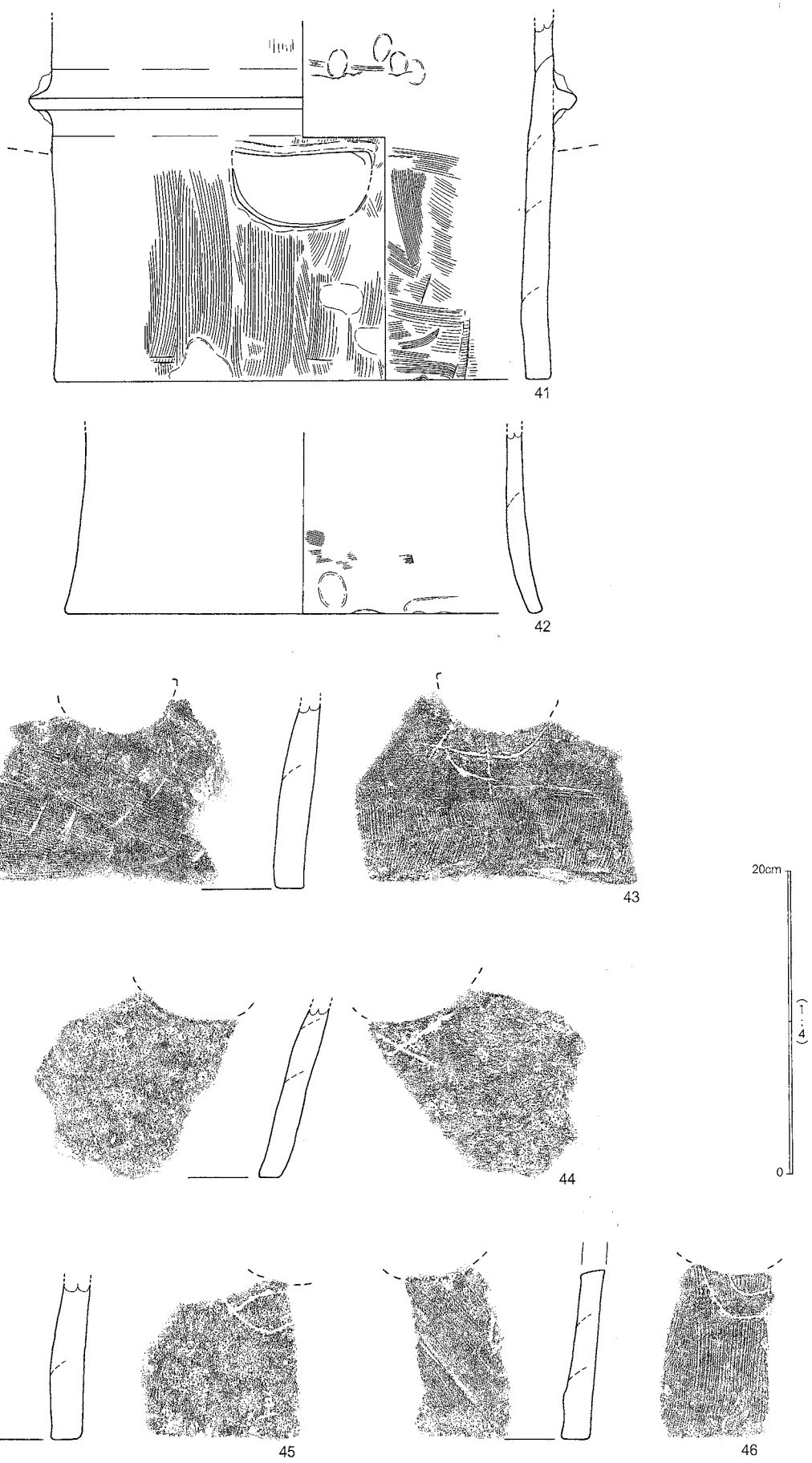


図37　円筒埴輪（9）

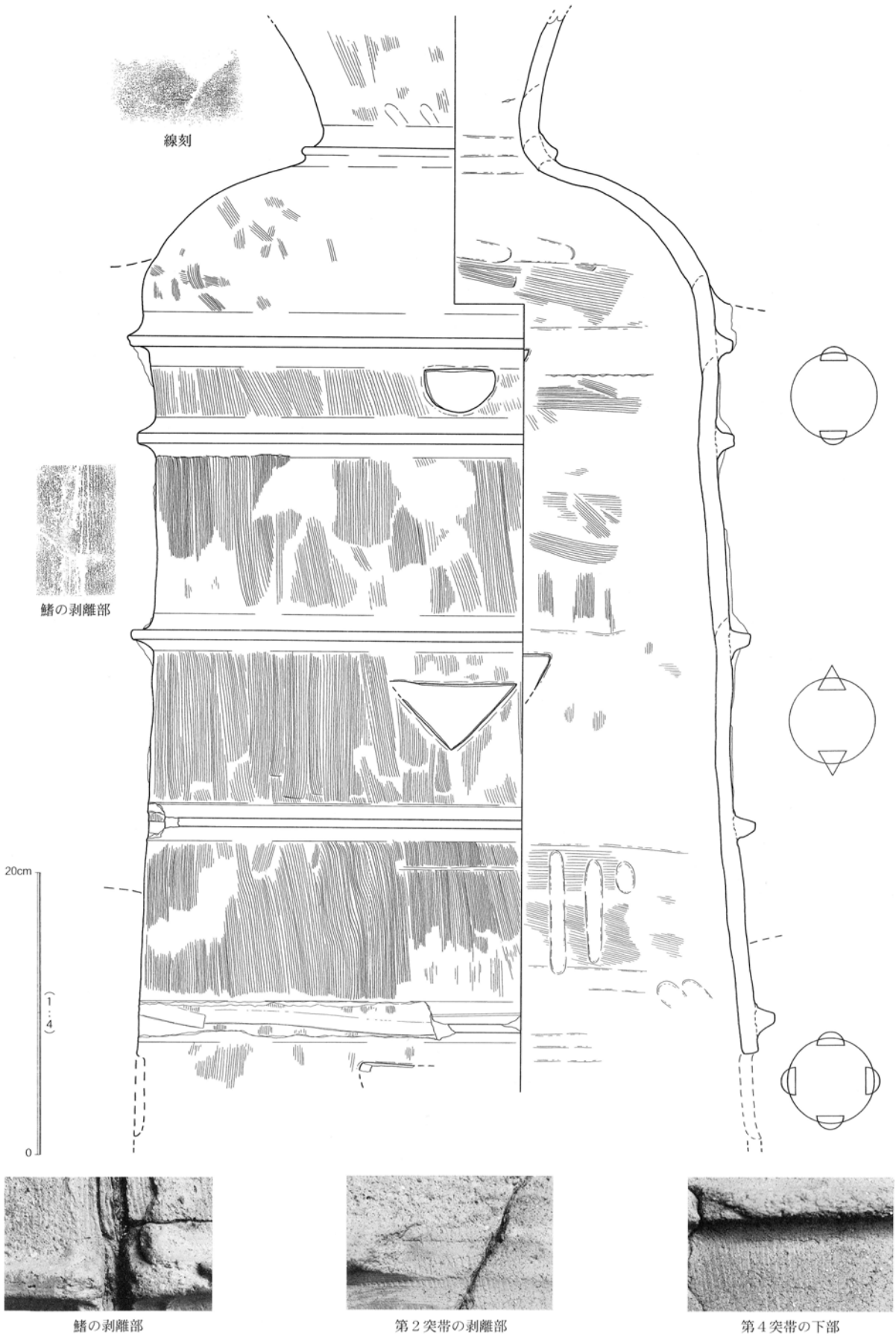


図38　朝顔形埴輪（１）

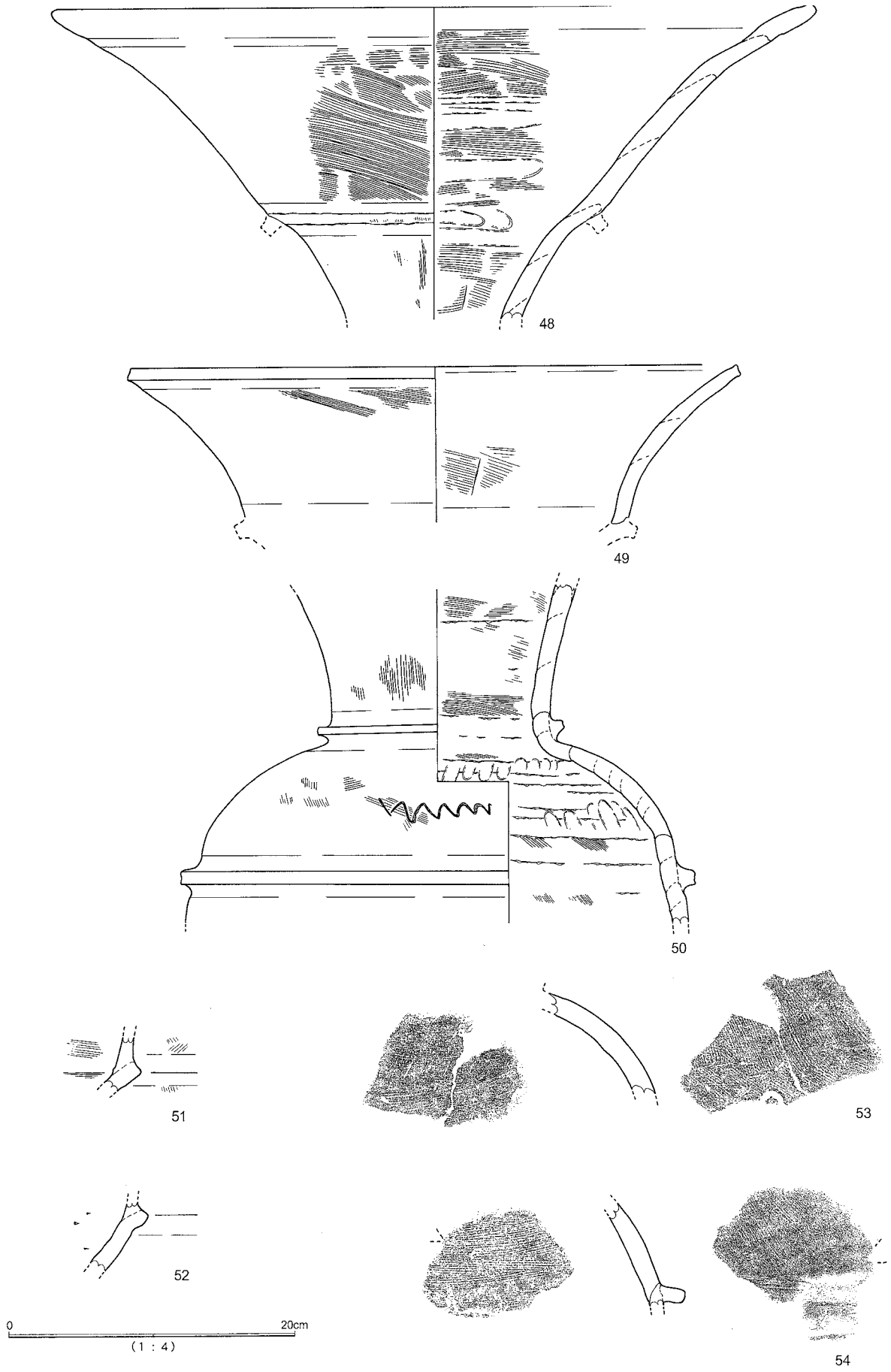


図39　朝顔形埴輪（2）

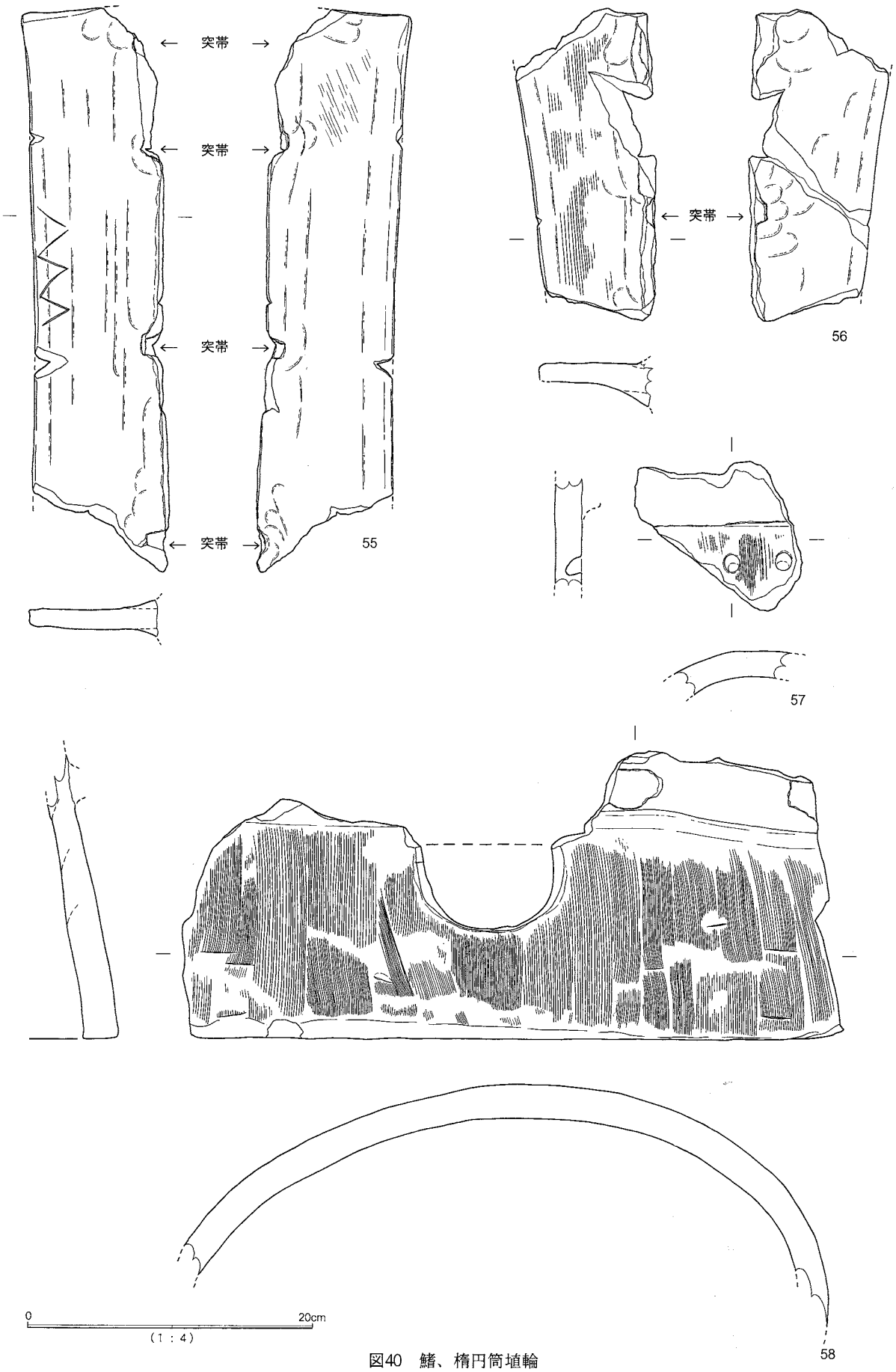


図40　鰭、楕円筒埴輪

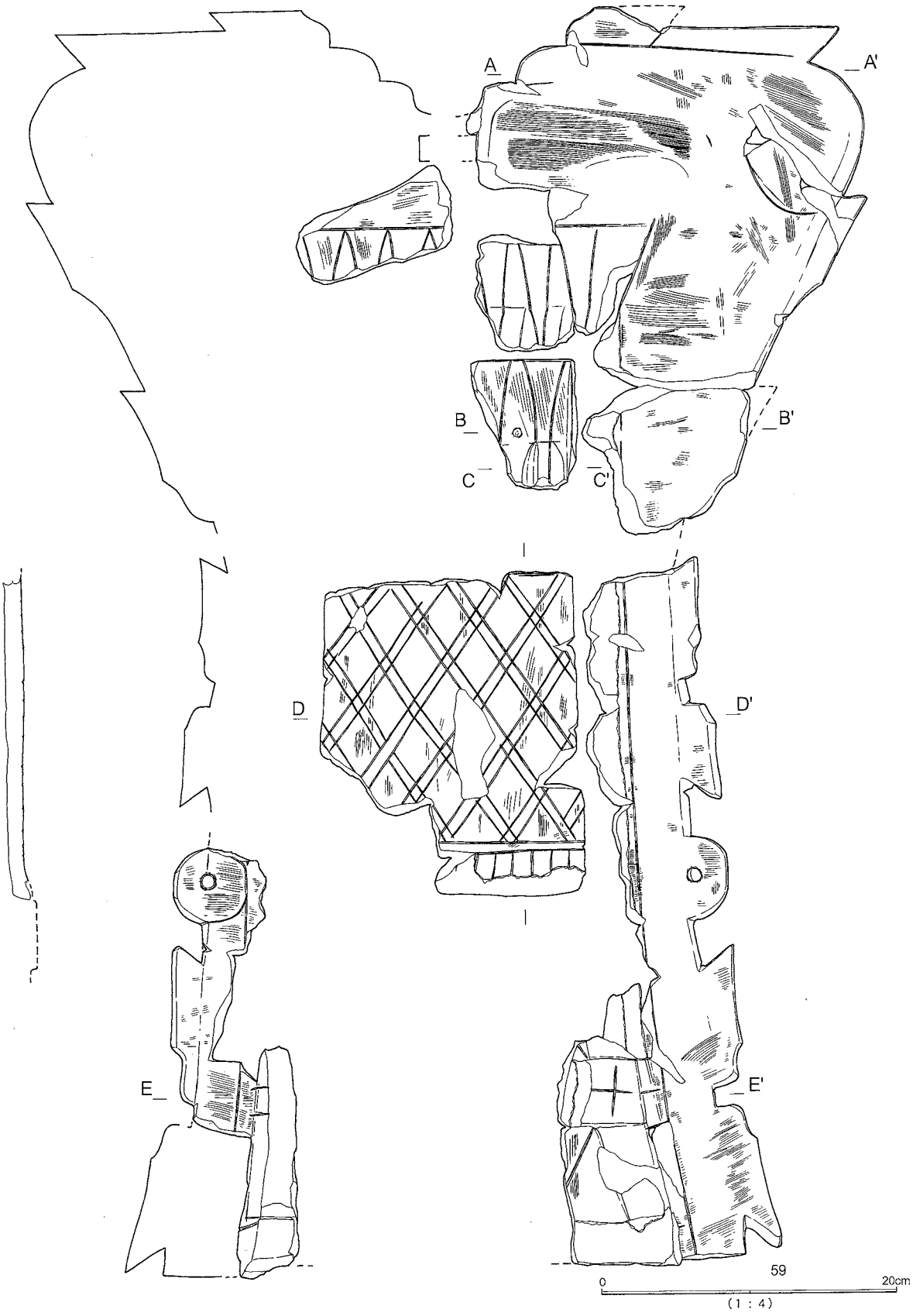


図41　鞍形埴輪（1）

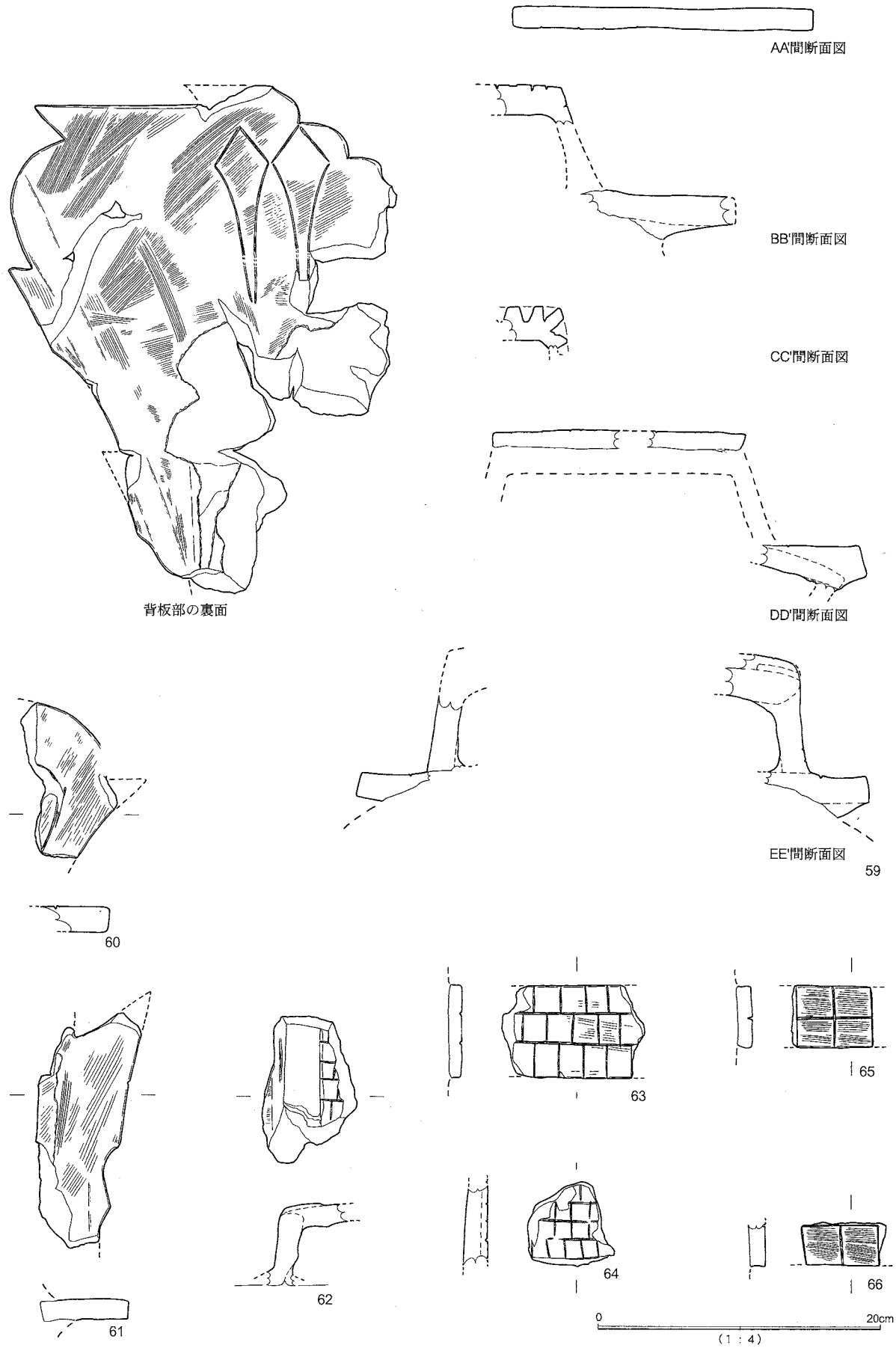

AA'間断面図
BB'間断面図
CC'間断面図
DD'間断面図
EE'間断面図
背板部の裏面
59
60
61
62
63
64
65
66
0
20cm
（1：4）

図42　鞍形埴輪（２）

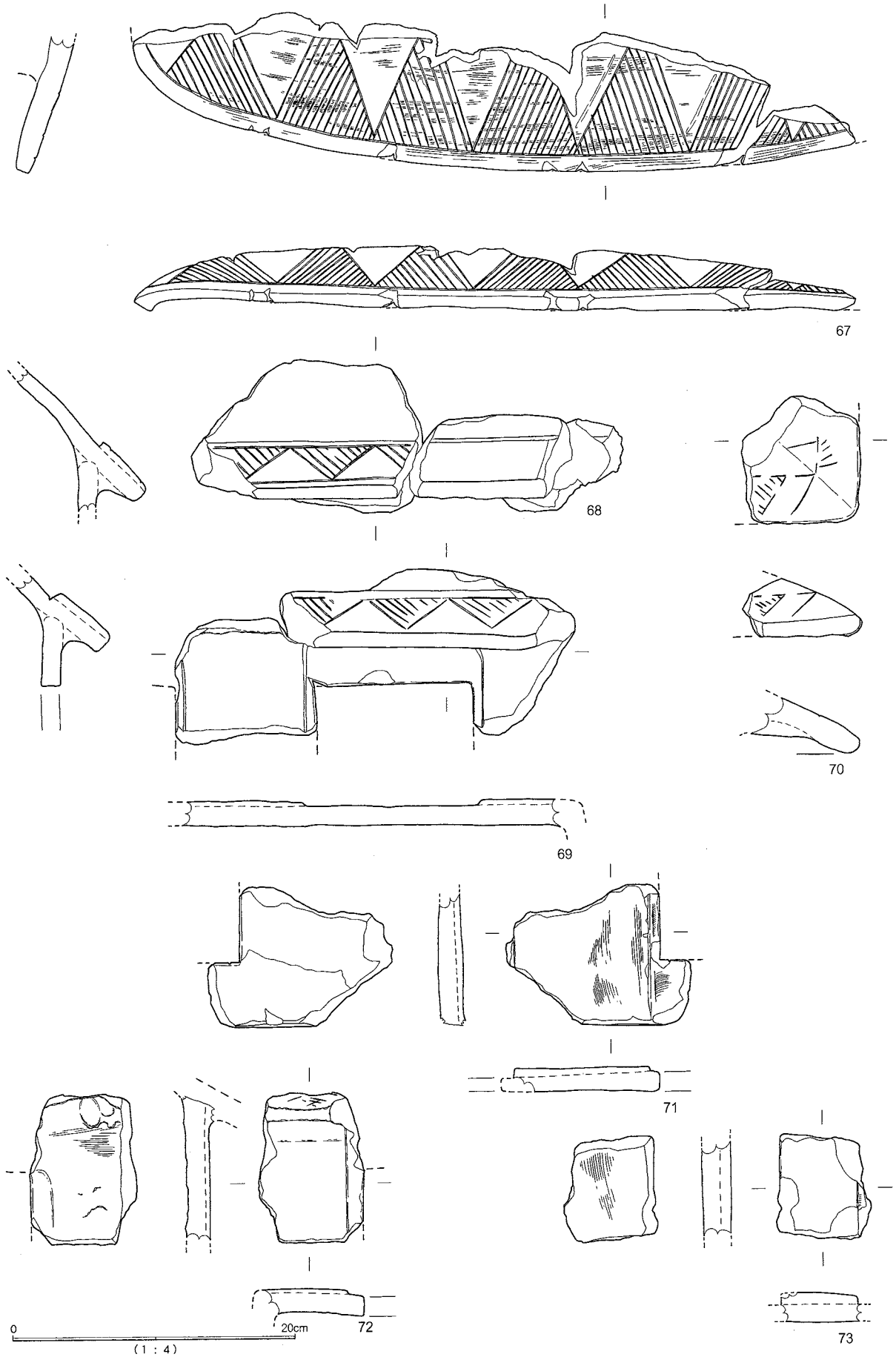


図43　家形埴輪（1）

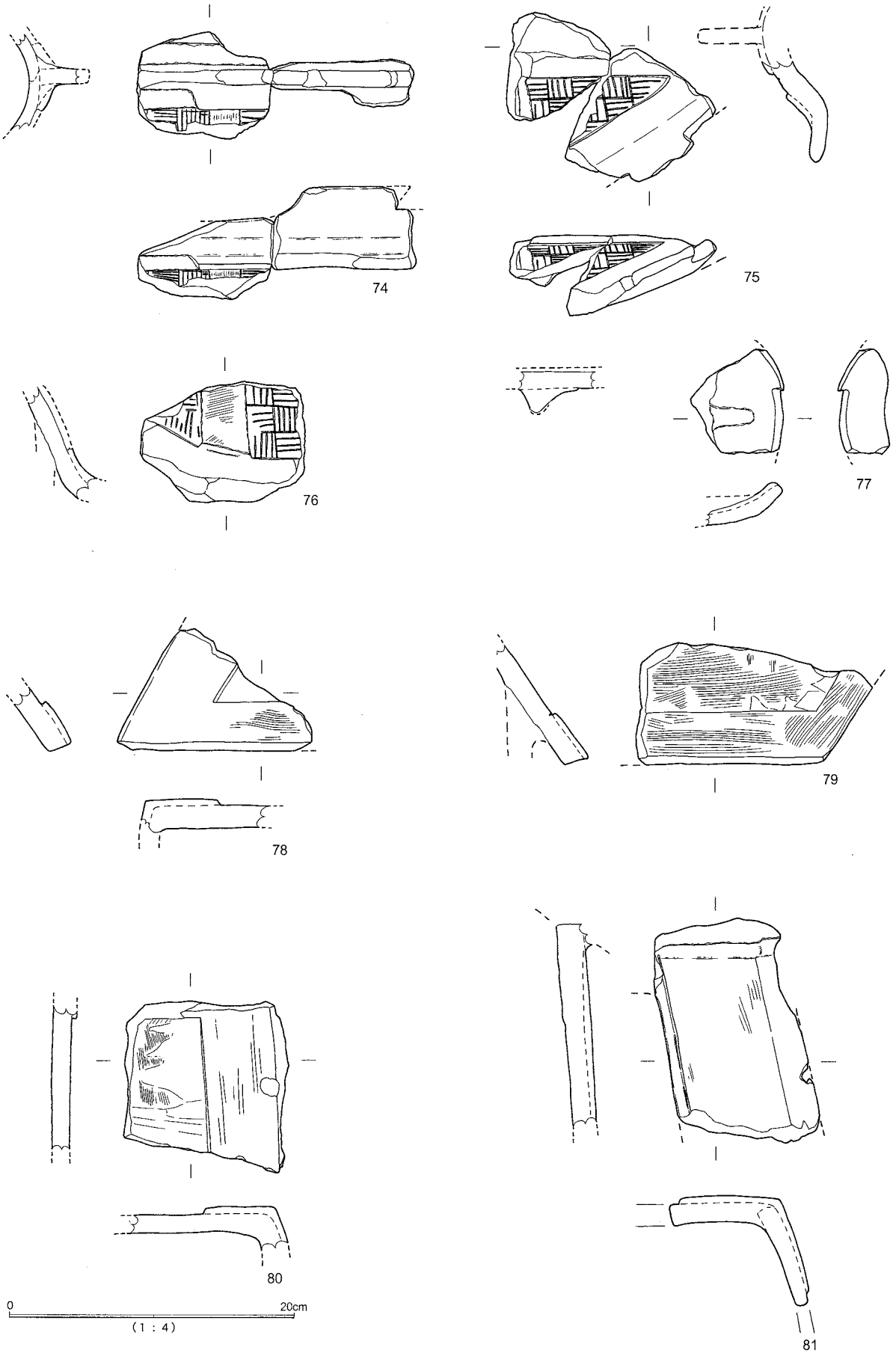


図44　家形埴輪（２）

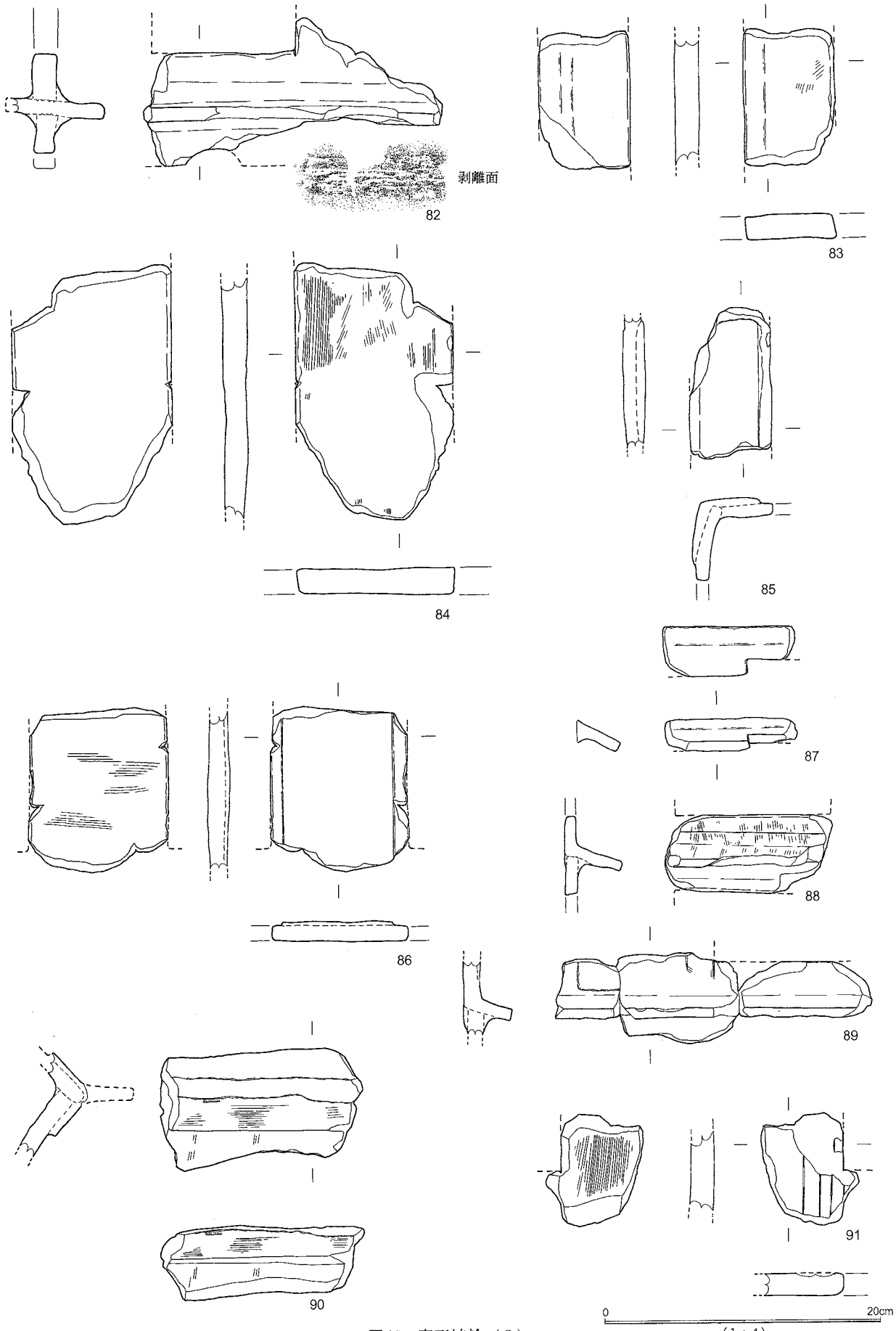


図45　家形埴輪（3）

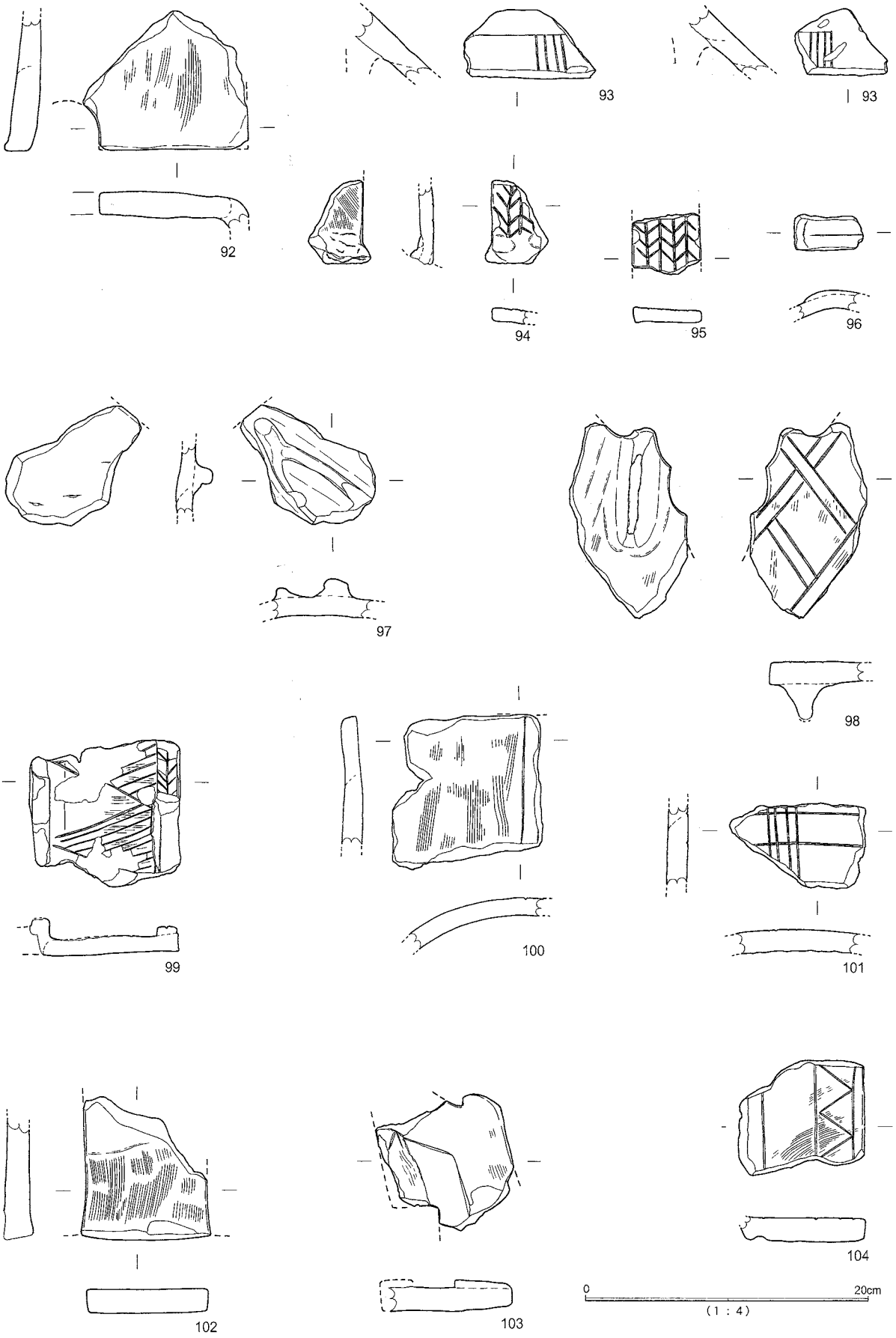
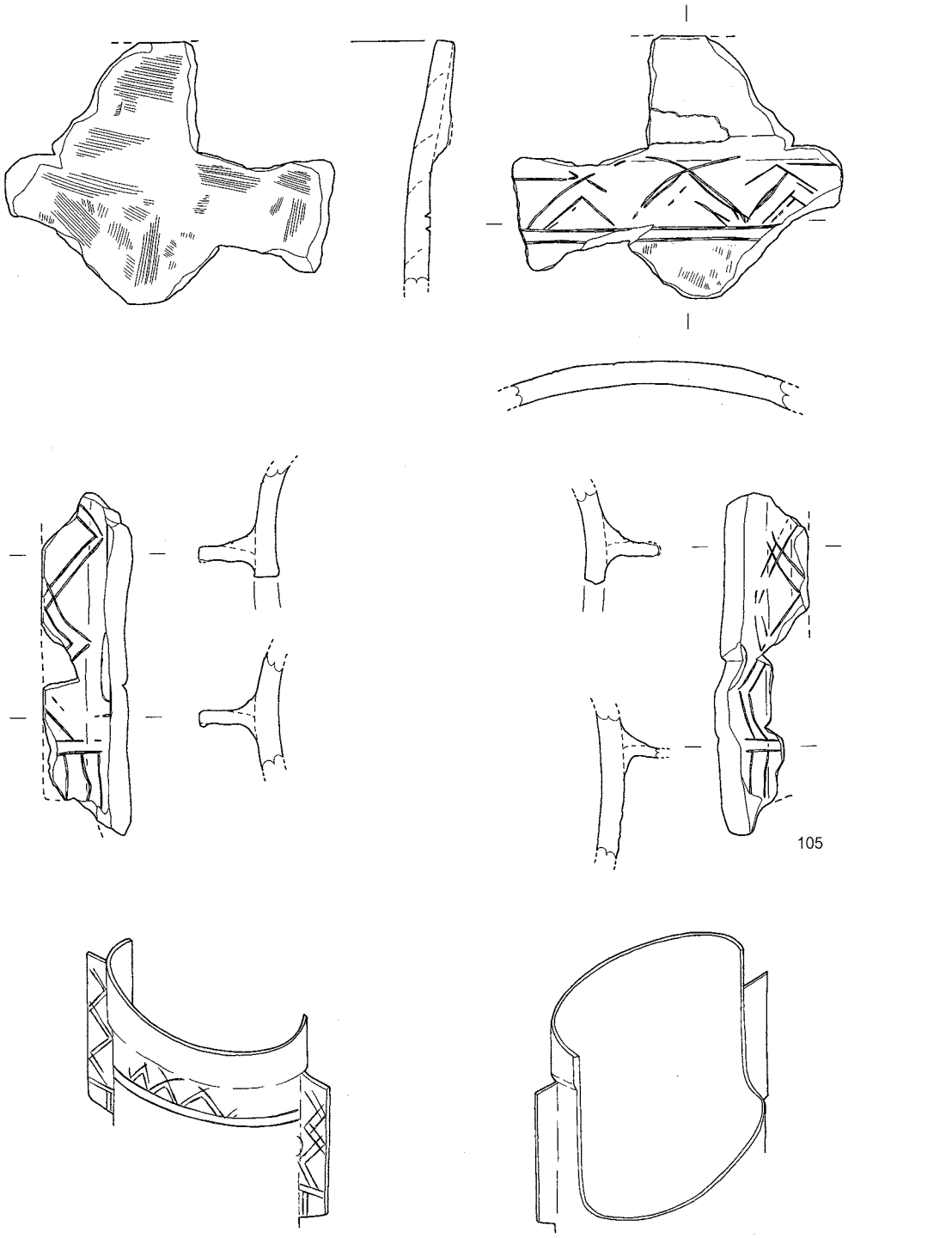


図46　囲形埴輪、蓋形埴輪、不明形象埴輪



105 復元模式図

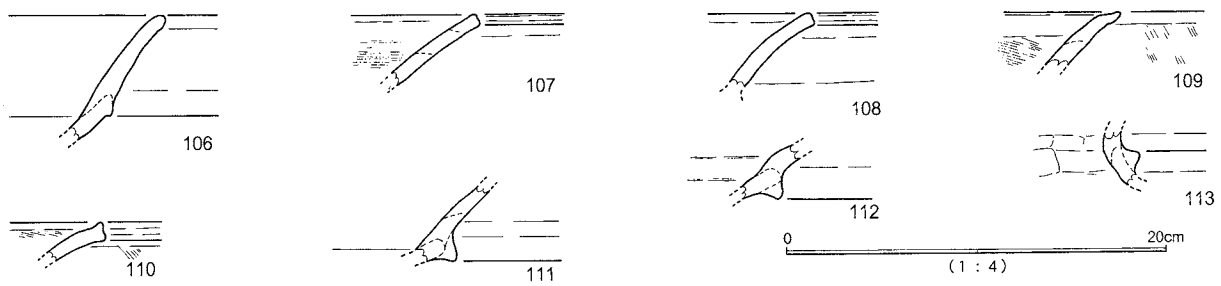


図47　鰭付半裁楕円筒埴輪、壺形埴輪

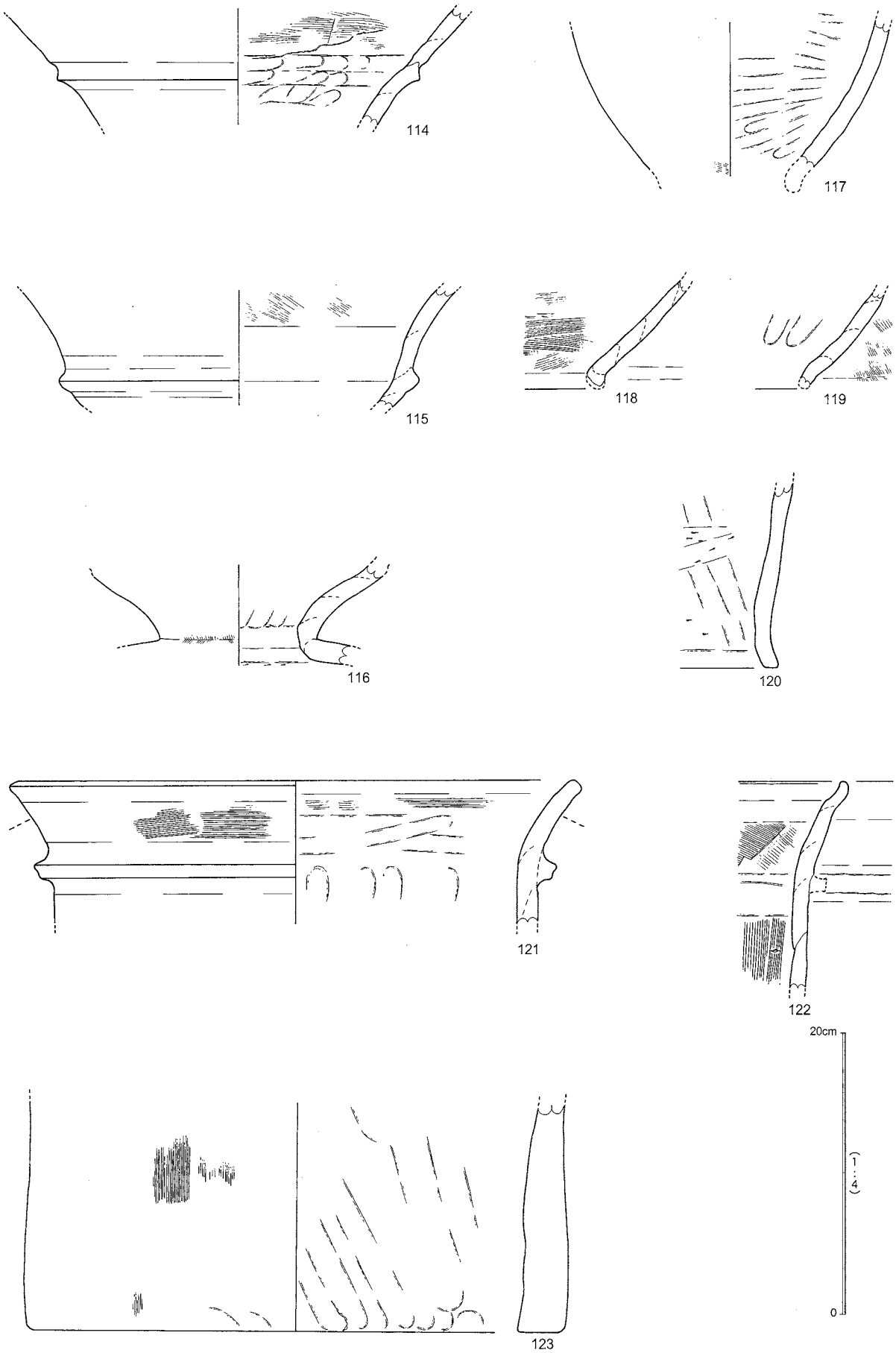


図48　壺形埴輪、円筒埴輪

表４　埴輪観察表（１）

図	遺物番号	登録番号	器種（部位など）	法量（cm）	焼成	色調	調整手法	備考	出土位置
29	1	1201	円筒埴輪	口径：42.8 底径：35.1 器高：62.4	良好	淡黄橙～黄白	外：タテハケ 内：ハケ	凹線、L字の工具痕あり	埴輪棺３
30	2	1202	円筒埴輪	口径：43.0 底径：35.4 器高：53.2	良好	黄白	外：タテハケ（一部ナデ） 内：ハケ（のちナデ）	第1段に線刻あり 凹線、L字の工具痕あり	埴輪棺２
	3	1203	鰭付円筒埴輪（口縁部）	口径：36.6 現存高：21.3	良好	円筒：黄橙 鰭：暗茶	外：タテハケ 内：ハケ（のちナデ）	円筒と鰭で色調（胎土）が異なる	埴輪棺３
31	4	1204	円筒埴輪（口縁部）	口径：33.0 現存高：41.5	良好	上半：黄橙 下半：茶灰	外：タテハケ（一部突帯貼付後） 内：ハケ（のちナデ）	乾燥単位の上下で色調（胎土）が異なる 凹線、L字の工具痕あり	埴輪棺２
	5	1205	鰭付円筒埴輪（口縁部）	口径：50.4 現存高：16.2	良好	黄白	外：タテハケ（横方向の擦痕） 内：ハケ（のちナデ）		Ｅ２区裾
	6	1206	円筒埴輪（口縁部）	口径：41.7 現存高：9.8	良好	淡黄橙～黄白	外：タテハケのちナデ 内：ハケのちナデ		Ｓ区裾
32	7	1207	円筒埴輪（口縁部）	口径：42.8 現存高：10.4	良好	黄橙	外：タテハケのちナデ 内：ハケのちナデ	内面に線刻あり	埴輪棺４
	8	1208	円筒埴輪（口縁部）	口径：38.5 現存高：10.0	良好	黄橙	外：ハケのちナデ 内：ハケのちナデ		Ｓ区裾
	9	1209	円筒埴輪（口縁部）	口径：40.8 現存高：9.2	良好	黄橙	外：ハケ（のちナデ） 内：ハケのちナデ		Ｓ区裾
	10	1210	円筒埴輪（口縁部）	口径：39.0 現存高：8.5	良好	黄白	外：タテハケ（のちナデ） 内：ハケのちナデ		Ｓ区１段
	11	1211	鰭付円筒埴輪（口縁部）	口径：43.6 鰭の突出：9.5	良好	黄白	外：ハケのちナデ 内：ハケのちナデ（板ナデ？）	鰭は接合しないが同一個体と判断した	埴輪棺２
33	12	1212	円筒埴輪（口縁部）	口径：37.0 現存高：20.6	良好	淡黄橙	外：タテハケ（横方向の擦痕） 内：ハケ（のちナデ）		埴輪棺４
	13	1213	円筒埴輪（口縁部）	口径：32.3 現存高：18.7	良好	黄白	外：タテハケ 内：ハケ（のちナデ）		Ｅ２区裾
	14	1214	円筒埴輪（口縁部）	現存高：10.8	良好	黄白	外：ハケのちナデ 内：ハケのちナデ		Ｗ２区３段
	15	1215	円筒埴輪（口縁部）	現存高：4.6	良好	黄橙	外：タテハケのちナデ 内：ヨコハケのちナデ		Ｓ区１段
	16	1216	円筒埴輪（口縁部）	現存高：8.9	良好	黄橙	外：タテハケのち板ナデ 内：ナナメハケ（のちナデ）		埴輪32
	17	1217	（突帯）	突出：1.1	良好	暗茶		剥離部に工具痕あり	Ｓ区裾
	18	1218	（突帯）	突出：1.5	良好	黄橙			Ｓ区裾
	19	1219	（突帯）	突出：1.2	良好	黄白			Ｓ区裾
	20	1220	（突帯）	突出：1.2	良好	黄白		剥離部に工具痕あり	Ｓ区裾
	21	1221	（突帯）	突出：1.7	良好	黄白		剥離部にナデ痕あり	Ｓ区裾
	22	1222	（突帯）	突出：1.4	良好	黄白		剥離部に工具痕あり	Ｓ区裾
	23	1223	（突帯）	突出：1.3	良好	黄白		剥離部に工具痕あり	Ｓ区裾
	24	1224	円筒埴輪（胴部）	現存高：24.1	良好	黄橙	外：タテハケ（一部突帯貼付後） 内：ハケ（のちナデ）	線刻あり 突帯形状それぞれ異なる	埴輪棺３
	25	1225	円筒埴輪（胴部）	現存高：13.5	良好	黄橙	外：タテハケ（横方向の擦痕） 内：ハケのちナデ	内面に線刻？あり	埴輪棺３
	26	912	円筒埴輪（胴部）	現存高：11.4	良好	黄橙	外：タテハケ（のちナデ） 内：ハケ（のちナデ）	L字の工具痕あり 線刻あり	Ｓ区裾
	27	908	円筒埴輪（胴部）	現存高：7.4	良好	暗茶	外：タテハケ 内：ハケ	線刻あり	Ｓ区裾
34	28	10	円筒埴輪（胴部）	現存高：16.5	良好	黄橙	外：タテハケのちナデ（横方向の擦痕） 内：ハケのちナデ	L字の工具痕あり 線刻あり	Ｓ区裾
	29	1226	円筒埴輪（胴部）	現存高：14.2	良好	黄橙	外：摩滅 内：ハケのちナデ	凹線、L字の工具痕あり 線刻あり	Ｓ区裾
	30	1227	円筒埴輪（胴部）	現存高：10.3	良好	黄橙	外：摩滅 内：ハケ（のちナデ）	凹線あり？ 線刻あり	Ｅ２区裾
	31	9	円筒埴輪（胴部）	現存高：10.0	良好	黄橙～暗茶	外：ハケ 内：ハケ	突帯剥離部に目印のナデあり 線刻あり	Ｓ区裾
	32	909	円筒埴輪（胴部）	現存高：7.0	良好	黄橙	外：ハケ 内：ハケ（のちナデ）	線刻あり	Ｓ区裾
	33	907	円筒埴輪（胴部）	現存高：5.6	良好	黄白	外：タテハケのちナデ 内：ナデ	線刻あり	Ｓ区裾
	34	1228	円筒埴輪（胴部）	現存高：5.6	良好	黄白	外：タテハケ 内：ハケ	線刻あり	Ｅ２区裾
35	35	1229	円筒埴輪（底部）	底径：30.9 現存高：36.4	良好	淡黄橙	外：タテハケ（横方向の擦痕） 内：ナナメハケ	第1段上部に赤彩の境界あり	埴輪棺４
	36	450	円筒埴輪（底部）	底径：35.0 現存高：16.4	良好	黄橙	外：タテハケ 内：タテハケ		埴輪52
	37	352	円筒埴輪（底部）	底径：33.2 現存高：18.5	良好	黄橙	外：タテハケ（のちナデ） 内：ナナメハケ		埴輪35
36	38	344	円筒埴輪（底部）	底径：28.0 現存高：28.8	良好	黄橙～黄白	外：タテハケ（のち板ナデ？） 内：ハケのちナデ	底面に草木類を敷いた痕跡あり 線刻あり	埴輪28
	39	341	鰭付円筒埴輪（底部）	底径：34.9 現存高25.8	良好	黄白	外：タテハケ（のちナデ） 内：ハケ（のちナデ）	突帯細い L字の工具痕あり 基部は1帯造り？ 第1段対面の透孔は半円形 鰭より上部に赤彩あり	埴輪43
	40	376	鰭付円筒埴輪（底部）	底径：31.6	やや悪	黄橙	外：摩滅（タテハケ） 内：ハケ（のちナデ）	L字の工具痕あり 基部は1帯造り？ 第2段から赤彩	埴輪33
37	41	445	鰭付円筒埴輪（底部）	底径：32.4 現存高：23.7	良好	黄橙～黄白	外：タテハケ（のちナデ） 内：ハケ（のちナデ）	L字の工具痕あり 底面に棒状のものを敷いた痕跡あり	埴輪50
	42	462	円筒埴輪（底部）	底径：31.0 現存高：12.0	やや悪	黄白	外：摩滅 内：摩滅（ハケ）	器壁薄い	Ｋ区(Ⅳ区)
	43	8	円筒埴輪（底部）	現存高：12.2	良好	黄橙	外：タテハケ（のち板ナデ？） 内：ナナメハケ	線刻あり	Ｓ区裾
	44	819	円筒埴輪（底部）	現存高：11.2	良好	暗茶	外：摩滅 内：摩滅	線刻あり	Ｋ区(Ⅱ区)
	45	906	円筒埴輪（底部）	現存高：10.3	良好	暗茶	外：摩滅 内：ハケのちナデ	線刻あり	Ｓ区裾
	46	887	円筒埴輪（底部）	現存高：11.7	良好	黄白	外：タテハケ 内：ナナメハケ	線刻あり	Ｋ区
38	47	1230	鰭付朝顔形埴輪	現存高：76.3	良好	黄橙	外：タテハケ（一部突帯貼付後） 内：ハケ（のちナデ）	第1段の透孔は4つ 凹線、L字の工具痕あり 突帯貼付後のタテハケあり	埴輪棺2
39	48	1231	朝顔形埴輪（口縁部）	口径：54.0 現存高：21.9	良好	上半：黄橙 下半：暗茶	外：ナナメハケ 内：ハケ（のちナデ）	1次口縁と2次口縁で色調（胎土）が異なる	Ｓ区裾
	49	1232	朝顔形埴輪（口縁部）	口径：42.6 現存高：11.0	良好	黄橙～黄白	外：ナナメハケのちナデ 内：摩滅（ナナメハケ）		Ｅ２区裾
	50	1233	朝顔形埴輪（頸部）	現存高：23.8	良好	黄橙	外：ハケ（のちナデ） 内：ハケ（のちナデ）	線刻あり 円筒部最上部突帯下に凹線あり	埴輪棺４
	51	1234	朝顔形埴輪（肩部）	現存高：3.9	良好	黄白～黄橙	外：ハケ 内：（ケズリのち？）ハケ		Ｗ２区１段
	52	1235	朝顔形埴輪（肩部）	現存高：4.9	良好	黄橙	外：ナデ 内：ケズリ		Ｅ３区裾
	53	945	朝顔形埴輪（肩部）	現存高：6.1	良好	黄橙～暗茶	外：ハケ 内：ハケのちナデ	竹管文あり（他に3片ある） 1231と同一個体？	Ｓ区裾
	54	410	朝顔形埴輪（肩部）	現存高：7.4	良好	黄白	外：ナナメハケ 内：ヨコハケ	肩部に透孔あり	埴輪31
40	55	1236	朝顔形埴輪（鰭）	鰭の突出：9.0	良好	黄白		線刻あり	埴輪棺２
	56	1237	（鰭）	鰭の突出：7.7	良好	黄橙～暗茶			埴輪棺２
	57	1238	楕円筒埴輪	現存高：10.6	良好	暗茶	外：タテハケ 内：ナナメハケ（のちナデ）	円形の刺突あり 351と同一個体	Ｂ区
	58	351	楕円筒埴輪	現存高：20.5	良好	黄橙～黄白	外：タテハケ 内：ハケ（のちナデ）	靴形埴輪の円筒部の可能性あり 1238と同一個体	埴輪37
40･41	59	1239	靴形埴輪	復元高：86.9	良好	黄白～黄橙			Ｂ区 Ｗ２区前方部墳頂
42	60	6	靴形埴輪（背板部）？		良好	黄橙			Ｓ区裾
	61	918	靴形埴輪（背板部）？		良好	黄橙		切開して差込？	Ｓ区裾

表５　埴輪観察表（２）

図	遺物番号	登録番号	器種（部位など）	法量（cm）	焼成	色調	調整手法	備考	出土位置
	62	1240	靫形埴輪（矢筒部）		良好	黄白～黄橙			Ｗ２区前方部墳頂
	63	1241	靫形埴輪？（装飾）		良好	黄白		裏面は剥離面	Ｗ２区裾
	64	1242	靫形埴輪？（装飾）		良好	黄白			Ｗ２区３段
	65	928	靫形埴輪？（装飾）		良好	黄白		裏面は剥離面	Ｂ区
	66	929	靫形埴輪？（装飾）		良好	黄白		裏面は剥離面	Ｂ区
43	67	5	家形埴輪？		良好	黄橙～黄白	外：ハケ 内：ハケのちナデ	鋸歯文あり 鋸歯文の外郭に赤彩	Ｗ２区前方部墳頂 Ｗ２区２、３段 Ｅ２区裾
	68	844	家形埴輪		やや悪	黄白～暗茶	外：摩滅 内：ナデ	鋸歯文あり 右半は摩滅著しい	Ｋ区(Ⅳ-J12区)
	69	841	家形埴輪（切妻造）		やや悪	黄橙～暗茶	外：摩滅 内：ナデ	鋸歯文あり 壁に段差あり	Ｋ区(Ⅱ区) Ｋ区(Ⅳ-J11区)
	70	864	家形埴輪 （寄棟造？入母屋造？）		やや悪	黄橙	外：摩滅 内：ナデ	鋸歯文あり	Ｋ区(Ⅳ区)
	71	820	家形埴輪（壁、平側）		良好	黄橙	外：ハケ（のちナデ） 内：摩滅	壁に段差あり 下端面は剥離面	Ｋ区(Ⅰ-H9区)
	72	810	家形埴輪（隅柱）		良好	黄橙～黄白	外：ナデ 内：摩滅（ハケのちナデ）	屋根接合面に線刻あり 壁に段差あり	Ｋ区(石室覆土)
	73	707	家形埴輪 （壁、妻側？）		良好	暗茶	外：摩滅（ハケ） 内：タテハケ	壁に段差あり	Ｅ１区中段
44	74	741	家形埴輪（棟）		やや悪	黄白	外：摩滅 内：摩滅	網代表現あり 鰭飾りあり	Ｋ区(石室覆土)
	75	736	家形埴輪（棟、破風）		やや悪	黄白	外：摩滅 内：摩滅	網代表現あり 鰭飾りあり	Ｋ区(石室覆土)
	76	1243	家形埴輪（切妻造）		良好	黄白	外：摩滅 内：摩滅	網代表現あり	Ｋ区(Ⅱ-H6区)
	77	797	家形埴輪（破風）		良好	黄白	外：摩滅 内：摩滅	鰭飾りあり	Ｋ区(石室覆土)
	78	913	家形埴輪（寄棟造？）		良好 堅緻	黄白	外：ハケのちナデ 内：ハケのちナデ		Ｓ区裾
	79	4	家形埴輪（切妻造）		良好 堅緻	黄橙	外：ハケ（擦痕あり） 内：ハケのちナデ		Ｗ２区前方部墳頂
	80	944	家形埴輪（隅柱）		良好 堅緻	黄白～黄橙	外：ハケ（擦痕あり） 内：タテハケ（のちナデ）	壁に段差あり	Ｓ区裾
	81	809	家形埴輪（隅柱）		良好 堅緻	黄橙	外：ハケのちナデ 内：ナデ	壁に段差あり	Ｋ区(石室覆土)
45	82	743	家形埴輪（基部）	現存高：10.5	良好	黄橙～暗茶	外：摩滅 内：摩滅	壁に段差なし	Ｋ区(石室覆土)
	83	742	家形埴輪（壁、妻側）		良好	黄白	外：摩滅（ハケ、ナデ） 内：摩滅（ナデ）	壁に段差なし	Ｋ区(石室覆土)
	84	821	家形埴輪（壁、平側）		良好	暗茶	外：タテハケ 内：摩滅	壁に段差なし	Ｋ区(Ⅳ-J11区) Ｋ区(Ⅰ区)
	85	801	家形埴輪（隅柱）		やや悪	黄白	外：摩滅 内：摩滅（ナデ）	器壁薄い 壁に段差あり	Ｋ区(Ⅲ-G3区)
	86	747	家形埴輪（壁）		やや悪	黄白	外：摩滅 内：ヨコハケ	器壁薄い 壁に段差あり	Ｋ区(石室覆土)
	87	947	家形埴輪（屋根突帯）		やや悪	黄白		器壁薄い	不明（Ｋ区 石室覆土？）
	88	782	家形埴輪（壁）		やや悪	黄白	外：ハケ 内：摩滅	器壁薄い 二階建	Ｋ区(石室覆土)
	89	949	家形埴輪（壁）		やや悪	黄白	外：摩滅（一部ハケ） 内：摩滅（一部ハケ）	器壁薄い 二階建	不明（Ｋ区 石室覆土？）
	90	749	家形埴輪（棟）		やや悪	黄白～暗茶	外：ハケ 内：ナデ		Ｋ区(Ⅲ－I2区)
	91	740	家形埴輪（壁）		良好	暗茶～黄橙	外：摩滅 内：タテハケ	線刻あり	Ｋ区(石室覆土)
46	92	799	囲形埴輪か？	現存高：9.8	良好	黄橙～暗茶	外：タテハケ 内：ナデ		Ｋ区(Ⅲ－I2区)
	93	560	蓋形埴輪		良好	黄白	外：摩滅 内：ハケのちナデ	線刻あり	Ｅ２区裾
	94	1244	不明形象埴輪（装飾？）		良好	黄白		線刻あり 剥離面あり 939と同一個体	小石室5
	95	939	不明形象埴輪（装飾？）		良好	黄白		線刻あり 1244と同一個体	Ｂ区
	96	835	不明形象埴輪（装飾？）		良好	黄白		線刻あり	Ｋ区(Ⅲ区)
	97	710	不明形象埴輪		良好	黄白	外：摩滅 内：摩滅		Ｅ２区後円部２段
	98	7	不明形象埴輪		良好	黄白		線刻あり	小石室５
	99	825	不明形象埴輪 （盾形埴輪？）		やや悪	暗茶		線刻あり	Ｋ区(Ⅲ区)
	100	562	不明形象埴輪 （短甲形埴輪？）	現存高：9.0	良好	黄白	外：タテハケ 内：ハケ	線刻あり	Ｗ２区裾
	101	708	不明形象埴輪 （短甲形埴輪？）		良好	黄橙～黄白	外：摩滅 内：摩滅（ハケ）	線刻あり	Ｅ２区後円部３段
	102	1245	不明形象埴輪		良好	暗茶			Ｗ２区裾
	103	915	不明形象埴輪		良好	黄橙			Ｓ区裾
	104	566	不明形象埴輪		良好	黄橙～暗茶		線刻あり	Ｅ２区裾
47	105	1246	鰭付半裁楕円筒埴輪	鰭の突出：3.5	良好	黄白	外：タテハケ 内：ハケ（のちナデ）	線刻あり 接合しないが同一個体と判断	Ｗ２区裾
	106	1247	壺形埴輪（口縁部）	現存高：6.7	良好	暗茶	外：ナデ 内：摩滅		Ｅ２区１段
	107	1248	壺形埴輪（口縁部）	現存高：3.8	良好	黄白	外：ナデ 内：ハケ		Ｅ２区裾
	108	1249	壺形埴輪（口縁部）	現存高：4.0	良好	黄白	外：摩滅 内：摩滅		Ｗ２区２段
	109	1250	壺形埴輪（口縁部）	現存高：2.9	良好	黄白	外：ハケ 内：ハケ		Ｓ区１段
	110	1251	壺形埴輪（口縁部）	現存高：2.1	良好	黄白	外：ハケ 内：ハケ		Ｗ２区２段
	111	1252	壺形埴輪（口縁部）	現存高：4.1	良好	黄白	外：摩滅 内：摩滅		Ｅ２区１段
	112	1253	壺形埴輪（口縁部）	現存高：2.9	良好	黄白	外：ナデ 内：ナデ		Ｅ２区裾
	113	441	壺形埴輪（頸部）	現存高：2.9	良好	黄白	外：ナデ 内：ナデ（板ナデ？）		Ｗ２区２段
48	114	1254	壺形埴輪（口縁部）	現存高：8.3	やや悪	黄白	外：摩滅 内：ハケ（のちナデ）		Ｅ４区１段
	115	1255	壺形埴輪（口縁部）	現存高：8.4	やや悪	黄白	外：摩滅 内：ハケ（のちナデ）		Ｅ２区裾
	116	1256	壺形埴輪（頸部）	現存高：7.0	やや悪	橙	外：摩滅（ハケ） 内：（ケズリのち）ナデ		Ｅ区墳頂
	117	1257	壺形埴輪（底部）	現存高：10.4	良好	黄白	外：摩滅 内：ナデ		Ｗ２区裾
	118	382	壺形埴輪（底部）	現存高：7.8	良好	黄白～黄橙	外：摩滅 内：ハケ		Ｅ２区２段
	119	1258	壺形埴輪（底部）	現存高：6.8	良好	黄橙	外：ハケ 内：摩滅（ナデ）		Ｅ４区１段
	120	1259	壺形埴輪（底部）	現存高：13.1	やや悪	黄白	外：摩滅 内：ナデ（のちケズリ）		Ｗ２区２段
	121	1260	鰭付円筒埴輪 （口縁部）	口径：39.2 現存高：10.3	良好	黄橙	外：ヨコハケ 内：ハケのちナデ		Ｗ２区裾
	122	1261	円筒埴輪（口縁部）	現存高：14.8	やや悪	黄白	外：摩滅 内：ハケ（のちナデ）		Ｗ２区裾
	123	1262	円筒埴輪（底部）	底径：37.0 現存高：16.2	良好	黄橙～暗茶	外：タテハケ 内：ナデ		Ｓ区裾

（６）墳丘出土土器（図49･50、図版61）

図49は古墳時代の土師器、図50は古代以降の土師器・須恵器である。出土位置は、１・２・５～11・16・17～22・23がＳ区墳丘裾、３・14がＥ２区１段テラス、４がＷ２区墳丘裾、12がSX01（後円部石室掘方）、13・15がＷ１トレンチ、24が「Ｓトレくびれ部」（注記誤りか）、28～32・34・35がＳ区内、36がＷ２区内、23・25～27が注記不明だが接合関係などからＳ区出土か。

１・２は山陰系の系譜を引く二重口縁壺。１は口径21.0cm(復元)。口縁部の凹凸はシャープではない。外面は、口縁部～頸部ヨコナデ、頸部タテハケあり。内面は、口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ。橙色～にぶい黄橙色。胎土は精良、少量の石英と、微量の長石、赤色粒子、雲母、角閃石を含む。２は頸部径18.4cm（復元）。外面は、頸部はタテハケ→擦痕あるヨコナデ、肩部ヨコハケ。内面は、頸部ヨコナデ、胴部ケズリ。橙色～にぶい橙色。胎土はやや精良、少量の長石、石英、赤色粒子と微量の雲母と輝石を含む。３・４は古墳時代中期の甕ないし壺。３は壺か。径の復元は小片で疑問、もっと小さい可能性がある。外面は、頸部ヨコナデ、胴部ナデ。内面は、頸部横のナデ、胴部ケズリ。明橙色～橙色。胎土はやや精良、若干の石英（花崗岩）、長石と微量の輝石、雲母を含む。４は甕か。小片で径復元は保留。頸部は内外面ヨコナデ。胴部は内面ナデ、外面は摩滅し不明。明黄褐色～にぶい浅黄褐色。胎土は石英（花崗岩）、長石を若干含む。

５～16は高杯。５は、口径15.9cm（復元）、器高12.8cm、脚裾部径10.3cm（復元）。外面は、坏部ヨコナデ（一部ヨコハケ）、坏部屈曲部タテハケあり、坏部下半は板ナデないしナデ、脚柱状部は摩滅し不明瞭（タテメントリ→横のナデまたはミガキ？）、脚裾部はヨコナデ。内面は、坏部（ハケ後？）ナデ、坏部底部ハケ、脚柱状部は上半シボリ、下半ケズリ、裾部との間はナデ、裾部ヨコナデか。脚部と坏部の接合は付加法か。赤橙色～橙色。胎土は密だが、粗粒を含む石英（花崗岩）、長石をやや多く、微量の雲母、輝石ないし角閃石がある。６は坏部上半を欠損し、現存高10.3cm、脚裾部径11.3cm（復元）。外面は、坏部下半は横の板ナデ、下部はミガキ（？）、脚柱状部はタテのメントリ→横のミガキないしミガキ状擦痕ヨコナデ、脚裾部はヨコナデ。内面は、坏部底部ハケメ、屈曲部ヨコナデ、脚柱状部は上半シボリ、中位以下ケズリ、脚裾部との間はナデ、脚裾部は摩滅し不明。接合は付加法か。橙色。胎土は５に類似するが、赤色粒子を少し含む。７～９は高杯の坏部。７は、口径17.4cm（復元）。外面は、坏部上半ヨコナデ→ミガキ状の擦痕ヨコナデ、坏部下半板ナデないしナデ。内面は、ヨコハケ→ナデ、坏部底部はナデ。接合は充填法と付加法の折衷か。橙色。胎土は６と同じかやや精良、砂礫がやや少ない。８は、口径16.7cm（復元）。外面はヨコナデ、坏部中位は横の板ナデか。内面は摩滅し不明、屈曲部にハケ痕跡。明黄褐色～橙色。胎土は精良だが、粗粒を含む若干の石英（花崗岩）、長石と微量の雲母を含む。９は坏部底部。外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ。接合は充填法。にぶい橙色～赤橙色。胎土は８と類似するが角閃石を少量含む。10～16は高杯の脚柱状部。10は、柱状部が裾広がりになり脚裾部も広いタイプ。外面はナナメないし縦のナデ、内面は、シボリ→中位以下ケズリ。接合は充填法だろう。橙色。胎土は９に近い。11～16は脚柱状部が細いタイプで５・６と同じ系統。11は、外面は摩滅し不明瞭、脚柱状部は丁寧なナデないしミガキ。内面は、脚柱状部上部はシボリ→縦のナデ、以下ケズリ、脚裾部はヨコハケ→ナデ。橙色。胎土は６に類似（輝石・角閃石は不明）。12は、外面は摩滅し不明。内面は、脚柱状部上部にシボリ、以下ケズリ、脚裾部は粗いナナメハケ。接合法は７と同様の充填法と付加法の折衷か。明赤褐色。胎土はやや粗く、粗粒を含む石英（花崗岩）、長石をやや多く、微量の雲母を含む。12～15は類似胎土。13は、バランス的に脚柱状部が短い小型の高杯か。外面は摩滅し不明。内面は、脚柱状部上半はケズリ後ナデ、下半はケズリ、脚裾部もヘラケズリか。明黄橙色～橙色。14は、外面は摩滅し不明。内面は上部にシボ

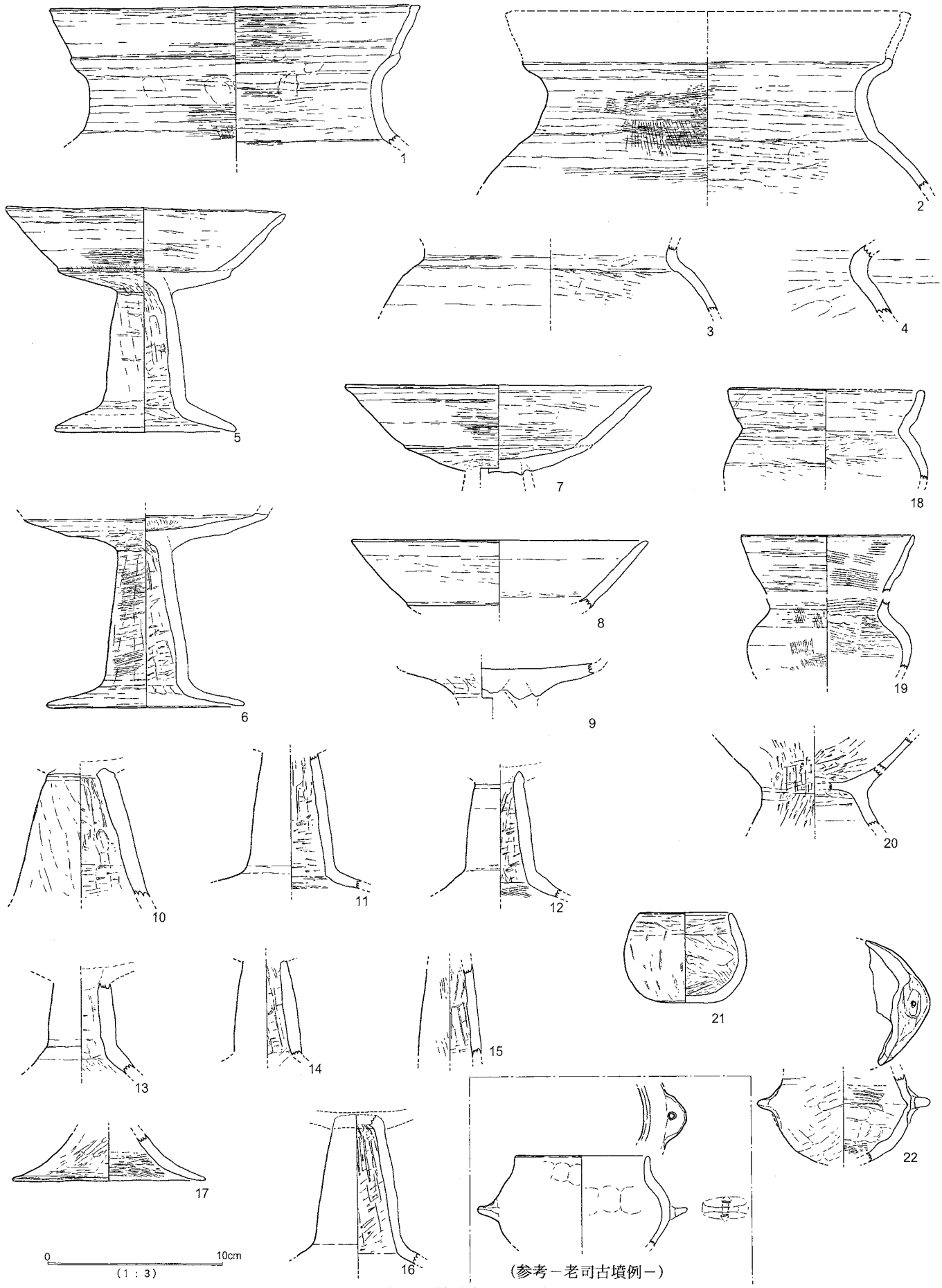


図49　墳丘出土土器（１）

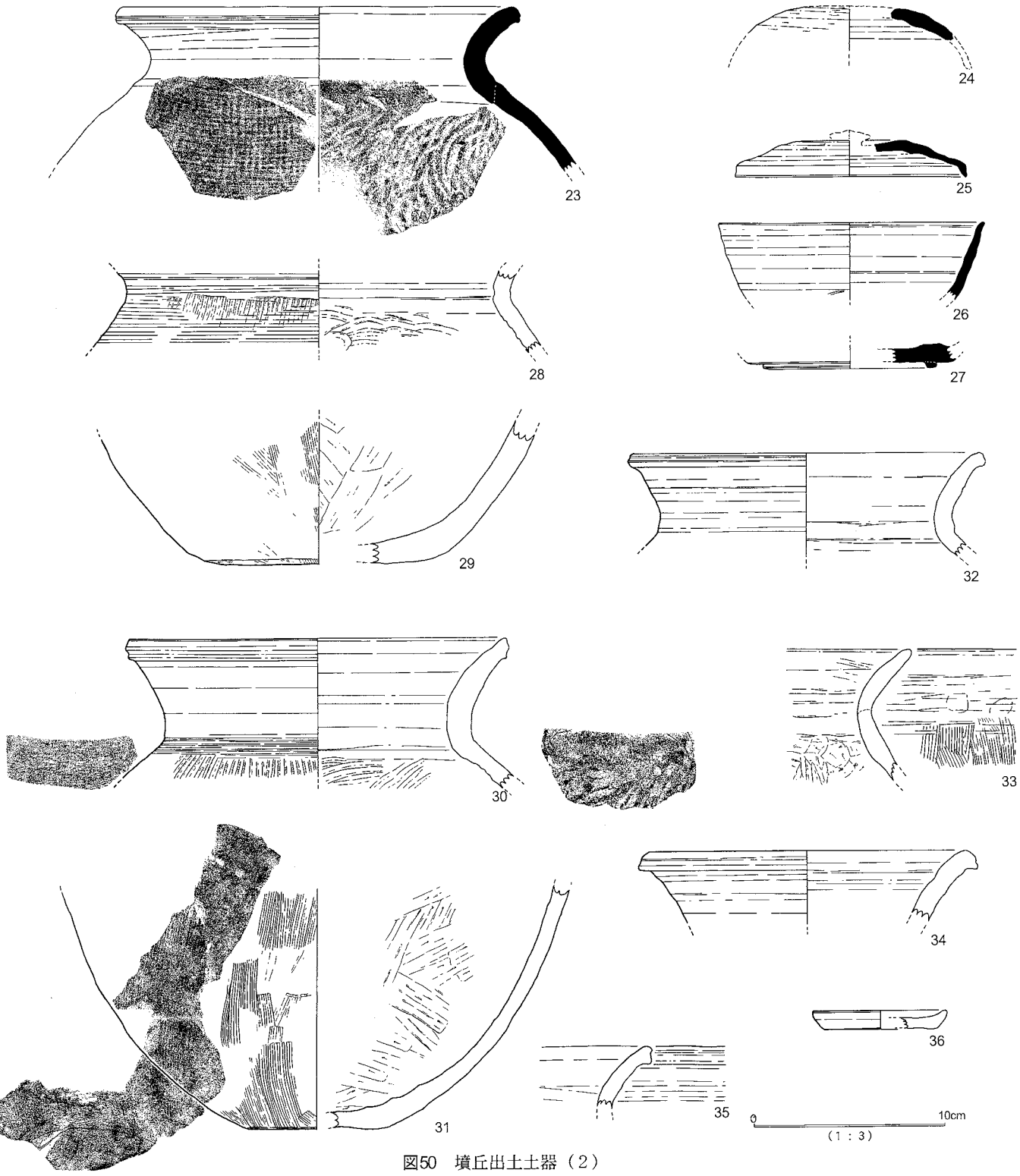


図50　墳丘出土土器（2）

リ、以下はケズリ。上部の破断面の状況から、接合法は充填法になるか。橙色。15は、外面は摩滅し不明瞭（縦のミガキか）。内面はシボリが残り、中位以下ケズリ。にぶい橙色～浅黄橙色。16は、外面は摩滅し不明。内面は、シボリが残り、全体的にケズリを施す。接合は付加法。橙色。胎土は８に類似。

17は精製の脚付鉢の脚部。脚裾部径はもう少し広くなる可能性。外面は、ケズリ（→ミガキ？）。

内面はケズリ→ナデ？、裾部下半はハケメか。明黄褐色～橙色。胎土は精良の水漉胎土、砂礫は少なく、長石、石英と微量の角閃石。18・19は粗製の小型丸底壺。18は口径11.0cm（復元）、体部最大径11.7cm。外面は、口縁部～頸部はヨコナデ、胴部はケズリ後ナデ。内面は、口縁部ヨコナデ、体部はケズリ後ナデ。橙色～赤橙色。胎土はやや粗く、若干の石英、長石と微量の雲母を含む。19は、口縁部と体部の接点が無いが同一個体。口径9.6cm（復元）、体部最大径9.3cm（復元）。外面は、口縁部は擦痕ヨコナデ、体部はタテハケ後ナデ、下部はケズリか。内面は、口縁部はヨコハケ→ヨコナデ、体部はヨコハケ→丁寧なナデ。明黄褐色～にぶい黄橙色。胎土は特に精良ではなく、少量の石英（花崗岩）、長石、角閃石、微量の雲母、輝石、赤色粒子を含む。20は粗製の脚付鉢。外面はケズリ、体部下部はケズリ後ナデ。内面は、体部ケズリ、脚部はヨコナデないしナデ。胎土は密でやや精良だが、粗粒を含む石英（花崗岩）、長石を若干と微量の角閃石、雲母を含む。21は手ずくねの小椀。口径5.3cm、器高5.4cm。底部は平底気味。外面は、口縁部ヨコナデ、体部はナデだが成形時のシワが残る。内面は、口縁部ヨコナデ、体部は一部ハケ→ナデ。にぶい褐色～明褐色。胎土は精良ではなく、小粒の石英、長石、微粒の雲母をやや多く含む。

22は有耳の小型直口壺。二耳か。耳の穿孔は天地方向で、耳の成形は体部から絞って引き出したような状況。現存高5.0cm、体部最大径9.8cm（復元、耳を除いた場合は7.8cm前後）。外面はナデ。内面は、ヨコハケないしナナメハケ→ナデ。明黄褐色～にぶい黄褐色。胎土は特別に精良ではなく、小粒の石英、長石、微粒の雲母をやや多く、角閃石を微量含む（21に類似）。類例が少ないので参考として老司古墳３号石室上部出土のものをあげておいた（吉留秀敏編1991『東光寺剣塚古墳』「老司古墳出土遺物（追加資料）」福岡市埋蔵文化財調査報告書第267集）。

23～27は須恵器。23は甕。胴部外面は縦位の擬格子平行タタキ、内面は同心円文当具痕。灰白色～浅黄灰色。時期は７世紀後半から８世紀前半。24は破片で径の復元は前後する可能性。坏蓋であろう。天井部は回転ヘラケズリ。ⅢB期か。焼成甘く軟質。にぶい灰色。25は８世紀前半の坏蓋。つまみは欠損。小片のため径の復元は前後する可能性。外面は天井部回転ヘラケズリ。暗青灰色。26は７世紀末（Ⅵ期）頃の坏身か。内外面ともに回転ヨコナデだが擦痕が強い。外面下方にヘラ記号の一部の可能性のある焼成前のキズがある。灰色～明青灰色。27は８世紀中頃の坏身。高台が小さい。28～35は７世紀末から８世紀の土師器。また28・30・32・34・35は赤焼きの酸化炎焼成だが、調整や口縁部形状が須恵器と類似するいわゆる似非須恵土師器である。28は甕の頸部。胴部は、外面は縦位の平行タタキ→カキメ、内面は同心円文当具痕。橙色。29は甕の底部。底部径はもう少し小さいかもしれない。底部はレンズ底気味平底。外面タテハケ、内面ケズリ。赤橙色。30は甕ないし壺。胴部外面は、縦位の擬格子平行タタキ→頸部下カキメ、内面は同心円文当具痕。明黄褐色～橙色。31は甕ないし壺の胴部下半から底部。底部は平底風。外面タテハケ、内面ヘラケズリ。明黄褐色～赤橙色。胎土や色調、出土注記から30と同一の可能性。32は甕。内外面回転ヨコナデ。橙色。33は通有の土師器の甕。小片で径復元不可。胴部外面はタテハケ、内面はヘラケズリ。明赤褐色。34は甕。明黄褐色。35は甕。小片で径復元不可。明黄褐色。36は中世の土師器の小皿。口径7.0cm、器高1.0cm。底部は糸切り。橙褐色。法量から14世紀以降か。

（久住 猛雄）

3　横穴式石室の調査

横穴式石室は後円部最上段中央に築造され、前方部側の南東に開口する。石室主軸方位は墳丘主軸に平行し、北から44度30分西に振れる長方形プランの玄室に短小な羨道を接続し、石室前面に前庭部と竪坑状墓道を設けた特異な構造をしめす。玄室天井部が崩落し原形を失っている部分もあるが、石室構造のおおよそと玄室内の棺と副葬品の配置状況を確認することができた。

（1）横穴式石室の調査

墳丘と墓壙の関係（図51、図版３・４・26・43）

横穴式石室は、ほぼ平坦に整えられた後円部頂の地山（花崗岩風化土）整地面から掘削された一辺約８ｍの隅丸方形で、深さ約2.1mの大型墓壙内に構築されている。墓壙は上端から0.4～0.5mの深さで0.6～0.8m幅のテラスを設け、その内方を深く掘削した二段墓壙である。テラス端は幅30～40cm、深さ20～30cm程度の浅い溝がめぐる。

墓壙下段は一辺約6.5mの隅丸方形、深さ約1.6m前後である。75～80度ほどの急角度で掘り込まれ、石室壁体背面に玄武岩・花崗岩の割石・転石に粘土をまじえた裏込めで充填している。裏込め上部は茶褐色～赤褐色系の土壌を堅く締めながら充填している。

墓壙上を覆う盛土は約30～50cmときわめて薄い。地山土壌を基調にした茶褐色～赤褐色系の盛土で、異なった土壌を版築状に積み上げることはない。遺存した墳丘上面は既述のように、拳大の川原石転石を敷いた直径10.4m、高さ20～30cm程度の低い円形壇を構成する。また次項で記述するように、横穴式石室の玄室天井部が崩落し、それにともなって玄室上部が深鉢状に落ち込んでいる。落ち込み層は腐植土と墳丘盛土がまじり、多量の転石や家形埴輪片が含まれている。

崩落した玄室天井部

玄室の天井部は扁平な大型板石３石で構成されているが、側壁上部の倒壊にともなって玄室内に落下している。奥壁側から天井石Ａ・Ｂ・Ｃとする。奥壁側の天井石Ａは、縦方向に左右２片に割れて奥壁に沿って垂直に落ち込む。中央の天井石Ｂは石室主軸に直交して２片に割れ、奥壁側の１片は天井石Ａに斜めにかかり、もう１片はほぼ水平に落ち込む。羨道側の天井石Ｃは、Ｂの上に重なりながら前壁上部に架かるように斜めに落ち込む。

天井石Ｂの下面は床面から0.8m上面にあり、推定される原位置から約1.3mほど落下している。落下天井石から床面までのあいだは、倒壊した側壁と裏込め石材、および灰黒～灰色粘土で埋まっている。

天井石は玄武岩を10～15cm程度の厚さに扁平に打ち割ったもので、石室内面側に赤色顔料の塗布が認められる。使用石材の大きさは次のとおり（数値は最大サイズ。第４章４　図85上）。

天井石Ａ＝幅2.2m・長さ1.25m・厚さ15cm。天井石Ｂ＝幅2.1m・長さ1.9m・厚さ13cm。天井石Ｃ＝幅1.9m・長さ2.0m・厚さ15cm。

落下した天井石Ｂの上面の一部に、２～３cmの厚さで灰色粘土が遺存しており、天井石上部を粘土で覆ったのち、その上面に30cm程度の低い盛土で被覆したものと推測される。

墓道と閉塞施設（図52、図版４・26～28）

調査で最初に検出された墓道と閉塞構造は最終埋葬にともなうものである。その下層から形状を異にする構築時＝１次埋葬時墓道と、それを改変した２次埋葬時墓道と埋土の一部が確認された。発掘調査手順とは逆に、１次埋葬、２次埋葬、最終埋葬の順に記述する。

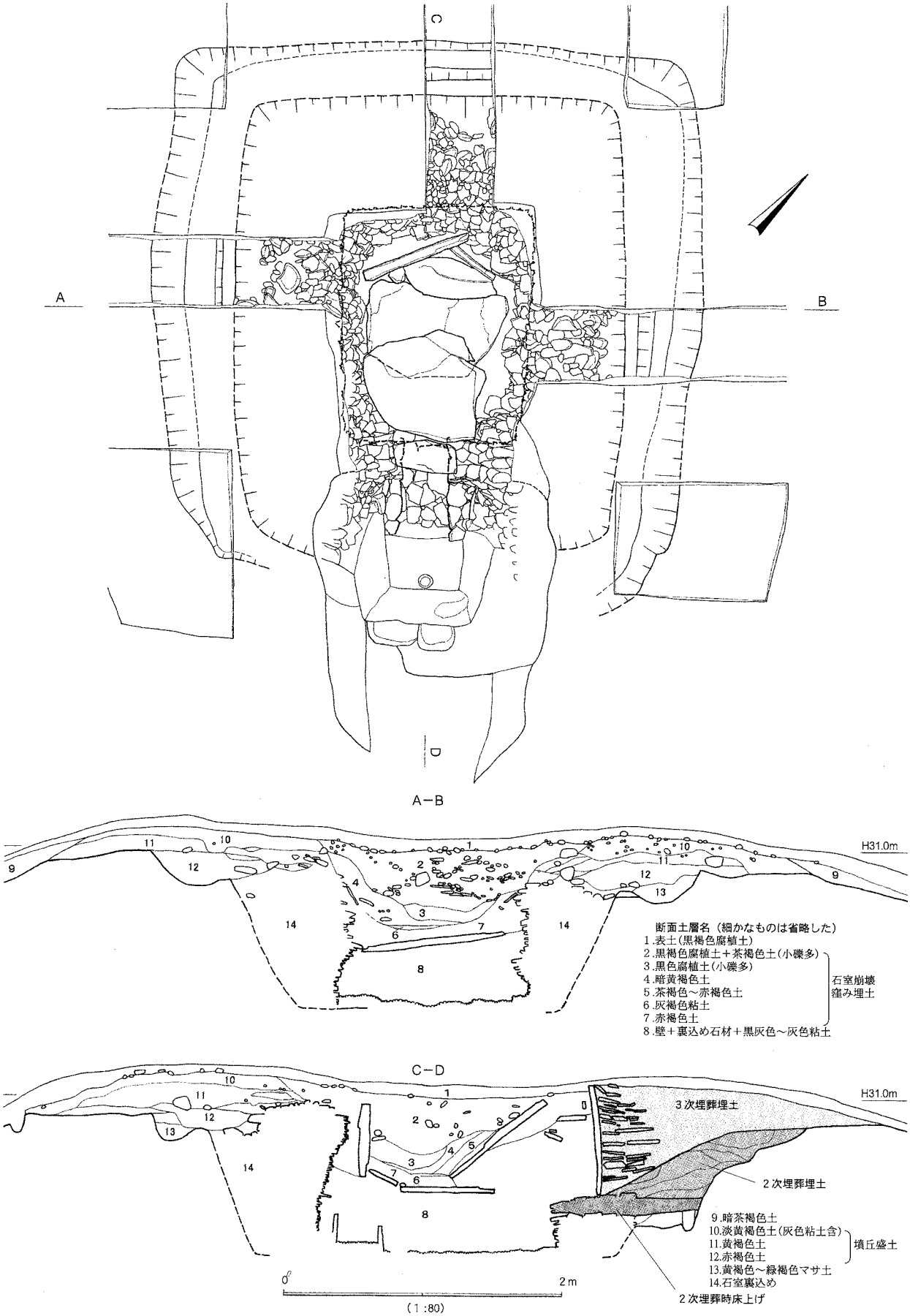

C
A
B
D
A－B
H31.0m
断面土層名（細かなものは省略した）
1.表土（黒褐色腐植土）
2.黒褐色腐植土＋茶褐色土（小礫多）
3.黒色腐植土（小礫多）
4.暗黄褐色土
5.茶褐色～赤褐色土
6.灰褐色粘土
7.赤褐色土
8.壁＋裏込め石材＋黒灰色～灰色粘土
石室崩壊窪み埋土
C－D
H31.0m
３次埋葬埋土
２次埋葬埋土
9.暗茶褐色土
10.淡黄褐色土（灰色粘土含）
11.黄褐色土
12.赤褐色土
13.黄褐色～緑褐色マサ土
14.石室裏込め
墳丘盛土
２次埋葬時床上げ
2m
（1:80）

図51　石室崩壊状況

①１次埋葬（初葬）にともなう墓道構造（図54、図版30）

構築時の墓道は石室墓壙の前方部側に突出するように掘削され、石室・前庭部構築後、墳丘盛土で上部形態を整えている。最終埋葬時の墓道開削のため、前方部側の上端部が30cmほど削平されている。

墓道は、上端幅3.6m、長さ約2.4m、深さ２m、底面の幅１～1.2m・長さ１mの竪坑状を呈し、石室前庭部に接続する。墓壙の堀方上部に20cmほど緑色マサ土の埋土を行い底面を整えている。墓道は上端から0.5～0.6mまでは墳丘盛土、それより下部は掘削した地山壁を整えて整形している。墓壙上半部は30度ほどの傾斜面、下半部は80度近くの急傾斜となる。斜面途中に足場のための窪みがある。なお墓壙床面の前方部側端に、直径20cm、深さ30cmの小穴が掘削されている。埋土に明確な柱痕跡を確認できなかったが、直径10cm程度の棒（柱）状のものを埋め込んだ可能性がある。

１次埋葬にともなう閉塞の痕跡は認められなかった。遺体埋葬後に石室入口部の閉塞が行われず、開口した状態で放置されたとは考えにくい。石室入口部を板石だけで閉塞したか、墓道下半部のみを埋め戻す程度であったか、２次埋葬時の際に完全に除去・整理したかのいずれかであろう。

②２次埋葬時の墓道と閉塞構造、羨道～墓道床面の改変（図51下、図版30）

最終埋葬時（第３次埋葬）墓道の調査中に、その下部に異なった墓道と閉塞にともなう控積みの存在が知られ、３次埋葬墓道調査後に掘り下げて確認した。２次埋葬の閉塞と墓道埋土は、最終埋葬にともなう墓道開削と閉塞のために大半が破壊されている。最終埋葬時の墓道下面や側面から閉塞にともなう控え積みの一部が確認された。その構造からみると、最終埋葬時とおなじように羨道端に板石を立て、その背面に割石の控積みを行いながら墓道全体を埋め戻したとみられる。

また竪坑状墓道から羨道部にかけては、初葬時の床面上に割石と置き土で20～30cm程度嵩上げして平坦に整えられている。

③３次埋葬（最終埋葬）にともなう墓道と閉塞構造（図51上、図版26～28）

２次埋葬時に埋められた墓道上部を破壊して開削された墓道は、墳頂面端の前方部側から石室先端に向かって平面楕円形に掘り込まれている。全長4.5m、最大幅3.2mを測る。墓道端付近の断面形は浅皿状だが、墓道先端から2.6m付近で傾斜を変え、30度の急角度で断面U字形に掘り込まれ羨道入口にいたる。墓道壁面は粘土粒子混じりの赤褐色土で丁寧に整えられ、とくに閉塞板石の両側面は前庭部の石積み壁面を隠すように塗り込まれている。

閉塞は羨道外端に玄武岩の大型板石（高さ1.6m、幅１mの隅丸長方形、厚さ10cm）を立てて羨道開口部を塞ぐ。板石の墓道側背面に奥行き0.8m、高さ1.4mにわたって割石と置き土を交互に重ねた控積みを行いながら、墓道全体を埋め戻している。埋土は赤褐色～茶褐色を基調とした土壌で、掘削した墓道土壌をそのまま使用したものであろう。墓道埋土のなかから埴輪の細片が出土している。

玄室（図54、図版３・５・６・27・29・32・34）

玄室は縦長の長方形プラン、周壁に扁平な玄武岩割石を使用して構築している。左右側壁は前・奥壁との隅角付近を除いて大きく崩壊し、裏込め石材が露出した部分が多い。遺存する下部側壁も崩壊にともなって石室内に倒れ込む部分が多い。石室壁面はすべてに赤色顔料が塗布されている。

玄室は奥行き3.4m、奥壁幅2.7m、前壁幅2.45mの規模である。架構された３枚の天井石はすべて落下していたが、床面から天井までの高さは約2.1mと推測される（第４章４参照）。壁体基底石の各隅角部はわずかな丸みをもつ。羨道は前壁中央にあり、玄室床面から約40cm上に床面がある。

周壁は壁面で長さ30～50cm、厚さ５～10cm程度の扁平な割石を水平に小口積みし、空隙に割石の細石を組み込む。両側壁と前壁では、床面から0.2mと0.4mの高さで比較的大型割石を多用して上面を揃える。また前壁では床面から1.3mより上部に大型の面の揃った石材を多用している。奥壁でも

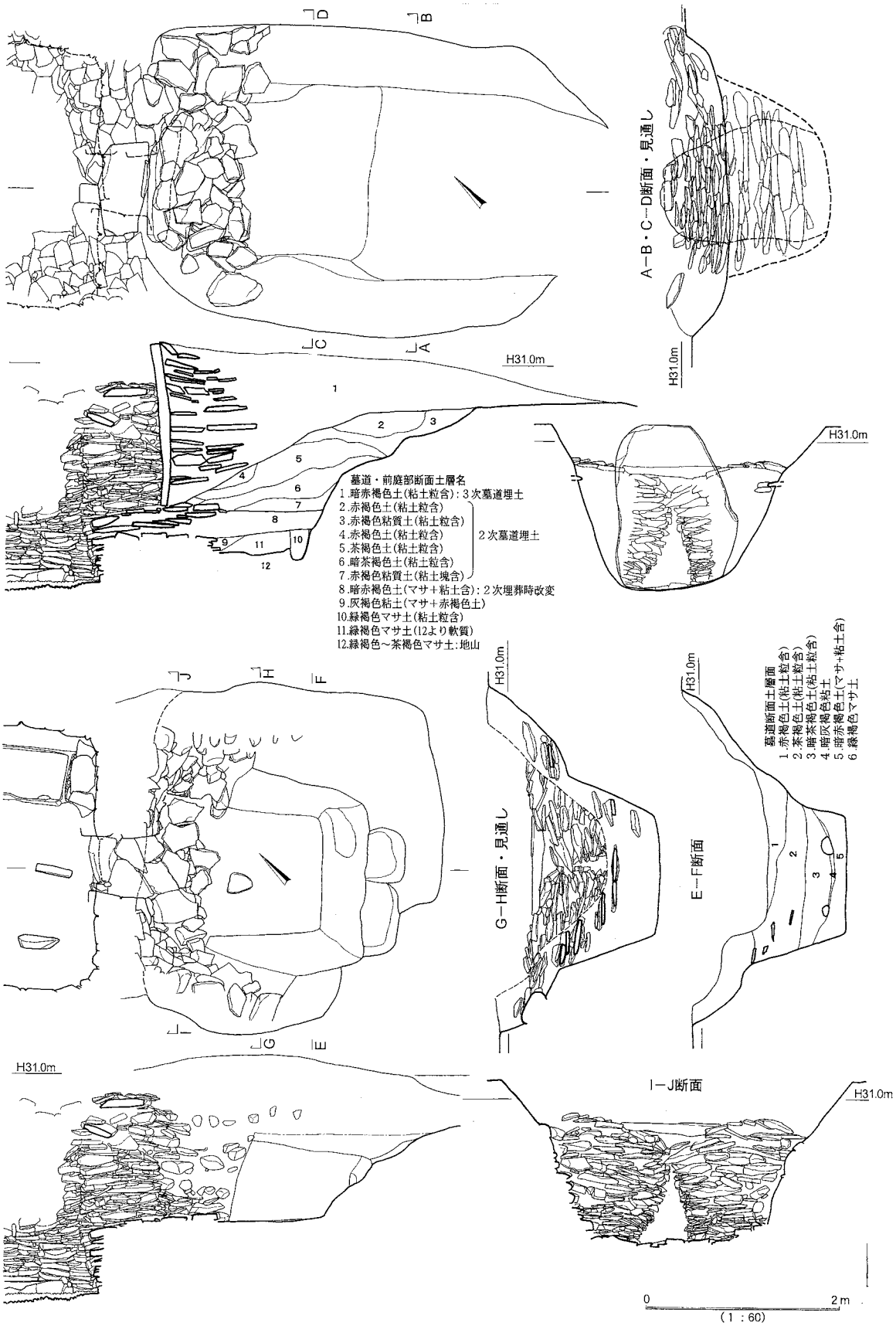


図52　墓道・前庭部と閉塞状況
上段は３次埋葬（最終埋葬）時、下段は２次埋葬時。

比較的大型石材を使用し、前壁での大型石材使用と対応している。

奥壁と前壁はわずかに内傾するが、側壁は最下部から著しい持ち送りをもたせる。ちなみに壁体上部まで遺存する隅角部分での持ち送り度合いをみると、奥壁側では床面幅2.7mに対して上位1.6mで1.2mに、前壁側では床面幅2.45mに対して上位１mで1.2mにそれぞれ幅を縮小している。こうした過度の持ち送りが側壁上部の倒壊を招いたと思われる。なお左側壁の壁体に、長さ1m、一辺約20cmの方柱状の支柱石が立てかけられている。この配置が石室構築時か、その後の追葬時に行われたか判然としないが、側壁倒壊の危惧に備えたものであろう。この石材にも赤色顔料が塗布されている。

前壁を除く奥壁と左右側壁の中～上位に、「突起石」と呼ぶ壁石の局部突出がみとめられる（図53）。玄室崩壊に伴って壁体から脱落したものや、壁体からの突出部が折れたものがある。奥壁には上・中・下の三段にわたって突起石が配置されている。下段３ヶ所（左壁寄りは突出部折れ）、中段３ヶ所（中央は突出部折れ）、上段に２個が確認されている（中央の突起石は落ちている可能性がある）。側壁は上半部が倒壊しているため上・中位にも配置されたか不明だが、奥壁の下段と同じ高さに突起石が配置されている。すでに転落したものもあるが、左右側壁とも４ヶ所に配置されたとみられる。

床面は掘削した墓壙底に８～10cmの花崗岩風化土（マサ土）を置いて平坦に整え、その上に直径２～５cm程度の川原石小礫を５～10cmの厚さに敷き詰めている。また床面には、奥壁に沿う１号棺（箱形石棺）、箱形石棺と前壁のあいだに右側壁に沿う２号棺（箱形埴棺）、左側壁に平行する３号棺（箱型木棺）痕跡の三つの棺が検出された。棺の詳細と副葬品の出土状況は次項で述べる。

羨道と前庭（図54、図版８・29～31）

羨道は玄室床面から約40cm高い前壁中央に接続し、割石を積み上げて構築されている。玄室天井石は落下していたが、羨道上には奥行き50cm、幅90cm、厚さ10cmの割石の天井部が遺存する。床面の平面規模は、長さ・幅とも0.6m、床面から天井までの高さは1.4mを測る。床面は壁体を構成する割石がそのまま利用され、とくに敷石を行っていない。また玄室側の床面端は、前壁の持ち送りのため玄

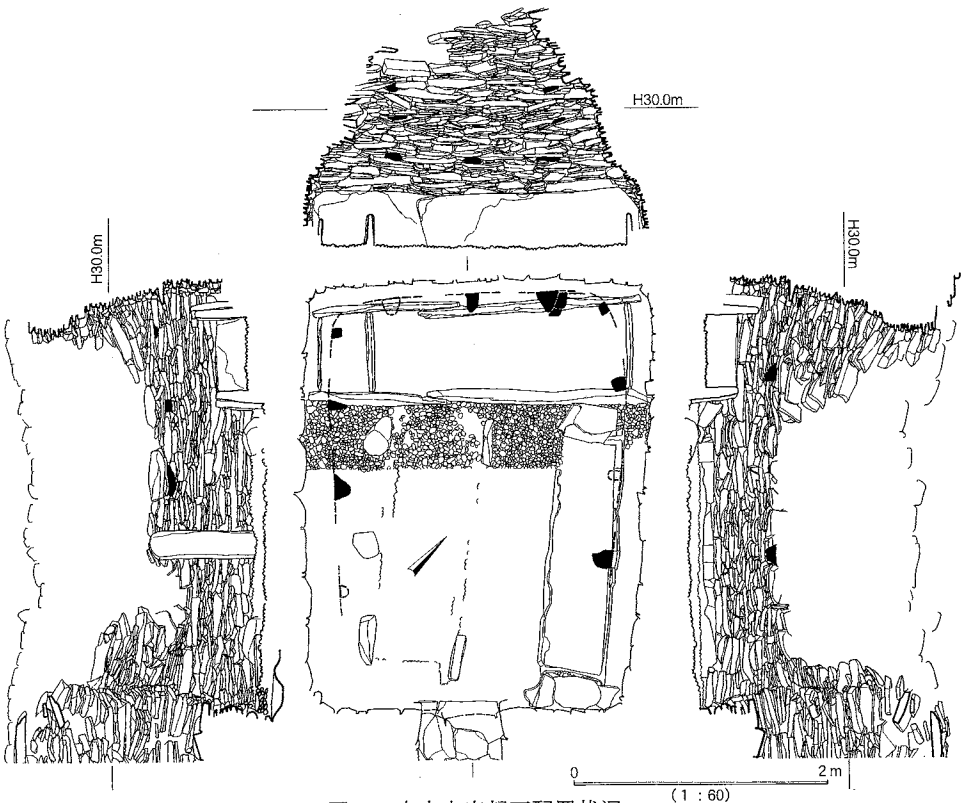


図53　玄室内突起石配置状況

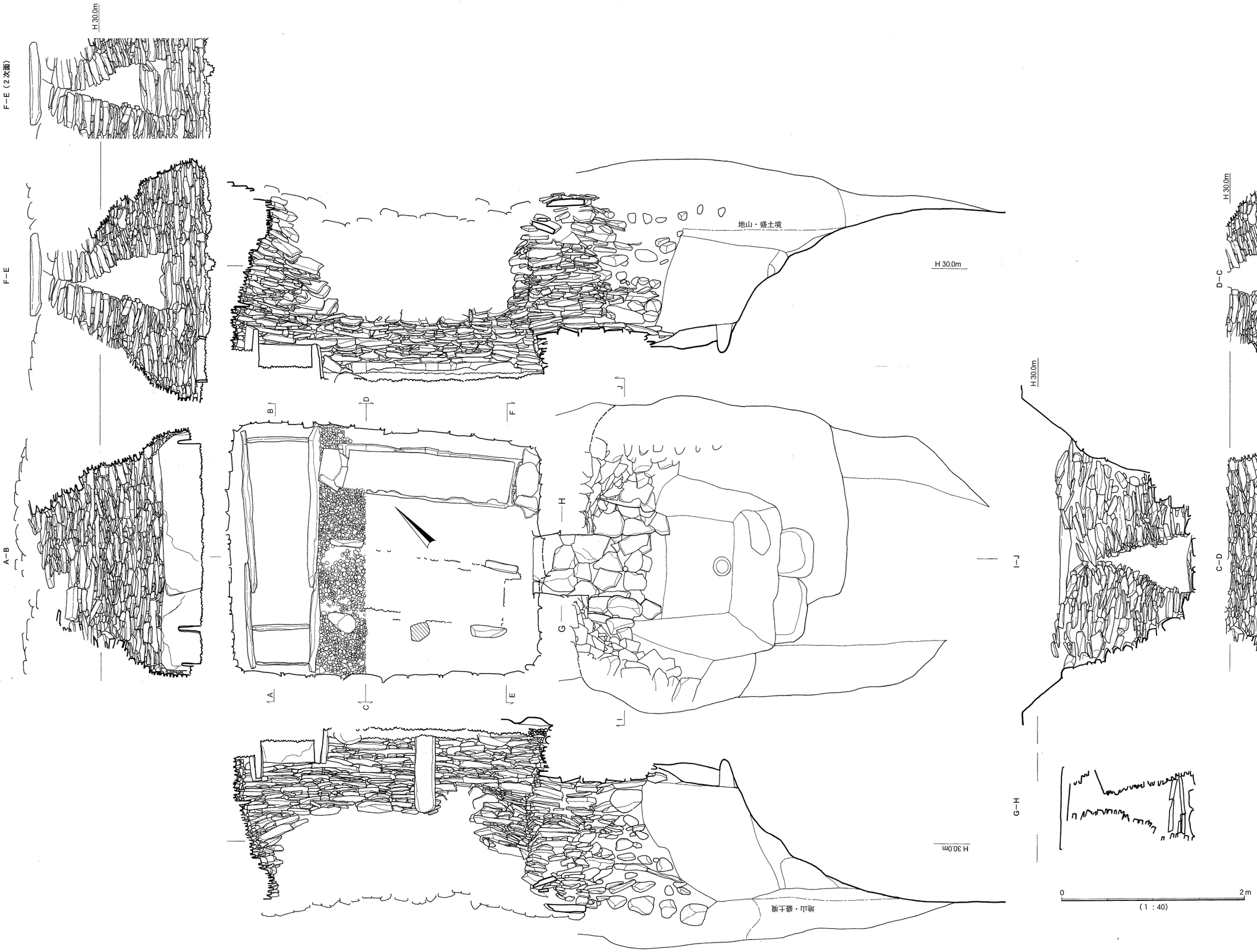

F－E（2次面）
H 30.0m
F－E
地山・盛土境
H 30.0m
D－C
H 30.0m
A－B
B
D
F
J
A
C
E
I
G
H
I－J
G－H
C－D
H 30.0m
地山・盛土境
0
2m
（1：40）

図54　横穴式石室

室基底石よりも10cmほど内側に突出している。

羨道はきわめて短小で、石室前面の前庭部と玄室と区画する隔壁的な構造に近い。左右の側壁面は玄室と前庭前面のあいだの２石が積み上げ単位になる。壁面には赤色顔料が塗布されている。玄室上部崩壊の影響や側壁上部の内側への倒れ込みのため壁面構成が乱れている。とくに内側への倒れ込みが著しい上部では、壁石が脱落するなどの変形が著しい。現状は羨道上部が合掌形に接するように内傾しているが、中央横断面図にみられるように、本来は上端で20cm前後の空間をもつアーチ形であったと思われる。

羨道の前面に石積みの壁で構成される前庭部が接続する。前庭部前面は羨道端から短く左右に延びる割石を1.4mの高さにほぼ垂直に積み上げているが、石室内部と比べて壁体構成が粗く、壁石間に灰色粘土を詰める部分が多い。壁面下部は鍵の手状に屈曲し、割石・転石を２～３段積み上げて低い側壁を構成する。その上部は灰色粘土と拳大～人頭大の転石（玄武岩と花崗岩）を灰色粘土で固定した外傾斜面となり、緩い円弧を描いて竪坑状墓道端に接続する。

前庭部底面は幅1.2～1.3m、奥行き0.7mの長方形。羨道床面から続く敷石面の延長部（中央部）と、一段高い側縁部に区画される。その境は低い段となり羨道側壁の基底石に接続している。

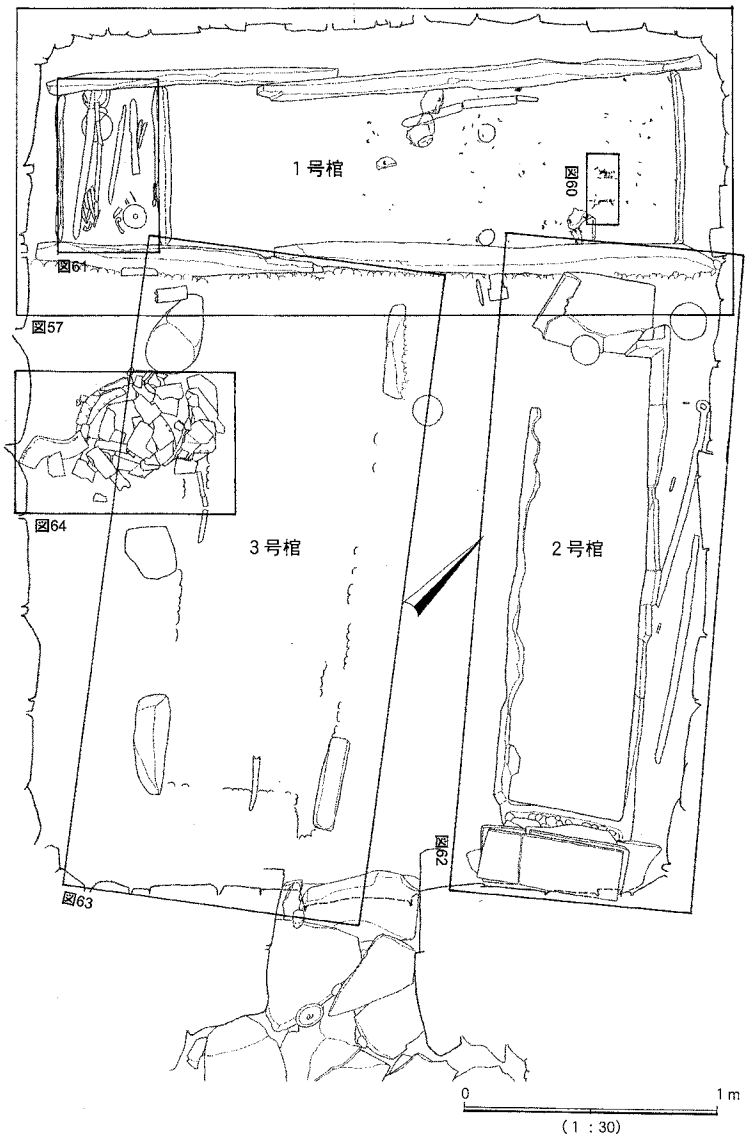


図55　玄室内の棺配置と別図の配置

なお２次埋葬時に羨道・前庭の床面上に割石と粘土を重ねて20～30cmほど嵩上げしたことは上述したとおりである。前庭部は、羨道端から竪坑状墓道間の墓壙空隙部側面強化のために案出された小空間である。墓道下部空間を接続することによって、埋葬時の遺体搬入や人の出入りを容易にしたと予測される。

（２）棺と副葬品

１号棺（図55・56・57～61、図版６・７・35・36）

石室主軸に直交し、奥壁に沿って配置された箱形石棺である。長側辺は２石の大型玄武岩板石を組み合わせ、その両端に小口壁を挟む。また西小口寄りに板石を配置して、遺体埋葬空間（主室）と副葬品埋納空間（副室）を仕切る。二方の長側辺は高さが異なり奥壁側が高い。小口壁と仕切石は、低い前面側の長側

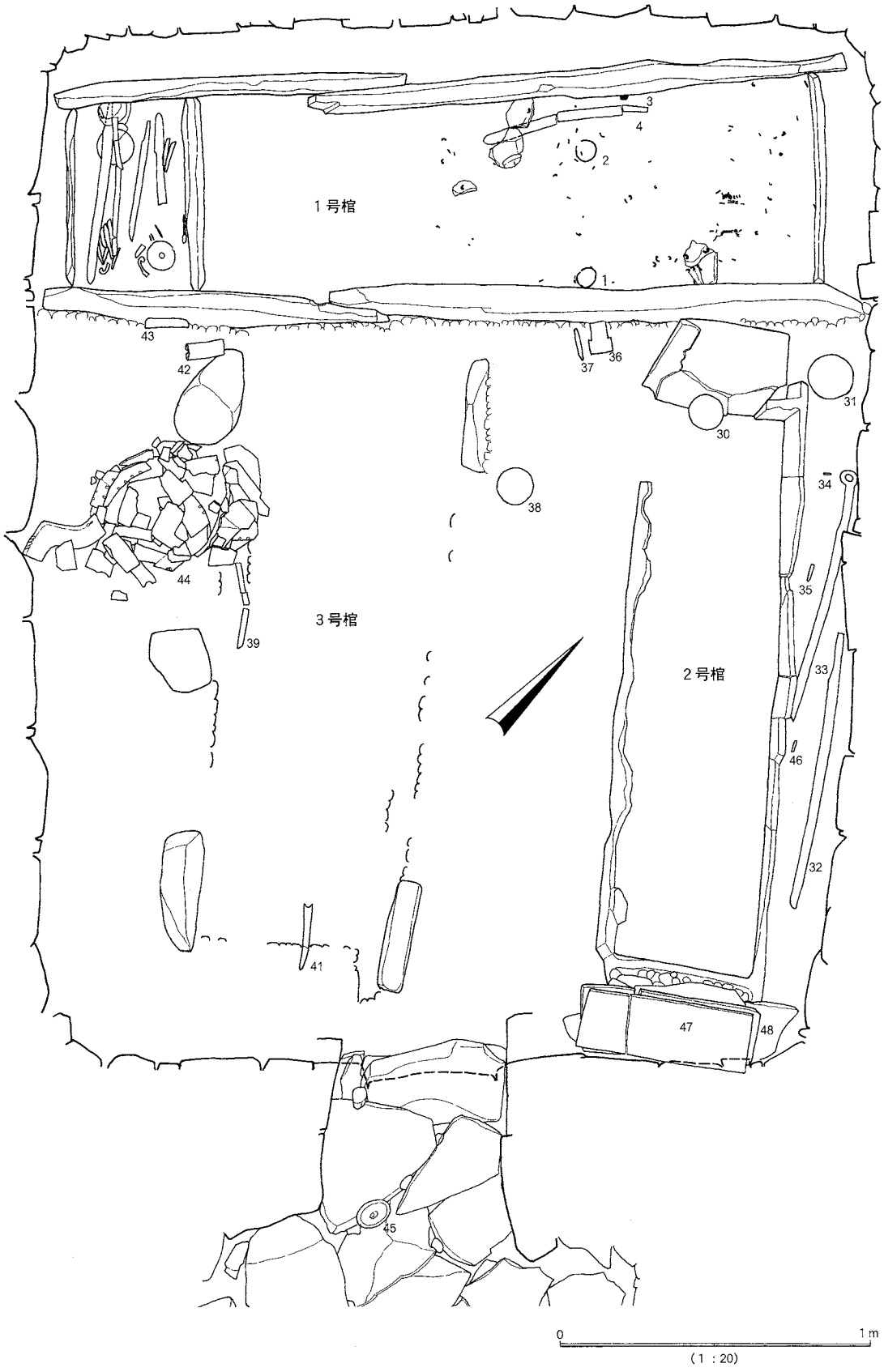


図56　玄室内の棺と遺物出土状況（１号棺副室の遺物番号は図61参照）

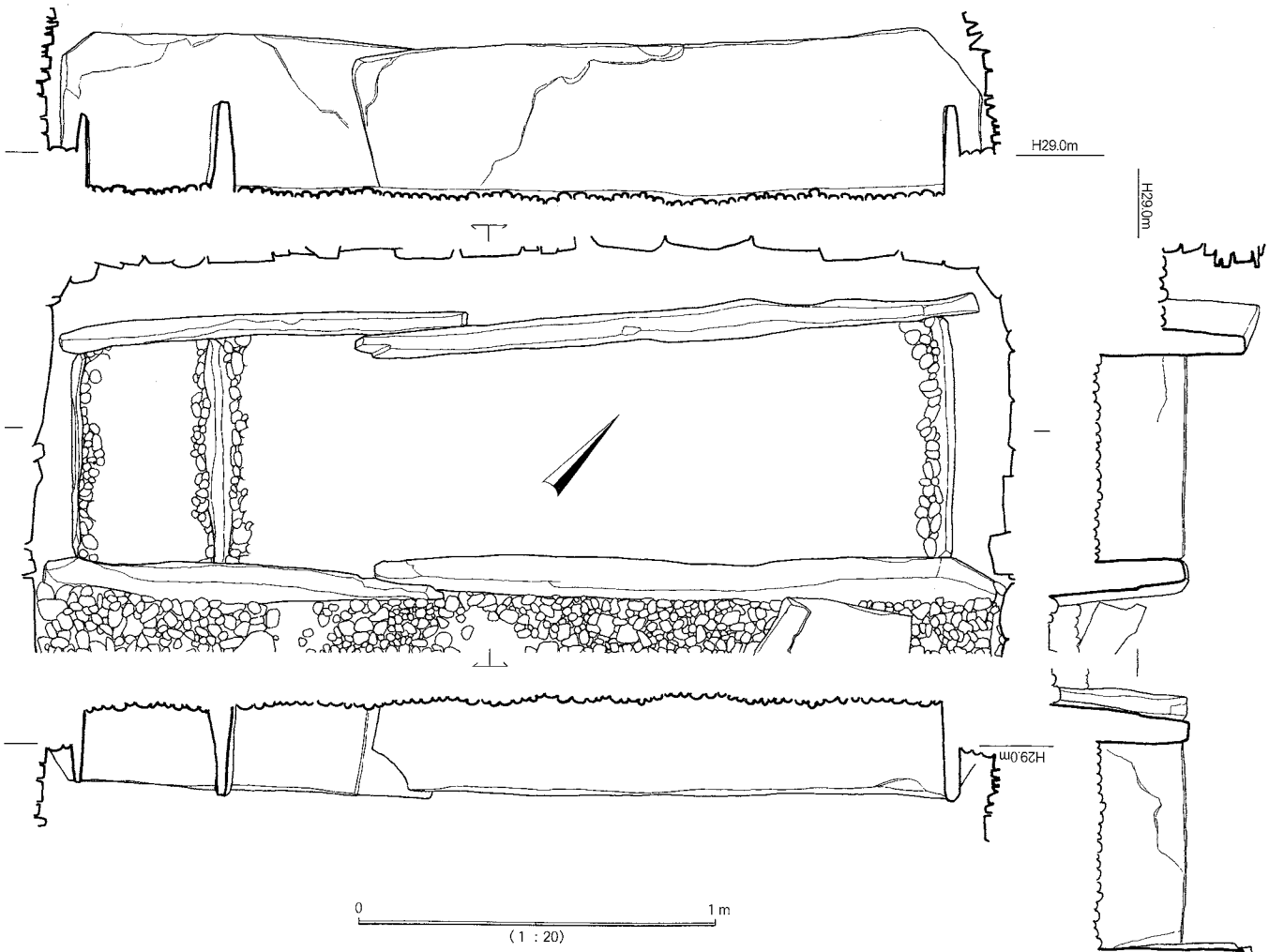


図57　１号棺

辺の高さに揃える（玄室奥壁に向かって右側の小口を東小口、左側を西小口と呼ぶ）。

石棺の外法最大長2.7m、幅0.75～0.9m、奥壁側の長側辺高0.45m、前面側の長側辺高0.2mを測る。石棺内法は全長2.4m、主室は長さ２m、幅は東小口が0.75m、西小口が0.65mと広狭が顕著である。副室は幅0.6m、長さ0.4mである。石棺内の床面は玄室よりも20cmほど高く、径２～５cmの小礫上に１～２cmの厚さにベンガラを敷いて平坦に整える。石棺上に蓋石を伴った痕跡はない。有機質素材の覆いがあった可能性はあるが未検出である。石棺の内外面とも赤色顔料が塗布されている。

【副葬品の出土状況】主室と副室に納められたもののほかに、奥壁「突起石」上に架けられたと推測されるものがある。石棺内は崩壊した側壁や裏込め石材で満されており、落下石材の直撃を受けて破損したものや、衝撃で飛び散って原位置から移動した副葬品も少なくない。

石棺内に落ち込んだ石材除去中に、主室中央付近から素環頭鉄刀（29）が出土した。石棺床面から20cmほど上位にあり、鉄刀下も転落した石材が充満している（図58、図版35）。奥壁の最下段突起石（右と中央）上に架けられたものが、石室崩壊の衝撃で転落した可能性が高い。

主室　床面上から出土した副葬品は、鉄剣１、竪櫛１、刀子１（攪乱中出土）のほか、着装した銅釧と首飾り、および散布したとみられる玉類である。出土した玉類は総数240点、番号を付して取り

上げたもの121点、床面上を覆う攪乱土中と床面下ベンガラ内から採集した119点がある。

鉄剣（４）は、遺体の体部右側に置かれている。石材落下の衝撃を受けて各部で割れている。鉄剣の茎と石棺のあいだに漆膜だけが遺存する竪櫛（３）がある。はたして原位置なのか明らかでない。なお、床面上部の攪乱土中から刀子（５）が出土した。

左右の手首付近から銅釧（１・２）が出土した。左右とも銅釧の周辺に碧玉製管玉のまとまりがあり、手玉とみられる。右手首の銅釧周辺には13個の管玉（C群）、左手首周辺には５個の管玉（D群）が散乱している。いずれも管玉の数が少なく、まとまりも悪い。落下石材の直撃や、衝撃のために飛散したか、あるいは玉の緒を切ってもともとの着装部位周辺に散布された可能性もある。

紐を通して一連を構成する玉飾りは、遺体頸部を挟んだ左右の２個所にある。頸部右側のA

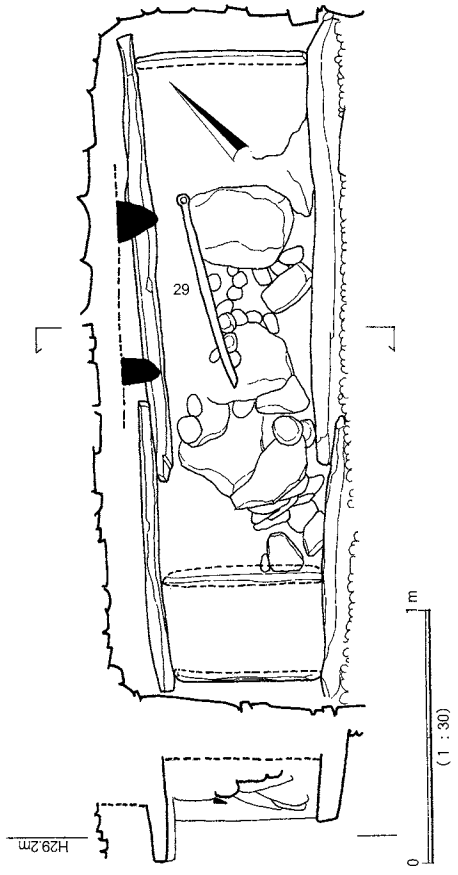


図58　突起石から転落した素環頭鉄刀

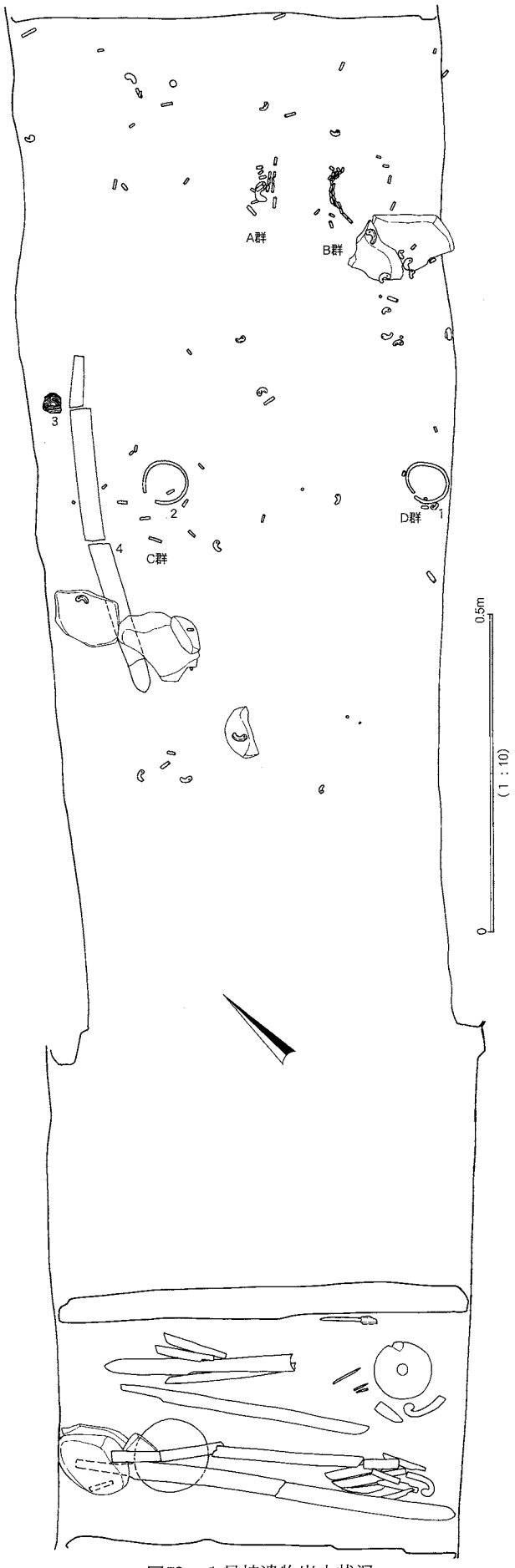


図59　１号棺遺物出土状況

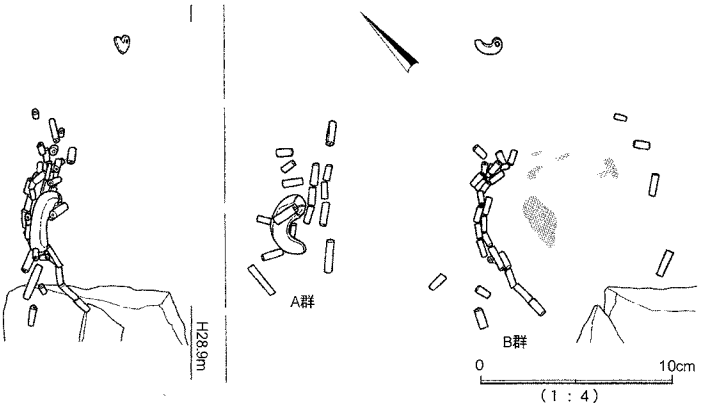


図60　玉Ａ・Ｂ群出土状況（アミは水銀朱）

表６　主室内出土玉一覧（括弧内は撹乱土・ベンガラ内からの採集数）

	総数	勾玉		管玉		臼玉	ｶﾞﾗｽ玉
		硬玉	その他	碧玉	その他		
Ａ群	17	1		16			
Ｂ群	29	2		27			
Ｃ群	11			4	7		
Ｄ群	5			3	2		
頭部	47(27)		10（5）	13(8)	10(2)	13(12)	1
胸～腰部	84(62)		16（4）	6(3)	8（6）	54(49)	
脚部	27(16)		6（1）	1	5（1）	15(13)	
不明	20(20)		6（1）		1（1）	13(13)	
計	240(119)	3	38	73(11)	33(10)	95(87)	1

※その他は、蛇紋岩・滑石・琥珀など

群は５×10cmの範囲に硬玉製勾玉１、碧玉製管玉16がまとまる。管玉が二列平行し、硬玉製の丁字頭勾玉をともなう。勾玉を親玉とした首飾りの可能性が高いが、管玉の数が少ない。石材落下によって飛散したものか、もともと数が少なく、首飾り以外の用途であった可能性もある。

Ａ群から南側に８cmの空間をおいてＢ群のまとまりがある。23個の碧玉製管玉が二列平行するほか、南側に離れて４個の管玉が半円形に散乱している。Ｂ群の西端近くに石材が落下し、Ｂ群の親玉と推測される硬玉製丁字頭勾玉が落下石材上から出土している。

Ｂ群西端の落下石材の上面や側面に７個の蛇紋岩・滑石製勾玉が散乱している。落下石材の直撃を受けたか、落下の衝撃で飛散したものと思われる。小範囲にまとまっているが、紐を通した玉一連を構成するとは考えにくく、一括して配置されたものが飛散した可能性が高い。また南長側壁に沿って硬玉製の丁字頭勾玉１が出土している。石材落下にともなって飛散したもので、Ｂ群にともなう可能性が高い。

また図59のように、主室内には遺体の頭部から脚部におよぶ広い範囲に玉が散乱している。出土位置を記録した玉は、各種の石材からなる管玉、蛇紋岩・滑石・琥珀製などの勾玉と滑石製臼玉が大半を占め、ガラス玉は遺体頭部の東寄りから出土した丸玉１点のみである。

撹乱土とベンガラ内から採取した玉類は採取位置を記録していないが、遺体の頭部・胸～腰部・脚部の部位に区分して取り上げているので、おおよその分布状況を知ることができる。取上個所ごとに区分した玉の種類と数量は表７のとおりである。

一連を構成する４つの玉飾りを除いた玉の出土状況は、つぎのような傾向をもつ。

①散乱状況で出土した勾玉は蛇紋岩ないし滑石製の小型品が多く、頭部・胸～腰部周辺に集中する。

②管玉は頭部の集中が高いが、胸～腰部・脚部にも満遍なく散乱する。

③滑石製臼玉は胸～腰部に相対的に多く分布する傾向はあるが、遺体全体におよぶ。

以上のような広範囲に及ぶ出土状況は、石室崩壊にともなう落下石材の直撃や衝撃による飛散・移動だけでは説明できない。遺体の頸の左右に置かれたＡ・Ｂ群と、左右手首の手玉Ｃ・Ｄ群の２連を除いた玉類は、遺体安置後に散布されたものと想定される。勾玉と管玉は遺体上半身を中心に、滑石製臼玉は脚部から頭部にかけてより広い範囲に散布されたと思われる。

副室　副葬品のあいだに落下石材が噛み込んでいるところがあり、多少の移動が予想される。副室北東隅と中央西寄りに２枚の鏡が置かれている。１号鏡（27）は鏡面を下に向けた珠文鏡、２号鏡

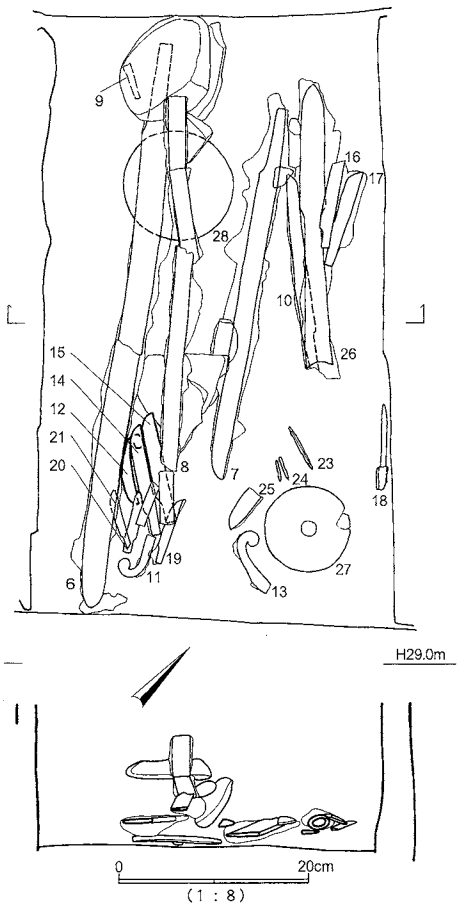


図61　副室内遺物出土状況

(28) は鏡面を上に向けた四獣鏡である。２号鏡の上に鉄剣（６）と鉄刀（８）がある。鉄剣・鉄刀の茎上に石材が落下し、剣と刀の茎（９）はその石材下にある。鉄刀先端は破損し原位置を動いている。鉄刀先端付近に刀子７本［蕨手刀子２（11・12)、刀子５（14・15・19・20・21)］がまとめて置かれ、その東側に鉄刀（７・10)、矛（26)、刀子２本（16・17）が平行して並ぶ。１号鏡の周囲に蕨手刀子（13)、針筒３本(23～25)、鹿角装刀子（18）がある。

【埋葬遺体と頭位】人骨の痕跡は皆無だが、首飾り・銅釧の配置から東小口側に頭部を置いたものとみられる。なお、粒子状となった水銀朱が玉一連のＡ群とＢ群周囲に散布された状態で検出されている。

２号棺

１号棺と前壁間の右側壁に沿って配置された土製埴質の棺である。棺は右側壁に沿って玄室中央床面よりも５～８cmほど高く整えた礫面上に置かれている。棺と右側壁・１号棺・前壁とのあいだにそれぞれ50cmほどの空間がある。前壁とのあいだは玄武岩の板石を２段に重ね、その上部に棺と同様の埴質の板（47・48）を２枚重ねている。この類例のない棺を、ここでは箱形埴棺と仮称する（１号棺側の小口を北小口、前壁側の小口を南小口と呼ぶ)。

埴棺は崩壊した側壁石材などによって押しつぶされ、上部は破片化して棺の内外に倒れ込んでおり、かろうじて下部が原位置に遺存する状況であった。同素材の蓋板と底板は伴っていない。棺内は小礫上に１～２cmの厚さで赤色顔料を敷き詰め平坦に整えている。棺の内外面・上面は赤色顔料が塗布されている。内法長1.88m、幅57cmで、小口側に広狭の差は認められない。小口板は長側板に挟まれる構造である。長側板の両端部は小口外端から５cmほど外側に突出し、その上面は長側板よりも３cmほど低い。長側板の長さ2.02m、高さ28cm、厚さ４～５cm。小口板と長側板の外面に、方形ないし長方形の凹みがある。小口板は２個、長側板は５個である（埴棺の詳細は第４章５参照)。

【副葬品の出土状況】棺内から出土した副葬品は、倒れた北小口板上にかかって出土した捩文鏡（30）１点のみである。鏡は鏡面を下に向ける。

棺外から各種の副葬品が出土した。棺と右側壁のあいだの北小口付近に内行花文鏡（31）が鏡面を下に向けて置かれている。その南側に、素環頭鉄刀（32）と鉄刀（33）が一部平行して棺に沿って配されている。２本の鉄刀は柄部を北側に置き、刃部を棺に向けている。素環頭鉄刀と棺のあいだから不明鉄製品（35）と針筒（34)、鉄刀と棺のあいだから針筒（46）が出土している。

棺の西側（石室中央側）は、１号棺に接するように有肩鉄斧（36）と刀子（37）が出土している。

【埋葬遺体と頭位】棺内から人骨は検出されなかったが、鏡の位置と棺外の直刀配列方向からみて、北側に頭部を置いたと想定される。

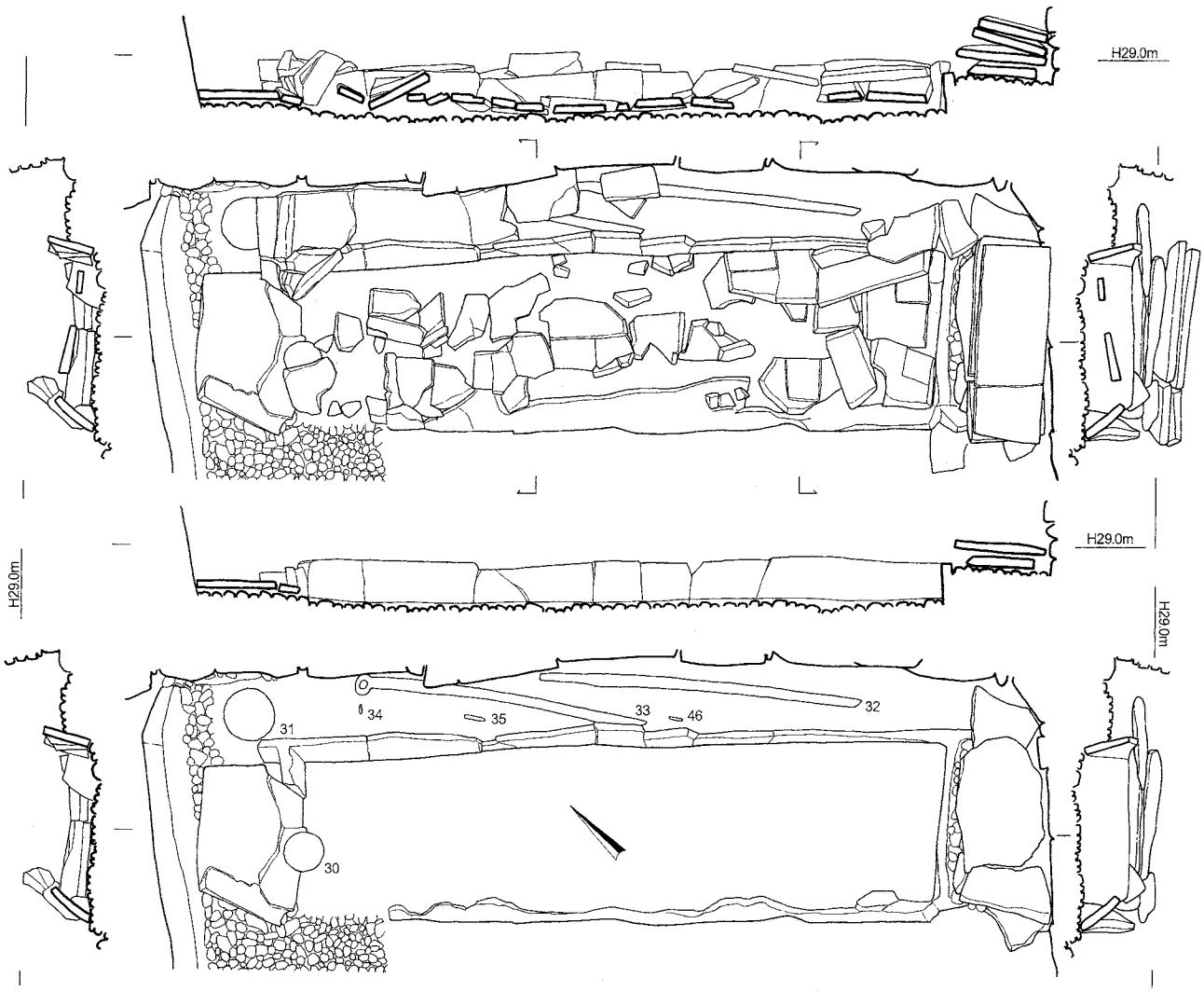


図62　２号棺

３号棺

１号棺と前壁のあいだで、左側壁側に寄った位置に設けられている。棺側壁の外側端部の４ヶ所に、30×８～20cm程度の花崗岩転石を床面から10cmほど高く配置している。

棺内床面と周囲の床面とのあいだに、石室主軸に沿って、幅５～10cm、深さ３～８cm程度の窪みが部分的に認められる。前壁側でも同様の窪みが確認されたが、１号棺側は不明瞭であった。その窪みは棺材を配置するために床面の小礫を除去したもので、その形状から箱形木棺を組み立てたとみてよいであろう。石室主軸方向に長側板を据え、小口板をそのあいだに挟みこむ構造である。（１号石棺側の小口を北小口、前壁側の小口を南小口と呼ぶ）

棺内床面は径２～５cm程度の小礫である。棺内は１・２号棺のようにベンガラが敷かれた状態でないが、棺内に相当する範囲の礫は赤色顔料が塗布されている。頭部付近と推測される北小口寄りの部分は、ベンガラが薄く敷かれた状態が認められた。

木棺の規模は外方で長側辺が約2.2m、北小口辺が約75cm、南小口辺が約60cm、内法は長さ1.9m、北小口幅60cm、南小口幅50cm程度と推測される。床板や蓋の存在は不明だが、１・２号棺を参考にすると、床板はなかった可能性が高い。なお南小口辺と左側壁側の長側辺の外方は棺内床面よりも５～10cmほど高い。木棺組み立て後、周囲に小礫を積んだのであろう。

【副葬品の出土状況】西側長側辺から棺据え付け溝にかけて、刀（39）と刀子（40）が出土した。棺

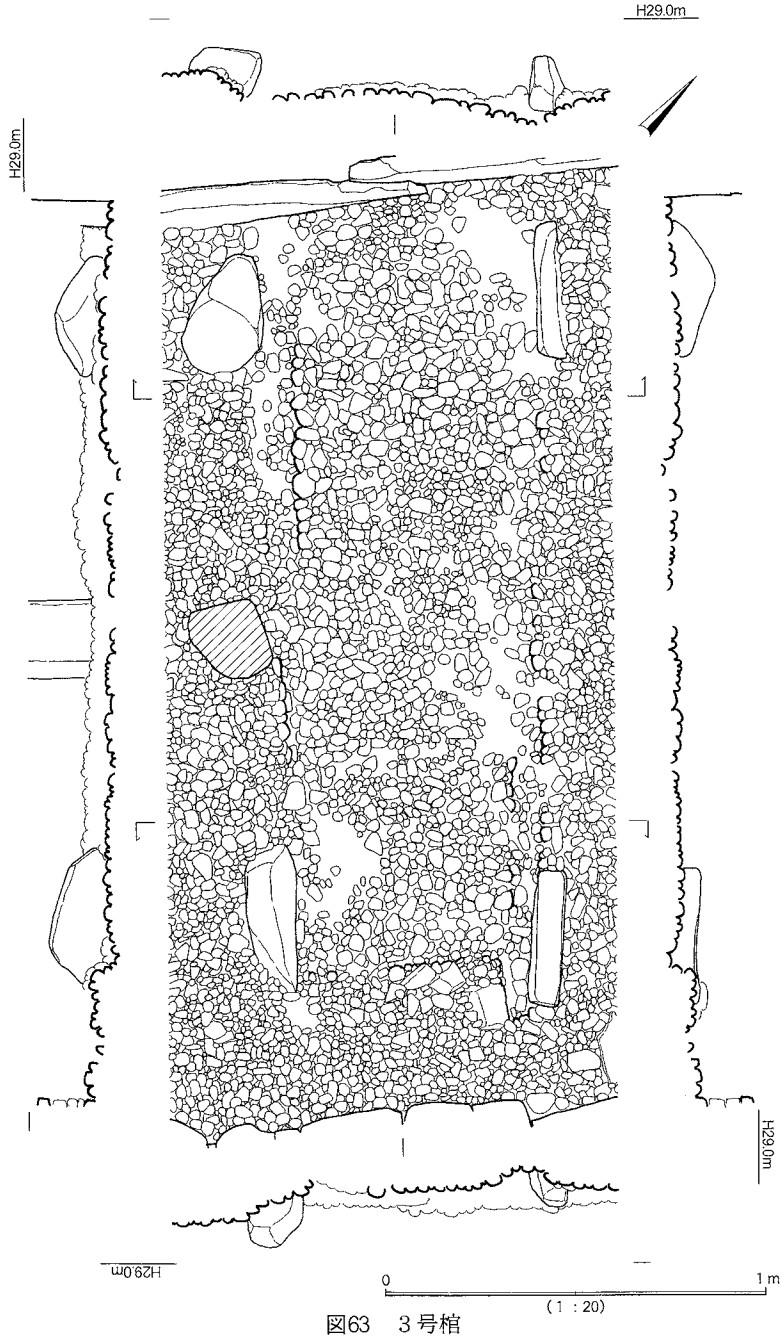


図63　3号棺

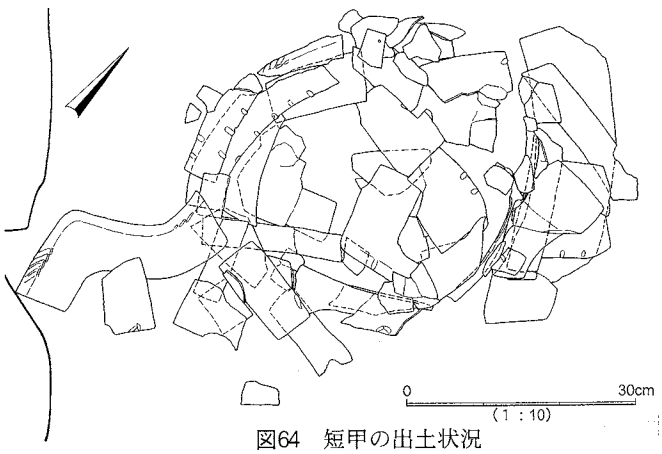


図64　短甲の出土状況

内に置かれたものが移動したものであろう。また南小口部から木棺据え付け溝にかけて鉄鉾(41)が出土した。おそらく木棺上に架けられたものが落ち込んだものであろう。

棺外では、左側壁側と棺のあいだに1号棺沿い鉄斧（42）と鉄鎌（43）が、その南側に長方板革綴短甲（44）が置かれている。短甲は崩壊した石材の直撃を受けて押しつぶされた状態で検出された。短甲各部位の出土状態からみて、棺に斜交し前胴を棺側に向けて置かれたことがわかる。

石室中央側の棺外からは、1号棺寄り転石の傍らに四獣鏡(38)が鏡面を上にして出土した。

【埋葬遺体と頭位】人骨は未検出だが、棺幅が広くベンガラが敷かれた北小口側に頭部を置いたと推測される。

羨道出土の双頭龍文鏡（図56、図版33）

羨道閉塞石を除去した際に、閉塞石端から20cmほど羨道内側に入った位置から双頭龍文鏡(45)が検出された。下端が羨道床面より2cmほど浮いた状態で、鏡面を石室側に向けて斜め（およそ70度前後）に立てかけた状態で出土した。鏡が原位置をとどめるとすれば、最終埋葬時の板石閉塞直前に羨道端に土砂を盛って立てかけたと想定される。あるいは玄室崩壊時に原位置から飛び跳ねて移動したとも考えられるがいずれとも判断できない。

玄室内から出土した副葬品を帰属する棺別と種類別にまとめると次のようになる。

玄室内出土副葬品一覧

１号棺

（主室）鉄剣１、刀子１、竪櫛１、銅釧２、玉類（勾玉36、管玉108、臼玉95、ガラス丸玉１）

（副室）珠文鏡１、四獣鏡１、鉄剣１、鉄刀３、鉄鉾１、刀子12（蕨手３、鹿角装１、刀子８）、針筒３

（奥壁突起石上）素環頭鉄刀１

２号棺

（棺内）捩文鏡１

（棺外・東）内行花文鏡１、素環頭鉄刀１、鉄刀１、針筒２、不明鉄器１

（棺外・西）鉄斧１、刀子１

３号棺

（棺内）鉄刀１、刀子１

（棺外・東）四獣鏡１

（棺外・西）長方板革綴短甲１、鉄斧１、鎌１

（棺上？）鉄鉾１

羨道入口部：双頭龍文鏡１

種類別副葬品一覧

鏡　：青銅鏡６（内行花文鏡１、双頭龍文鏡１、四獣鏡２、珠文鏡１、捩文鏡１）

装身具：銅釧２、竪櫛１、玉類（勾玉36、管玉108、臼玉95、丸玉１）

武　器：鉄剣１、素環頭鉄刀２、鉄刀５、鉄鉾２

武　具：長方板板革綴短甲１

農　具：鎌１、

工　具：鉄斧２、刀子14（蕨手３、鹿角装１、刀子10）

その他：針筒５

（柳沢　一男）

（3）副葬品

1）鏡（図65・66、図版46～50）

鋤崎古墳出土の鏡は計6面。これらを鏡の形式順に記述する。なお観察と計測は2001年におこなったもので、保存処理後の状態による。樹脂が含浸され欠損部には補填がなされている。

内行花文鏡　31　＜2号棺棺外＞　径14.8cm　重248g　　図65、図版46・49

鋤崎古墳出土鏡の中では径が一番大きい。錆による傷みがいちじるしく、文様の細部はあまりよくみえない。内区の3分の1ほどを欠失する。

半球形の鈕のまわりに四葉座をおく。その間に「長」「宜」「子」の3文字が読み取れる。もう一字の部分は欠失しているが、「孫」であったとみてよいだろう。四葉座の周囲には圏帯をめぐらす。圏帯は脇に櫛歯文をともなわない形式。その周囲に八花を表すが、花文間に文字や図像を置いているかどうか不明。花文のまわりの雲雷文は、2帯の斜行櫛歯文ではさまれ、杉の葉状に線が入り組むいわゆる斜角雲雷文に属する。渦は、残存部分からみるかぎり同心円化していない段階のものであろう。外区は素文。縁部外側端面は傾斜している。なお四葉座の上に回転による研磨を示す線条痕が観察できるが、元々つけられていたものか出土後のものか判断できない。

双頭龍文鏡　45　＜羨道床面＞　径11.8cm　重129ｇ　　図65、図版46・49

羨道端部から斜めに立った状態で発見されたものである。錆の進行によって表面はかなり荒れており、文様の大半はみえない。

鈕は低平で、鈕孔は銘帯を縦にしたときの鏡の軸に対して斜め方向にあく。主文の細部はほとんどみえず、かろうじて以下の点が判明したのみである。鈕の上下に銘をいれる長方形の区画をもち、幅広の突線で区画する。通常は「位至三公」という銘が上下に分けて記されることが多いが、一字も判読できなかった。この区画の両側に配される獣像は逆S字形の体部をもち、中央に脚部が変形した木の葉形の突き出し部を表現する。やや幅のある線で平彫り風に表す。内区外周には斜め方向の櫛歯文をめぐらすが、これと内区との間の境界には太い突線を用いる。外区は素文。

四獣鏡　28　＜1号棺副室＞　径11.8cm　重157g　　図66、図版47・50

錆の進行がいちじるしく、文様の細部はよくみえない。

半球形の鈕のまわりに突線をめぐらす。内区を小乳で4つに区画し、頭部を正面に向け胴部を側面形に表現した獣像を各区に1体おく。獣像は左向きと右向きがそれぞれ2体ある。獣像の頭部表現は、輪郭が円形で中央に鼻梁を通し、目のまわりを曲線で縁取るタイプらしい。脚を前後に大きく踏ん張るような姿態に表すが、後脚表現はほとんど省略されている。

内区の周囲には低い界圏をめぐらす。界圏の内斜面には鋸歯文が施され、界圏の頂部には浅い溝が彫りこまれている。その外側は素文となり、一段高い外区に続く。外区は鋸歯文と二渦の菱雲文がめぐる。菱雲文から縁部にむけて斜縁状に厚みを増す。

四獣鏡　38　＜3号棺棺外＞　径11.5cm　重206g　　図66、図版47・50

遺存状況はきわめて良好で、一部に銀色の地色がのぞく。本来の鋳上がりも良好であったことがうかがわれる。

鈕はきれいな半球形。鈕座には突線と界圏状の突起を用いる。界圏の内側斜面は段状表現を施す。内区は乳で4つに区画し、各区に外側からみて左向きの獣像を置く。獣像は頭部が横に平たくつぶれた半円形で、目と鼻梁をそれぞれ横線と縦線で示す。胸部の高まりに環状乳を設け、そこから羽状表現を後ろに伸ばす。この環状乳は中央をくぼませ、孔の周囲に刻みをいれたものである。脚表現はほ

とんど省略されている。内区周囲には櫛歯文を施し、一段高い外区には一条の鋸歯文をめぐらせ、斜縁状の縁部に至る。

この鏡の図像には興味深い特色がある。すなわち獣像は頭部、脚表現ともに省略形であることを示すのに対し、環状乳と羽状表現は中国製の神獣鏡を思わせる丁寧なもので、後者は羽の先端を若干ふくらませ、立体的な表現に成功している。また鈕座の界圏状表現は比較的整ったものであり、他では鼉竜鏡（単頭双胴神鏡）の初期型式にしかみられないものである。

捩文鏡　30　＜２号棺棺内＞　径9.7cm　重86g　　図66、図版48・49

残存状況は比較的よい。

半球形の鈕の周囲に二重の突線をめぐらす。内区は６つの小乳で区切り、数本の単線で平行線をくくった俵状の図像を表す。内区周囲は一条の突線と低い界圏で囲む。界圏の内斜面には櫛歯文をほどこす。界圏頂部には溝がない。界圏と一段高い外区の間は櫛歯文で埋められる。外区はやや細長い鋸歯文をめぐらす。縁部はやや厚さをもつ斜縁状を呈する。

珠文鏡　27　＜１号棺副室＞　径9.3cm　重63g　　図66、図版48・49

縁部を中心に錆膨れが発生しており、とくに主文部に変形が生じている。

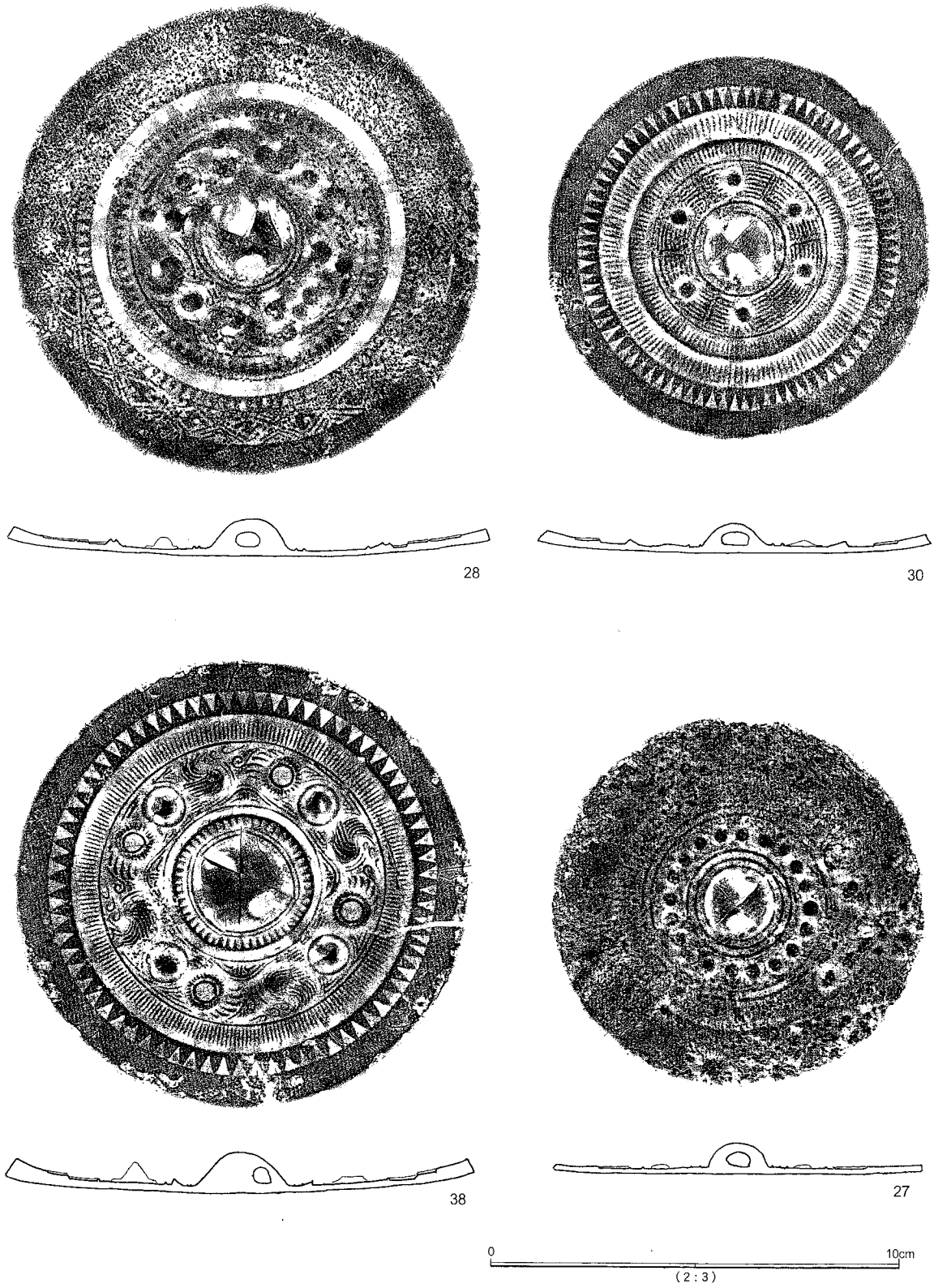
半球形の鈕のまわりに三重の突線をめぐらす。内区は粒の大ぶりな珠文である。はっきりとは確認できないが、各珠文のまわりを括弧形の突線で囲っている可能性がある。内区の周囲には二重の突線と櫛歯文とをめぐらし、一段高い素文の外区に続く。

直径９cmを超えるものは珠文鏡としてはやや大きめの部類であり、珠文も通例のものとは特徴を異にする。通常の珠文鏡とは異なる系列のものかもしれない。

（森下 章司）

内行花文鏡（31）２号棺棺外
双頭龍文鏡（45）羨道床面

図65　鏡（1）



四獣鏡（28）１号棺副室
四獣鏡（38）３号棺棺外
捩文鏡（30）２号棺棺内
珠文鏡（27）１号棺副室

図66　鏡（2）

2）　玉類　(図67～69、図版51・52、表８・９)

玉類はすべて１号石棺主室からの出土である。総数240点、その内訳は、勾玉36点、管玉108点、臼玉95点及び丸玉１点である。個別の詳細は表８・９に示し、種別ごとに報告するが、さきに玉に利用された石材について触れておきたい。石材は硬玉・碧玉・蛇紋岩・滑石のほかにこれらに属さないものがあり、それらを石材Ａ・Ｃ・Ｄ・Ｅとする。

石材Ａ　明緑褐色を呈し、全体が細粒状となっている。ごく軟質で、表面が粉状となっているものから刃物で傷がつく程度の硬度をもつものまである。多孔質となるためか、軽い。

石材Ｃ　オリーブ灰色で鈍い光沢をもつ。細粒状で流理がみられる。

石材Ｄ　灰白色だが、やや緑がかる。表面は風化、ややあばた状を呈す。光沢はなく、流理が見える。

石材Ｅ　緑灰色に見えるが、拡大してみると灰白色の地に緑の斑が混じる。遺物表面はすりガラス状であるが、加工によるものか風化によるものか判断が難しい。硬質

勾玉　全部で36点出土した。石材は、硬玉、蛇紋岩、滑石および琥珀である。石材により３分類され、さらに細分することができる。

硬玉製勾玉　３点出土し、すべて丁字頭勾玉である。長さは勾玉のなかで最大級の位置にあり、太さが他例と比べ際立って太い。他類の最大値より0.2cmほど大きく、長短の差に関わらず1.0cm弱に集中する。頭部の刻線はいずれも３条、横断面は上下あるいは左右に面を残すようにして全体を研磨され、ガラス状の光沢を持つ。

琥珀製勾玉　２点出土した。ともに尾部を欠く。くすんだ赤色を呈し半透明、断面は円形である。穿孔が他材質に比べて小さい。

蛇紋岩製勾玉　22点出土し、加工・形状により２群に区分できる。１群は全体が長軸に沿う細長い面で構成され、面と面の成す稜が明瞭に残り、擦り削り途中のような状態にある。各面には擦状痕が残る。特に腹側は帯状の面が顕著で、頭部の下縁、尾部の先端に明瞭な鋭い稜線が残されたままとなっている。勾玉の中では小形の領域にまとまり、長さ2.1cm～1.5cmの範囲にある。２群は、上下面の孔を中心とした部分及び腹側を除き全体に研磨が施され、外面、断面とも丸みをもつ。長さと厚さに一定の割合を保って大小の差が大きく、長さ1.4～2.6cmの幅がある。２群のほうがやや太い傾向がある。

滑石製勾玉　９点ある。よく磨かれて樹脂状の光沢をもつ。他の勾玉に比べ、長さに対して厚さの変化量が大きく、２群に分離される。１群は長さに比して厚さが小さい。極端な差はないが頭部上下面に擦り削ったような平らな面があり、これが厚さの値に反映している。２群にはこの頭部の特徴がみられない。１群は長さ1.5cm強に集中し、２群の長さは1.4～1.6cmの範囲に広がる。

丸玉　１点出土した。深い青色のガラス製、右回りに孔に向かう渦状の気泡列が残る。径は1.1cm。

管玉　108点が出土した。石材は碧玉に加えて石材Ａ，石材Ｃ、石材Ｄ、石材Ｅを用いている。0.5cmから2.2cmの長さに収まる。穿孔は両面から行い、長さの2/3までの位置で貫通する例が多いが、例外的に端部近くで貫通させるものがある。長さと径について、石材ごとに記述する。

碧玉製管玉　特に大形の１点を除き長さが0.4～1.7cm、径は0.3～0.5cmの範囲にあり、変化が大きいが、値の分布から見ると、特に長さに比べて径の変化が大きい。

石材Ａ製管玉　碧玉製勾玉より大きいものが含まれ、小形のものはない。長さ0.4～2.4cm、径0.4～0.6cmの範囲にある。全体として径の変化が小さいが、例外的に太いものがある。

石材Ｃ製管玉　碧玉製より大きい領域を占め、長さと径の比については碧玉製と同様の傾向をもつ。長さ1.5～2.1cm、径0.4～0.5cmの範囲にある。

石材Ｄ製管玉　長さの変化に対し、径の変化がごく小さい。長さ1.2～1.9cm、径は0.4cmに集中する

石材Ｅ製管玉　全体として小さく長さに比べ径が小さい範囲におさまる。長さが0.8～1.1cm、径が0.3～0.4cm弱の範囲にある。

臼玉　全部で95点、すべて滑石製である。計測値をみると、径は0.4cm～0.6cm、高さは0.1cm～0.4cmの間にあり、径は４mm台後半に最も集中するが、高さは0.2cm弱から0.3cm後半台までと振れがあり、一定の傾向を認めることができない。高さの変化が大きく、径に対して高さが低く車輪状を呈するものから、逆に高さが高く樽状を呈するものまでがあり、その間が漸移的に変化するように見える。形状はともかく、全体としていくつかの特徴を見い出すことができる。側面は中央部に最大径をもち、緩い稜となるものから曲面となるものまであるが、いずれもよく研磨され平滑で光沢をもつ。上下面の一方、まれに両方が、回転を利用して削り窪めたように孔を中心に凹レンズ状に窪む例が目立つ。

群を構成する管玉　１号石棺出土玉類には管玉の４群のまとまりがある（Ａ～Ｂ群）。そのうち遺体の頸部付近と想定されるＡ・Ｂの２群は、連接状態をよく留めている。Ａ・Ｂの２群は、丁字頭勾玉をもつ。出土した玉群ごとに管玉の長さを集計すると、Ａ群が16点、19.8cm、Ｂ群は連接して出土した部分で27点、24.3cm、やや離れて散布するものを含めると32点、30.6cm、Ｃ群は11点16.1cm、Ｄ群は５点5.4cmとなる。

この４群の管玉について碧玉製の数をみると、頭部位置のＡ群が16点中15点、Ｂ群が範囲を広く考えた場合で34点中33点、連接した部分のみでは27点の全部が碧玉製となる。手首位置Ｃ群では11点中４点、同じくＤ群では５点中３点という構成になる。Ａ群とＢ群の管玉は、Ｂ群の１点を除き、すべて碧玉製である。

老司古墳３号石室では、碧玉製管玉を主体とした玉類が出土している(1)。５群のまとまりのうち、Ｂ群とＣ群が連接した状態をよく保っており、管玉が２列に並ぶ端に勾玉が位置する点、２群が近接して並ぶ点で鋤崎古墳Ａ群、Ｂ群と類似する。

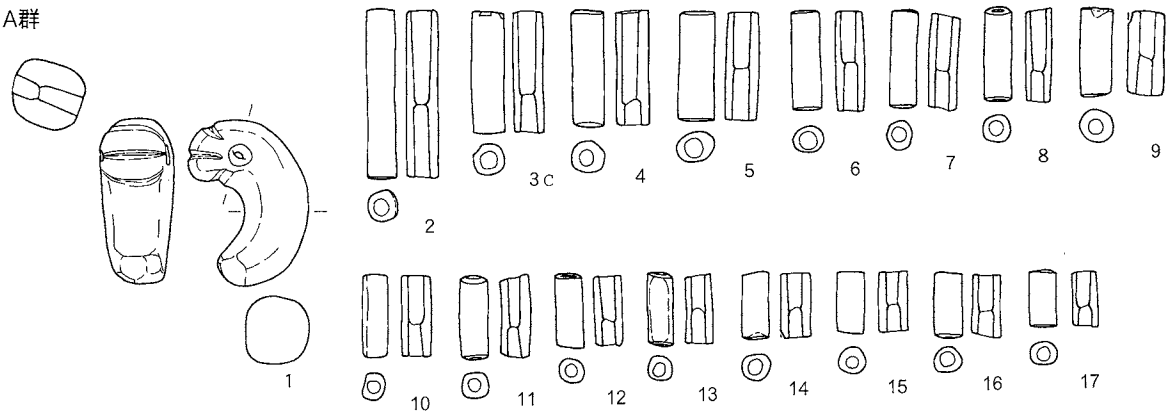
老司のＢ群は、丁字頭勾玉１と碧玉製管玉13の構成で管玉の延長23.8cm、Ｃ群は丁字頭勾玉１と碧玉製管玉12の構成で延長21.1cmとなり、鋤崎のＡ群、Ｂ群の連接部の値と近い。老司例を参照すると、石材の落下により一部の欠落が生じてはいても、鋤崎古墳のＡ群、Ｂ群は、それぞれ別個に同じ位の長さで一連を構成していた可能性が大きい。老司古墳の報告では玉飾りの位置を被葬者頭頂部付近に想定するが、鋤崎古墳ではＡ群、Ｂ群の間に被葬者の頸部位置を想定できる。この場合、付近に散布する管玉の解釈が問題となるが、棺の東半部分に比較的集中して碧玉製管玉が分布し、丁字頭勾玉が別に１点あることから、３連めの存在を想定できる。このときは、Ａ群のように別種の石材が利用された可能性もある。

（杉山 富雄）

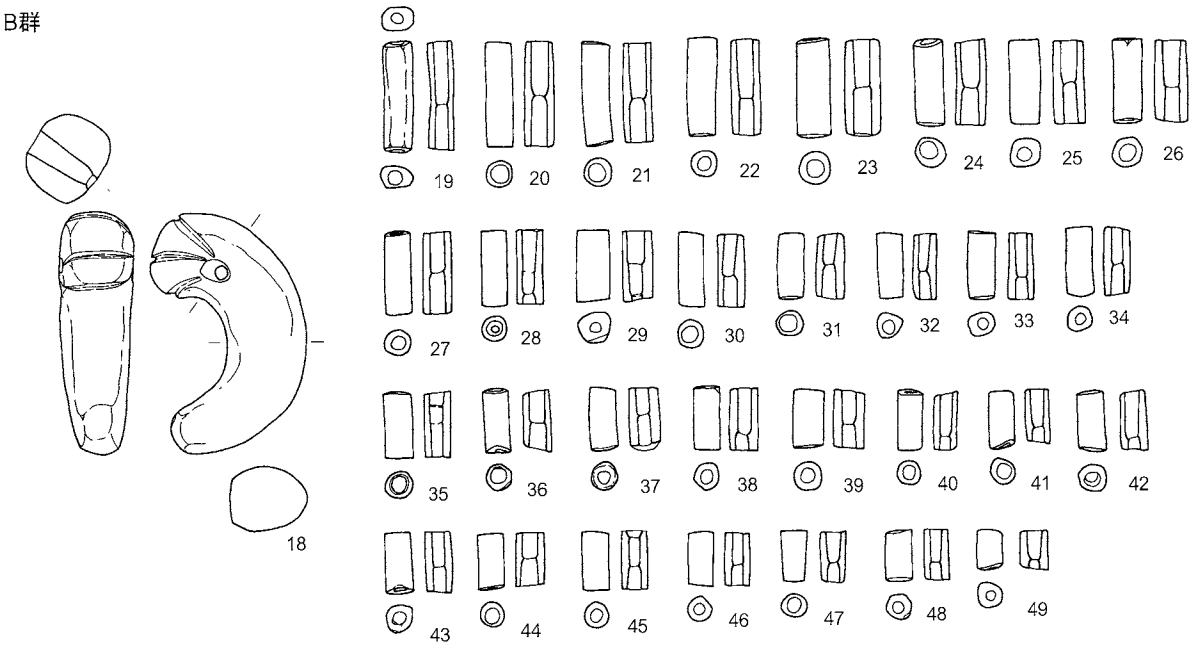
【註】

（１）山口譲治・吉留秀敏・渡辺芳郎編1989『老司古墳』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集）

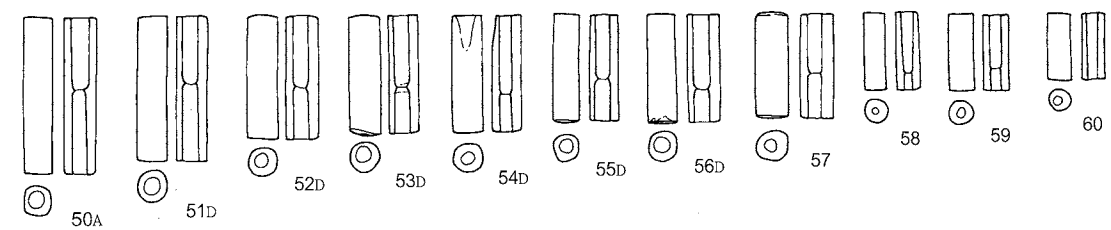
A群



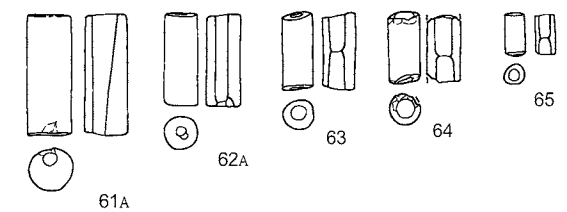
B群



C群



D群



※図67～69中番号につづく記号は石材
勾玉　Z：蛇紋岩、K：滑石、Kh：琥珀
　　それ以外は硬玉
管玉　A：石材A、C：石材C、D：石材D、
　　E：石材E、それ以外は碧玉

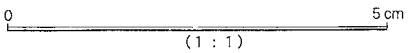
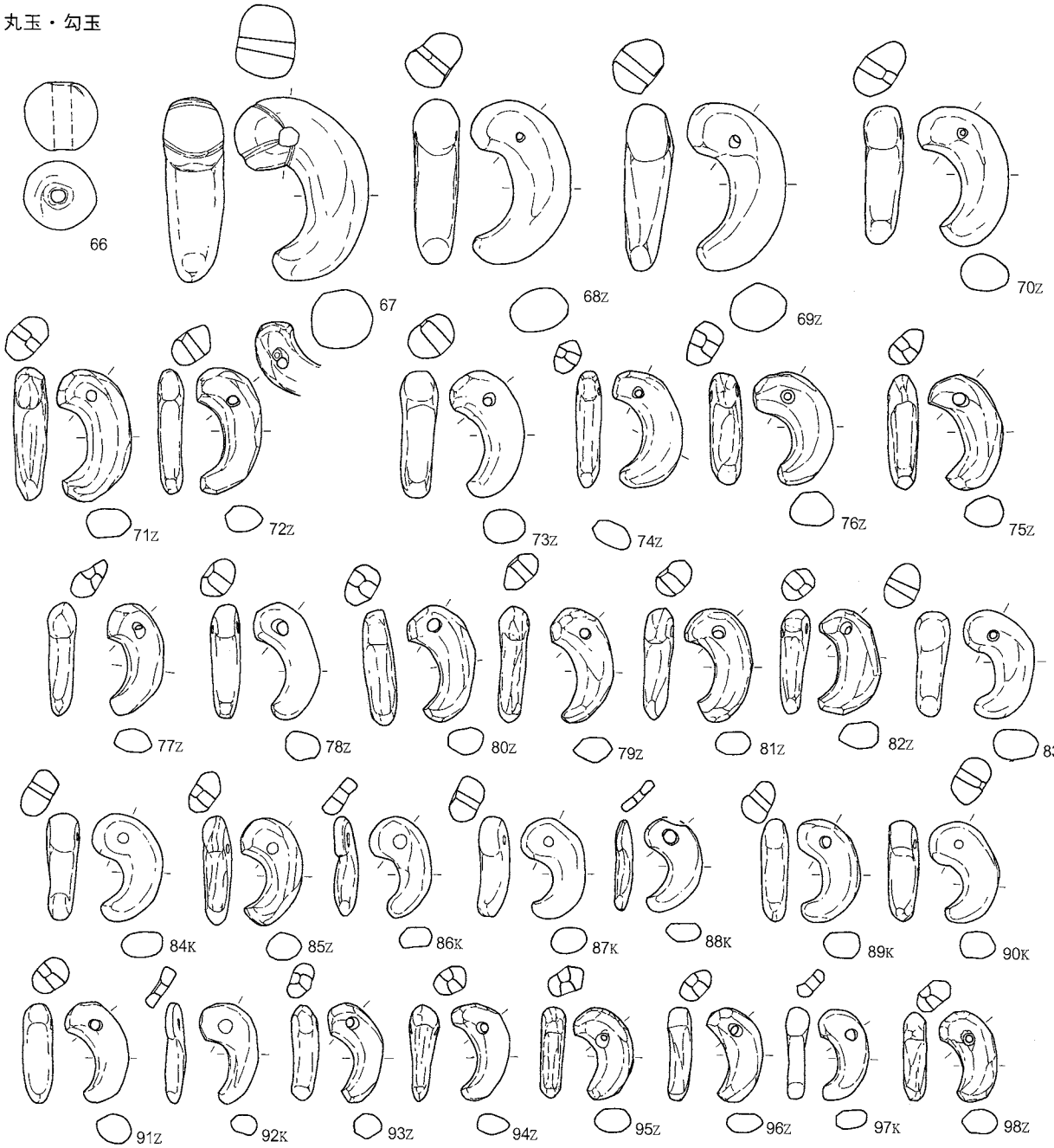


図67　玉類（1）

丸玉・勾玉



管玉（群外）

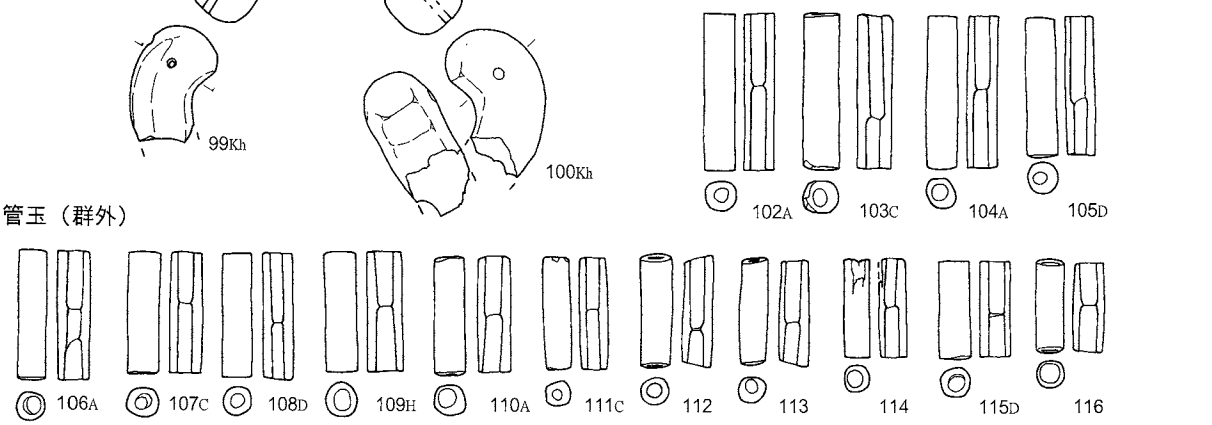


図68　玉類（２）

0　5cm
（1：1）

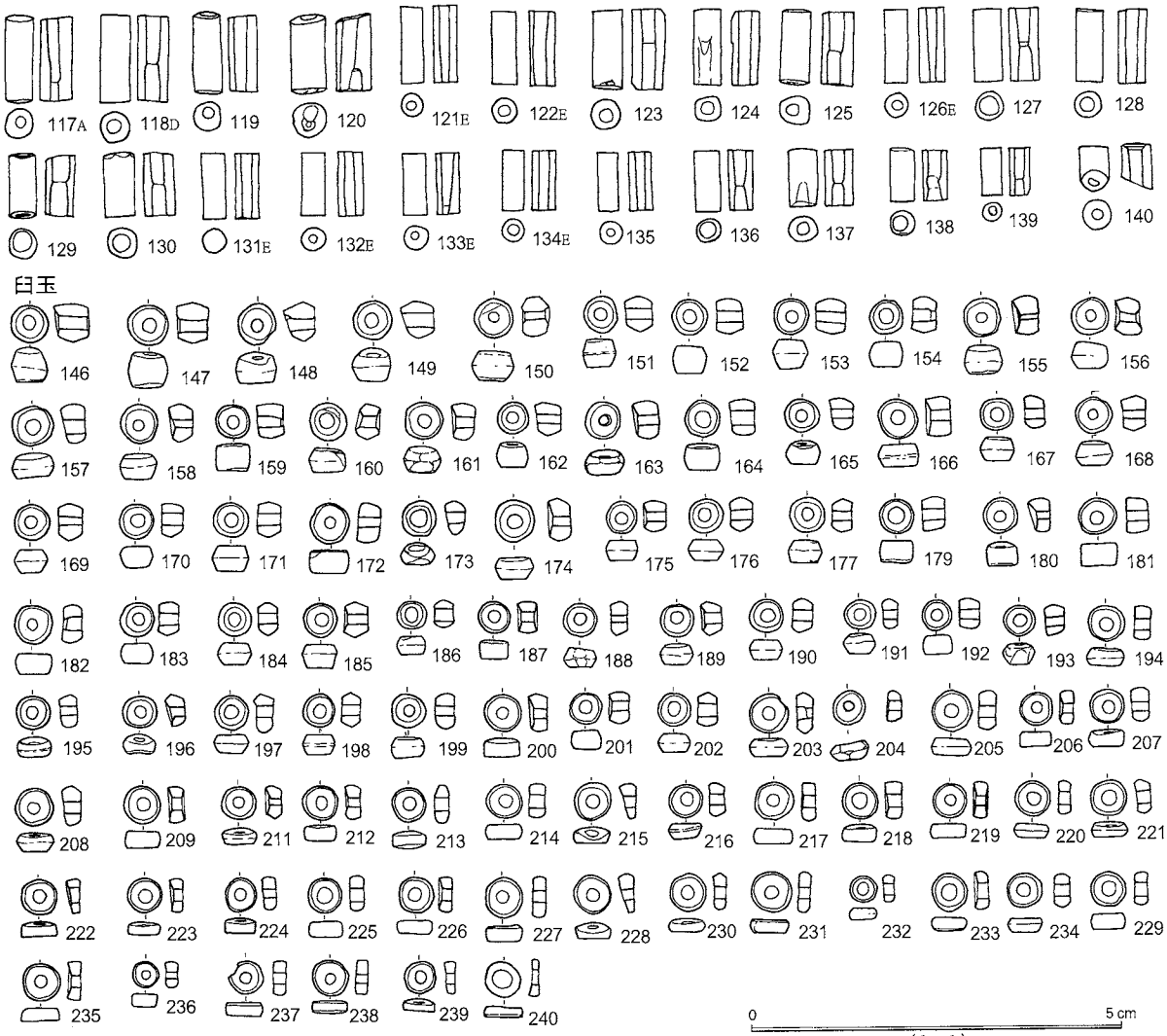


図69　玉類（3）

表7　玉類計測表（1）

図	群	報告番号	遺物番号	遺物種別	材質	長さ(高さ)	径(最大)	重量	遺存状況
67	A	1	1162	勾玉	硬玉(*)	23.1	9.6	5.8	完存
	A	2	1146	管玉	碧玉	22.3	4.3	0.6	完存
	A	3	1147	管玉	石材C	16.8	4.4	0.5	完存
	A	4	1161	管玉	碧玉	16.3	4.0	0.5	完存
	A	5	1158	管玉	碧玉	14.9	4.8	0.5	完存
	A	6	1148	管玉	碧玉	13.4	4.1	0.3	完存
	A	7	1151	管玉	碧玉	13.2	4.4	0.4	完存
	A	8	1152	管玉	碧玉	12.6	3.9	0.3	完存
	A	9	1160	管玉	碧玉	12.0	4.5	0.4	完存
	A	10	1157	管玉	碧玉	11.2	4.0	0.2	完存
	A	11	1153	管玉	碧玉	11.0	3.8	0.3	完存
	A	12	1155	管玉	碧玉	10.0	3.8	0.3	完存
	A	13	1159	管玉	碧玉	9.7	3.5	0.2	完存
	A	14	1156	管玉	碧玉	9.1	4.0	0.2	完存
	A	15	1150	管玉	碧玉	8.8	3.8	0.2	完存
	A	16	1154	管玉	碧玉	8.5	4.1	0.3	完存
	A	17	1149	管玉	碧玉	8.0	4.0	0.2	完存
	B	18	1111	勾玉	硬玉(*)	31.3	9.6	0.9	完存
	B	19	1142	管玉	碧玉	14.7	4.0	0.3	完存
	B	20	1119	管玉	碧玉	14.1	3.7	0.3	完存
	B	21	1121	管玉	碧玉	13.6	3.9	0.3	完存
	B	22	1141	管玉	碧玉	13.4	3.7	0.3	完存
	B	23	1127	管玉	碧玉	13.0	4.7	0.5	完存
	B	24	1118	管玉	碧玉	11.6	4.4	0.3	完存
	B	25	1116	管玉	碧玉	11.4	4.1	0.3	完存
	B	26	1117	管玉	碧玉	11.2	4.0	0.2	完存
	B	27	1122	管玉	碧玉	11.0	3.7	0.2	完存
	B	28	1114	管玉	碧玉	10.0	3.7	0.2	完存
	B	29	1144	管玉	碧玉	9.9	4.7	0.3	完存
	B	30	1120	管玉	碧玉	9.9	4.0	0.2	完存
	B	31	1125	管玉	碧玉	9.3	3.7	0.2	完存
	B	32	1130	管玉	碧玉	9.2	3.8	0.2	完存

図	群	報告番号	遺物番号	遺物種別	材質	長さ(高さ)	径(最大)	重量	遺存状況
67	B	33	1132	管玉	碧玉	8.9	3.5	0.2	完存
	B	34	1129	管玉	碧玉	8.8	3.7	0.2	完存
	B	35	1126	管玉	碧玉	8.8	3.6	0.2	完存
	B	36	1143	管玉	碧玉	8.7	3.6	0.2	完存
	B	37	1131	管玉	碧玉	8.4	3.7	0.2	完存
	B	38	1138	管玉	碧玉	8.3	3.7	0.2	完存
	B	39	1140	管玉	碧玉	8.3	3.9	0.2	完存
	B	40	1137	管玉	碧玉	8.2	3.8	0.2	完存
	B	41	1136	管玉	碧玉	8.0	3.8	0.1	完存
	B	42	1123	管玉	碧玉	8.0	4.0	0.2	完存
	B	43	1115	管玉	碧玉	7.9	3.6	0.1	完存
	B	45	1128	管玉	碧玉	7.5	3.7	0.2	完存
	B	44	1124	管玉	碧玉	7.5	3.7	0.1	完存
	B	46	1133	管玉	碧玉	7.2	3.7	0.1	完存
	B	47	1139	管玉	碧玉	6.9	3.8	0.1	完存
	B	48	1134	管玉	碧玉	6.8	3.5	0.1	完存
	B	49	1135	管玉	碧玉	5.5	3.7	0.1	完存
	C	50	1087	管玉	石材A	21.1	4.2	0.3	完存
	C	51	1094	管玉	石材D	19.3	4.2	0.2	完存
	C	52	1165	管玉	石材D	16.7	4.2	0.2	完存
	C	53	1092	管玉	石材D	16.0	4.2	0.2	完存
	C	54	1095	管玉	石材D	15.8	4.3	0.2	完存
	C	55	1088	管玉	石材D	14.4	4.2	0.2	完存
	C	56	1093	管玉	石材D	14.3	4.4	0.2	完存
	C	57	1086	管玉	碧玉	14.0	4.5	0.4	完存
	C	58	1090	管玉	碧玉	10.5	3.1	0.1	完存
	C	59	1089	管玉	碧玉	10.1	3.5	0.2	完存
	C	60	1091	管玉	碧玉	8.8	3.4	0.1	完存
	D	61	1053	管玉	石材A	16.3	6.2	0.7	部分欠
	D	62	1100	管玉	石材A	12.7	4.6	0.4	完存
	D	63	1098	管玉	碧玉	10.3	4.5	0.3	完存
	D	64	1097	管玉	碧玉	9.2	4.4	0.2	完存

単位cm(径は勾玉では厚さ)

表８　玉類計測表（２）

図	群	報告番号	遺物番号	遺物種別	材質	長さ(高さ)	径(最大)	重量	遺存状況
67	D	65	1083	管玉	碧玉	5.5	3.1	0.1	完存
68		66	1065	丸玉	ガラス	10.2	11.1	1.7	完存
		67	1082	勾玉	硬玉(*)	28.9	9.4	7.4	完存
		68	1108	勾玉	蛇紋岩	25.8	7.3	3.2	完存
		69	1109	勾玉	蛇紋岩	25.3	7.6	3.0	完存
		70	1046	勾玉	蛇紋岩	21.8	6.5	2.1	完存
		71	1191	勾玉	蛇紋岩	20.3	4.9	1.3	完存
		72	1051	勾玉	蛇紋岩	19.4	4.6	1.0	完存
		73	1048	勾玉	蛇紋岩	19.3	5.8	1.3	完存
		74	1049	勾玉	蛇紋岩	19.2	4.2	0.9	完存
		75	1085	勾玉	蛇紋岩	17.7	4.6	1.1	完存
		76	1195	勾玉	蛇紋岩	17.5	4.9	1.1	完存
		77	1102	勾玉	蛇紋岩	17.5	4.2	0.7	完存
		78	1060	勾玉	蛇紋岩	17.5	4.6	0.8	部分欠
		79	1360	勾玉	蛇紋岩	17.5	4.1	0.9	完存
		80	1104	勾玉	蛇紋岩	17.2	4.5	0.8	完存
		81	1313	勾玉	蛇紋岩	17.0	4.1	0.9	完存
		82	1343	勾玉	蛇紋岩	16.7	3.9	0.8	完存
		83	1074	勾玉	滑石	16.6	5.6	1.2	完存
		84	1310	勾玉	滑石	16.4	4.7	1.1	完存
		85	1173	勾玉	蛇紋岩	16.0	4.2	0.6	完存
		86	1314	勾玉	滑石	15.8	3.6	0.6	完存
		87	1371	勾玉	滑石	15.6	4.3	0.9	完存
		88	1056	勾玉	滑石	15.4	3.4	0.5	完存
		89	1105	勾玉	滑石	15.4	4.0	0.8	完存
		90	597	勾玉	滑石	15.3	4.6	0.9	完存
		91	1055	勾玉	蛇紋岩	15.2	4.7	0.8	完存
		92	1058	勾玉	滑石	15.2	3.4	0.5	完存
		93	1084	勾玉	蛇紋岩	15.1	4.0	0.6	完存
		94	1112	勾玉	蛇紋岩	14.8		0.5	完存
		95	1099	勾玉	蛇紋岩	14.4	3.6	0.6	完存
		96	1174	勾玉	蛇紋岩	14.4	3.6	0.5	完存
		97	1110	勾玉	滑石	14.1	3.7	0.5	完存
		98	1052	勾玉	蛇紋岩	13.7	3.7	0.5	完存
		99	606	勾玉	琥珀			0.8	部分欠
		100	1068	勾玉	琥珀			1.3	小破片
		101	1073	管玉	石材A	24.3	5.4	0.5	部分欠
		102	1064	管玉	石材A	21.3	4.4	0.3	完存
		103	1169	管玉	石材C	21.2	4.9	0.8	完存
		104	1054	管玉	石材A	20.8	4.3	0.3	部分欠
		105	1078	管玉	石材D	19.2	4.1	0.2	完存
		106	1059	管玉	石材A	17.3	4.2	0.2	部分欠
		107	1066	管玉	石材C	16.4	4.6	0.4	完存
		108	1175	管玉	石材D	16.4	4.3	0.3	完存
		109	1192	管玉	碧玉	16.2	4.8	0.5	完存
		110	1050	管玉	石材A	15.9	4.5	0.3	完存
		111	1071	管玉	石材C	15.3	3.8	0.4	完存
		112	1193	管玉	碧玉	14.8	4.2	0.3	完存
		113	1063	管玉	碧玉	14.4	4.3	0.4	完存
		114	1164	管玉	碧玉	13.3	4.0	0.3	完存
		115	1176	管玉	石材D	13.1	4.2	0.2	完存
		116	582	管玉	碧玉	12.3	4.4	0.3	
69		117	1177	管玉	石材A	12.0	4.4	0.3	完存
		118	1070	管玉	石材D	11.9	4.2	0.2	完存
		119	604	管玉	碧玉	11.2	3.9	0.3	完存
		120	1072	管玉	碧玉	10.7	4.9	0.4	完存
		121	1196	管玉	石材E	10.6	3.2	0.1	完存
		122	1080	管玉	石材E	10.4	3.4	0.1	完存
		123	1113	管玉	碧玉	10.4	4.2	0.3	完存
		124	581	管玉	碧玉	10.4	3.9	0.2	
		125	1361	管玉	碧玉	10.3	4.2	0.3	完存
		126	1047	管玉	石材E	10.2	3.3	0.2	完存
		127	1194	管玉	碧玉	10.1	4.2	0.2	完存
		128	1145	管玉	碧玉	10.0	3.8	0.2	完存
		129	1061	管玉	碧玉	9.1	4.2	0.2	完存
		130	1307	管玉	碧玉	9.0	4.3	0.3	完存
		131	1363	管玉	石材E	8.8	3.4	0.2	完存
		132	1067	管玉	石材E	8.7	3.5	0.2	完存
		133	1069	管玉	石材E	8.6	3.5	0.2	完存
		134	1344	管玉	石材E	8.4	3.3	0.1	完存
		135	1057	管玉	碧玉	8.3	3.2	0.1	完存
		136	1308	管玉	碧玉	8.3	3.4	0.1	完存
		137	1311	管玉	碧玉	8.1	3.7	0.2	完存
		138	1335	管玉	碧玉	7.4	3.5	0.1	完存
		139	1170	管玉	碧玉	6.5	3.0	0.1	完存
		140	1062	管玉	碧玉	6.3	4.1	0.2	完存
		141	1365	管玉	石材A	3.6	4.3	0.1	小破片
		142	1106	管玉	石材A		5.0	0.2	部分欠
		143	599	管玉	石材B			0.1	小破片
		144	585	管玉	石材A			0.9	小破片
		145	1077	管玉	石材A			0.1	細片
		146	1355	白玉	滑石	4.4	5.2	0.1	完存
		147	1197	白玉	滑石	4.3	5.5	0.1	完存
		148	1347	白玉	滑石	4.3	5.6	0.2	完存
		149	1166	白玉	滑石	4.2	5.4	0.1	完存
		150	1107	白玉	滑石	4.0	5.2	0.2	完存
		151	590	白玉	滑石	4.0	4.8	0.2	完存
		152	1179	白玉	滑石	3.8	4.9	0.1	完存
		153	1324	白玉	滑石	3.7	5.0	0.1	完存

図	群	報告番号	遺物番号	遺物種別	材質	長さ(高さ)	径(最大)	重量	遺存状況
69		154	1198	白玉	滑石	3.6	4.8	0.1	完存
		155	1076	白玉	滑石	3.6	5.3	0.2	完存
		156	1323	白玉	滑石	3.6	5.2	0.1	完存
		157	1358	白玉	滑石	3.5	5.5	0.1	完存
		158	1373	白玉	滑石	3.5	5.1	0.1	完存
		159	1336	白玉	滑石	3.5	4.8	0.1	完存
		160	1178	白玉	滑石	3.5	5.2	0.1	完存
		161	593	白玉	滑石	3.4	5.3	0.1	完存
		162	1349	白玉	滑石	3.4	4.3	0.1	完存
		163	1096	白玉	滑石	3.3	5.1	0.1	完存
		164	1171	白玉	滑石	3.3	4.8	0.1	完存
		165	1301	白玉	滑石	3.2	4.8	0.1	完存
		166	1356	白玉	滑石	3.2	5.4	0.1	完存
		167	1168	白玉	滑石	3.2	4.5	0.1	完存
		168	1317	白玉	滑石	3.2	5.0	0.2	完存
		169	1374	白玉	滑石	3.1	4.8	0.1	完存
		170	1327	白玉	滑石	3.1	4.8	0.1	完存
		171	1315	白玉	滑石	3.1	4.8	0.1	完存
		172	1321	白玉	滑石	3.1	5.6	0.1	完存
		173	1302	白玉	滑石	3.0	4.7	0.1	完存
		174	1079	白玉	滑石	3.0	5.5	0.1	完存
		175	1352	白玉	滑石	3.0	4.7	0.1	完存
		176	1350	白玉	滑石	3.0	4.5	0.1	完存
		177	1326	白玉	滑石	3.0	4.7	0.1	完存
		178	1370	白玉	滑石	3.0	4.5	0.1	小破片
		179	1199	白玉	滑石	2.9	4.8	0.1	完存
		180	1081	白玉	滑石	2.9	5.0	0.1	完存
		181	1325	白玉	滑石	2.9	4.9	0.1	完存
		182	1200	白玉	滑石	2.8	5.4	0.1	完存
		183	1348	白玉	滑石	2.8	4.9	0.1	完存
		184	1359	白玉	滑石	2.8	4.6	0.1	完存
		185	1316	白玉	滑石	2.8	4.9	0.1	完存
		186	1320	白玉	滑石	2.8	4.2	0.1	完存
		187	1181	白玉	滑石	2.8	4.5	0.1	完存
		188	1375	白玉	滑石	2.7	4.7	0.1	完存
		189	1353	白玉	滑石	2.7	4.4	0.1	完存
		190	1328	白玉	滑石	2.7	4.5	0.1	完存
		191	1366	白玉	滑石	2.7	4.4	0.1	完存
		192	1341	白玉	滑石	2.7	4.3	0.1	完存
		193	1342	白玉	滑石	2.7	4.4	0.1	完存
		194	1362	白玉	滑石	2.7	4.9	0.1	完存
		195	1180	白玉	滑石	2.7	4.5	0.1	完存
		196	1304	白玉	滑石	2.6	4.6	0.1	完存
		197	1357	白玉	滑石	2.5	4.6	0.1	完存
		198	1333	白玉	滑石	2.5	4.7	0.1	完存
		199	1367	白玉	滑石	2.5	4.9	0.1	完存
		200	1309	白玉	滑石	2.5	5.1	0.1	完存
		201	1167	白玉	滑石	2.4	4.5	0.1	完存
		202	1346	白玉	滑石	2.4	4.6	0.1	完存
		203	1318	白玉	滑石	2.4	5.4	0.1	完存
		204	1103	白玉	滑石	2.3	4.8	0.1	完存
		205	1322	白玉	滑石	2.3	5.3	0.1	完存
		206	1354	白玉	滑石	2.2	4.3	0.1	完存
		207	1330	白玉	滑石	2.2	4.5	0.1	完存
		208	1368	白玉	滑石	2.2	5.1	0.1	完存
		209	1339	白玉	滑石	2.2	4.9	0.1	完存
		210	1185	白玉	滑石	2.1	5.4	0.1	部分欠
		211	1372	白玉	滑石	2.1	4.5	0.1	完存
		212	1331	白玉	滑石	2.1	4.6	0.1	完存
		213	1338	白玉	滑石	2.1	4.8	0.1	完存
		214	1337	白玉	滑石	2.1	5.0	0.1	完存
		215	1187	白玉	滑石	2.1	5.0	0.1	完存
		216	1189	白玉	滑石	2.1	4.7	0.1	完存
		217	1183	白玉	滑石	2.1	5.4	0.1	完存
		218	1351	白玉	滑石	2.0	4.8	0.1	完存
		219	1329	白玉	滑石	2.0	4.7	0.1	完存
		220	1319	白玉	滑石	2.0	5.0	0.1	完存
		221	1188	白玉	滑石	2.0	4.8	0.1	完存
		222	1305	白玉	滑石	1.9	4.9	0.1	完存
		223	1306	白玉	滑石	1.9	4.5	0.1	完存
		224	1332	白玉	滑石	1.9	4.5	0.1	完存
		225	1340	白玉	滑石	1.9	4.8	0.1	完存
		226	1345	白玉	滑石	1.9	4.6	0.1	完存
		227	1312	白玉	滑石	1.9	5.3	0.1	完存
		228	1186	白玉	滑石	1.9	4.9	0.1	完存
		229	1182	白玉	滑石	1.9	4.8	0.1	完存
		230	583	白玉	滑石	1.8	5.4	0.1	完存
		231	1184	白玉	滑石	1.8	5.4	0.1	完存
		232	1190	白玉	滑石	1.8	3.8	0.1	完存
		233	1303	白玉	滑石	1.7	4.9	0.1	完存
		234	1075	白玉	滑石	1.7	4.9	0.1	完存
		235	598	白玉	滑石	1.7	4.9	0.1	完存
		236	1334	白玉	滑石	1.7	3.7	0.1	完存
		237	1369	白玉	滑石	1.7	4.5	0.1	完存
		238	1172	白玉	滑石	1.7	4.9	0.1	完存
		239	1364	白玉	滑石	1.5	4.4	0.1	完存
		240	1101	白玉	滑石	1.4	4.9	0.1	完存

単位cm(径は勾玉では厚さ)

3）銅釧（図70、図版53）

1　銅釧は2点1号棺から出土しているが、うち1点（2）は錆化がいちじるしく細片となっており、図化しなかった。ただし、断面などをみるかぎり1と同タイプとなるようである。1は、ほぼ円形で直径は約7.2cmである。釧の幅は4㎜前後である。断面形はやや内傾ぎみにたちあがる形状で、丸味はあるものの3つの面をもつようである。内傾ぎみにたちあがる断面形態は石釧などの釧と同じであるともいえる。なお、図の左側は湯口であったためか、他の箇所とは異なる断面形となり、平滑な面が存在する。（加藤　一郎）

4）竪櫛（図70、図版53）

3　1号棺から出土した。有機質部分は腐朽し、塗布された漆のみが残存している状態である。歯は欠失している。櫛歯の材料を中央部で束ねてU字に折曲げたのち、その屈曲部に近い部分を帯状の樹皮で縛っていたようである。また、歯を固定したものとも考えられる瘤状のものが1箇所で確認できる。ムネの長さは現状で3.0cmである。（加藤　一郎）

5）鉄器

1号棺棺内（図70、図版53）

鉄剣（4）　全長は54.9cmで、刃部長43.7cm、茎部長11.2cm、関付近での身幅は3.7cmである。関の形状は直角で、刃部に鎬はみとめられない。茎部には目釘孔が2つ存在する。鞘および把の木質が一部で残存するが、鞘口部では幅8㎜ほどの空白が存在する。鞘自体は木材によるものであったようであるが、鞘口に関しては木材ではない別の有機質がもちいられていたようである。

刀子（5）　現存長3.6cmで、茎部長は1.4cmの非常に小型の刀子である。関は斜めに落ち、背は刃部から茎部まで一直線をなす。茎部には木質が残存する。

1号棺副室内（図71・72、図版53～55）

鉄刀（7～10）

7は全長40.0cmで、刃部長33.6cm、茎部長6.4cm、関付近での身幅は2.4cmである。関はナデ関で、茎部には目釘孔が1つ確認できる。茎尻は一直線であるが、茎は若干斜めに屈曲している。刃部には鞘の

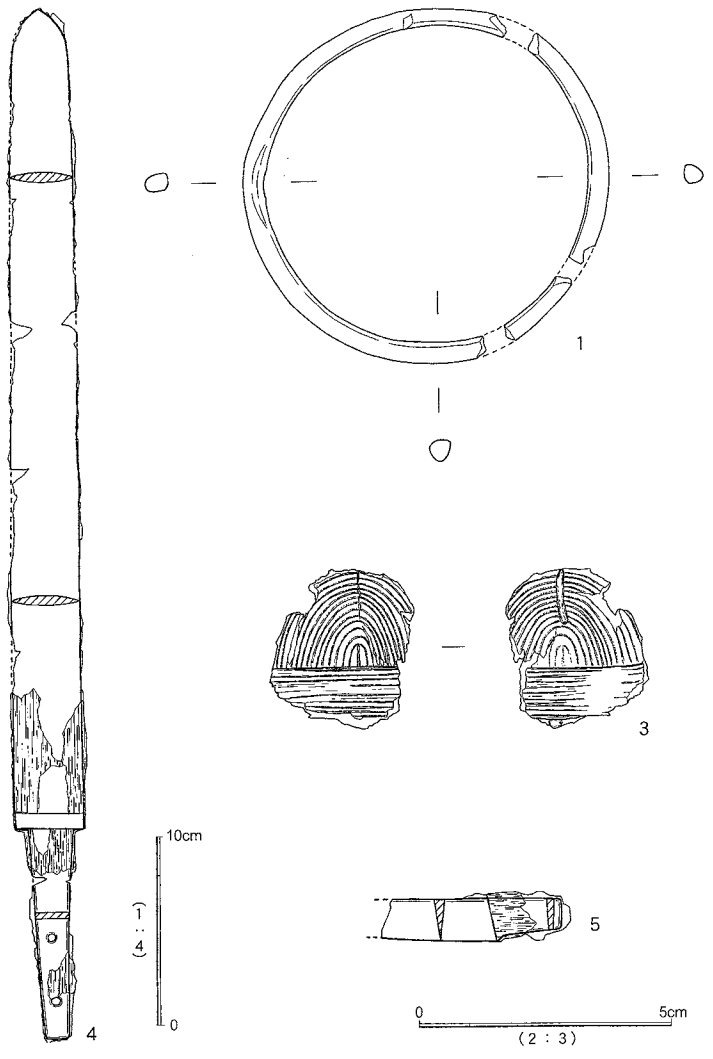


図70　1号棺棺内出土鉄剣・銅釧・竪櫛・刀子

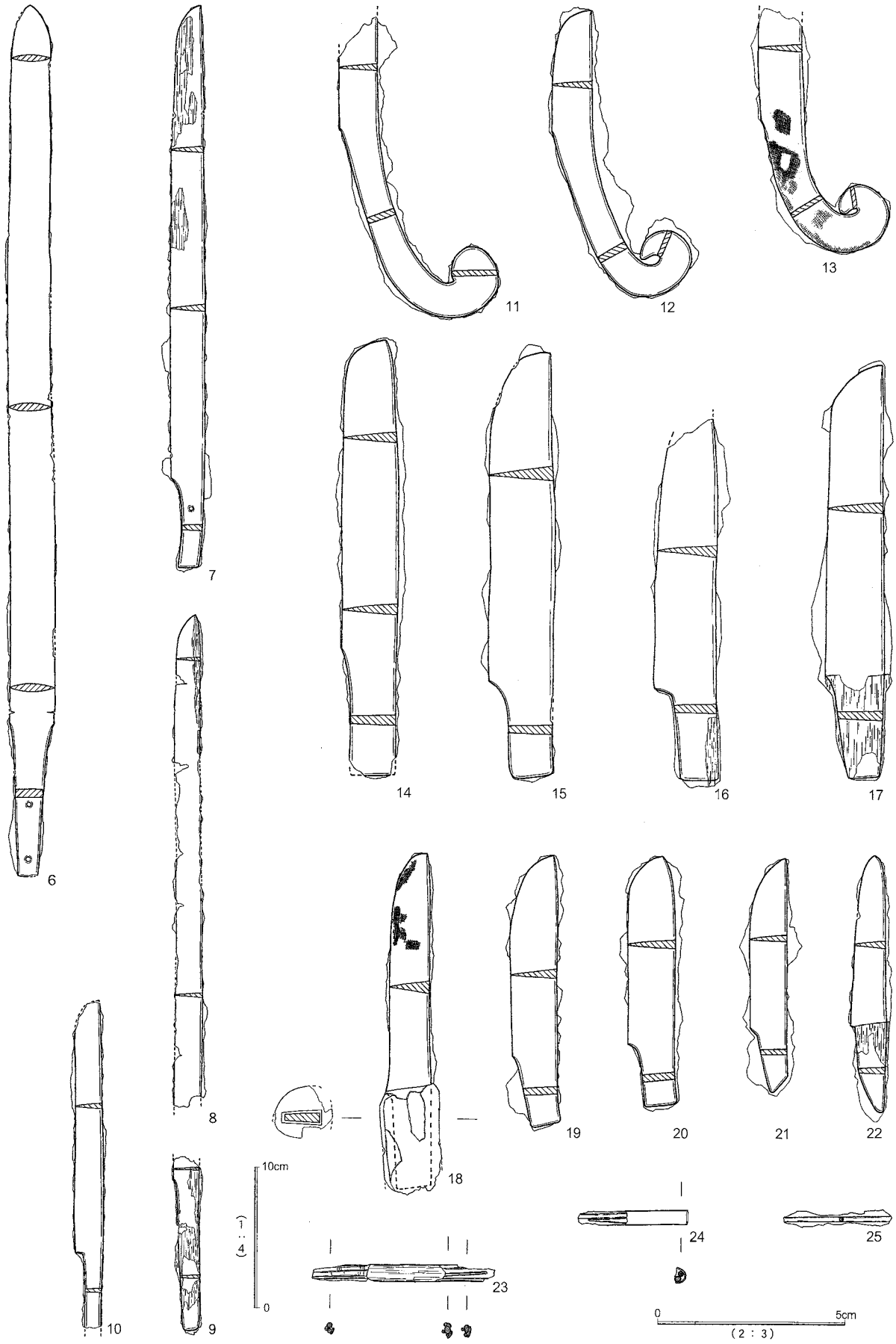


図71　１号棺副室出土鉄製品（1）

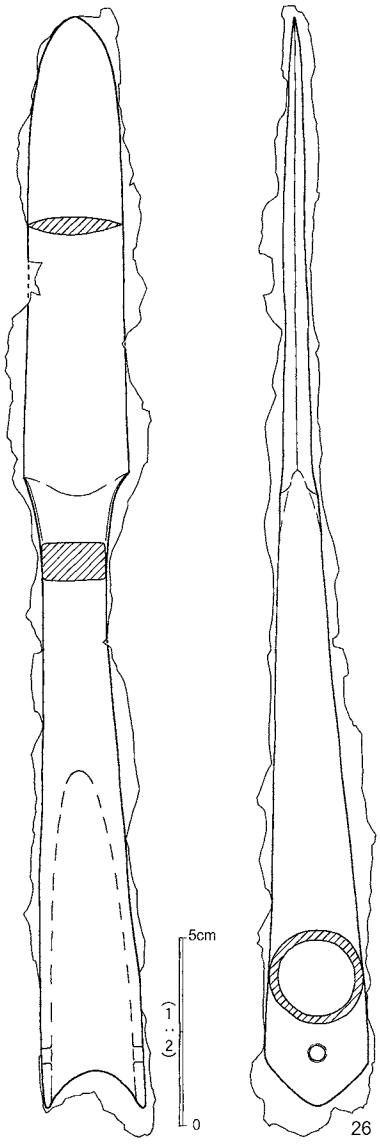


図72　1号棺副室出土鉄製品（2）

一部と思われる木質が残存している。8は残存長35.0cmで、刃部の一部である。身幅は2.0cmで、背幅は3㎜と薄いつくりになっており、木質が残存している。9は残存長12.4cmで、刃部から茎部にかけての破片である。関はナデ関で、茎尻は丸味をもっており、目釘孔はみとめられない。木質が一部に付着している。関付近での身幅は1.9cmで、背幅は3㎜と薄いつくりであり、8と同一個体である可能性がある。10は残存長23.2cmで、刃部は切先を欠損しているものの、ほぼ残存しているようである。関は直角で、関付近での身幅は2.0cmである。目釘孔はみとめられない。

鉄剣（6）　全長は61.9cmで、刃部長51.0cm、茎部長10.9cm、関付近での身幅は3.1cmである。関はナデ関で、刃部に鎬はみとめられない。茎部には目釘孔が2つ存在する。木質は茎部の一部に残存するが、遺存状況は悪い。

鉄鉾（26）　全長は29.0cmで、刃部長12.3cm、袋部長9.0cmである。刃部と袋部の間には7.7cmほどの茎部ともいえる部分が存在する。その間の断面形は長方形である。刃部の関付近での身幅は2.8cmで、鎬はみとめられない。関はナデ関である。袋部の断面は円形で、目釘孔が対面する2箇所に存在する。目釘については現状で確認できない。また、袋端部には山形の抉りがある。

蕨手刀子（11～13）　11は残存長8.0cmで、茎部長5.0cmである。関はナデ関である。茎尻の形状は12、13と異なり、巻込まずに半円形となっている。12は全長7.6cmで、刃部長3.2cm、茎部長4.4cmである。関はナデ関である。茎尻は巻込んでおり、先端になるほど細くなっていて、鍛打しながら巻込むためか断面も薄くなっているようである。13は残存長6.9cmで、茎部長3.8cmである。関はナデ関で、茎部を中心に布が付着している。付着した布には粗密の2種があるようである。11、12については木質などの有機質は残存していない。

刀子（14～22）　刀子には全長8cm弱の大きめの一群（14～17）と5cm弱の小さめの一群（19～22）が存在するようである。それ以外に、全長6cmほどの鹿角製の装具をもつもの（18）が存在する。大きめの一群の関はナデ関のもの（14、15、17）と直角に近い斜めに落ちるもの（16）とが存在する。茎尻の形状はすべて直線をなしている。小さめの一群の関はナデ関のもの（19、20）と斜めに落ちるもの（21、22）とが存在する。茎尻の形状は斜めになるものなど、バラエティーに富む。18は茎部に鹿角製の装具をもつ。刃部は関にむかって身幅を増やし、緩やかに湾曲している。また、刃部には布が付着している。付着した布には粗密の2種があるようである。関は斜めに落ちている。鹿角製の装具と茎部との中間には、木質が確認できるので、木質の装具の上に鹿角製の装具が装着されたものと推測される。

鉄針（23～25）　23は残存長4.8cmで、針は4本確認でき、木製の容器に収められていたようである。木の材質については、表面が薄い膜状となり、硬質で光沢があり、繊維が一直線に走ることから、竹や笹などが該当する可能性がある。容器の直径は5㎜ほどである。同一箇所の断面における針の太さには2～0.5㎜とばらつきがみとめられるが、針の形状に差異があるのか、容器内での位置が偶然異な

ったのかは不明である。なお、針には長軸方向に直交して繊維にも錆にもみえる痕跡がある。複数の針を束ねていた可能性も想定できる。24は残存長2.9cmで、針は２本確認できる。23と同様、木製の容器に収められていたようである。容器の直径は４mmほどで、針の太さは1.5mmほどである。25は残存長2.8cmで、針は１本確認できる。遺存状況が悪く、容器に収められていたのかは不明である。23～25について針穴はみとめられなかった。

突起上（図73、図版53）

素環頭鉄刀（29）　全長80.0cmで、把部長18.2cm、素環頭部をのぞいた把部長14.2cm、素環頭部径5.5cm、刀身部長61.8cmである。刀装具などの有機質の遺存状況は悪いが、刀本体は一部を欠損する以外は完存する。切先はフクラ切先をなし、刀身は茎部をふくめて内反りがみとめられる。関の形状はナデ関で、目釘孔は存在しない。素環頭部はほぼ円形であるが、内側の茎部寄りの部分は直線になっている。素環頭部の茎部への接合方法はX線写真などをふくめて観察をおこなったが、決定的な結論をえるにはいたらなかった。可能性としては素環頭部を茎部に鍛接する方法と素環頭部を茎部で巻込む方法が考えられる。鞘、把の木質の遺存状況は非常に悪く、わずかに確認できるのみである。

２号棺棺外（図74、図版53～55）

素環頭鉄刀（32）

全長83.2cmで、把部長16.9cm、素環頭部をのぞいた把部長14.1cm、素環頭部長径5.1cm、刀身部長66.3cmである。刀装具などの有機質は比較的良好に残存し、刀本体もほぼ完存する。切先はフクラ切先をなし、刀身には内反りがみとめられる。関は腹側のみにみられるようであるが、その形状はX線写真などをふくめて観察したがあまり判然としない。あえて図化するならば図に示したような小さく斜めに落ちる形態となろう。なお、目釘孔が近接した位置に２つみられる。素環頭部の茎部への接合方法は、素環頭部を茎部の背側に鍛接したか、茎部から素環頭部を造出したかであろう。なお、X線写真により茎部腹側と素環頭部は接合せず、隙間のあることが判明した。

鉄刀（33）　全長88.9cmで、刀身部長72.8cm、茎部長16.1cmである。切先はフクラ切先をなし、刀身から茎部にかけて内反りがみとめられる。関はナデ関で、関付近での身幅は3.1cmである。茎部には直径７mmほどの比較的大きい目釘孔が１つ確認できた。茎尻は直線をなしている。

鉄斧（36）　鍛造による有肩鉄斧で、いわゆる硬肩になるタイプのものである。錆化がいちじるしく、X線写真による観察に多く

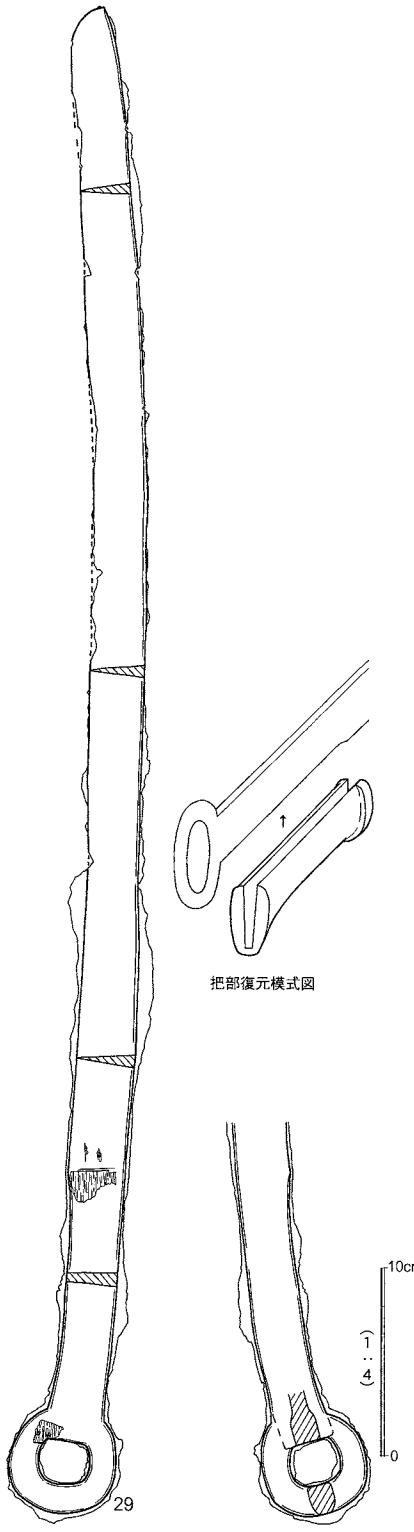


図73　１号棺上突起出土鉄製品

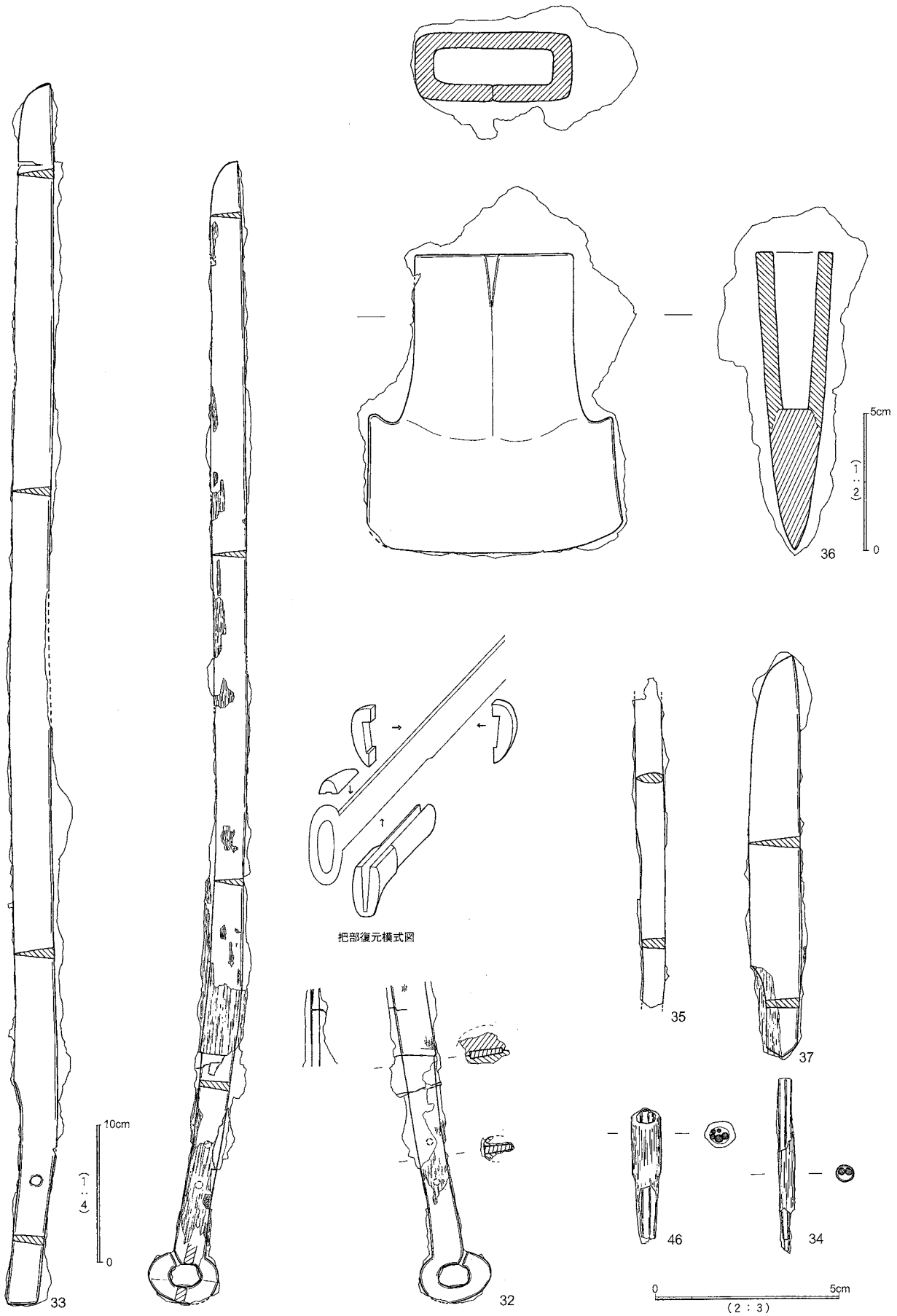


図74　２号棺棺外出土鉄製品

を頼っている点をことわっておきたい。全長は10.8cmで、刃部幅は9.3cmである。刃部と袋部は別造りで鍛接しており、X線写真で接合線が明瞭に観察できる。袋部折返しの基部側が若干開いている点が特徴的である。なお、木質などは残存していない。

刀子（37）　全長は10.9cmで、刃部長8.5cm、茎部長2.4cmである。関はナデ関で、関付近の身幅は1.4cmである。茎尻の形状は三角形となり、茎部には木質が付着している。

鉄針（46・34）46は残存長3.7cmで、針は５本確認でき、木製の容器が良好に残存している。木の材質については、表面が薄い膜状で、硬質で光沢があり、繊維が一直線に走ることから、竹や笹などが該当する可能性がある。容器の直径は８㎜ほどである。同一箇所の断面における針の太さには２～0.5㎜とばらつきがある。針穴はみとめられない。34は、残存長4.8cmで、針は２本確認でき、木製の容器に収められていたようである。容器の直径は４㎜ほどで、針の太さは1.5㎜ほどである。針穴はみとめられない。

不明鉄製品（35）　概報では鉈とされていたものである。現存長8.9cmで、図の上方においては刃部を造出しているようにもみえるが、不明瞭である。

３号棺棺内（図75、図版53・55）

鉄刀（39）　完全には接合しないが、復元すると57cm以上になるようである。切先はフクラ切先で、関はナデ関であり、関付近での身幅は1.7cmである。刀身には鞘の木質が良好に残存し、２枚の木材を貼合せていることが確認できる。

鉄鉾（41）　全長は22.2cmで、刃部長13.0cm、袋部長8.3cmである。刃部の関付近での身幅は1.8cmで、鎬はみとめられない。関はほとんど存在しない。袋部の断面は円形で、袋端部には山形の抉りがある。目釘孔はX線写真で観察したが１つしか確認できなかった。通常は２つあるはずなので、目釘が詰ま

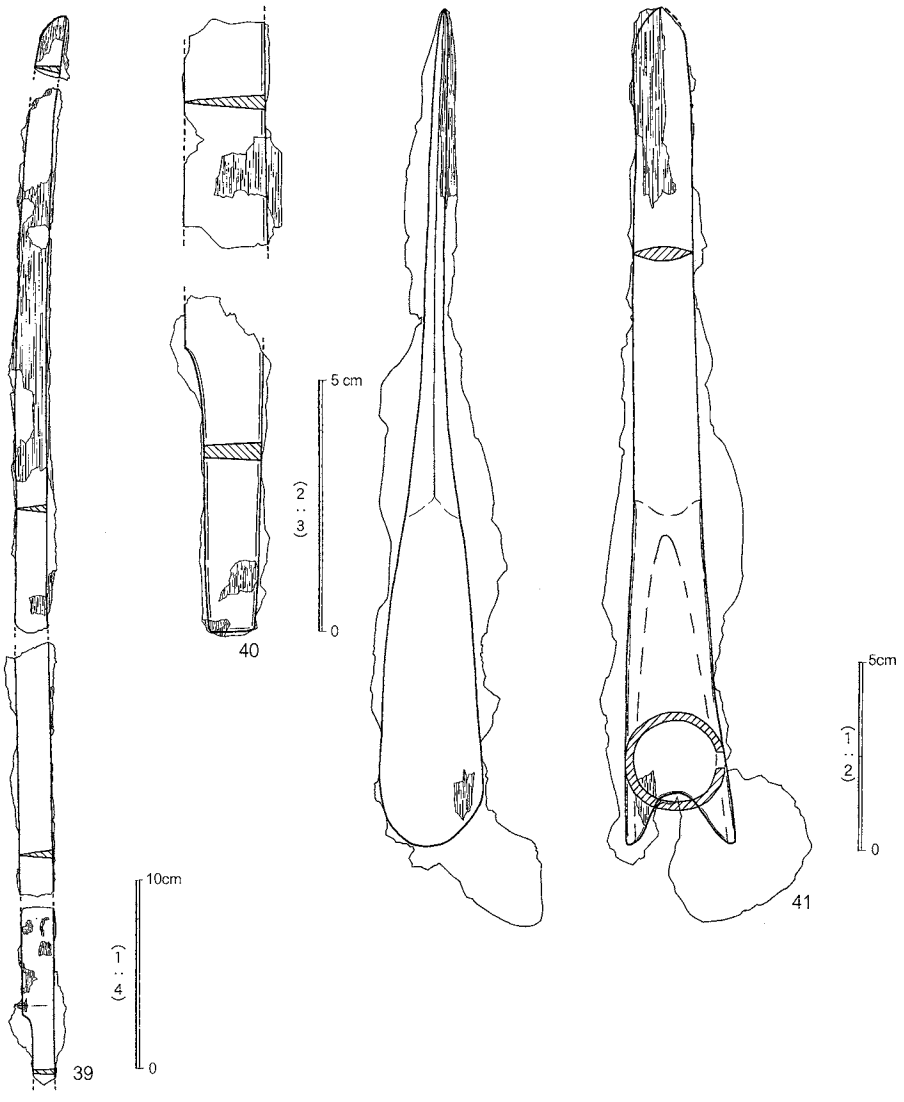


図75　３号棺棺内出土鉄製品

ったまま錆化しているだけの可能性も考えられる。なお、観察できる目釘孔は楕円形となっている。刃部から袋部にまで木質が残存しており、鞘などにおさめられていたものと考えられる。

刀子（40）　断片であり、全形をしることはできない。関はナデ関で、身幅は1.6cmである。刃部および茎部には木質が残存する。茎部長は5.6cmである。

３号棺棺外（図76、図版55）

鉄斧（42）　鍛造による無肩鉄斧である。全長は12.6cmで、刃部幅は5.4cmである。袋部と刃部は一体造りであり、袋部の断面からは成形の際に折曲げた箇所が複数観察できる。なお、木質などは残存していない。

鉄鎌（43）　全長は13.3cmで、身幅2.3～2.8cmの曲刃鎌である。刃は緩やかな弧を描き、先端部は丸味をおびている。刃部は薄いものの、刃を研ぎだしているようである。基部はわずかに折返す程度である。木質などの有機質は残存していない。

（加藤　一郎）

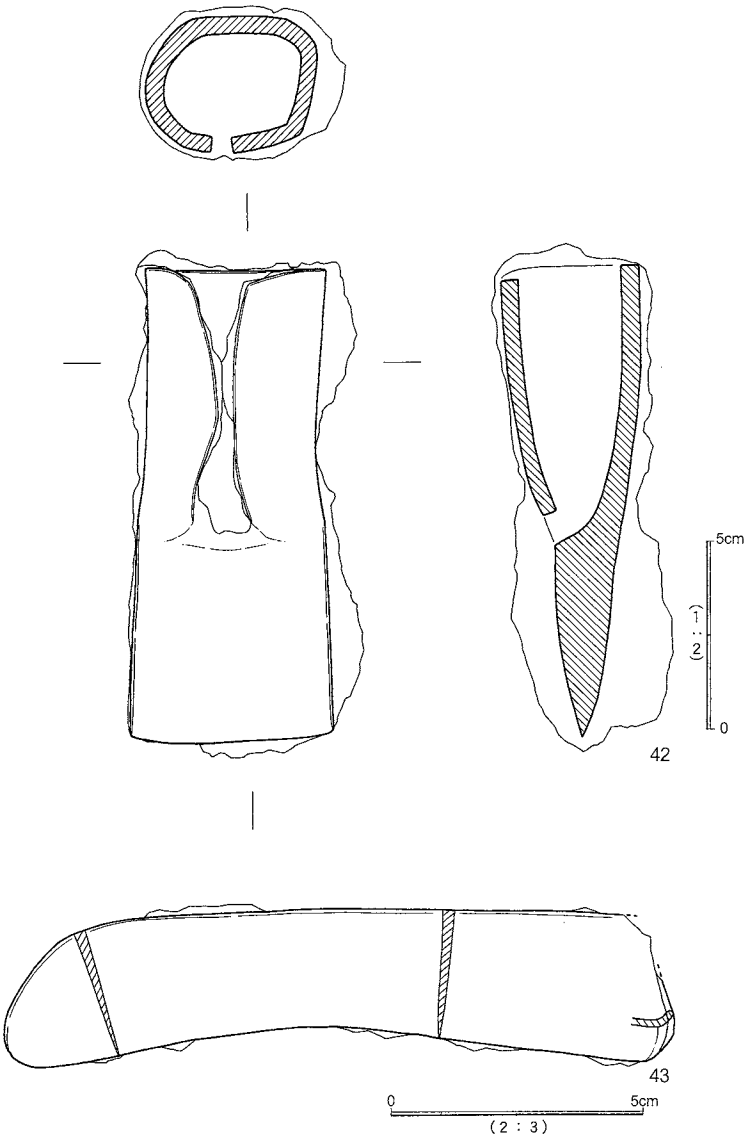


図76　３号棺棺外出土鉄製品

６）短甲44（図77～80　図版56）

短甲は３号棺と左側壁の間から潰れた状態で出土した。綴じ革の腐蝕や石室石材の崩落によって、出土当初は無数の破片になっており、その復元は困難を極めたが、何とか部材の特定に至った。

復元の結果、本墳で出土したのは短甲一領分で、冑などの付帯するセットは無い。短甲の型式は横長の鉄板を革紐で綴じ合わせる長方板革綴式で、前胴は竪上２段、長側４段の計６段、後胴は竪上３段、長側４段の計７段で構成される。これらは更に、部材そのものの観察や出土状況の他、類例との比較検討により、竪上板前胴上端が左右各１枚、後胴押付板１枚の計３枚、引合板は左右各１枚の計２枚、竪上２段目は前胴左右各１枚、後胴３枚で計５枚、長側１段目は、前から脇にかけて左右各３枚と、後胴３枚の計９枚、同３段は前胴左右各２枚、後胴３枚の計７枚、最下段の裾板は前後３分割で３枚、これらを押さえる竪上３段目の後胴帯金が１枚と、一部継ぎ足し用の小片を含む長側２段目の帯金４枚、合計34枚の部材に分けられるものと想定される（図80）。後胴竪上２段から長側１段目にかけて、特定できる部材が見つからない部分が見られるが、35－①～⑤のような部位の不明な地板や、図化不能な多くの細片が残されていることから、現時点で位置を特定できる確証は得られないが、これらが収まるものと推定される。全体の高さは、部材が一部、錆着している部分を除いて分離し、復元不能な部分もあるため、極めて不確かな数値であるが、図上で復元すると前胴中央（端部）で約34cm、後胴中央で約46cm、脇が約23cmを計る。

各板の連結は、上下方向では押付板、裾板、帯金の下に地板が重ねられ、横方向では残存部材で見る限り前胴部材が後胴部材の上に重ねられているようである。従って後胴中央地板が最も下に綴じ合わされていることになる。また革紐は地板裏面にて鋸歯状に進行する様に綴じられている。各部材の重なり代は概ね0.7～0.8cm、各綴じの間隔は狭い部分で２cm、広い部分では3.7cmとばらつきが見られるが、平均すると2.9cm程となる。綴じ紐の幅は0.7～0.8cmである。

短甲の上下それぞれの端には、引合板を除いて革紐による覆輪が施されている。覆輪孔は１～1.1cmの間隔で設けられており、組み方は高橋工氏による分類（高橋1991）のⅡ技法である。紐幅は太いものが0.6～0.85cm、下の細いものが0.4cmを計る。

「わたがみ」や「腰緒」は、それを通す孔も含め目視できない。透過X線による孔の観察を試みたが、腐蝕が著しく確認できなかった。また１、３、４、７、12、21－①、32－①といった部材には布の錆化したものが付着している。これらは全て平織りの布で、1cmあたりの織り密度は縦35～50本、横20～25本と、見る限り同種類のものと考えられる。これらが懸緒の残欠とも想定されるが確証は無い。

その他各部材の大きさであるが、右前胴竪上１段は右上端の部分で高さ6.8cm、また後胴押付板は中央で高さ9.5cm、帯金は狭いもので3.8cm、広いものは4.5cm、裾板は高さとしては5.6～6.5cm、引合板の幅は左が3.2cm、右が3.3cmをそれぞれ計る。また地板については、紙幅の関係上、高さと幅の双方が計測できる方形のものを中心に一覧表にて以下に示す。　（比佐　陽一郎）

表９　短甲地板計測値

部材No.	縦min	縦max	横min	横max	部材No.	縦min	縦max	横min	横max
6	5.8	6.0	8.4	7.8+α	19	－	7.8	－	5.7+α
7	6.1	6.2	(8.1)	9.7	20	－	8.2	－	7.9
8	－	8.9	－	10.1+α	25	6.2	6.2	13.0	13.2
10	－	－	－	10.7	26	6.3	6.5	14.9	15.0
12	－	8.1	－	9.1+α	27	7.2	8.9	13.2	13.7
13	3.2	－	－	－	28	8.3	8.6	10.7	10.7
14	3.8	4.5+α	－	11.8	29	8.4-α	8.6+α	－	6.2+α
15	－	8.8	－	13.6	30	6.3	6.9	13.3	13.5
18	2.9	5.8+α	－	13.2	31	6.5-α	7.0+α	－	11.4+α

【参考文献】

高橋工　1991「甲冑製作技術に関する若干の新視点」『盾塚・鞍塚・珠金塚古墳』由良大和古代文化研究会

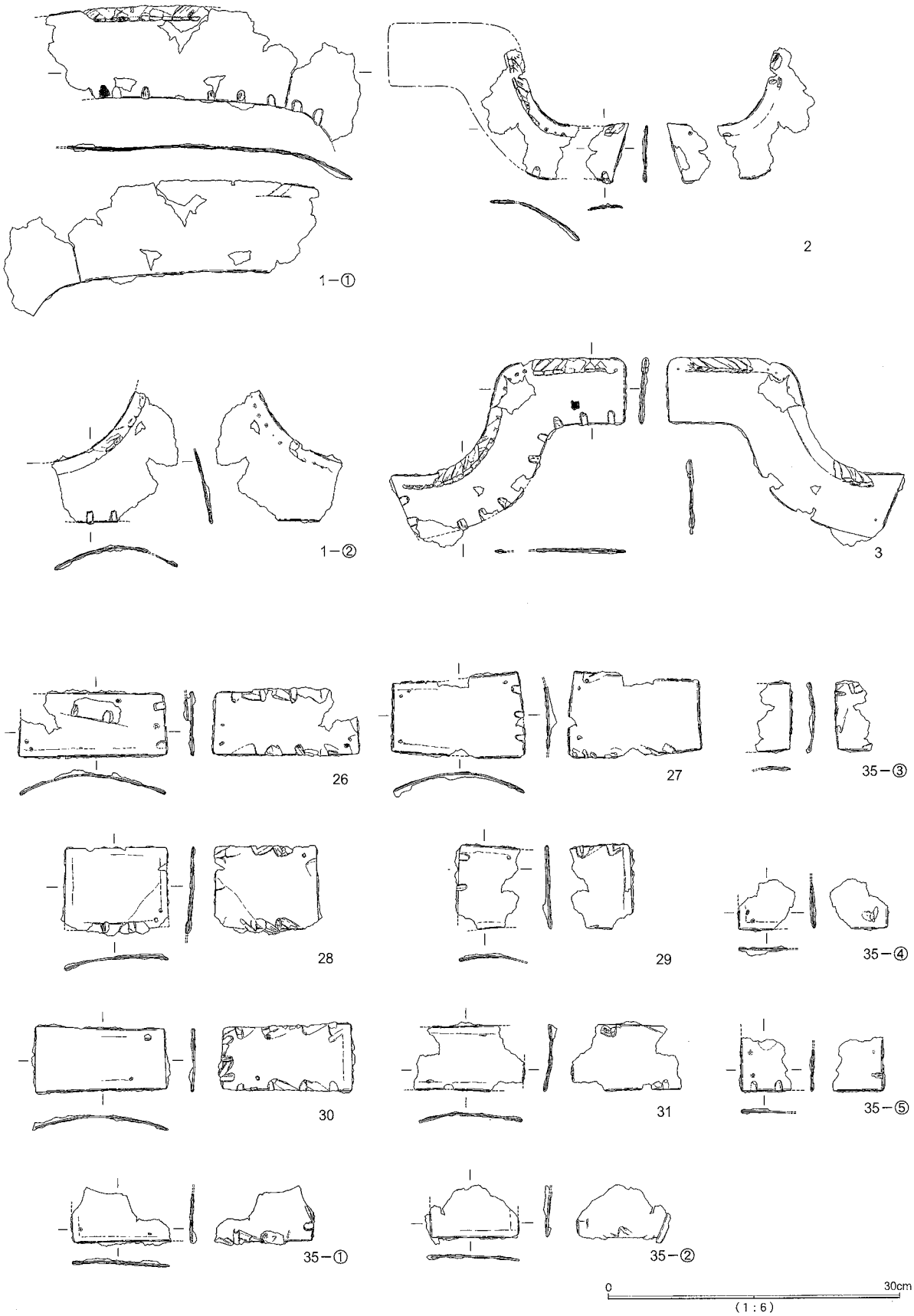
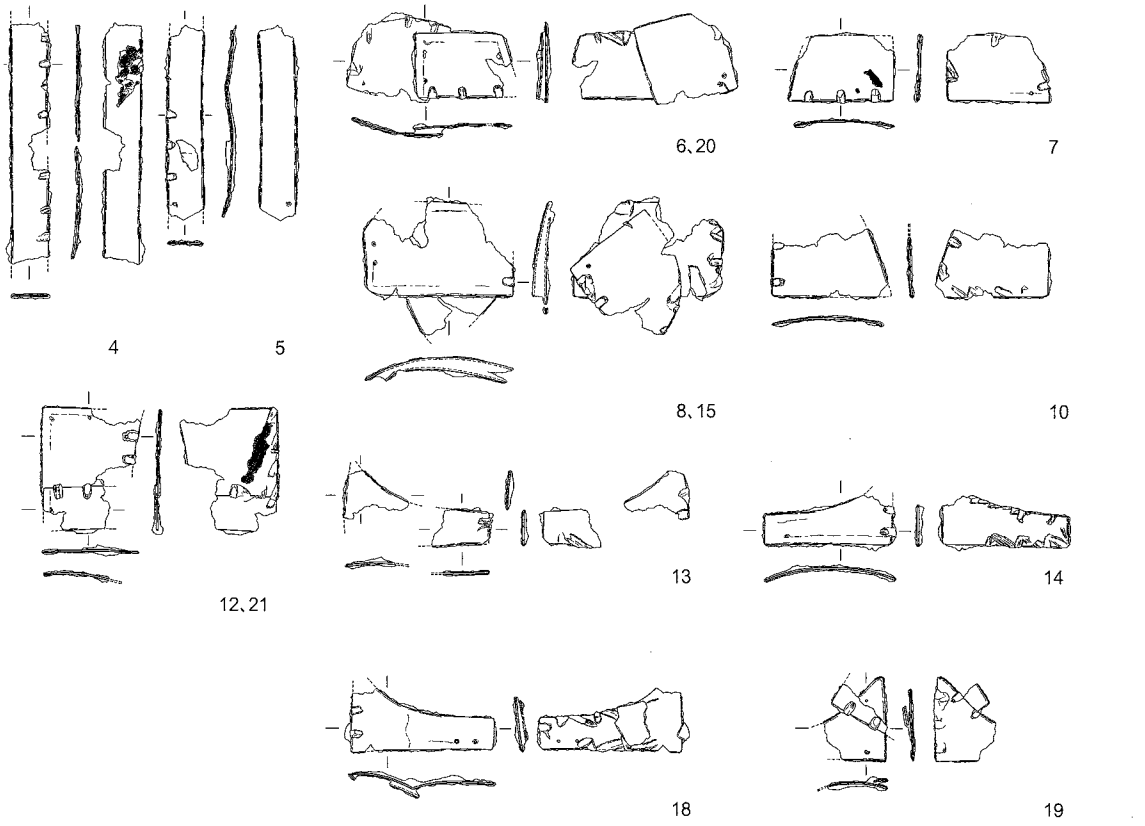


図77　短甲部材（1）


4
5
6、20
7
8、15
10
12、21
13
14
18
19

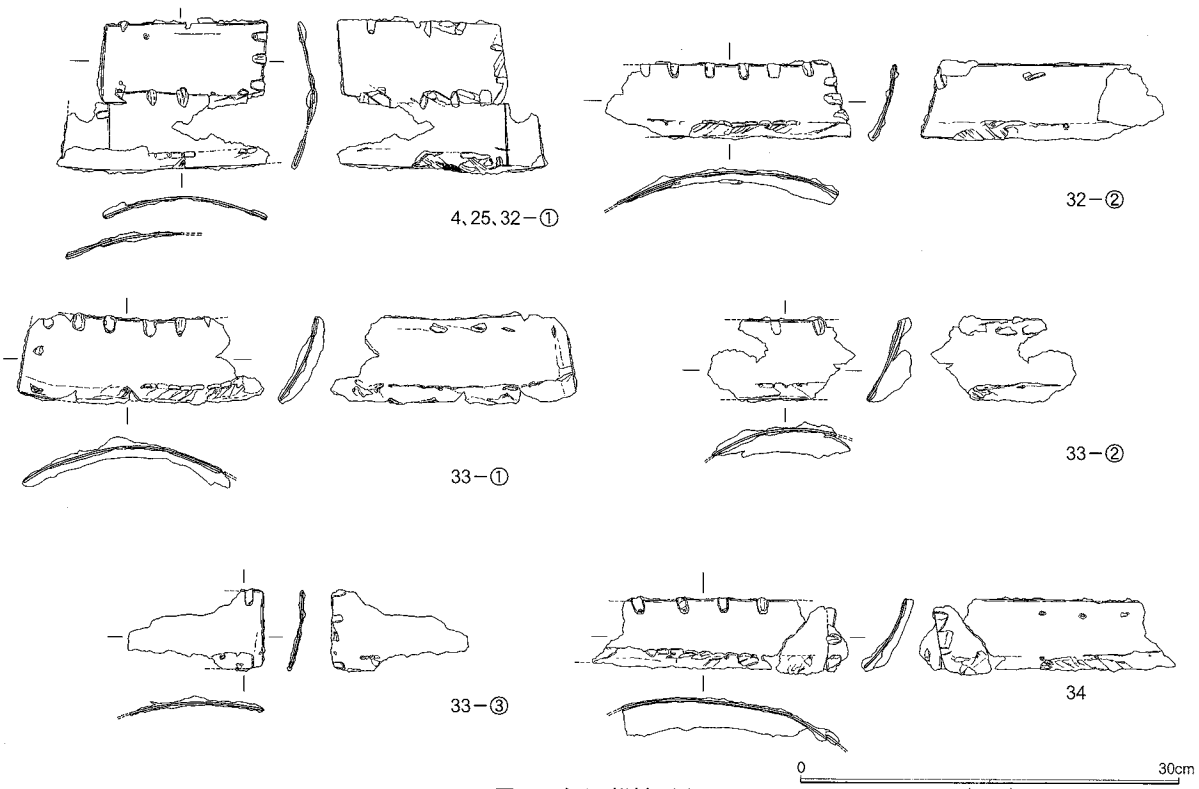

4、25、32－①
32－②
33－①
33－②
33－③
34
0
30cm
(1:6)

図78　短甲部材（2）

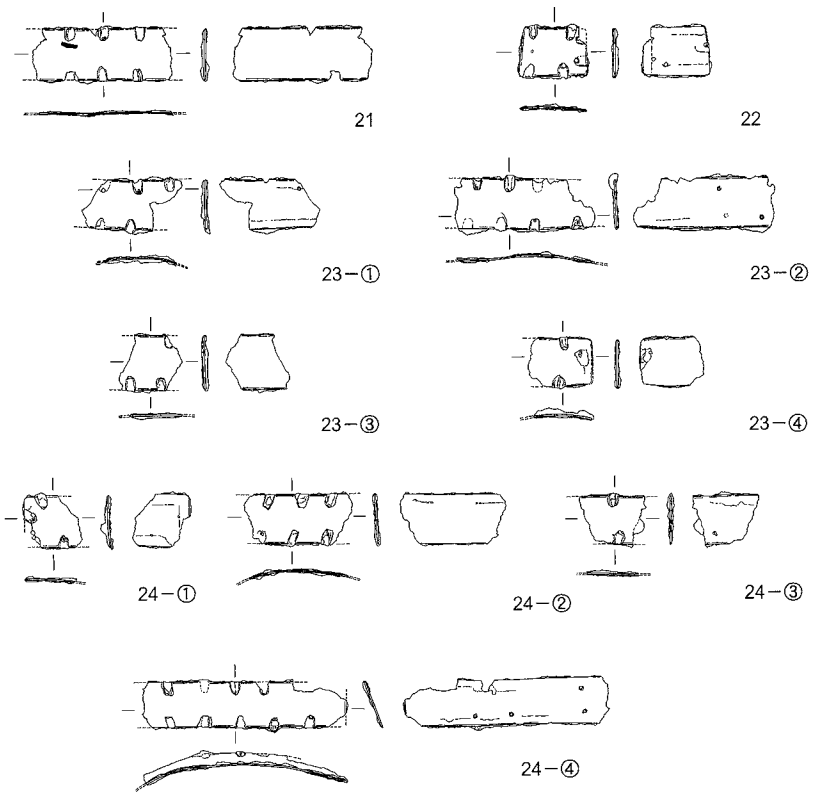


図79　短甲部材（3）　0　30cm　（1：6）

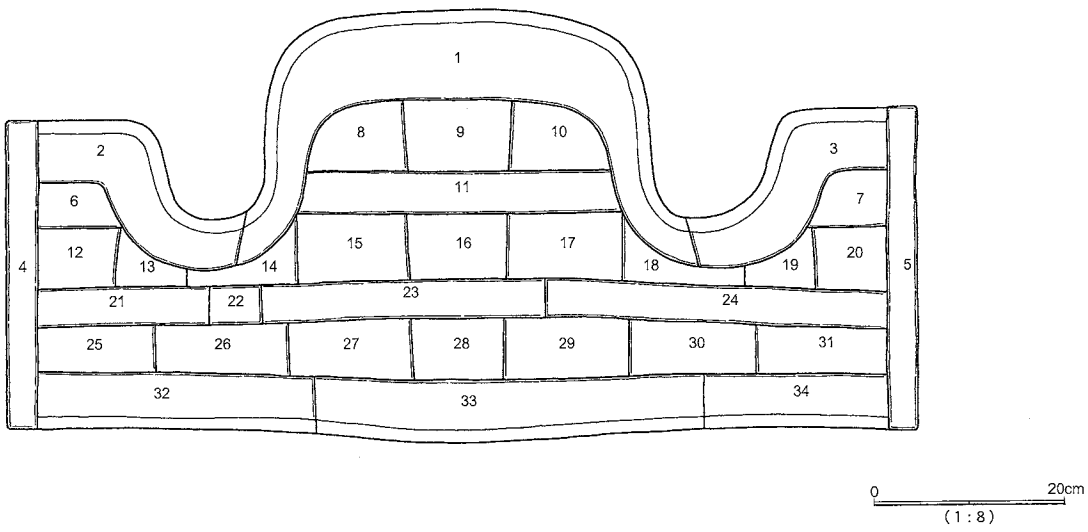


図80　短甲部材の配置復元

７）土製板（図69、図版62）

土製板は２号棺と前壁のあいだから２枚が重なった状態で出土している。607が608の上に乗っており、どちらも線刻のある面を下にした状態であった（以後、便宜的に線刻のない面を表とし、線刻のある面を裏とする）。

607は56.2×20.4cmの長方形を呈し、裏面を上にすると長軸方向にやや反りあがっている。端面はナデのために丸味をおびている箇所と鋭利な工具で切落としたようなシャープな箇所がある。表面は摩滅がいちじるしいものの、一部でナデや指頭圧痕がみられる。裏面は２本の平行な線刻がみられるほかに、ハケを施したのちに４辺に沿うかたちで指頭圧痕、手掌圧痕、ナデがみられる。胎土は埴輪や２号棺との差異はなく、色調は黄橙色を呈する。なお、赤色顔料は表、裏面どちらにもみられる。

608は59.0×22.2cmの長方形を呈し、607と同様、裏面を上にすると長軸方向にやや反りあがっており、端面はナデのために丸味をおびている箇所と鋭利な工具で切落としたようなシャープな箇所がある。表面は摩滅がいちじるしいものの、ナデや指頭圧痕がみられる。裏面は２本の平行な線刻と、その反対側の位置に鳥足文のような３本の線刻がみられる。裏面の調整はハケを施したのちに、４辺に沿うかたちで指頭圧痕、手掌圧痕、ナデ、ケズリがみられる。胎土は607と同様で、表、裏面どちらにも赤色顔料がみられる。色調は表が黄白色、裏が黄橙色である。

この２枚の土製の板は出土状況から土製の棺である２号棺と何らかの関係があると思われるが、その用途は不明である。このような棺との関連がある板状製品の類例としては大阪府松岳山古墳の板状の石が想起されるが（小林行雄1957『河内松岳山古墳の調査』大阪府文化財調査報告書第５輯）、鋤崎古墳との関連は不明である。

（加藤　一郎）

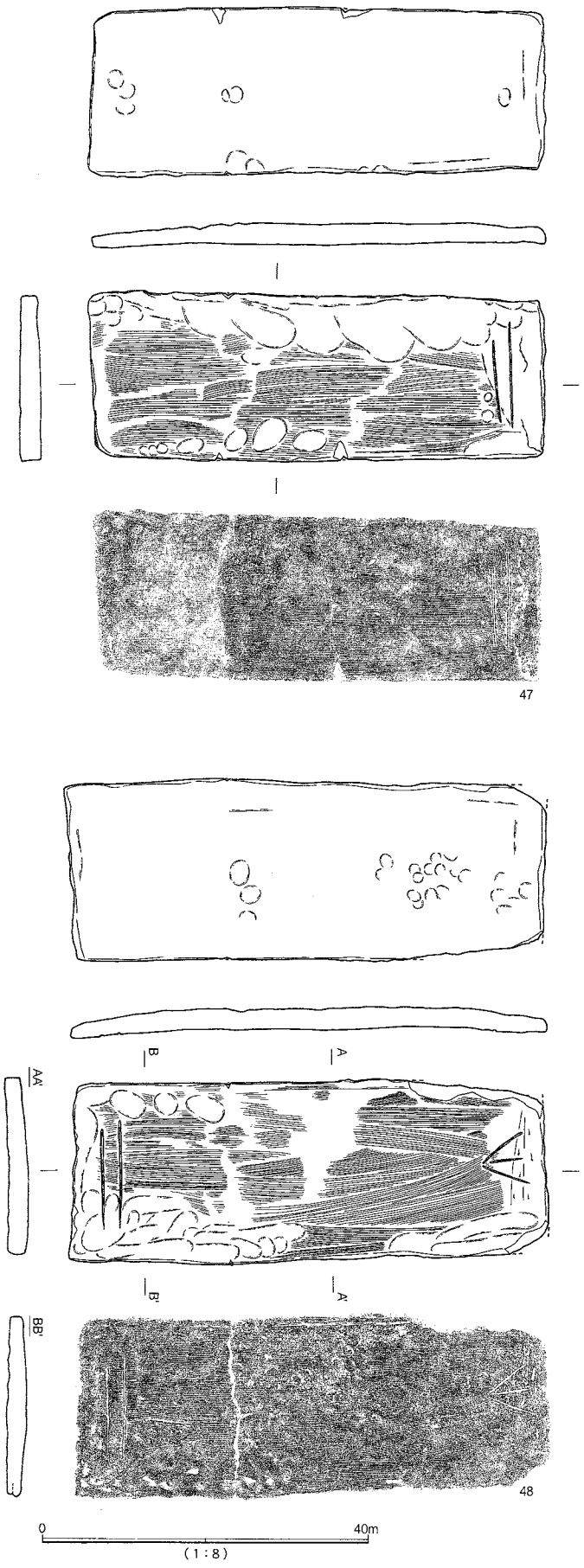


図81　土製板

第4章　考　察

1　墳丘と外表施設

（1）墳丘の復元（図82）

鋤崎古墳は丘陵端の稜線上に立地し、後円部を丘陵先端側に、前方部を丘陵高位側に向ける。墳丘の基本形は地山を削りだして整形し、盛土は後円部の頂部に0.5m程度行われたにすぎない。墳丘は後円部・前方部とも３段築成、各段斜面に葺石を施す。

平面形

古墳築造後、大規模な地形改変や乱掘を受けた痕跡がなく、保存状態は良好である。しかし、丘陵上に築造された古墳が一般的なように、墳丘の流出によって前方部隅角が不明瞭となっているほか、傾斜のつよい斜面の葺石は流出した部分がある。

墳丘の中軸線方位はN44°30′W、墳丘基底面での平面規模は、墳長62m、後円部は長径38.4m・短径36.3m、後円部背面端からの高さ6.7m、くびれ部幅14m、前方部は長さ27m、前面推定幅21.6m、前方部前面端からの高さ1.9m、後円部頂と前方部頂の比高差は1.2mを測る。古墳が立地する丘陵稜線は５度ほどの緩い傾斜があり、墳丘はその傾斜に沿って築造されているため、墳丘基底面はもっとも高い前方部前面（標高28.2m）と低い後円部端（23.6m）で4.6mの比高差があり、前方部側が相対的に高い。後円部頂と前方部頂の比高差（後前高差）が小さいのは、こうした立地の制約を受けたためであろう。

後円部１段・２段斜面葺石基底部の描く平面形は正円でなく、墳丘主軸方向が短い楕円形をなす。墳丘基底面・１段テラスの傾斜を水平に置き換えても楕円形は解消しないから、後円部１・２段の平面形は何らかの理由で楕円形が選択されたのであろう。各段基底部、墳頂面の規模は表10のとおりである。

また各段テラスの幅は、斜面葺石上端まで遺存する部分がなく明確でないが、くびれ部がやや広くなるほか、約0.8～１m前後と推測される。なお、W４区で確認された前方部側面の１・２段斜面の墳端は、W２区の西くびれ部とW３区で確認された葺石端を結んだ直線方向と多少異なる。どの部分で方向が変化するのか不明だが､前方部西隅角近くで角度を変えて前方部前面幅を少し狭めたと思われる。

側面形

墳丘基底面・テラスは墳丘基底面に沿って後円部端に向かって緩く下降している。

前方部側面の基底面は、くびれ部に向かって一定の傾斜（約５度）で緩く下降しするが、くびれ部から後円部側面の傾斜がやや急となり、側面から先端は再び緩くなる。前方部１・２段斜面が前面側に、後円部１・２段斜面がくびれ部に向かって次第に減じるのは、テラスをできるだけ水平に近づけるための工夫であろう。ちなみに基底面にみとめられた比高差4.6mは、１段テラスで3.2mに、２段テラスで1.7mに縮小し、後円部側の３段テラスではほぼ水平面を達成している。

後円部前面斜道（隆起斜道）

前方部頂面から後円部頂面にいたる斜面は、後円部側面の３段斜面よりも一段高く、その境に急角度の石積みを設けている。この部分には墳丘上面が多少流失しているとはいえ、葺石を施した痕跡は認めることはできず、もともと地山面を整形したままの斜面を構成したとみられる。こうした構造は、和田晴吾が「後円部前面斜道」(1)と命名し、近藤義郎が

表10　墳丘の平面規模　　※単位m

	墳丘長	後円径	くびれ幅	前方長	前面幅
１段端	62.0	38.4－36.3	14.0	27.0	(21.6)
２段端	56.2	32.4－31.0	10.0	27.0	(18.0)
３段端	52.0	24.0	8.0	8.0	(13.0)
墳頂面	(44.4)	(12.4)	(3.0)	－	(10.8)

※後円径は後円部直径、前方長は前方部長、前面幅は前方部前面幅である。括弧内は推定値。

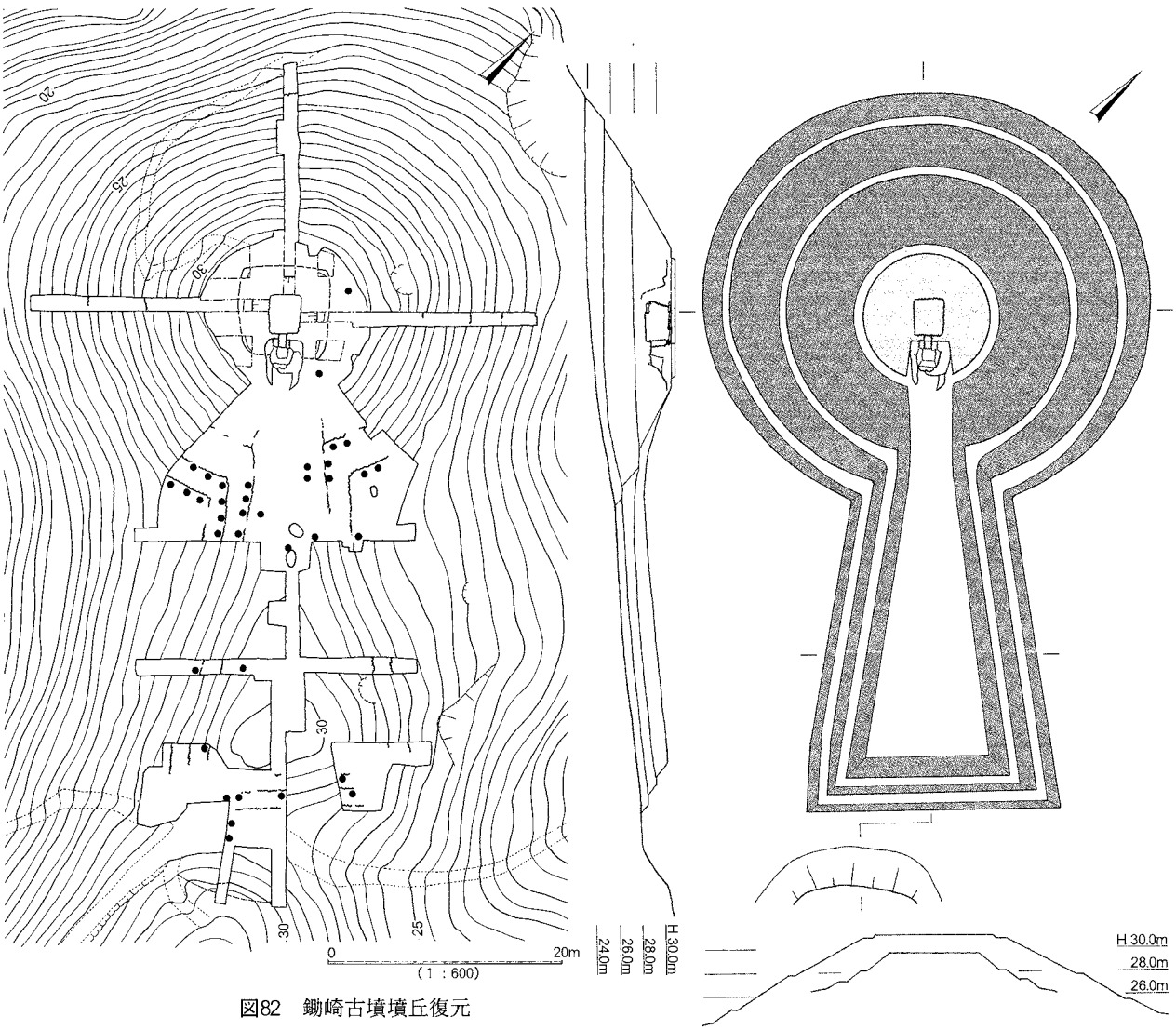


図82　鋤崎古墳墳丘復元

「隆起斜道」[2]（以下、斜道という）と呼ぶものに等しい。

一部の古墳では、斜道が墓壙・墓室築造に関わる作業用通路を兼ねたとみらるものもあるが、３段斜面葺石面よりも傾斜が弱い斜道は、前方部頂面から横穴式石室入口が開口する後円部頂面にいたる通路として設置された可能性が高い。

後円部頂面の円形壇

後円部墳頂平坦面は肩部が流出しているため確実でないが、外縁を巡る円筒埴輪列の位置からおおよそ直径12.4m程度と推定される。テラスの内側は横穴式石室の墓道部分を除く範囲に、拳大～人頭大程度の花崗岩礫の敷石面が広がる。

玄室天井部崩落によって生じた窪みの周囲は、標高31.2～31.3m前後を測り、埴輪列が巡る外縁テラスより20～30cm程度高い。したがって、墳頂面は外縁テラスの内側に、上面に礫を敷いた高さ20～30cm、直径10.4m前後の円形壇が構築されたと推定される。円形壇端に石積みをともなう明確な段は確認できなかったが、本来は石積みがあった可能性が高い。横穴式石室前面には竪坑状墓道が掘削されており、円形壇の前方部側は「ハ」字形に開く形状であったと想定される。

墳丘の平面企画

本墳の墳丘平面形企画を検討したものに倉林論文[3]がある。鋤崎古墳に関する部分だけを要約しておこう。

まず後円部平面形が楕円形を呈するのは、後円部背面側の急斜面をさけるための措置と理解し、調査で検出された後円部１段の長径38mが企画段階の本来の規模と推測する。そして、後円部２・３段の径は１段（最下段）の直径を基準に設定され、２段径は１段の7/8、３段径は5/8とする。また、前方部長は後円部各段の８区画を基準にして、１段が5.5区、２段が6.5区、３段が9.5区に設定されたとする。倉林は、後円部各段の直径設定に第１段を基準に第２・３段を設定する固定型と、第２段の基準に第１段の、第３段の基準に第２段の直径を用いる変動型があることを明らかにし、変動型は畿内の大型墳に顕著に認められるという。また固定型の場合、第２段の直径を第１段の7/8とする設計企画は、前期に特徴的な設定法とする。

倉林の検討によって、これまでの墳丘企画論であまり考慮されることがなかった段の設定に、一定の基準が見いだされたことは重要である。しかしその作業は限られた範囲にとどまり、残された課題も多い。ここでは倉林の成果を検証することができがなかったので紹介に留めたい。

（２）外表施設

１）葺石

墳丘段斜面の葺石に使用された石材のほとんどは花崗岩の転石である。葺石の基底石は人頭大から最大長40～50cm程度の塊が用いられているが、上部の積石は拳～掌大程度のものが多い。古墳の立地する丘陵基盤は花崗岩帯である。葺石に類似する花崗岩転石は、周辺の谷筋や小河川から容易に採取することが可能であり、そうした石材を利用したと推測される。

墳丘斜面葺石の基底石は大振りな転石を横置きし、上部は小振りな石材を小口積みするのが一般的である。調査に際して葺石の配列を注意して観察したが、葺石の積み上げ作業単位をしめす区画石の配列は認められなかった。これまで葺石が確認された今宿・飯氏地区の７基の前方後円墳（帆立貝形を含む）では、区画石の配置例は皆無である。この地域における葺石施工の特徴であろう。

２）円筒埴輪列と形象埴輪の配列

墳丘基底面、１・２段テラス、墳頂面の４段を巡る円筒埴輪列と、家形・靱形などの形象埴輪が検出された。ここでは、円筒埴輪列の使用埴輪数と形象埴輪の配置を検討する。

円筒埴輪列

１・２段テラスではテラス中央付近に、墳頂面では肩部から20～30cmほど内側に、墳丘基底面では下段葺石から20cm程度の空間をおいて配置されたものが多い。埴輪は基部より一回り大きめの堀形内に１本単位で配置され、各段とも芯々で1.4m±10cmの間隔を置いて樹立されている。埴輪列が途中で省略されることがなければ、各段に使用された埴輪は、後円部頂～後円部前面斜道側～前方部頂面の最上段に約79本、２段テラスに約104本、１段テラスに約118本、墳丘基底面に約126本（前方部前面は約10mの空隙を設ける）と算定され、約430本が使用されたと推測される。

円筒埴輪の配列で注意されるのはつぎの３点である。

１．くびれ部折角部への大型埴輪配置。Ｗ２区のくびれ部２段テラス折角に配置された円筒埴輪（43）は、基部直径が40cmと大型の鰭付埴輪である。鰭付埴輪の樹立部位を知る手がかりとなろう。

２．前方部前面基底面の埴輪区画。前方部前面のＳ区で確認された墳丘基底面の埴輪列は、全面をめぐらずに途中で南に折れ曲がる。東側は未掘のため確定しないが、左右対称の配列となる可能性が高い。これに間違いなければ、埴輪で区画された幅（東西）約10m、奥行（南北）４m程度の空間を構成する。古墳にともなう土師器はこの区画内から集中的に出土しており、埋葬儀礼などがこの区画内で実修されたか、あるいは異なった場所での儀礼に使用された土師器が廃棄されたかのいずれかであろう。

３．後円部前面斜道（隆起斜道）側縁の円筒埴輪列。斜道部の墳丘上面が多少流出しているため、樹立状態を留める埴輪は検出されなかった。しかし、斜道が前方部頂面から後円部横穴式石室にいたる通路的な役割を果たした可能性を勘案すると、三重県石山[4]・京都府蛭子山１号墳[5]のように、前方部頂面側縁の埴輪列が斜道斜面にも連続し、後円部頂面の埴輪列に接続する可能性が高いと判断される。

形象埴輪

報告編で記述したように原位置をとどめるものはないが、形象埴輪の出土位置から、本来の配置状況のおおよそを推測することが可能である。

【後円部頂面】後円部頂の円形壇上および玄室崩落埋土から出土した家形埴輪は７個体分である。そのうちの５個体は玄室崩落埋土中から出土した破片が含まれており、円形壇でも玄室上近くに配置されたと推測しうる。また確定しうるほどの破片がないため断定を保留した、盾形・短甲形・蓋形らしい埴輪片がそれぞれの製品に間違いなければ、家形埴輪の周囲にそれらが配置された可能性が高い。

【前方部頂面】中央付近と前端付近から複数の形象埴輪片が出土している。まず中央の基部を留めた楕円形埴輪の周辺から、２個体の靱形埴輪と１個体の家形埴輪片が集中して出土した。これらと同一個体とみられる破片は、くびれ部調査区（Ｅ２・Ｗ２区）に広く分散して出土しているが、もともと墳頂面に配置されたものが転落した可能性が高い。したがって、楕円形埴輪の周囲に靱形埴輪２個体と家形埴輪１個体が配置されたと推測される。なお特異な鰭付半裁楕円形埴輪はＷ２区の基底部から２段テラスにかけて出土しているが、基部を留める楕円形埴輪と同一個体の可能性もある。

また前方部前面Ｓ区から家形と靱形の破片が１個体ずつ出土している。破片も小さく正確な出土位置が分からないため確定しえないが、複数の破片が認められる家形埴輪は、前方部頂面端か、埴輪列で区画された基底面に配置されたかのいずれであろう。出土した破片数が僅少ない点を考慮すると、前者の可能性が高い。靱形の破片は１片のみで、前方部頂面中央付近出土のものと同一個体の可能性が高く、破片化したのちに移動したものと想定しておきたい。

（柳沢　一男）

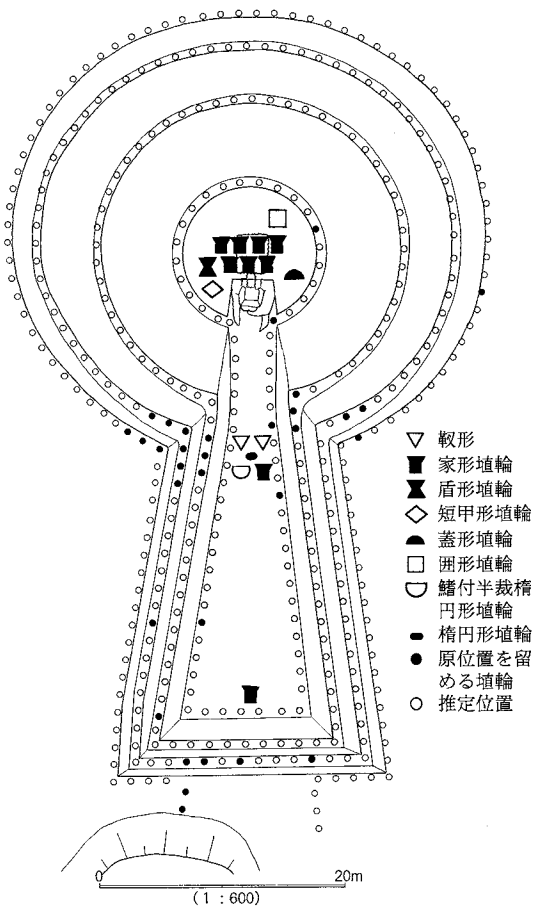


図83　埴輪樹立位置復元

【注】

(1) 和田晴吾1997「墓壙と墳丘の出入口」『立命館大学考古学論集Ⅰ』

(2) 近藤義郎2000『前方後円墳観察への招待』（青木書店）

(3) 倉林眞砂斗1998「畿内中枢の構造的把握」『古代学研究』143

(4)京都大学文学部博物館1993『紫金山古墳と石山古墳』

(5)佐藤晃一ほか1992『史跡蛭子山・作山古墳整備事業報告書』（加悦町教育委員会）

2 鋤崎古墳の埴輪の位置づけと諸問題

ここでは、九州における埴輪の本格的な導入の良好な一例である鋤崎古墳の埴輪の系譜的、編年的位置づけをおこなうとともに、そこから派生するいくつかの問題点を指摘し、簡単な考察をくわえてみたい。

まず、埴輪の編年をおこなうにはその系譜を把握し、その系譜ごとに編年をする必要があるが、のちにも述べるように鋤崎古墳の埴輪の系譜を把握することは困難であるので、編年の材料となるような要素を列記すると以下の点がおおよそ指摘できる。

① 円筒埴輪は口縁部が突帯間隔にくらべて短く、外反するものが多い
② 円筒埴輪の透孔は基本的に一段あたり２つである
③ 朝顔形埴輪の第１段に４方向に透孔を穿つものがある
④ 円筒埴輪、朝顔形埴輪はその器高にくらべて、径が大きい印象をうける
⑤ 突帯設定技法には凹線技法がもちいられる
⑥ 貼付口縁が存在する
⑦ 円筒埴輪、朝顔形埴輪の３～４割には鰭がつく
⑧ 靱形埴輪の外形は、奈良県新沢500号墳(1)、室宮山古墳(2)、大阪府萱振１号墳(3)などのものに類似する
⑨ 壺形埴輪の底部は穿孔ではなく筒状成形である

以上の点などを考慮すると、鋤崎古墳の埴輪はおおよそ古墳時代前期末～中期初頭に位置づけることが可能である。③にあげた特徴は、通常の埴輪編年においては、古墳時代前期でも古い一群に位置づけられるものであるが、その基準からは逸脱した資料であるといえる。私見では、朝顔形埴輪は他の埴輪にくらべて古い要素を残しやすい性質をもっていると考えるが、そうしたことを裏づける資料となる可能性がある。⑤については、方形刺突に後出する技法ではあるが、福岡市周辺では方形刺突が中期前半までは確実に存在するので、凹線技法の存在のみで時期をあたらしくすることはむずかしい。また、凹線技法を第１突帯の接合に際してもちいないという点は、凹線技法のなかでは古く位置づけることができる可能性がある。ただし、方形刺突や凹線技法などの突帯設定技法についてはそれが確実に一地域に起源をもつ「技法」なのかそれとも各地で自然発生的に考案されるたぐいのものなのかをさらに吟味する必要が感じられる。

鋤崎古墳の埴輪を古墳時代前期末～中期初頭という位置づけから、あえてさらに細かく時期を定めようとするならば、古墳時代前期末という時期が妥当なのではないかと筆者は考える。その根拠としては①、④などがあげられる。近隣の古墳でほぼ同時期の古墳をあげるとすれば老司古墳が該当すると思われる(4)。

次に鋤崎古墳における埴輪の生産体制についても言及しておきたい。事実記載の項で触れたように、円筒埴輪、朝顔形埴輪については、大別２種に分類可能である。ひとつは器壁が薄くシャープな印象をうけるグループ（A群）であり、もうひとつは器壁が厚く重厚な印象をうけるグループ（B群）である。出土量はA群が大半を占めており、B群はごくわずかである。A群の埴輪は大量に存在し、細部についてはさまざまなバリエーションがみられるが、大局的には非常に均質な埴輪である。B群については、A群には属さないものの、口縁形態をA群に似せたものや（121）、鰭をもつものや、凹線技法をもちいるものもあるので、A群に近似するグループであるといえる。紙幅の都合もあり、その根拠を提示することはできないが、おそらくA群には複数の埴輪の作り手が関与し、B群は一人の作り

手によるものであろう。この実態から鋤崎古墳の埴輪の生産体制についていえることは、埴輪の作り手の技術レベルが非常に均質であったか、製作すべきモデル（埴輪）から逸脱することをあまり良しとしない統制のとれた生産組織であったか、あるいは両者が該当するかであろう。筆者は上記の両者が該当するのではないかと考えるが、埴輪の導入期にあたってどのようにしてこうした生産体制を組織したのかあえて推測するならば、これまでの壺形埴輪の作り手や土器の作り手が関与していたものと思われる。その傍証となるのが、ごく微量ながら壺形埴輪が存在することや、15や122のような壺形埴輪や土器にみられる口縁形態が円筒埴輪に存在することである。

鋤崎古墳における埴輪の生産体制が上記のような壺形埴輪や土器の作り手を投入したものであったとしても、靱形埴輪や家形埴輪などの形象埴輪や鰭といった要素は畿内やそれに準ずる埴輪を知っている作り手の関与なしにはとうてい発現しえないものであろう。この時期の埴輪の波及にあたっては、そうした畿内の埴輪を知っているような指導者的な作り手が一人あるいはごく少人数いて、在地の作り手を編成するというばあいが多い。しかし、そのような視点で鋤崎古墳の埴輪を丹念にチェックしたが、他の埴輪を卓越するような指導者的な作り手による埴輪はみいだしえなかった。在地にはないであろう指導者的な作り手の埴輪を抽出することができれば、その古墳の埴輪の系譜をあきらかにできるのであるが、鋤崎古墳の埴輪のこのような状況ではその系譜をどこにもとめればよいのか皆目見当もつかないというのが現状である[5]。

ただし、こうした状況で示唆的なのは、82の家形埴輪にみられるような他に例をみない裾廻り突帯の特異な作り方や、88･89にみられるようなこれも他に例をみない庇状の表現や、靱形埴輪のようにある程度畿内の埴輪に忠実なものの、充填される文様などがその規範からは大きく逸脱するというありかたである。このような状況が産出される要因としては、類似する未見資料が畿内に存在するか、埴輪が波及する際の変容が考えられる。

前者については、以前から筆者も指摘しているように[6]、古墳時代前期後半の畿内においては鰭付円筒埴輪に代表される斉一的な埴輪の展開がみられるようになるが、それと同時に地域差がみられるようになる点をもっと意識する必要があるだろう。これまでの研究では突帯間隔などの斉一的な面に注目するあまり、そうした地域差が見落とされがちであったが、どのような埴輪が各地に波及していったのかを考えるには畿内における地域差の把握をより入念におこなっておく必要があるように感じられる。すなわち、いわゆる「畿内の埴輪」は単一のものではないことに注意する必要がある。

後者については、さまざまな要因がケースごとに想定できるので、ここで詳しく論じることはしないが、以下に埴輪の波及を考えるうえで示唆的な状況を呈する資料をあげておくことにする。

・香川県中間西井坪遺跡[7]

全国で３例ほどしか確認されていない野焼による埴輪焼成遺構の１つである。時期は古墳時代中期初頭に位置づけられ、形象埴輪のセット関係も把握できる良好な資料である。円筒埴輪の１段あたりの透孔は４つのものがある。

・山口県柳井茶臼山古墳[8]

古墳時代中期初頭に位置づけられる資料で、家形埴輪・蓋形埴輪の形象埴輪も存在する。おそらく畿内から来たであろう指導者的な埴輪の作り手による埴輪と在地の作り手による埴輪の２群に判然と分離することができる。在地の作り手による円筒埴輪は１段あたりの透孔が４つであるが、畿内的なものは２つである。在地の作り手はおそらく畿内の作り手による埴輪に接していたと思われるが、その埴輪はあくまで独自なものである点が興味深い。

・大分県小熊山古墳[9]・御塔山古墳[10]

小熊山古墳と御塔山古墳は同じ首長系列にあると思われ、小熊山古墳が先行する。時期は小熊山古墳が前期中頃～後半で御塔山古墳が前期末～中期初頭に位置づけられよう。両者の埴輪は系譜的にはまったく異なるものであり、関連性はみいだせない。

以上は鋤崎古墳から比較的距離の離れている地域の例ではあるが、いずれも畿内には含まれない例で、しかも瀬戸内海に面した地域という地理的な共通性がある。以上の例をみても、埴輪の波及についてはさまざまなケースが想定できることがわかる。

では、鋤崎古墳以降の近隣における埴輪はどのような展開をみせるのであろうか。まず、鋤崎古墳の次代の首長墓とされる丸隈山古墳[11]の埴輪は鋤崎古墳の埴輪の系譜をひくものと考えられる。丸隈山古墳の埴輪には薄手の一群（少量）と厚手の一群（多量）が存在し、それぞれ鋤崎古墳のA群とB群に対応する可能性もある。丸隈山古墳以降の古墳で、野焼焼成による埴輪をもつ古墳としては博多１号墳、拝塚古墳、樋渡１・２号墳、井尻B１号墳などがあげられるが、未報告資料が多くここでその詳細については触れないことにする。ただ、あえていうならば、それぞれ単発的な生産で相互の関連はなく、生産体制もそれぞれ異なる印象がある。

最後に鋤崎古墳の埴輪についてまとめておくならば、その時期は古墳時代前期末に位置づけられ、その生産は非常に統制・管理の行届いたものであったということが指摘できよう。ただ、そのような状況にあっても円筒埴輪には段構成の異なるものが存在している点が興味深い。原位置での出土でない点が惜しまれるが、配置箇所による使い分けがあった可能性もある。また、他古墳の資料と段構成や突帯間隔などの比較をおこなう前に、同一古墳内における生産体制や作り手のグループの把握といった基礎的な作業が前提となることも再認識させられた。　（加藤　一郎）

【註】

（１）伊達宗泰ほか　1981　「500号墳」『新沢千塚古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第39冊

（２）奈良県立橿原考古学研究所（編）　1959　『室大墓』

（３）広瀬雅信（編）　1992　『萱振遺跡』大阪府文化財調査報告書第39輯

（４）老司古墳には少量ながら円筒埴輪が存在し、家形埴輪も存在する。
山口譲治ほか（編）　1989　『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集
吉留秀敏　1991　「老司古墳出土遺物（追加資料）」『東光寺剣塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第267集
なお、老司古墳に先行する卯内尺古墳からも器種は不明ながら、形象埴輪が１点出土していることが注目される。
吉留秀敏（編）　2001　『卯内尺古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第690集
また、元岡池ノ浦古墳も鋤崎古墳に先行する古墳で円筒埴輪、壺形埴輪をもつことがあきらかになっている。
岡部裕俊・河村裕一郎　1994　「糸島地方の古墳資料集成（その１）――志摩町井田原開古墳・福岡市元岡池の浦古墳出土資料――」『福岡考古』第16号、福岡考古懇話会

（５）単なる形態的な類似からいえば、佐賀県谷口古墳の円筒埴輪の口縁形態と121のような口縁形態が類似するという指摘はできる。ただ、谷口古墳の資料はごくわずかであるという点が注意される。

（６）加藤一郎　2000　「前期古墳の円筒埴輪――大和を中心に――」『溯航』第18号、早稲田大学大学院文学研究科考古談話会

（７）大久保徹也（編）　1997　『中間西井坪遺跡』Ⅰ、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

（８）柳井市教育委員会（編）　1999　『史跡柳井茶臼山古墳』

（９）原田昭一・平川信哉　1991　「小熊山古墳」『杵築地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ』杵築市教育委員会
原田昭一　1992　「杵築市小熊山古墳について」『おおいた考古』第５集、大分県考古学会
平川信哉ほか　1992　「御塔山古墳・小熊山古墳」『杵築地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ』杵築市教育委員会

（10）清水宗昭　1987　「杵築市御塔山古墳出土の埴輪について」『九州考古学』第61号、九州考古学会
平川信哉・清水宗昭　1990　「御塔山古墳・小熊山古墳」『杵築地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ』杵築市教育委員会
平川信哉ほか　1992　「御塔山古墳・小熊山古墳」『杵築地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ』杵築市教育委員会

(11) 柳沢一男（編）　1986　『丸隈山古墳』Ⅱ、福岡市埋蔵文化財調査報告書第146集

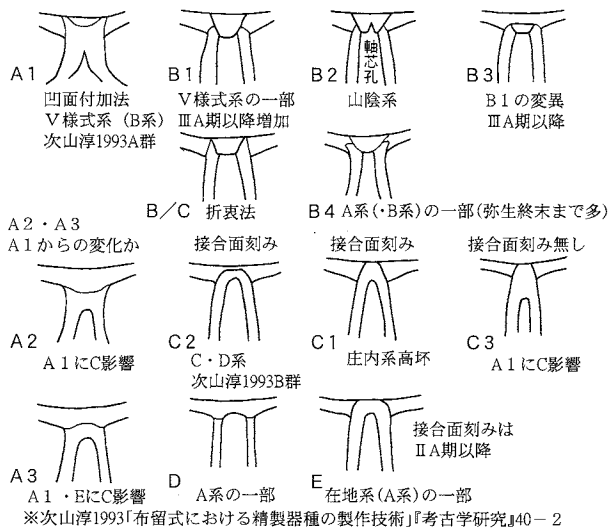
なお、整理段階において重藤輝行氏（福岡県教育委員会）、井上義也氏（春日市教育委員会）および柳井茶臼山古墳研究会の諸氏からさまざまな御教示をいただいた。また、久住猛雄氏（福岡市教育委員会）からは壺形埴輪の存在を指摘していただいた。記して感謝申し上げる次第である。

３　鋤崎古墳出土の土器について

鋤崎古墳では、墳丘を中心に多数の土師器が出土した。図49に古墳時代の土師器を、図50に古代の土器を掲載した。以下、これらについて若干の考察を加える。また「壺形埴輪」として報告したもののうち、胎土が精良で比較的小型のものは土師器に含めて考えるべきかもしれない。

まず図50（23.35）の古代の土器についてだが、７世紀末～８世紀初頭の土器が多い（23,25,26,31,33）。また似非須恵土師器は編年的に不明な部分が多いが、甕の口縁部形状からⅢB～Ⅳ期の須恵器に類似する。また今宿、飯氏地区の古墳時代後期の集落には似非須恵土師器が少なくないことも注意したい。これらの土器の存在は、一定の期間をおいて６世紀後半から８世紀前半にかけて鋤崎古墳に対する祭祀が行われたことを示し、隣接する鋤崎古墳群の存在と関連するのだろう。

古墳時代に属する土師器（図49）は、全て古墳の築造時期か、やや下る頃とみてよい。重藤輝行の編年（重藤輝行・西健一郎1995「埋葬施設にみる古墳時代北部九州の地域性と階層性」『日本考古学』第2号）のⅢA期に多くが属する。図49-４の甕は小片であるが、重藤の分類ではA類Ⅲ式となり、氏のⅢB期に下る可能性がある。５～16の高杯は、10のみ形式が異なるが、他は同じであり、多くはS区墳丘裾に集中し、祭祀に伴い選択されたものであろう。ただし、10も同時期でもありうる形式である（調整も丁寧であり、下がっても重藤編年ⅢB期）。重藤分類では、10が高杯B類、他は高杯A類である。ただし高杯A類は、坏部と脚部の接合にバリエーションがある。また調整は比較的丁寧なものが多いが（ナデ仕上げが多く粗いハケで終わるものが少ない）、一方で胎土は砂礫が少なくない。これら高杯A類は、少なくとも湯納遺跡D5溝・D11溝（久住編年ⅢA期新相）の高杯群よりは新しい。鋤崎の高杯は、外面の細密ヨコミガキをほとんど欠落し、坏部と脚部の接合は付加法（図84のC技法）が少なくなり、充填法（B技法）が主体となる点で新相である。また、水漉胎土で細密ヨコミガキとなる精製器種が鋤崎ではほとんど欠落している。重藤編年ⅢA期の前の土器様式である久住編年のⅢA期では（久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』ⅩⅨ）、古相においてC２、Ｂ１、Ｂ２（山陰系）がみられるが、新相においてＢ１、Ｂ３、Ｂ／Ｃ（付加法・充填法折衷）、Ａ２、Ａ３が増加し、付加法Ｃ２は減少傾向となる。鋤崎の高杯群はその次の段階で、付加法がわずかとなる。小型丸底壺の図49-18,19は、雑な調整で久住編年ⅢA期新相以降であり、19は重藤分類の小型丸底壺Ⅱ式、重藤ⅢA期でよい。20のような粗製の脚付鉢や、21の小型埦もこの時期（重藤ⅢA期）に多く見られる。山陰系壺形土器の1,2も、頸部が広く短く、口縁部が鈍くなる点で新相を示し、時期的に矛盾しない。様相的に、大和の上ノ井手遺跡ＳＥ030上層資料や「布留式」設定土器群ほぼ併行するものであろう。



※次山淳1993「布留式における精製器種の製作技術」『考古学研究』40－２

図84　古式土師器高坏接合法分類

図49-22の有耳小型壺は、器形的に韓半島系である。類例として老司古墳例を図示したが、鋤崎例も含めていずれも技法や胎土は在地の土師器であり（ただし、老司例の方が薄手で丁寧な作りで、耳は貼付けか）、韓半島の土器を模倣したものであろう。最古の初期横穴式石室を有する両古墳に、模倣品とはいえ韓式土器が出土することの意味は示唆深い。　（久住猛雄）

4　横穴式石室の検討

後円部から検出された横穴式石室は、これまでのところ定型化した横穴式石室として列島最古に位置づけられる。ここでは、崩壊した玄室天井部の復元、先行する横穴系墓室との関係、北部九州型横穴式石室のなかでの位置づけ、の諸点を検討することにしたい。

（1）崩壊した玄室天井部の復元

第３章３で記述したように、石室上部に架構した天井石は羨道上の１石のみが遺存し、玄室天井石３石は側壁上部の崩壊にともなって石室内に落下していた。石室上部の崩壊の要因は側壁の過度の持ち送りにあったと想定されるが、天井石上の盛土が薄く、上部から加重不足も崩壊の遠因となった可能性がある。玄室天井部の復元はすでに老司古墳の報告書[1]で行なっているが、要約を掲載することにした。

表11　天井石のサイズ　（単位m）

No.	幅	奥行	厚さ
A	2.2	1.25	0.15
B	2.1	1.9	0.13
C	1.9	2.1	0.15

玄室内に落下した天井石は３石、いずれも玄武岩の扁平な大型割石で、各石材のサイズは表12のとおりである。各石材の配列と配置関係が判明したのは、天井石の石室内面側に塗布された赤色顔料の範囲である。

各石材に塗布された顔料の範囲は図85の天井石に網点で表示している。このことから、Ａ～Ｃの天井石が水平に並置されたのではなく、奥壁側の天井石Ａの上部に中央の天井石Ｂの一部が、そしてＢの上部に羨道側の天井石Ｃの一部が重なることが判明する。Ｃの顔料が先端まで塗布されていることは、羨道上に原位置を留める天井石とのあいだに10cm程度の空間が設けられ、羨道天井石は楣石として配置されたものであろう。

これらの観察をもとに、横穴式石室の遺存部分最上面と天井石下面の組み合わせを検討した結果、図85にしめす天井石の位置と重複関係がもっとも整合性があると推測された。

以上を要約すれば次のとおりである。

１．玄室壁体構築後、石室床面から約2.1ｍの高さに扁平な天井石３枚を架構する。天井石は水平並置でなく、奥壁側から鎧重ね状に羨道側に向かって配置し、その先端を楣石先端と揃えている。

２．天井石架構後、石室内側から赤色顔料が塗布される。顔料の塗布範囲から、側壁上端と天井石が接する位置での幅は、0.7～１ｍ程度と想定される。

（2）先行する横穴系墓室との関係

鋤崎古墳に先行する横穴系墓室として、佐賀県谷口古墳と福岡県老司古墳例がある。老司と鋤崎の築造時期は近接し先後関係は微妙である。まず谷口・老司の石室概要を記しておこう（図86）。

谷口古墳（墳長約80m前後の前方後円墳か前方後方墳）の石室は、主丘部最上段に東・西の２基が設けられている。墓壙内に扁平な割石で構築され、両者とも石室内に長持形石棺を内蔵する。墓壙の重複から東石室→西石室の順に築造されたことが判明している[2]。

東石室は幅1.6m、長さ約３ｍ、高さ約2.1ｍの規模で、石室上部を合掌形に持ち送り、明確な天井部をもたない。明治末年に発掘され、大正初期に保存施設が設置された。その際の破壊と入口部側の壁石積み替えによって、横口部の構造が分かりにくくなっている。

再調査の結果、前方部側小口壁の床面から75cmほど上位が出入り口＝横口部の底面となることが確定した[3]。横口部の側面は石室の側壁がそのまま墓壙壁まで延びて壁面を構成する（右側壁上端で1.5

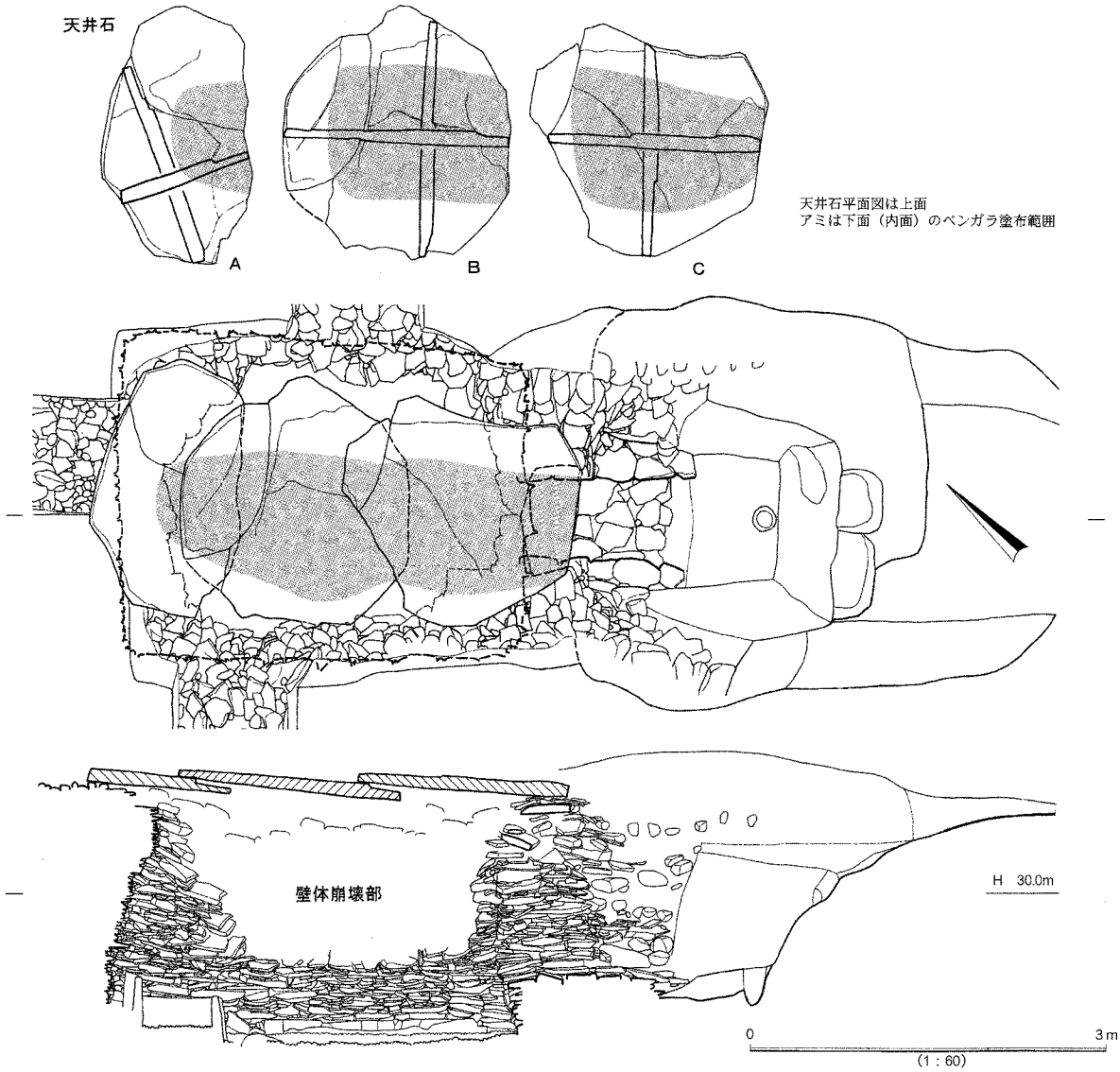


図85　横穴式石室天井部の復元

mの長さがある)。横口の側壁面の高さは石室床面から1.8mに達し、石室天井部との差は30cm程度にすぎない。墓壙端付近の側壁はほぼ垂直に積み上げられ、その上端を盛土で押さえている。石室小口壁と墓壙端付近の側壁面のあいだに、合掌形から垂直に変換する処理があったと思われるが、当該部分の壁石は積み替えられており、詳細を知りえない。

西石室は長さ3.2m、奥幅1.9m、前幅1.5mの羽子板形の平面形、石室上部は崩壊しているが東石室と同様の合掌形と推測される。前方部側の小口壁外側は、石室側壁がそのまま延びて横口部側壁を構成する。左側壁は小口端から0.7mで鍵の手状に開いて前庭部をかたちづくる。右側壁側は小口端から直線的に延びる。横口部は石室床面から65cm上面に設けられ、幅1.1m、長さ0.7mである。変則的な前庭部は、幅1.4m、遺存長1mとなる。横口部の閉塞は、小口壁に面を揃えて丁寧に割石を積み上げて行う。なお東・西石室とも石室四隅は、基底石から上端まで端正な隅角を形成する。墓室平面形と前底部の有無に違いがあるが、壁体や横口部の構築法は類似している。

老司古墳（墳長約75mの前方後円墳）は、後円部に3基、前方部1基の4基の石室が検出されている。3号石室を除くといずれも小型の竪穴系横口式石室である。

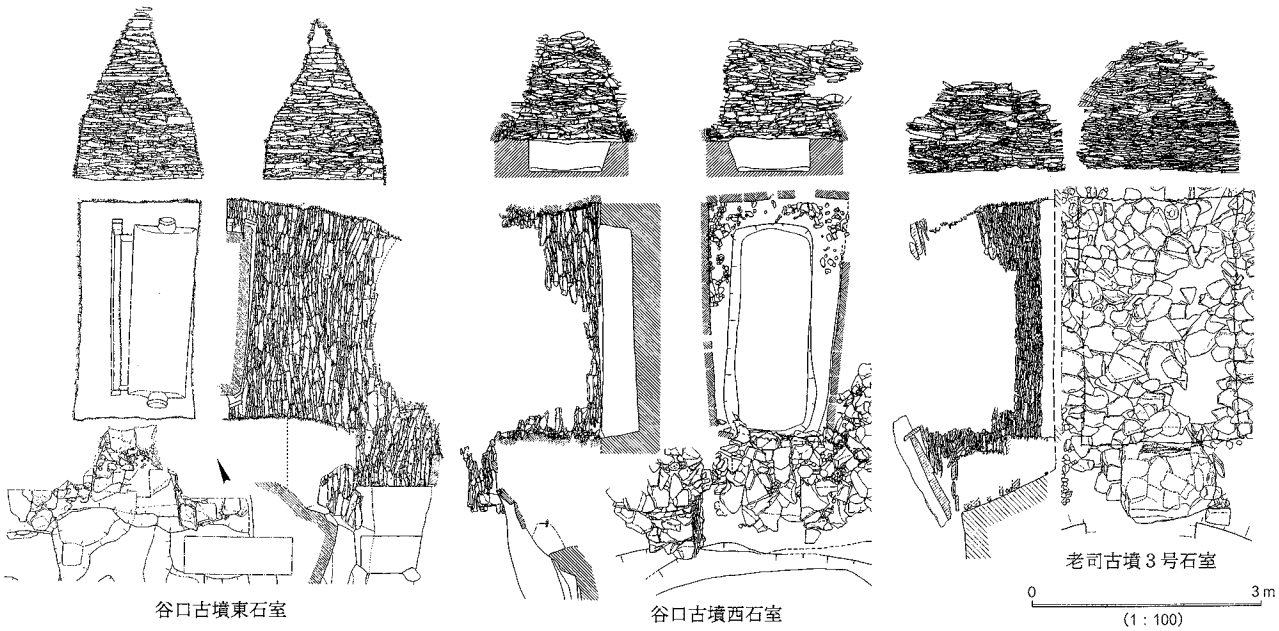


図86　鋤崎古墳に先行する横穴系墓室

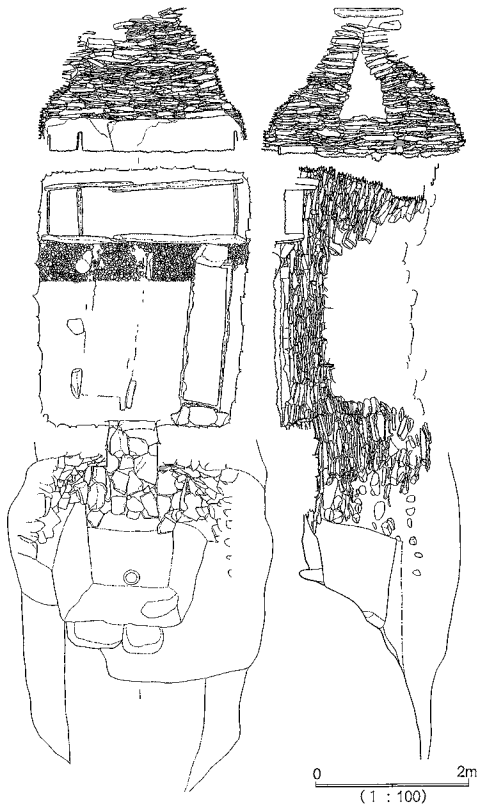


図87　鋤崎古墳の横穴式石室

３号石室は後円部最上段に掘削された墓壙内に築造された割石積みで、石室前面に前方部から長さ９m、底面幅1.2mの墓道が接続する。石室は幅２～2.1m、奥行き3.2m、推定高1.7m（鋤崎と同様に天井石が落下しているが、天井構造の詳細は不明である）、前方部側の小口壁中央に外方に突出した横口部を設ける。横口部は幅80cm、奥行き30cmほどの横長長方形で、墓道側に0.7m、側面に1.2mの高さに割石積み壁面をともなう。横口部上に天井石は架構されず、そこに大型板石を斜めに架けて閉塞する。横口部端に壁面がなければ、短小な羨道もしくは隔壁に近い構造となる。石室の四隅は壁面中位まで隅角を形成し、上部は丸みをもつ。

以上の３基の石室と鋤崎の石室を比較し、相互の関連性を検討してみよう。

まずこれらの石室は、大型墓壙のなかに築造され、壁体周囲に板石・粘土などで厚い裏込めを行い伝統的な竪穴式石槨と等しい構築技法をとる。

長持形石棺を内臓した谷口の場合、もともと追葬予定はなかったであろうし、その痕跡も確認されていない。本来の石室構造に不要な横口部を設けたのは、寿墓として造営されたためであろう。横口部は丁寧に構築され、東石室は前面に墓道が接続し、西石室は変則的な前庭部を構成している。西石室の前庭部構造から高句麗古墳との関係を想定する見解もある[4]が、石室の一部だけを取り上げて祖型を比定するは困難である。

これに対して老司３号石室は、石室幅が２mを越えて竪穴式石室の範疇から逸脱している。３～４体の遺体埋葬が想定され、初葬の遺体は石室主軸に直交して埋葬されたと推測されている[5]。老司３

号石室の石室平面形や突出部の構造は谷口との隔たりが大きく、両者を繋ぐ未見の石室も予想されるが、谷口の延長上に築造されたとみるのは難しい。老司3号石室の築造にあたっては、横穴式石室構築原理との接触という新たなインパクトがあったと想定される。おそらく横穴式石室をモデルにしながらも、深い墓壙内の石室配置という伝統的技法の制約を受けて、羨道を突出状の横口部に改変し、石室に入るための長大な墓道接続を案出したと思われる。

老司3号石室と鋤崎の石室は、玄室への出入り装置に横口部と羨道という違いがあるが、それらが前壁に設けられた位置や接続手法はほとんど等しい。玄室の前・奥壁に持ち送りが少なく、側壁を急角度で持ち送る手法や、壁体上部に大型石材を使用する点などの構築技法が共通し、二つの石室のあいだには類似点が多い。

老司と鋤崎の石室構造の基本的な違いは、羨道接続の有無とそれに連動した墓道の形態と構造にすぎない。両者は、副葬品や出土土師器に年代上の大きな差異はなく、きわめて近い時期に築造されたとみられる。しかし、鋤崎と共通する横穴式石室が広く九州中北部に分布することからみて、鋤崎が老司に先行する可能性は少い。鋤崎の横穴式石室は羨道の構築に成功した初例の可能性が大きい。

発掘調査当時から、鋤崎の石室と老司3号石室との先後関係や築造系譜について考えてきた。今回改めて石室の細部を検討したところ、上述のように老司3号と鋤崎の石室のあいだに意外なほど共通する部分が多く、また谷口との隔たりの大きさに気付いた。谷口の横口部構造がはたして朝鮮半島横穴式石室の直接的な影響下に築造されたか不明だが、調査担当者が述べるように、石室に出入り可能な装置のアイディアのみを受容したという見解[6]が妥当であろう。

谷口・老司・鋤崎の3古墳は、それぞれ唐津・福岡・糸島平野の4世紀中～後葉に築造された有力首長墳である。これらの古墳に埋葬された首長層は相互に密接な関係をもちつつ、ヤマト王権による朝鮮諸勢力との外交に重要な役割を担ったと予想される。谷口の築造時に横穴式石室と接し、老司で本格的な横穴式石室築造を指向したが十分果たすことができず、鋤崎で羨道接続の横穴式石室築造が可能となったとみたい。

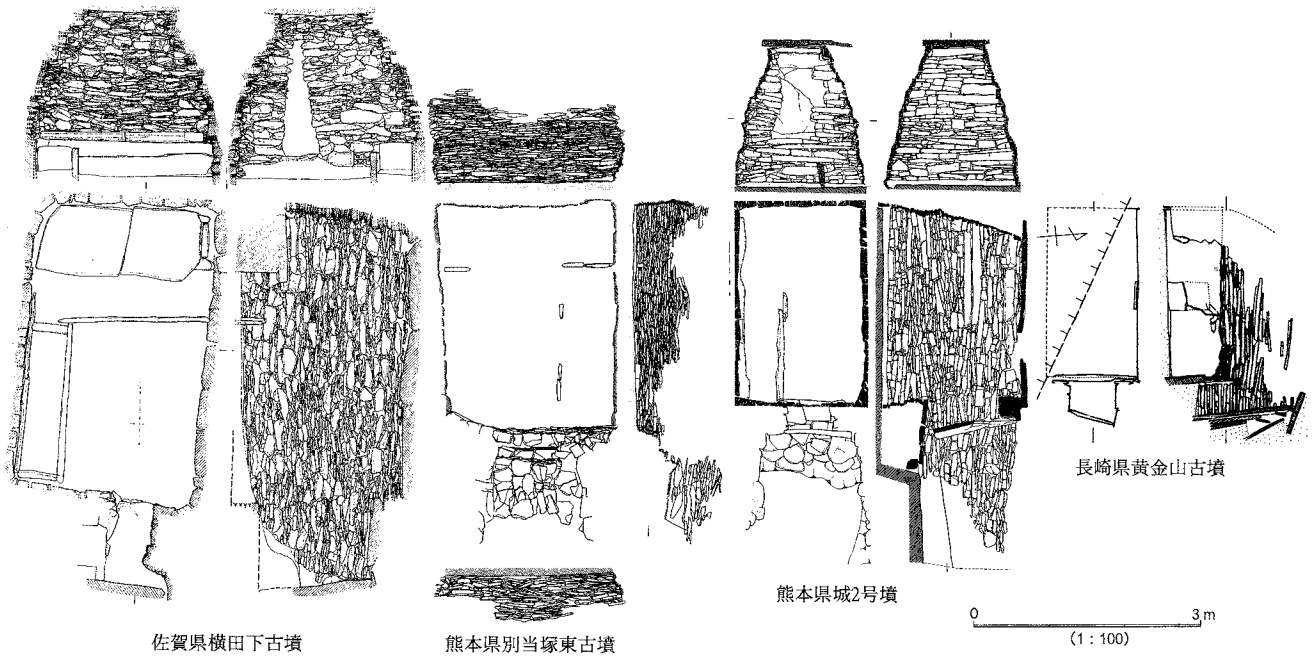


図88　鋤崎式の横穴式石室

表12　鋤崎式横穴式石室一覧　（単位m）

古墳名	墳形・規模	玄室規模 奥行×幅×高	羨道規模 奥行×幅×高	石棺・ 屍床	閉塞	前庭	主要副葬品
鋤崎	前円・62	3.4×2.45～2.7×2.1	0.6×0.6×1.4	石棺	板	○	鏡・素環頭鉄刀・短甲・鉄刀・刀子
横田下	円・25？	3.8　×2.4　×2.2	0.9×0.5×1.4	石棺	板	？	鏡２・筒形銅器・短甲・玉・土師器
別当塚東	円・40	2.9×2.2～2.4×？	？×？×？	屍床	？	？	
城２号	円？	2.6　×1.6　×1.7	0.4×0.6×0.9	屍床	板	－	琴柱形石製品・鉄剣・鉄鏃・刀子・玉
黄金山	円？	2.2　×1.2　×？	0.6×0.6×？	屍床	板	？	土師器（甕・壺・高杯）

（３）鋤崎式横穴式石室の提唱

鋤崎古墳の横穴式石室は、長方形の玄室に短小な割石積みの羨道を接続する構造に特色がある。鋤崎の石室と類似する横穴式石室は、佐賀県横田下[7]、熊本県別当塚東[8]、城２号墳[9]に認められ、それぞれの地域最古の横穴式石室と位置付けられている。おそらく鋤崎の横穴式石室を規範に築造されたとみられる。こうした構造的特徴を有する石室群を鋤崎式の横穴式石室と呼びたい[10]。長崎県黄金山[11]の石室は、玄室下部に大型板石を配置する異形だが本型式内に含めてもよいだろう。

これらの一群は羨道接続手法だけでなく、玄室内に石棺や屍床仕切石を配置することも共通する。なかでも横田下の石室は、奥壁に沿って箱形石棺と屍床、左側壁沿いにも屍床を配置し、鋤崎との類似が顕著である。別当塚東・城２号では、屍床を「コ」字形ないし「L」字形に配置する。黄金山は玄室中央に隔壁を配置し、２基の箱形石棺が並置したような平面形を呈していたらしい[12]。５世紀初頭前後に定型化する肥後型横穴式石室の「コ」字形ないし「川」字形屍床配置の源流は、鋤崎式に求められる可能性が高い。

鋤崎古墳では石室内の容器副葬は認められなかったが、横田下・黄金山[13]から複数個体の土師器が出土し、食物供献を象徴する容器副葬がみられる点も注意する必要があろう。これらの土師器は須恵器出現以前の型式であり、鋤崎式横穴式石室の築造時期が近接することを示唆している。

これらの横穴式石室を採用した古墳は鋤崎を除いて円墳だが、玄界灘沿岸域だけでなく、有明海沿岸域まで広範囲に分布することは従来の予想を超える。肥後型横穴式石室最古の熊本県小鼠蔵１号墳は、鋤崎式段階までさかのぼる可能性がある。鋤崎式の横穴式石室を採用した古墳の被葬者は、玄界灘沿岸域の首長層とともに朝鮮半島諸勢力との外交に参与した人々であろう。

（柳沢　一男）

【註】

（１）山口譲治ほか編1989『老司古墳』（福岡市文化財調査報告書第209集、福岡市教育委員会）
（２）家田純一編1991『史跡谷口古墳保存修理事業報告書』（佐賀県浜玉町教育委員会）
（３）発掘調査の前に、この可能性を指摘したのは土生田純之である。
　　土生田純之1983「九州の横穴式石室」『古文化談義　第12集』
（４）加部二生1999「横穴式石室の前庭について－その起源と系譜－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集
（５）前掲、註(1)文献69・70頁
（６）註(2)文献、51～56頁
（７）小田富士雄1982「横田下古墳」『末盧国』（唐津湾周辺遺跡調査会編、六興出版）
（８）清田廣行1992『別当塚古墳群調査報告書』（荒尾市教育委員会）
（９）城２号墳発掘調査団編1981『城２号墳』（宇土市教育委員会）
（10）別稿で大枠を示した。柳沢一男2001「全南地方における栄山江型横穴式石室の系譜と前方後円墳」『朝鮮学報』179
（11）小田富士雄1970「長崎県大村市黄金山古墳調査報告」『九州考古学』39・40
（12）開正和2000「大村市黄金山古墳の調査」『西海考古』第２号
（13）古門雅高1999「黄金山古墳出土土師器の検討」『西海考古』創刊号

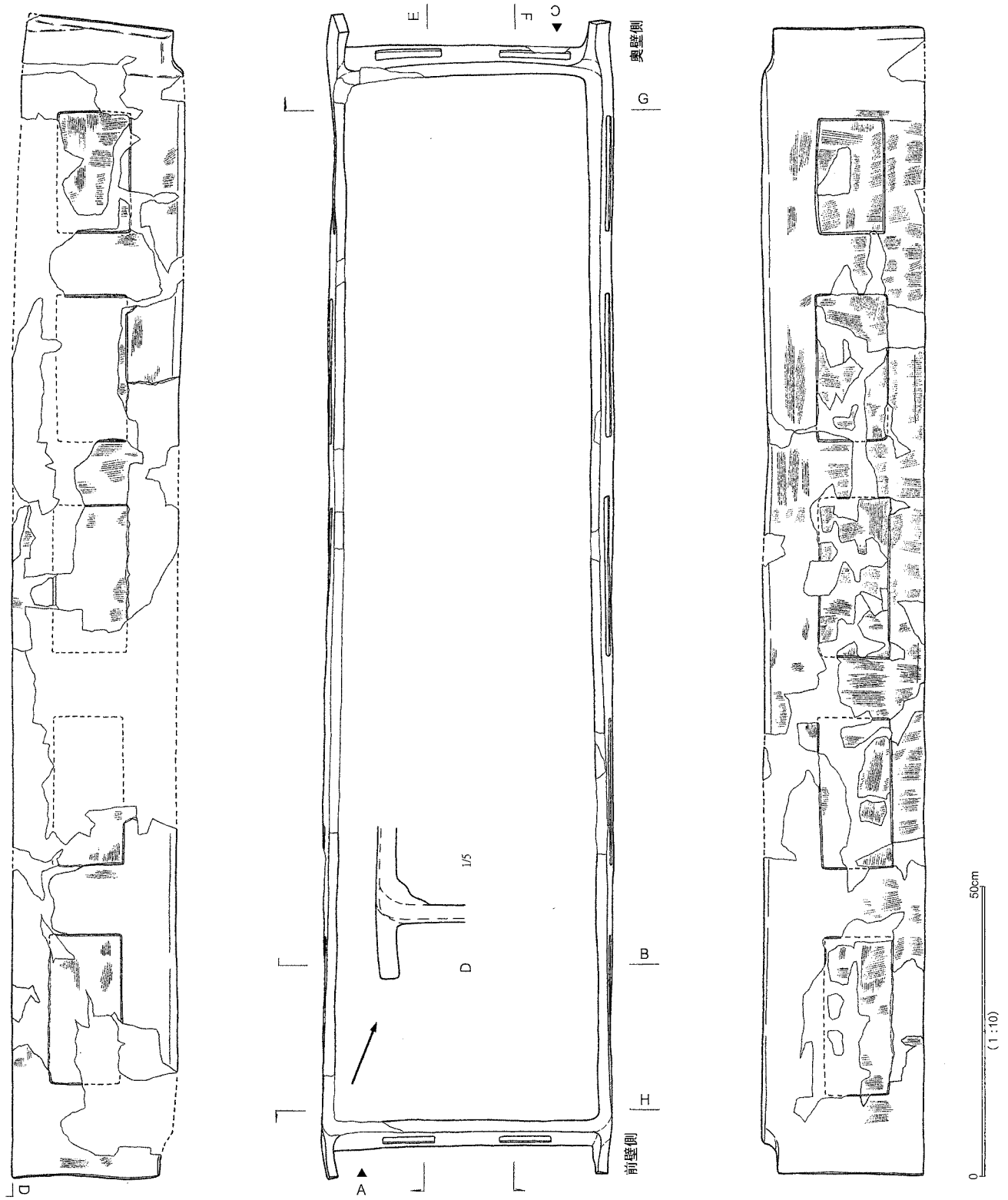
5　2号棺について

東側の側壁に沿うかたちで出土している土製の棺である。全長は202cmで、幅は50cmである。内法は長側が188cm、小口が45cmである。長側板は小口板から5cmほど突出している。長側板の内側に小口板をはさみこむ形態をとり、4辺ともに内側に傾きながらたちあがる形状である。なお、有機質のものが存在した可能性はあるものの、現状で蓋や底板は存在しない。小口板の幅は奥壁側と前壁側とで明瞭な違いはなく、埋葬頭位を断定できるような状況ではない。底面は非常に平滑な点が特徴であるが、上部の端面は外に向かってなだらかに下がっており、平滑ではない。小口外面には正方形の凹みが2つあり、長側外面には長方形の凹みが1辺に5つみられる。これらの凹みは約1cmほどの凹みで、周囲に突帯状の粘土を貼付してつくりだしたものである。長側の凹みは2辺ともに前壁側から4つ目までは13×27cmの長方形であるが、奥壁側の1つだけが最後に長さを調整したためか13×20cmと小さくなっており、この長側の凹みをつくりだすための突帯の貼付は2辺ともに前壁側からなされたものと推測される。成形方法については製作工程復元模式図にゆずるが、重要と思われるのは長側板の突出部が最後に付加される点である。

調整方法は部位によって異なるものの、傾向として外面はハケで、内面はハケのあとにミガキをほどこしている。焼成方法は野焼と考えられ、胎土も埴輪と大差ない印象をうける。色調は茶灰色で、内外面には赤色顔料が塗布されている。

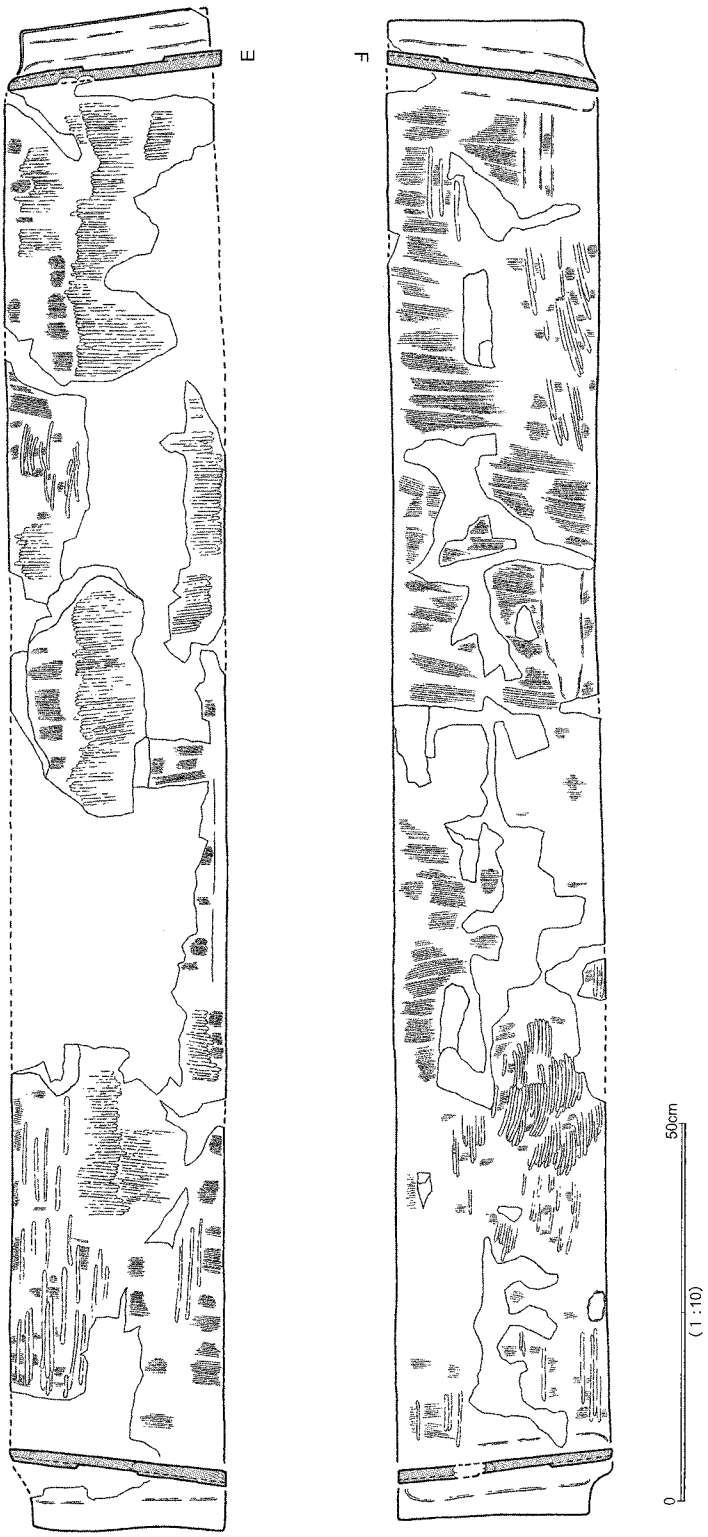
このような土製の棺については大久保徹也氏が網羅的にまとめているが（1996「土製棺」『中間西井坪遺跡』Ⅰ、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター）、2号棺に類似するものはみいだせないのが現状である。2号棺は直接的には箱形石棺などを模倣したものと思われるが、正方形や長方形の凹みが規格的に配置されているように他種の石棺、木棺、土棺からの影響も想定される。このような土製の棺の本体や長持形石棺の蓋石に多くみられる凹みについては、それが棺にほどこされる意味を今後あきらかにしていく必要性があると思われる。

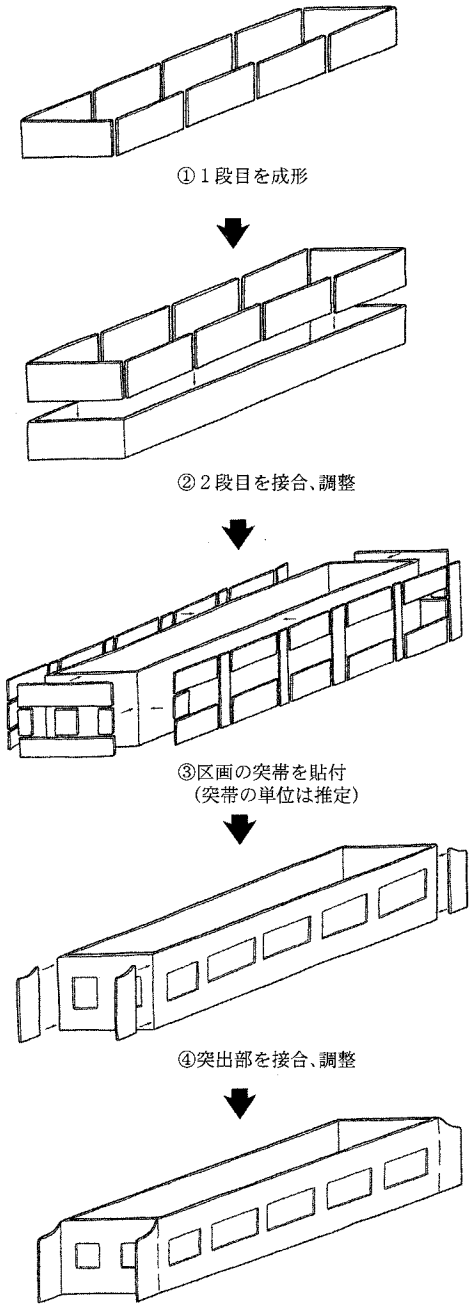
（加藤　一郎）



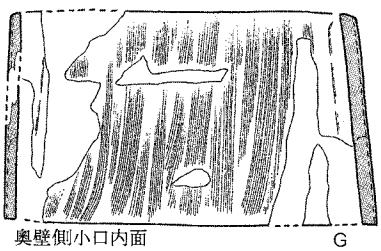
A 前壁側小口外側　　B　　C 奥壁側小口外側

図89　2号棺（1）

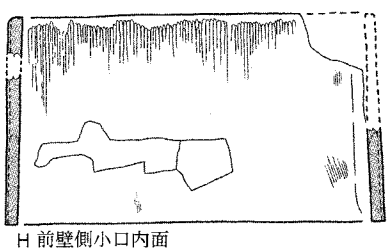




[製作工程復元模式図]



奥壁側小口内面　G



H 前壁側小口内面

図90　2号棺（2）

6　鋤崎古墳出土鏡の位置づけと特色

年代　鋤崎古墳出土鏡計６面の内訳は、中国鏡２面（内行花文鏡１、双頭龍文鏡１）、仿製鏡４（四獣鏡２、捩文鏡１、珠文鏡１）となる。

内行花文鏡（31）は型式分類の鍵となる雲雷文の詳細がよくみえないが、斜角線文が互い違いに表現され、また斜角線文間には同心円でなく渦文を置いているものとみて、立木修分類のⅡ式（立木1993）、岡村秀典の編年では四葉座内行花文鏡Ⅰ式にあたる（岡村1993）ものと想定する。

双頭龍文鏡（45）は西村俊範分類（西村1983）のⅡ式。外区が連弧文でなく素文であり、内区周囲を太い突線で囲むこと、龍を比較的幅広の線で表現していることが特徴である。西村俊範が示したように弥生時代の遺跡からは双頭龍文鏡Ⅰ・Ⅱ式、古墳出土のものはⅢ式にわかれて出土している。鋤崎古墳例以外、Ⅱ式が古墳から出土した例を知らない。

仿製鏡のうち、１号棺副室出土の四獣鏡（28）は、顔を正面に向け、前脚を前方に突き出した獣像の姿態や、界圏があること、外区に菱雲文を用いていることなどから、森下分類の斜縁四獣鏡Ａ系に位置づける（森下1991）。この系列は奈良県天神山古墳出土鏡（伊達ほか1963）、大阪府玉手山西山古墳（梅原1934）、岡山県用木３号墳（神原ほか1975）、大阪府茶臼塚古墳（石田1986）などに例がある。静岡県松林山古墳鏡（後藤ほか1939）なども獣像表現からこの系列に属するものとみるが、外区には二重の鋸歯文（突線付鋸鋸文）を用いており、新しい型式と考えている。獣像がすべて縦向きの頭部をもち、表現もやや簡略化しているが、外区に菱雲文を用いた鋤崎古墳鏡は系列変遷の中段階に位置づけられる。

３号棺棺外の四獣鏡（38）は同じく四獣を主文とするものであるが、獣像表現を異にしており１号棺出土鏡（28）とは別系列と考える。この頭部が扁平な半円形で目を横線で表現した獣像は福岡県萱葉１号墳例（柳田ほか1984）にやや似た表現があり、一応変形の進んだ獣像表現とみられる。一方で本鏡には古い特徴とみられる要素もある。鈕座に段状表現の界圏をめぐらすこと、獣像の胸部に環状乳を表し、それに羽表現をつけた点である。刻みをつけた真の環状乳表現は、単頭双胴神鏡（鼉竜鏡）ではそのａ１式にあてられる奈良県新山古墳出土鏡にしか例がない。この共通性を重視するなら、古墳時代前期の仿製鏡でも古い型式と平行するものと考えられる。しかしこの環状乳が単頭双胴神鏡から取り入れられたのか、あるいは新たに中国鏡を模倣したものなのかわからない。これは同系列品がみつからないと判断できない(1)。一方外区の一条鋸歯文（鋸文）は仿製鏡でも新型式に多い特徴である。こうした問題から本鏡の細かい位置づけについては保留しておきたい。

１号棺副室の珠文鏡は珠文が一列の形式で、外区は素文という特徴をもつ。この類の珠文鏡は前期に製作されたものと考えるが（森下1991）、鋤崎鏡の場合、珠文鏡としては径が大きく、ひとつひとつの珠文の粒が大きい。やや間延びした感を受ける。一部の珠文の脇に弧文状の表現がみられることから、主系列とは別の系列の可能性が考えられる。

捩文鏡はこの鏡群の中でもっとも新しい様相を示す。主文は平行線化した俵文であり、外区には一条の鋸歯文がめぐる。この種の捩文鏡の中でも新しい型式に位置づけられ、それは鋤崎古墳の築造年代に近いものとみる。

中小型鏡主体　鋤崎古墳出土鏡は、副葬鏡数が比較的多いわりには直径20cmを超えるような大型鏡がふくまれず、中小型鏡ぞろいである。もっとも大きいもので径14.8cm（内行花文鏡　31）である。こうした中小型鏡の副葬という特徴は福岡市老司古墳出土鏡群にも共通する。

糸島～福岡平野にかけて古墳時代前期前半では、三角縁神獣鏡を副葬する古墳がめだつ。古墳時代

前期前半－三角縁神獣鏡を中心とする大型鏡の副葬、前期後半－中国鏡・仿製鏡ともに中小型鏡が中心、という推移が認められる。前期後半には単頭双胴神鏡や方格規矩四神鏡など大型の仿製鏡が生産されているが、この地域ではやや時期のくだる福岡市丸隈山古墳をのぞいて大型鏡の副葬例はとぼしい。

副葬方法の特色　鋤崎古墳では3つの棺があり、少なくとも2度にわたる追葬が想定される。副葬鏡も、1号棺副室－仿製鏡2、2号棺棺内－仿製鏡、同棺外－中国鏡、3号棺棺内－仿製鏡、羨道－中国鏡というように各段階にわけて納められたものである。佐賀市関行丸古墳でもひとつの石室内に設けられた3つの屍床それぞれに計4面の鏡が副葬されていた（渡辺1958）。

副葬方法として興味深い点のひとつは、仿製鏡の副葬が中国鏡に先行ないし優先したようにみえる点である。とくに2号棺では中国鏡を棺外に置き、仿製鏡の方を棺内に納めていた。

埋葬施設の形式に関わらず、副葬鏡配置においては一般に中国鏡が優先する。被葬者の近くに置かれる鏡としても中国鏡がまず選ばれる。老司古墳3号石室では、正確な埋葬数についてはわからないが、6面の副葬鏡について中国鏡→仿製鏡という順序が復元される（高倉1989）。鋤崎古墳のように計6面もの副葬鏡がありながら、中国鏡が2面ともに棺外に置かれているのは異例な処置である。

また置き方として出土した鏡が被葬者に接していない点も特徴である。2号棺の捩文鏡が被葬者の頭部付近にあるだけで、他は副室や棺外に置かれていた。なかでも1号棺では2面の鏡が刀剣や工具類とともに副室に納められ、被葬者に接して置かれた鏡はない。基本的に被葬者に接して置かれたとみられる老司古墳とは、この点も異にする。さらに羨道部の双頭龍文鏡も特異な出土状況である(2)。

柳沢一男は、老司古墳や鋤崎古墳において新式の埋葬施設が採用されながらも、副葬品は従来の組合せであることをのべた（柳沢1991）。鏡の副葬があること自体、そして各埋葬に添えられている点もそうした伝統にのっとったものと評価できる。ただし鏡式の選択や配置方法には特異な点があり(3)、それは埋葬儀式の変化と関係するものかもしれない。

（森下 章司）

【注】
（1）獣毛文鏡系と関係する可能性はある。
（2）双頭龍文鏡は羨道部の第2次床面上に、斜めに立った状態で出土した。まわりから他の器物はみつかっていない。この場所にどうしてこの鏡のみが置かれたのか、合理的な説明は用意できていない。
（3）1号棺には蓋があった形跡がなく、追葬時に棺内の鏡を取り出して別の場所に置いた可能性も捨てきれない。

【参考文献】
石田成年 1986　「松岳山古墳群85-1次調査」『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報』1985年度1、19-90頁　17頁
梅原末治 1934　「大阪府下に於ける主要な古墳墓の調査」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告書』第5集　大阪府教育委員会
岡村秀典 1993　「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集、39-82頁
神原英朗・則武忠直・太田耕一・国安敏樹 1975　『用木古墳群』岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報第1集、山陽団地埋蔵文化財調査事務所　図版71-3
後藤守一・内藤政光・高橋勇 1939　『静岡県磐田郡　松林山古墳発掘調査報告』御厨村郷土教育研究会　図版15下
高倉洋彰 1989　「銅鏡」『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集、203-205頁
立木修 1993　「雲雷文帯連弧文鏡考－漢中期の鏡－」『鏡が語る古代史』季刊考古学第43号、38-43頁
伊達宗泰・小島俊次・森浩一 1963　『大和天神山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第22集、橿原考古学研究所　図版27
西村俊範 1983　「双頭龍文鏡（位至三公鏡）の系譜」『史林』第66巻第1号、95-115頁
森下章司 1991　「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻第6号、史学研究会.1-43頁
柳沢一男 1991　「九州古墳文化の展開」『新版古代の日本』3、角川書店、103-124頁
柳田康雄・小池史哲・副島邦弘 1984　『萱葉古墳群』志免町文化財調査報告書第2集
渡辺正気 1958　『佐賀市関行丸古墳』佐賀県文化財調査報告書第7集

7　鋤崎古墳の鉄製品が提起する諸問題

鋤崎古墳からは、３種の異なる棺に伴い、さまざまな鉄製品が出土している。ここでは、これらの遺物群が示す年代観を示し、副葬鉄器が提示する問題点を指摘しておく。

年代観　年代の推移を明確に追求できる鉄鏃などの遺物が出土していないことから、副葬鉄器から導き出せる年代観は、ある程度の時間幅をもって理解すべきものといえる。また、各棺に伴う副葬品組成がそれぞれ異なることから、３棺の時間差をうかがうことも困難である。

古い様相が指摘できるものとして素環頭大刀の存在があげられる。１号棺の棺上突起と、２号棺の棺外から出土した素環頭大刀はともに全長が80cm程度であり、前期古墳から多く出土する規格品といえる。ただし、素環頭大刀は大阪府七観古墳や熊本県江田船山古墳など中期古墳からの出土も一般的であり、必ずしも前期古墳に限定される副葬品とはいえない。

新しい様相としては、鉄鉾や蕨手刀子の存在が注目できる。鉄鉾は前期後葉から中期初頭頃に日本列島内で受容されるが、広く普及するのは中期中葉を待たなくてはならない（高田1998）。鋤崎古墳から出土した鉄鉾は、日本列島内で鉄鉾の受容が本格化する段階の初源的な事例として注目できる。鉄鉾は１号棺副室や３号棺から出土しているが、ともに身部が剣身のように幅広で薄く、日本列島から出土した鉄鉾のなかでは古い特徴をみせる。１号棺副室出土例は、関から袋部に移行する頸部の断面が方形を指向しているが、この形態も古い時期の特徴といえる。なお、３号棺から出土した鉄鉾は関が不明瞭な形態である。一般的に無関の鉄鉾は中期中葉以降に増加するが、本例は導入段階の形態的な揺籃状況を示すものとして理解できる。

蕨手刀子は、鹿角装刀子や柄を鉄にうつした鉄製柄付刀子と関連をもちながら、中期初頭に成立する。柄の端部を渦巻き模様にする形態の遡源は朝鮮半島南部の鉄製儀器に求められ、蕨手刀子は朝鮮半島南部との交流のなかで生み出された、儀器化した刀子と捉えられる。１号棺副室で出土した３点の蕨手刀子は、日本列島内における最古級の事例といえるだろう。

以上にあげた遺物の様相は、古墳時代前期から中期への移行段階を示している。ここでは、鉄鉾や蕨手刀子など古墳時代中期に盛行する遺物の出現を積極的に捉え、鋤崎古墳の年代を古墳時代中期初頭と評価したい。直接比較できる遺物が出土した古墳として、初源期の蕨手刀子をもつ岐阜県昼飯大塚古墳があげられ、大阪府和泉黄金塚古墳、三重県石山古墳なども古墳時代前期から中期に移行する中間的な様相が見出せる事例として同じ段階に位置づけることができる。

朝鮮半島との関連　上述の遺物にとどまらず、鋤崎古墳から出土した副葬鉄器には朝鮮半島南部との関連がうかがえるものが少なくない。３号棺の棺外から出土した曲刃鎌もそのひとつである。一般に、直刃鎌から曲刃鎌への移行は古墳時代中期中葉と把握されるが、近年、兵庫県行者塚古墳のように、中期前半の古墳から曲刃鎌が出土する事例が知られるようになった。鋤崎古墳例は、屈曲が弱く先端が丸味をおびるなど、典型的な曲刃鎌とは異なる形態をなしている。類似した形態の曲刃鎌は、朝鮮半島南部から出土する事例に多くみることができ、強い関連性がうかがえる。ただし、鋤崎古墳から出土した曲刃鎌の基部の折り返しは、古墳時代前期からつづく日本列島での伝統的な方向（いわゆる甲技法、都出1989）に向いており、朝鮮半島南部とのかかわりについては慎重な議論が必要である。

鉄斧は有肩形態が２号棺の棺外から、無肩形態が３号棺の棺外からそれぞれ１点ずつ出土している。朝鮮半島南部では金海大成洞13号墳などにみられるように、有肩鉄斧と無肩鉄斧が一対となって扱われる傾向が見出せる。鉄斧の形態差は横斧と縦斧という機能の違いを示すと想定でき、日本列島内の前中期古墳にも同様の組合せが認められる。彼我において２種の鉄斧にたいする共通した使用形態が

うかがえる。鋤崎古墳では、２種の鉄斧がともに１号棺に伴う可能性があるが、報告どおりそれぞれ異なる棺に伴うとすれば、有肩鉄斧と無肩鉄斧の一対が分有されていることになり、農工具や短甲の有無と合わせ、各棺に伴う副葬鉄器の組成差が明確になる。換言すれば、３棺に伴う副葬品がそれぞれ補完的な役割を果たし、総体としてひとつの副葬品の組合せを形成しているようにもみえる。

３棺合葬の意義　副葬品の分有と並んで留意したいのは、３棺の合葬形態である。竪穴式の墓壙内に納められるという決定的な違いがあるものの、中期前葉には、行者塚古墳、和泉黄金塚古墳、大阪府心合寺山古墳、石山古墳など３棺併葬の事例が各地で認められ、棺形態や副葬品組成がそれぞれ異なる事実が明らかにされつつある。鋤崎古墳にみられる各棺の形態差と副葬品組成の違いに、上述の事例と通底した要因を見出すことは許されよう。

被葬者の性別　鋤崎古墳からは鉄鏃の出土が知られていない。鉄鏃の有無は、古墳被葬者の系譜の違いや性別差を示す可能性があり（清家1996）、注目できる。短甲をもつ３号棺に鉄鏃が存在しないことの解釈は難しいが、中心的な存在である１号棺に鉄鏃が伴わない点を積極的に評価してもよいだろう。１号棺の副室に納められた鉄器をみると、刀剣類と比べ刀子の数が卓越する。前方後円墳の中心埋葬施設において、鉄鏃をもたず多量の刀子が副葬される傾向は、女性を埋葬した熊本県向野田古墳にみられ、大分県免ヶ平古墳も同様の特徴をもつ事例として注目できる。また、円墳であるが、近接する地域の首長墓として、鋤崎古墳と同様に初源期の蕨手刀子が共伴する福岡県七夕池古墳も女性被葬者の具体例に加えることができるだろう。鋤崎古墳の１号棺には針が伴うことも留意したい。針や多数の刀子をもつことは被葬者を女性に限定する根拠とはいえないが、上述の事例は、鋤崎古墳１号棺の被葬者が女性である蓋然性を強く示唆する。

対照的に、短甲をもつ３号棺の被葬者は男性と推定できる。また、消極的な根拠であるが、１号棺に副葬された鉄器組成との類似から、２号棺の被葬者は女性の可能性がある。

鋤崎古墳副葬鉄器の意義　鋤崎古墳から出土した副葬鉄器には、鉄鉾、蕨手刀子、曲刃鎌が含まれ、古墳時代中期に盛行する様相のさきがけとして把握できる。これら新しい様相の副葬品は、朝鮮半島南部との積極的な交流のもとで日本列島内に成立したことは論をまたない。鋤崎古墳の鉄器組成は、中期初頭における鉄器の形態変革を象徴する存在として捉えることができよう。和泉黄金塚古墳の東槨からは鉄鉾が、昼飯大塚古墳の墓壙内からは小型化した蕨手刀子が出土しており、鋤崎古墳でみられた鉄器組成の一端が近畿地方とその周辺の中期初頭の有力古墳にも見出せる。鉄鉾や蕨手刀子といった新形態の鉄器は、中期初頭のうちに日本列島内の有力首長層に共有されたことが分かる。

いっぽう、中期前葉の北部九州においては、新しい副葬品組成がより広い階層にいち早く浸透していく。中期前葉の鉄鉾や曲刃鎌の出土例は北部九州に集中し、蕨手刀子の分布も近畿地方と並んで北部九州にひとつの核がある。北部九州と瀬戸内地域以西における鉄器変革の跛行的様相は中期前葉を通じて解消され、やがて中期中葉の諸変革（都出1989）が日本列島規模で引き起こされたと評価できる。鋤崎古墳の副葬鉄器にみる先進性は、日本列島内の有力首長層と朝鮮半島南部との交流の窓口として、諸変革を優先的に主導した被葬者たちの性格を象徴するものといえるだろう。

（鈴木　一有）

【参考文献】
清家　章　1996「副葬品と被葬者の性別」『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会
高田貫太　1998「古墳副葬鉄鉾の性格」『考古学研究』第45巻第１号
都出比呂志　1989「農具鉄器化の諸段階」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店

8　素環頭鉄刀の把の構造について

鋤崎古墳からは２点の素環頭鉄刀が出土している。刀装具などの有機質の残存状況はそれほど良好ではないが、その２点がそれぞれ異なる把の構造をもつことが確認できたので、ここでは素環頭鉄刀の把の構造について検討をおこない、そこから派生する問題について若干の考察をくわえたい。

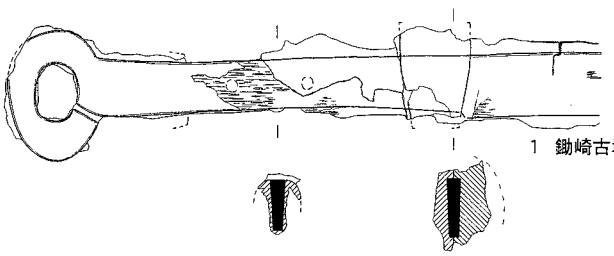
鋤崎古墳29（図73）は、鞘、把の木質の遺存状況は非常に悪く、わずかに確認できるのみである。そのわずかな痕跡を頼りにすると、鞘口と把縁の境目が関と同じ位置にくること、把の木質は素環頭部にまで達すること、把部の背側には木質が存在しないことが観察できる。関の形状はナデ関で、目釘孔は存在しない。素環頭部の茎部への接合方法はＸ線写真などをふくめて観察をおこなったが、決定的な結論をえるにはいたらなかった。

鋤崎古墳32（図91－１）は、鞘、把の木質の遺存状況が比較的良好である。鞘は鞘尻、鞘口の構造を確認するにはいたらなかったが、基本的には２枚の板を貼合せたものであろう。把は一木造で落し込みによって装着されたものであるが、把縁には別の装具が貼合せで鐔状に装着されていたことがわかる。また、関から素環頭部へ9.8cmの位置の背側では木質の段差らしき痕跡が確認できる。この段差は把とは別の木質を背側からかぶせたことによるものであることが佩裏側で観察できる。この段差と把縁装具による段差によって把握部を区画していたものと思われる。この把握部のやや素環頭部寄りに目釘孔が２つ確認されているが、目釘の材質やその状態については観察することができなかった。関の形状はあまり判然としないが、あえて表現するならば図示したような小さく斜めに落ちる形態となろう。素環頭部の茎部への接合方法は、素環頭部を茎部の背側に鍛接したか、茎部から素環頭部を造出したかであろう。なお、Ｘ線写真により茎部腹側と素環頭部は接着しないことが判明した。

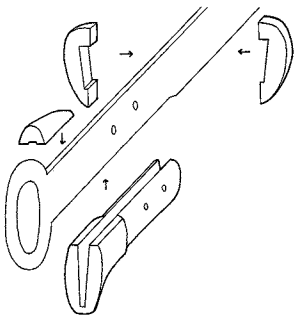
図91－２は京都府椿井大塚山古墳出土のもので、把部の有機質の遺存状況は比較的良好である。把縁は、両端に樹脂が充填されているので別造りの装具にもみえるが、断面の観察から落し込みによって装着されていることがわかる。したがって、おそらく把縁は一木造の把から鐔状に削り出されていたのであろう。また、把縁から素環頭部へ10cmほどのところにも木質の段差が確認できる。これも基本的には把縁と同様に削り出しによるものであるが、背側の段差については菊地芳朗氏が指摘するように把とは別の木質を背側からかぶせたことによるものである（菊地1996）。この段差と把縁の段差とのあいだが把握部となっており、把の木質の上に二つ折りの布を巻いていることが観察できる。この把握部の把縁寄りには目釘孔が確認できる（１つは確実だが、もう１つは曖昧）。また、把の木質は素環頭部にまで達していることが観察できる。関の形状は判然としないが、大きく落ちることはないであろう。また、素環頭部の茎部への接合方法は茎で巻込む方法が考えられる状態ではないので、何らかの方法で鍛接したものと思われる。

図91－３は奈良県池ノ内７号墳出土のものである。素環頭部周辺以外はあまり木質の遺存状況は良くない。素環頭部端から15cmほどのところで鞘と把の境界のラインがみられ、この位置に関がくるものと思われる。関の形状は判然としないが、大きく落ちることはないようである。茎部の断面は刃の研ぎ出しはないものの三角形になっている。現状で把部の背に木質は確認できないので、把は落し込みによって装着していたものと判断される。把縁の形状は不明であるが、素環頭部端から５cmほどのところでは把握部の素環頭部側の段差が確認できる。また、特筆すべきは把の木質が素環頭部をほぼ覆うところまで達していることである。なお、茎部の素環頭部寄りには目釘孔が２つ確認できる。

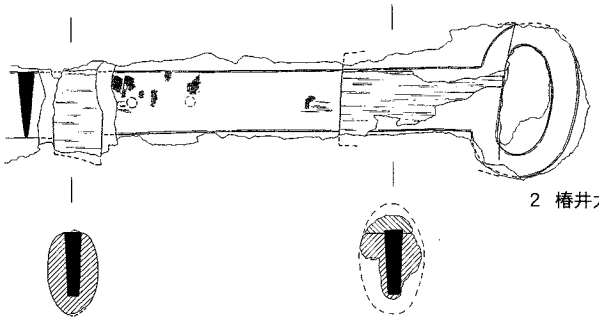
図91－４は島根県大成古墳出土資料で、刀装具の遺存状況が良好なことで古くから知られるものである。実見できる立場に筆者はないので、これまでの複数の報告（置田1989、大野1997、古谷1999な



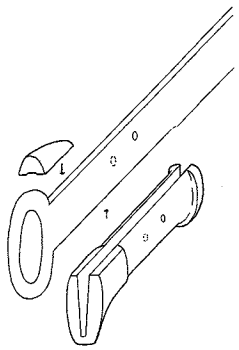
1　鋤崎古墳（32）



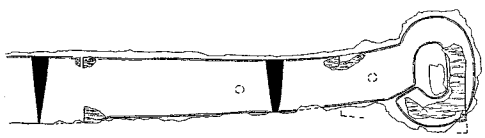
1の復元模式図



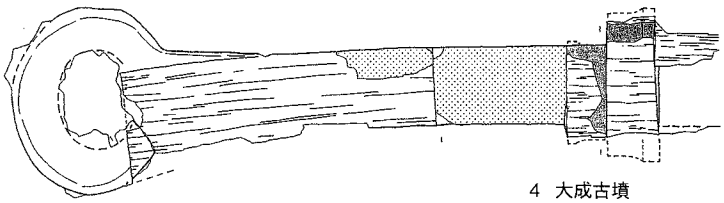
2　椿井大塚山古墳



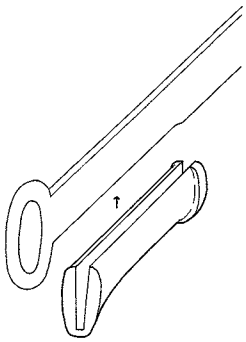
2の復元模式図



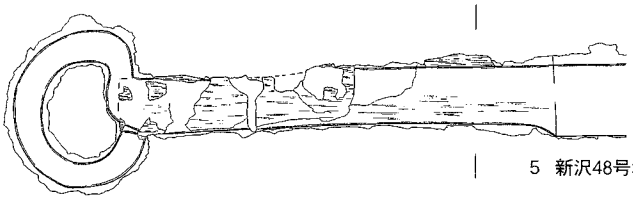
3　池ノ内７号墳



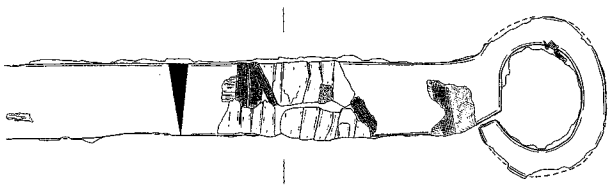
4　大成古墳



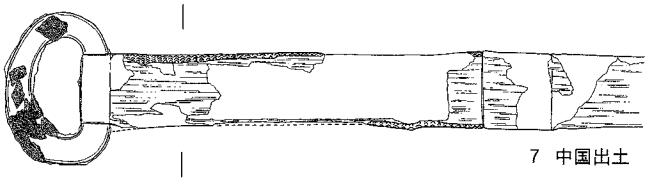
4の復元模式図



5　新沢48号墳



6　中国出土



7　中国出土

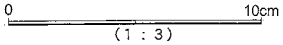


図91　素環頭鉄刀の把の構造

ど）を総合すると、把は一木造で落し込みによって装着されており、把縁には削り出しによって鐔状の段差がもうけられているようである。把の木質の腹側での厚さは１～２㎜と非常に薄いつくりになっている。また、把の木質は素環頭部にまで達している。なお、目釘孔は存在せず、素環頭部は茎部に鍛接しているようである。

図91－５は奈良県新沢48号墳出土のもので、背側・腹側で木質の接着ラインがみられることから、把は落し込みではなく、２枚の板を貼合せたものであることがわかる。関の形状はあまり判然としないが、比較的大きく落ちる。また、把の木質は素環頭部にわずかに達する程度である。なお、目釘孔は存在せず、素環頭部は茎部に鍛接しているようである。

図91－６・７は天理参考館所蔵の中国出土とされるもので、置田雅昭氏によってその詳細が報告されているものである（置田1989）。６は把の有機質が一部しか残っていないものの、木質の上に布を巻き、さらにその上に革を巻いていることが観察できる。ただし、腹側は錆化による破裂がひどく、木質が一木造による落し込みなのか、２枚の板をもちいているのかは不明である。なお、把を構成する有機質は素環頭部までは達しない。また、素環頭部には布が付着している。関は判然とせず、落ちもほとんどない。また、目釘孔は現状では確認されていない。７は有機質が良好に残存している。鞘と把の境界は素環頭部端から19cmほどのところにある。把は一木造による落し込みによって装着されており、その上に赤彩された組紐が巻かれている。把には素環頭部端から16cmほどの腹側に若干の突起がみられるほかは、段差などはみられず、鞘と同じ幅を保っている。把の木質の腹側での厚さは２～３㎜と非常に薄くなっている。また、把の木質は素環頭部までは達せず、素環頭部には６と同様に布が付着している。なお、現状で目釘孔は確認できず、素環頭部は茎部に巻込まれて接着している。また、刀身は糸で巻かれたあとに鞘に収められている。

以上が現時点で筆者が把握している各資料の概要である。まず、中国出土と日本出土のものには、把における明瞭な段差の有無、把の木質が素環頭部にまで達するか否か、素環頭部における布付着の有無という点で明らかに差異が存在することが指摘できる。

把に明瞭な段差をもち、把の木質が素環頭部まで達するような拵が日本出土のものに限定されることは、刀本体は別にして、そのような拵が列島内において製作されたとする多くの先学の指摘を追認するものであろう。なお、奈良県東大寺山古墳出土の青銅製環頭に境界線らしいものが刻まれていることからも、列島における古墳時代前期の拵は把の木質が環頭部にまで達することを意識していたことがうかがえる（図92）。また、素環頭部に付着した布について置田氏は、紐を素環頭部に通して輪に結んだもので（図93）、主にそこに腕を通して刀の脱落を防ぐ用途であったことを推定し、列島産の鉄刀にみられる勾金の出自をそこに求めた（置田1985）。車崎正彦氏はこれをうけて、「輪を結ぶ紐」に勾金の系譜がたどれるとすれば、さらにその「結び」が勾金を飾る三輪玉の起源となりうるという非常に魅力的な見解を提示している（車崎1987）。ただし、この置田氏、車崎氏の見解は、中国で実際に腕に通して使用していたかが不明であることや、日本出土資料で素環頭部に布の付着がみられない現状を考えると、いまだ仮説の域を脱しえない。

話を日本出土資料に限定すると、把の構造にも幾つかの種類があることが図91からわかる。まず、大きな構造上の差異として、把の木質を落し込みによって装着したもの（１～４）と２枚の板を貼合せたもの（５）のあることが指摘できる。５の新沢48号墳出土資料は、素環頭鉄刀本体についての先行研究から時期が下るにつれて関の落ちが大きくなっていくことが明らかであること（池淵1993など）や古墳自体が中期に位置づけられることから１～４の前期古墳出土資料に比べて時期の下るものと思われる。よってここでは話が煩雑になるのを避けるために、１～４の前期古墳出土資料について考え

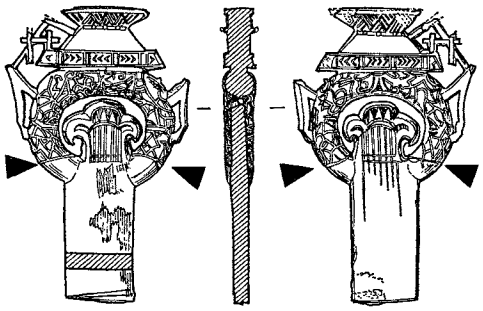


図92　東大寺山古墳の青銅製環頭

図93　画像石にみる素環頭鉄刀の佩用

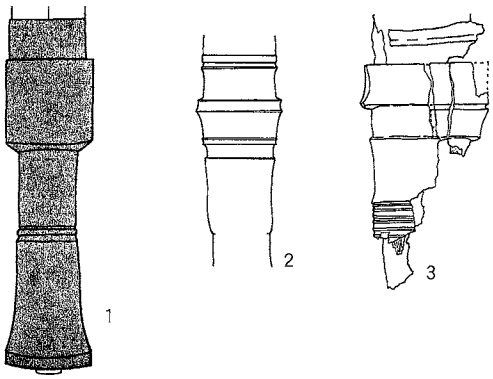


図94　木製刀剣装具の左右対称性

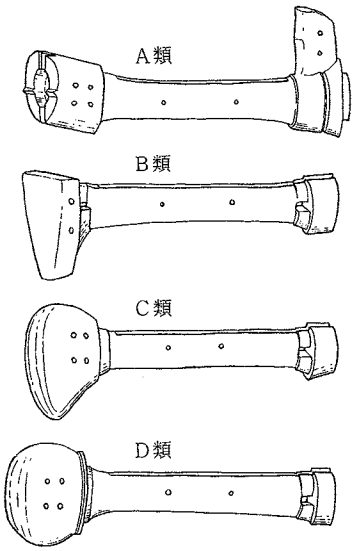


図95　布留遺跡出土の木製把装具

てみたい。

先にも述べたように、1～4はすべて把の木質を落し込みによって装着しているが、把の素環頭部寄りに把とは別の木質を背側からかぶせているもの（1・2）とそれがないもの（3・4）の2者が存在する。この2者が同時並存していたのか、時期差を示すのかは不明であるが、前者には素環頭鉄刀としては珍しく目釘孔が共通してみられる点が注意される。この目釘孔は、背側からかぶせる別材によって、把を固定するための布巻きの面積が減少したことを補う工夫といえるかもしれない。しかし、目釘孔という刀本体の構造と把の構造との間にどこまで関連をみいだせるのかは不明である。そもそも大成古墳出土資料のように把を落し込みによって装着し、繊維状の有機質と布を巻くことのみで、固定するという目的が達せられたとするならば、それほどの工夫は必要ないかもしれない。また、大成古墳出土資料は、把の腹側における木質の厚さが1～2㎜ほどしかないらしく、固定すること、ひいては実用に耐えうることはそれほど必要とされていなかった可能性がある。

構造上それほど意味がないとなると、この背側からかぶせる木質はどのような理由から必要とされたのであろうか。その理由の1つとして、一部の木製剣装具（図94－1）にみられるような左右対称性を志向していた可能性はないだろうか。鹿角製剣装具と鹿角製あるいは木製刀装具との同一性はすでに明らかであるが、同じことが木製刀剣装具にもあてはまる可能性はある。そうした目でみてみると、落し込みという左右対称性をとりにくい装着法でありながら把縁に左右対称性を志向している木製刀装具が存在することがわかる（図91－4、図94－2・3）。そうなると図94－1の権現山51号墳は古墳時代前期初頭に位置づけられることから、前期古墳出土の素環頭鉄刀における背側からかぶせる木質は古い要素であり、それが簡略化される方向で変化が進んだと考えられなくもない。

前期古墳出土の素環頭鉄刀の把構造は車崎氏も指摘するように、奈良県天理市布留遺跡三島地区から出土した古墳時代中期に位置づけられる4種の木製把装具（図95）のうち、B類とされているものやその類例の出自と関係が深そうである（車崎1987）。三重県石山古墳より出土した素環頭鉄刀の装具には直弧文の施されたものも存在するらしいことからも（小林1952）、素環頭鉄刀の拵がのちの倭装といわれる拵と関連することが注意される。今後、装具の材質や

剣・刀といった区分をこえた総合的な検討をおこなっていく必要があると思われる。

一般的に刀剣類では弥生時代と古墳時代との間に型式的断絶があるとされる。それはおおむね首肯されるものであるが、拵については弥生時代からの影響を受けている面も指摘できる。奈良県東大寺山古墳の青銅製環頭をもつ鉄刀にみられる把頭の裁断は、弥生時代の日本海沿岸地域にみられる特徴であり、古墳時代に引継がれたものとみることができよう（村上2000）。弥生時代においては、北部九州では船載品の素環頭鉄刀にあまり手をくわえず、日本海沿岸では素環頭部の裁断や独自の拵を施すといったように、その扱いに地域差がみられる。しかし、古墳時代になるとそのような地域差はなくなり、おしなべて画一的になる。古墳時代開始期前後はそうした地域差の払拭という前代との非連続性をもつ側面と、その一方で、ある地域にみられる伝統の汎列島的採用という前代との連続性をもつ側面が同時に創出される時期であったようである。そうした時代の流れの中で、素環頭鉄刀も素環頭部の裁断といった日本海沿岸地域での伝統を摂取しつつも、列島独自の拵を創出することによって、列島内での秩序の具現化やアイデンティティーの表現（村上2000）としての役割を他の刀剣類とともに担っていたことであろう。しかし、列島における長大な鉄刀の生産は古墳時代前期後半からであり、それ以前の刀身は船載品であったのもまた事実のようである。東大寺山古墳出土の「中平年」銘をもつ鉄刀にみるように、刀身は大陸との紐帯を明示しておきながらも、拵では列島独自のデザインを採用するという相反する様相が１つの器物に同時に表現されていることは古墳時代前期の刀剣類を考える上で重要な点であろう。

いたずらに文を連ねてきたが、明らかなのは、材質の区別なく刀剣装具の系統的な把握をおこなう必要があるということであろう。そのためには良好な資料の増加も望まれるが、あらたな視点による既存資料の再調査も必要であろう。紙幅の都合もあり、言及できなかった点も多いものの、本稿が古墳時代における刀剣装具を考える上での一助となるならば、幸いである。

（加藤　一郎）

【引用・参考文献】
池淵俊一　1993「鉄製武器に関する一考察――古墳時代前半期の刀剣類を中心として――」『古代文化研究』第１号、島根県古代文化センター
今尾文昭　1982a「中平紀年銘大刀をめぐる問題――東大寺山古墳出土三葉環頭大刀の系譜――」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズⅠ
今尾文昭　1982b「素環頭鉄刀考」『考古学論攷』第８冊、奈良県立橿原考古学研究所
大野　薫　1997「古墳時代鉄製素環頭大刀の観察――東京国立博物館所蔵資料をめぐって――」『研究調査報告』第1集、（財）大阪府文化財調査研究センター
置田雅昭　1985「古墳時代の木製刀把装具」『天理大学学報』第145輯、天理大学学術研究会
置田雅昭　1989「中国 鉄素環頭大刀の把の構造」『古文化談叢』第20集（中）、九州古文化研究会
菊地芳朗　1996「前期古墳出土刀剣の系譜」『雪野山古墳の研究』考察篇、八日市市教育委員会
車崎正彦　1987「剣と玉と」『早大所沢文化財調査室月報』№23、早大所沢校地文化財調査室
小林行雄　1952「鉄製素環頭大刀について」『福岡県糸島郡一貴山村田中銚子塚古墳の研究』
藤井康隆　2001「大刀の復元的検討」『寺戸大塚古墳の研究』Ⅰ、前方部副葬品研究篇、財団法人向日市埋蔵文化財センター
古谷　毅　1999「東京国立博物館所蔵の遺物」『島根県安来市大成古墳第４・５次発掘調査報告書』島根大学考古学研究室・安来市教育委員会（『荒島古墳群発掘調査報告書』抜刷）
古谷　毅　2001「鉄製刀剣の系譜」『季刊考古学』第76号、雄山閣
町田　章　1976「環頭の系譜」『研究論集』Ⅲ、奈良国立文化財研究所
村上恭通　2000「鉄器生産・流通と社会変革――古墳時代の開始をめぐる諸前提――」『古墳時代像を見なおす――成立過程と社会変革――』青木書店
禹　在柄　1991「素環刀の型式学的研究」『待兼山論叢』史学篇、第25号、大阪大学文学部

［挿図出典］
図91　１筆者実測、２筆者実測、３筆者実測、４（大野1997）を一部改変、５筆者実測、６・７（置田1989）をもとに改変・加筆
図92　金関　恕　1975「卑弥呼と東大寺山古墳」『古代史発掘』６、講談社に加筆
図93　山東省博物館・山東省文物考古研究所（編）　1982『山東漢画像石選集』図363の一部
図94　１権現山51号墳［近藤義郎（編）　1991『権現山51号墳』を一部改変］、２寺戸大塚古墳［(藤井2001）より］、３雲部車塚古墳［(藤井2001）より］
図95　山内紀嗣　1995「古墳時代の木製刀剣装具について」『布留遺跡三島（里中）地区発掘調査報告書』埋蔵文化財天理教調査団を一部改変

なお、資料調査・掲載許可において以下の諸氏・機関より御高配賜った。末筆ながら記して感謝の意を表したい。
（敬称略、五十音順）
小田木治太郎、小池香津江、阪口英毅、鈴木裕明、千賀　久、藤原郁代、山中一郎
京都大学総合博物館、天理大学附属天理参考館、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

９　鋤崎古墳出土短甲の意義

（１）鋤崎古墳出土短甲の特徴

鋤崎古墳から出土した長方板革綴短甲とその意義について若干の考察を加えておきたい。本短甲は後胴７段、前胴６段構成とする通有の長方板革綴短甲である。後胴中央部分の残りが悪く、すべての地板が復元できたわけではないが、その配置は復元可能であった。復元された地板配置は、中段地板（長側第１段）が左右胴各４枚と後胴中央板からなる９枚構成。下段地板（長側第３段）が左右胴各３枚と中央板からなる７枚構成であった。また前胴上段（竪上第３段）帯金は存在しない。

（２）長方板革綴短甲に占める位置

鋤崎古墳出土の長方板革綴短甲において最も注目できる特徴が中段９枚、下段７枚とする地板の配置である。長方板革綴短甲の地板配置に関してはすでに、阪口英毅氏（阪口1998)や筆者（橋本1999）が注目しており、中段・下段における地板配置方法によってこれまで５つの型式に分けられ、それらはおおむね製作段階差を表すとみる。すなわち、長方板革綴短甲の地板配置は最も地板を細分するものから、大型化・地板枚数の少量化という方向で位置づけることが可能で、最終的には横矧板鋲留短甲へ連なるものとみることができる。

これまでの長方板革綴短甲出土例中で最も古く位置づけられるのは、中段・下段ともに９段構成とする例である。大阪府盾塚古墳、鳥取県古郡家１号墳出土の２例があたる。これをⅠ式とした。次に中段・下段ともに７枚構成とする例が出現する。代表的な資料に東京都野毛大塚古墳、大阪府豊中大塚古墳出土例などがある。これをⅡ式とする。Ⅲ式は中段を７枚、下段を５枚構成とするもの。Ⅳ式は中段を５枚、下段を７枚構成とするもの。最も新しく位置づけられるⅤ式は中段・下段とも５

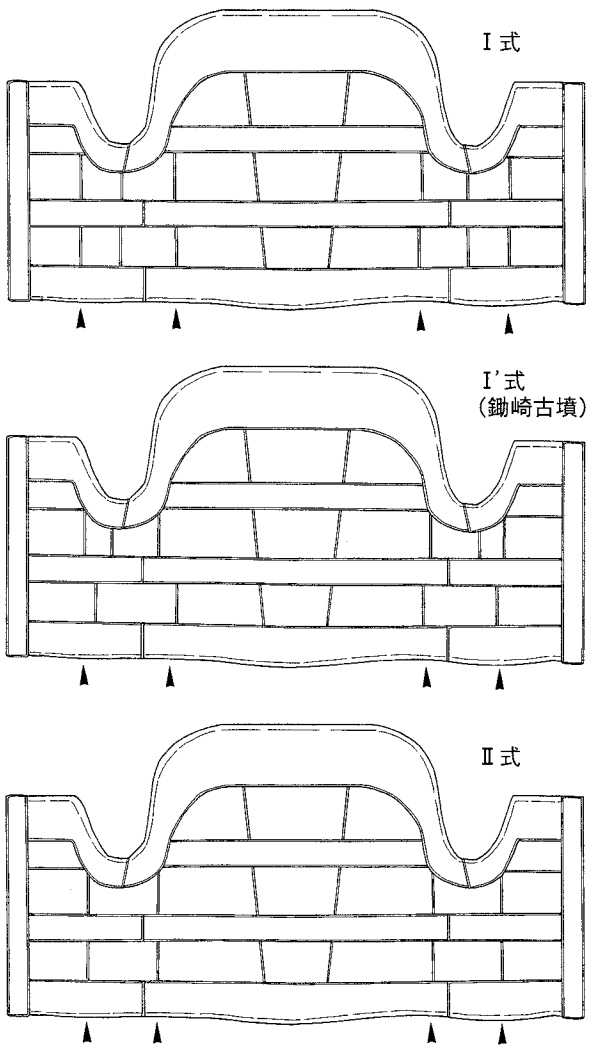


図96　鋤崎古墳出土長方板革綴短甲の関連型式展開模式図

枚で構成するものである。

そこで鋤崎古墳例をみると中段が９枚構成でⅠ式、下段は７枚構成でⅡ式に共通している。Ⅰ式とⅡ式の中間形態ともいえるであろう。この型式をひとまずⅠ’式としよう。これはこれまで同一の形態がほとんど認められていないものである(1)。しかし、その形態は異例なものではなく、むしろあり得るべき資料ではあった。というのは短甲では複雑かつ急なカーブをもつ脇部をいかに分割し組み合わせるかが最も技術的な工夫を要する部分である。そのため、難度の高い中段地板は細分しながらも、裾に近くやや緩やかな下段地板から大型化を開始することはむしろ本質的な方向性である。

すなわち鋤崎古墳の長方板革綴短甲はⅠ式をベースとし、カーブの複雑な中段地板においては地板を細分したが、カーブが緩い下段地板はⅠ式よりも地板の大型化の方向へ一歩あゆみだした形態をとっているとみることが可能である。その形態は最古の地板を細分する一群から、わずかに技術的改良が加わった製作段階に属するといえよう。ただし、Ⅱ式出土古墳をみてもわかるとおり、これらは製作段階としては設定可能であっても、ほとんど実質的な時間差をもたないといって良い。すなわち鋤崎古墳出土の長方板革綴短甲は帯金構造を基本とする定型化した中期甲冑の中で、最も初現期の形態的特徴をもっているといえるであろう。

また鋤崎古墳の短甲では帯金の一部に長さを継ぎ足すような補足小板を加えていることも、初期の設計および裁断に技術的な未熟さがうかがえる段階のものと評価可能である。

（３）甲冑出土古墳としての鋤崎古墳の意義

表13に西日本における古墳時代前期の甲冑（表上半）と長方板革綴短甲出土古墳（表下半）を示す。前期甲冑、長方板革綴短甲ともに、その分布は各地の拠点的な古墳に点在するといったあり方である。すでに松木武彦氏の指摘があるが（松木1992）、前期甲冑と長方板革綴短甲などの中期前半の甲冑出土古墳は基本的に同一地域に存在せず、系譜的な連続性が認められないことが一般的である。その背景には中央－地方を巻き込むような政治変動や朝鮮半島情勢の変化との関係も指摘されている。

表13　西日本における古墳時代前期甲冑と長方板革綴短甲

古墳名	地域		墳形・規模	埋葬施設	甲	冑	付属武具
奥の前１号	岡山	久米郡久米町油木北	前方後円	組合石棺	竪矧板革綴		
浦間茶臼山	岡山	岡山市浦間茶臼山ほか	前方後円・約138	竪穴石室	小札		
中山Ｂ－１号	島根	邑智郡石見町	前方後方・22.3	組合石棺	方形板革綴		
若八幡宮	福岡	福岡市西区徳永字下引地	前方後円・約47	粘土槨	方形板革綴		
石塚山	福岡	京都郡苅田町富久町	前方後円・120	竪穴石室		小札革綴冑	
稲童15号	福岡	行橋市稲童	円・6	組合石棺	方形板革綴		
甕琶隈	福岡	行橋市延永	円・25	竪穴石室	小札革綴甲		
熊本山	佐賀	佐賀市久保泉町	？	舟形石棺	方形板革綴		
古郡家１号・3号棺	鳥取	鳥取市古郡家	前方後円・90	組合石棺	長方板革綴		
旗振台・北槨	岡山	岡山市門田	方・27	粘土槨	長方板革綴	三角板革綴衝角付冑	
佐野山古墳	岡山	総社市井尻野	方・25	組合石棺	長方板革綴	？？衝	三角板綴
月の輪	岡山	久米郡柵原町飯岡	円・60	粘土槨	長方板革綴		頸・肩・草
天神山１号	山口	山口市大字吉敷	円・30～40	竪穴石室	長方板革綴		頸・肩
国高山	徳島	阿南市内原町大字松	前方後円・50	竪穴石室	長方板革綴		
大代	徳島	鳴門市大津町大代	前方後円(54)	竪穴・舟形石棺	長方板革綴		
津頭東	香川	綾南町羽床下	円・35	粘土槨	長方板革綴		
日吉山	愛媛	今治市宮下通	円？	木棺直葬	長方板革綴		
鋤崎	福岡	福岡市西区今宿青木	前方後円・62	横穴石室	長方板革綴		
将軍塚	熊本	下益城郡城南町塚原	円・25	（横穴石室）	長方板革綴		
小坂大塚	熊本	上益城郡御船町小坂	円・31	横穴石室	長方板革綴	冑	
岬	大分	西国東郡香々地町香々地	円・6	竪穴石室	長方板革綴		
浄土寺山	宮崎	延岡市大貫町	前方後円・34.5	粘土槨	長方板革綴	三角板革綴眉庇付冑	
岡崎１５号	鹿児島	肝属郡串良町上小牧	円(8.5)	組合石棺	長方板革綴	？	

表から明らかなように前期から中期へ同一地域内において甲冑出土古墳の継続的な造営は一般に見られない。しかし、この中で例外的な存在が糸島地域・今宿平野東部の古墳群である。すなわち、ここでは方形板革綴短甲を保有した若八幡宮古墳(48m)から長方板革綴短甲を保有する鋤崎古墳(62m)へと連続的な甲冑保有と古墳築造が行われているのである。しかも両古墳は埋葬施設に違いがあるが、いずれも中型の前方後円墳であり、鋤崎古墳が若八幡宮古墳の後継首長墳であることは疑いえない。

また、この今宿平野東部の古墳群内においては中型前方後円墳・兜塚古墳から鋲留短甲が出土しているし、円墳・今宿谷上２号墳からも甲冑片が出土している(2)。さらに丘陵を挟んで平野を違えるが、距離的には近接する羽根戸南Ｅ－１１号墳から三角板革綴短甲が出土しており、前期以来、中期末に至るまで継続的な甲冑を保有するきわめて特殊な地域であるといえる。

他でも京都府丹波地域の方形板革綴短甲を出土した園部垣内古墳と長方板革綴短甲を出土した今林６号墳のように前期から中期へと甲冑出土古墳の継続的性が確認された地域がないではない(3)。しかしながらその場合でも園部垣内古墳は82mの前方後円墳であるが、今林６号墳は長軸22mの長方形墳でしかなく、同一首長勢力による継続的保有とはいえない状況である。

同一地域内の同一首長系譜において前期から中期をとおして甲冑が副葬されるという事象はまさに他地域にはない特殊な政治的背景が想定できるであろう。鋤崎古墳のいち早い横穴系の埋葬施設を導入するあり方などからみると、この地域が朝鮮半島－九州－西日本～近畿を結ぶとりわけ軍事的な側面の強い政治交流の要衝としての役割を担ったことがその継続性を保証したと見ることもあながち荒唐無稽ではないものと考える。むしろ鋤崎古墳とそれをとりまくこの地域の首長層は近畿中央部の政権側にとって継続的な関係を取り結んでおかねばならないだけのとくに外交にかかわる政治的役割を担っていたとみられるのである。

（橋本達也）

【註】

（１）　阪口英毅1998では三重県石山古墳出土の長方板革綴短甲が鋤崎古墳と同じ中段地板９枚、下段地板７枚の配置を採る可能性を指摘している。現状で鋤崎古墳例の類例となりうるのはこの一例のみである。しかし、筆者は石山古墳例の復元は不十分で、公表されている写真の状態は本来の地板配列ではないと見る（京都大学文学部考古学研究室編1993）。

また、徳島県大代古墳で出土した右脇中段地板はその大きさから、この段が９枚構成であったことを推定させる。ただし全体は細片化により下段地板の構成は不明とせざるを得ない。よって、この短甲はＩ式かＩ’式かは限定できない。

（２）　実物は未見なので詳細な評価は控えねばならないが、挂甲小札かとされる実測図を見る限では、小札ではなくむしろ頸甲と肩甲片などではないかと見られる。すなわち中期甲冑の範疇にあると見る。いずれ確認の機会をもちたい。

（３）　静岡県松林山古墳と安久路２号墳の関係も同様である可能性はあるが、松林山古墳の短甲については明確な位置づけは保留せざるをえない。

【参考文献】

京都大学文学部考古学研究室編　1993『紫金山古墳と石山古墳』
阪口英毅　1998「長方板革綴短甲と三角板革綴短甲」『史林』81-5
橋本達也　1999「野毛大塚古墳出土甲冑の意義」『野毛大塚古墳』世田谷区教育委員会
松木武彦　1992「古墳時代前半期における武器・武具の革新とその評価－軍事組織の生成に関する－試考－」『考古学研究』39-1

第５章　鋤崎古墳出土資料の自然科学的調査について

１　はじめに

鋤崎古墳の調査で出土した資料に関して、材質を中心とする自然科学的調査を行った。今回対象としたのは石室内各所に多用されていた赤色顔料、釧や鏡などの非鉄金属製品、及びガラス製品である。これら資料を構成する元素の調査は、類例との比較によってその資料の製作技法や、流通、変遷など様々な歴史情報の基礎データとなるものと期待される。なお紙幅の関係上、ここには事実報告のみを記し、詳細については機を改めて検討したい。また、分析に用いた装置と作動条件は次の通りである。

エネルギー分散型微小領域用蛍光Ｘ線分析装置＝EDX（エダックス社製：Eagle μ plobe）／対陰極：モリブデン（Mo）／検出器：半導体検出器／管電圧・電流：20～40kV・50～600μA／測定雰囲気：真空／測定範囲0.3mmφ／測定時間300秒

波長分散型大型資料用蛍光Ｘ線分析装置＝WDX（フィリップス社製：PW2400）／対陰極：スカンジウム(Sc)／検出器：シンチレーションカウンター／管電圧・電流：60kV・40mA／測定雰囲気：真空／分光結晶：フッ化リチウム

試料水平型Ｘ線回折装置（フィリップス社製／ＰＷ3050）／対陰極：銅（Cu）／管電圧・電流：40kV・30mA／検出器：Xeガスプロポーショナル検出器／発散・受光スリット：１°・１°／マスク幅：10mm／走査角度：10~80°(2θ)／ステップサイズ：0.02°／スキャンスピード：0.04°/sec

ところで本報告以外に、鉄製品の分析が国立歴史民俗博物館の特定研究「日本人の技術と生活に関する歴史的研究－在来技術の伝統と継承－」のなかで８点について行われ、結果が報告されているので参照願いたい(「日本・韓国の鉄生産技術<調査編２>」『国立歴史民俗博物館研究報告』第59集、1994)。

２　赤色顔料

古代の顔料には酸化鉄（Fe_2O_3）を主成分とするベンガラと、硫化水銀（HgS）の結晶である朱が主に用いられ、本田光子氏等による研究で、それぞれの使用される状況に違いのあることや、粒度や粒形に特徴の現れることなどが明らかにされている（本田1997)。

鋤崎古墳では横穴式石室の主体部を中心に、各所に赤色の部分が広がっており、顔料の活発な使用が認められる。これらは発掘調査当時、主体部や、更にその中での細かい部分ごとにポリ袋に採取され、その数は１号棺19袋、２号棺６袋、３号棺３袋の計28袋に及ぶ。この中には埋葬位置の復元から、人体の部位ごとに分けられているものもあるが、それ以外では採取位置を示す情報の無いものも多い。しかし今回は念のため、当初の区分を踏襲している。

作業はまず、使用されている顔料の種類を知るための蛍光Ｘ線分析を行った。この方法は試料にＸ線を照射し、含有する各元素から発生する二次Ｘ線（特性Ｘ線）を検出器でとらえてＸ線エネルギーとその強度をピークとして表すもので、ベンガラであれば鉄（Fe)、朱であれば水銀（Hg）のピークが現れることになる。ただし鉄は土壌にも多く含まれることもあり、裏付け調査としてＸ線回折分析による結晶構造解析も行った。この方法ではベンガラはHematite（Fe_2O_3)、朱はCinnabar（HgS）のピーク検出によって存在を確認することができる。試料は、それぞれの袋から特に赤色の強い部分を抽出、目に見える範囲の砂粒を取り除いてから瑪瑙乳鉢にて粉砕し、均質化したものを塩ビ製リングに入れて圧縮し、コイン型のペレット状に調製した。装置は、より広範囲の情報を得るためにＸ線の照射面積が20mmφの波長分散型を用いた。

別表に示す結果を見ると、いずれのサンプルでもベンガラと朱が共存しているが、その割合は試料によって異なっており、主体部による違いが現れているものと思われる。１号棺19点のＸ線回折ではNo.048の１サンプルを除いてHematiteが強く現れている。しかし、残念ながらこのNo.048が１号棺の中でもどの部分から採取されたかの手掛かりは既に失われている。逆に人体の部位による両者の違いは見られない。また２号棺では、水銀及びCinnabarが強いサンプルが６点中２点あり、朱が集中して用いられていることが想定され、サンプル数は少ないものの３号棺でも、１号棺よりは朱の存在が明瞭である。

この他、一部の試料について電子顕微鏡を用いた粒子の形状観察を行ったが、ベンガラ粒子にパイプ状などの特徴的な形状を示すものは見られなかった。

３　非鉄金属製品

北部九州地域は弥生・古墳時代の多くの青銅製品が出土しているが、これまで当地に文化財専用の分析装置がなかったこともあり、それほど多くの情報が得られている状況にはない。

今回は青銅鏡６面と銅釧２点に対して非破壊による蛍光Ｘ線分析を行ったが、この方法ではＸ線が照射された範囲内の、しかも表面的な組成情報しか得ることができないため、得られた結果が必ずしも資料全体の組成を反映しているとは限らないことは、出土文化財の分析において周知の注意事項とされている（平尾1999・村上2000）。今回もこれを踏まえ、平尾氏らの手法に従って定性的な値として表示することとしている。またエネルギー分散型装置の場合、照射範囲が極端に狭いため、特徴的な範囲内でできる限り複数ヶ所を分析対象としている。対象とした資料と分析箇所、及び分析結果は別表に示した通りである。

全てに共通する元素として銅、錫、鉛が顕著なピークとして現れており、３元系の青銅であることを示している。他に微量成分としてアンチモン、銀、ビスマス、砒素、亜鉛、ニッケル等が見られるが、これらは資料や分析場所、分析装置によって検出されない場合もある。また各元素のＸ線強度は個体間だけではなく、同一個体内での分析箇所によるバラツキも大きく、前に記した注意を裏付けている。これらは過去、先学によって示されている同時代の青銅器の分析結果と合致するものである。

４　ガラス製品

ガラス製品は、青紺色の丸玉が１点出土している。古代のガラス資料についても肥塚隆保氏らによって材質調査が行われ、歴史的位置づけが進められつつある（肥塚1998）が、本市でも肥塚氏の指導によりガラスの材質分析を行い、データの蓄積を進めている。

ガラスは風化の影響によって組成が変化する場合があり、本来であれば風化層を除去した上で分析を行い、更に標準資料を用いた校正によって含有元素の定量値を算出して、データの比較検討を行うところであるが、これまでの作業では完全非破壊による定性分析でもＸ線強度の比較によってある程度の傾向やガラス種別の判別が可能であることを確認しており、今回もこの方法で試みることとした。またガラスの場合、強いＸ線を照射すると変色を来すことから、微弱なＸ線でも検出感度の高い微小領域用エネルギー分散型装置を用いた。

調査の結果、本例はナトリウムの検出と、カルシウムがカリウムのピークを上回る特徴から、ソーダ石灰ガラスに区分され、定量値を算出していないため類例との相対的な比較であるが、低アルミナタイプに属すると考えられる。また着色要因としてコバルトが検出されているが、マンガンのピークは低く、他に銅、鉛を若干含んでいる。

（比佐 陽一郎・片多 雅樹）

【参考文献】
肥塚隆保 1998「主成分からみた古代ガラスとその歴史的変遷」『保存科学研究集会　1998（発表要旨集）』奈良国立文化財研究所
平尾良光編 1999『古代青銅器の流通と鋳造』鶴山堂
本田光子 1997「カルメル修道院内遺跡第５次調査出土赤色顔料について」『カルメル修道院内遺跡４－カルメル修道院内遺跡第５次調査－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第504集　福岡市教育委員会
村上　隆 2000「蛍光X線分析における諸問題」『保存科学研究集会2000－非破壊的手法による考古資料の分析・観察－』奈良国立文化財研究所

表14　赤色顔料の蛍光X線分析結果

	仮No.	ラベル内容	蛍光X線 Fe-Kα	Hg-Lα	X線回折 Hematite	Cinnabar	電子顕微鏡観察による粒子の形状
1	033	1号棺	100.00	1.41	++	△	粒状
2	034	1号棺　下層（腰）	100.00	1.21	++	△	粒状
3	035	1号棺　下層（胸）	100.00	3.30	++	△	未観察
4	036	1号棺　下層（頭）	100.00	1.68	++	△	未観察
5	037	1号棺　下層（頭）	100.00	1.09	++	△	未観察
6	038	1号棺　下層（左腕）	100.00	1.40	++	△	未観察
7	039	1号棺　下層（頭）	100.00	1.90	++	△	未観察
8	048	1号棺	100.00	19.00	++	++	角礫状(朱の粒子)
9	049	1号棺	100.00	1.87	++	△	未観察
10	050	1号棺	100.00	2.38	++	△	粒状
11	051	1号棺	100.00	2.37	++	△	未観察
12	052	1号棺　副室	100.00	0.02	++	△	未観察
13	053	1号棺	100.00	1.85	++	△	未観察
14	113	1号棺	100.00	2.96	++	△	未観察
15	114	1号棺	100.00	2.13	++	△	未観察
16	115	1号棺	100.00	2.05	++	△	未観察
17	116	1号棺　下層（腰）	100.00	1.76	++	△	未観察
18	117	1号棺　下層（頭）	100.00	1.68	++	△	粒状
19	118	1号棺　下層（足）	100.00	0.56	++	△	未観察
20	043	2号棺	100.00	4.75	++	+	粒状
21	044	2号棺	100.00	2.67	++	+	未観察
22	045	2号棺	100.00	2.38	++	+	未観察
23	046	2号棺	100.00	2.66	++	+	未観察
24	047	2号棺	100.00	17.45	++	++	未観察
25	112	2号棺	100.00	22.48	++	++	粒状
26	040	3号棺	100.00	7.14	++	+	未観察
27	041	3号棺	100.00	9.90	++	+	未観察
28	042	3号棺	100.00	2.20	++	△	未観察

蛍光X線の数値は鉄のKα線を100とした場合の水銀Lα線の相対強度を表す
X線回折の結果表示は、得られたピークが＋＋＝強、＋＝中、△＝弱をそれぞれ表す

表15　青銅製品の蛍光X線分析結果

元素と使用線					Sb-Kα	Sn-Kα	Aα-Kα	Bi-Lα	Pb-Lα	As-Kα	Hα-Lα	Zn-Kα	Cu-Kα	Ni-Kα	Fe-Kα	主元素のX線強度
				角度(2θ)	13.5	14.0	16.0	27.4	28.3	34.0	35.9	41.8	45.0	48.7	57.5	(cps)
				エネルギー(keV)	26.2	25.1	22.0	10.8	10.5	10.5	9.9	8.6	8.0	7.4	6.4	
資料名	資料No.	分析部分	装置	分析範囲												
四獣鏡	1037	鏡面任意	WDX	20mmφ	1.03	49.13	0.82	+	5.43	1.67	−	0.12	100.00	+	0.73	114.35
四獣鏡	1037	鏡面黒色部分	EDX	0.3mmφ	+	2.71	0.11	0.30	8.12	−	+	0.59	100.00	0.69	10.07	3212.31
四獣鏡	1037	鏡背紐頂部	EDX	0.3mmφ	0.23	11.19	0.40	0.87	25.94	−	0.59	0.72	100.00	0.31	39.16	1903.20
四獣鏡	1037	鏡背乳部分	EDX	0.3mmφ	−	+	+	+	0.34	−	−	0.57	100.00	0.66	1.79	5493.66
珠文鏡	1038	鏡面任意	WDX	20mmφ	1.21	82.17	0.78	0.14	7.03	2.10	−	−	100.00	0.15	2.68	85.06
珠文鏡	1038	鏡面縁付近	EDX	0.3mmφ	0.10	9.20	0.25	0.24	12.50	−	0.10	0.75	100.00	1.04	1.89	2600.71
珠文鏡	1038	鏡面擦触孔	EDX	0.3mmφ	0.12	11.57	+	0.57	19.13	−	0.12	0.73	100.00	1.17	1.24	2326.52
珠文鏡	1038	顔料付着部分	EDX	0.3mmφ	0.19	13.01	0.29	0.58	20.54	−	0.36	0.79	100.00	0.96	65.81	1865.75
捩文鏡	1039	鏡面任意	WDX	20mmφ	3.99	190.34	2.72	0.55	29.09	6.51		−	100.00	0.23	2.31	38.43
捩文鏡	1039	鏡背面顔料付着部分	WDX	20mmφ	0.32	23.47	0.31	+	3.00	0.65	0.18	−	100.00	0.04	3.67	125.87
捩文鏡	1039	鏡画平滑部	EDX	0.3mmφ	0.17	11.85	0.44	0.87	30.51	−	0.54	0.92	100.00	1.09	5.36	1938.14
捩文鏡	1039	鏡背紐頂部	EDX	0.3mmφ	0.24	13.64	0.31	0.91	31.26	−	1.79	0.78	100.00	1.26	4.15	1897.60
捩文鏡	1039	鏡背鋸歯文内赤色部分	EDX	0.3mmφ	+	1.58	+	0.02	2.15	−	0.51	0.66	100.00	0.59	76.07	3250.05
船載内行花文鏡	1040	鏡面任意	WDX	20mmφ	1.19	79.65	0.73	0.08	6.60	2.23	−	0.11	100.00	0.14	1.46	82.69
船載内行花文鏡	1040	鏡背面縁黒色部分	EDX	0.3mmφ	0.11	8.95	0.17	0.26	13.08	−	0.10	0.78	100.00	1.10	2.46	2636.17
四獣鏡	1041	鏡面任意	WDX	20mmφ	0.88	67.20	0.64	0.11	4.48	1.37	−	−	100.00	0.21	0.58	99.19
四獣鏡	1041	鏡背面紐頂部	EDX	0.3mmφ	0.04	2.42	+	0.10	1.92	−	+	0.48	100.00	0.63	0.36	4403.99
四獣鏡	1041	鏡面黒色部分	EDX	0.3mmφ	0.04	2.86	+	0.13	2.68	−	+	0.59	100.00	0.63	0.44	4316.06
船載位至三公鏡	1042	鏡面任意	WDX	20mmφ	1.93	197.87	1.80	0.29	19.53	4.23	−	0.12	100.00	0.33	1.77	42.75
船載位至三公鏡	1042	鏡背面文様黒色部分	EDX	0.3mmφ	0.11	9.69	0.16	0.59	14.37	−	0.22	0.81	100.00	1.03	6.49	2365.08
船載位至三公鏡	1042	鏡面黒色部分	EDX	0.3mmφ	0.10	8.83	0.14	0.58	13.56	−	+	0.69	100.00	0.99	1.82	2502.80
釧（左）	1044	表面任意（顔料・土付着）	EDX	0.3mmφ	1.89	39.31	3.61	5.82	221.86	2.82	−	−	100.00	1.59	30.87	554.41
釧（右）	1045	破断面	EDX	0.3mmφ	0.52	17.61	1.25	2.32	60.05	3.50	−	−	100.00	1.68	0.86	1120.11
釧（右）	1045	表面任意	EDX	0.3mmφ	0.49	15.68	0.67	1.84	61.24	1.86	2.71	−	100.00	1.91	2.98	1266.68
釧（右）	1045	表層剥離部分	EDX	0.3mmφ	0.57	22.82	0.95	2.22	47.09	−	2.95	−	100.00	1.65	2.31	1213.03

数値は銅のX線強度を100としたときの各元素の強度比を表す。
WDXでは砒素、鉛、錫はそれぞれ重複するピークの値を補正した数値。
＋は蛍光X線の相対強度が0.1以下であるが存在を確認したもの、－は元素が確認できなかったものを表す。

第6章　まとめ

以上、３ヶ年にわたって行った鋤崎古墳の発掘調査成果と、遺構・遺物に関する考察を掲載した。最後にそれらを要約し、多少の私見をまじえてまとめとしたい。

1　発掘成果と特記事項

（1）墳丘

丘陵先端を整形して築造した前方後円墳である。後円部を丘陵先端側に、丘陵高位側に前方部を置く（墳丘主軸方位は後円部から前方部を見てN135°30'E、ほぼ南東に向く）。後円部・前方部とも３段築成、各段斜面に葺石を行う。墳丘は花岡岩風化土の地山を削り出して整形しており、盛土の高さは後円部頂部の0.3～0.5mにすぎない。

墳丘規模は、墳長62m、後円部は地山の傾斜方向が短い楕円形で短径36m・長径38m、背面端からの高さ6.7m、前方部長27m、同前面幅22m、前面端からの高さ1.9mを測る。墳丘基底面は地山の傾斜に沿い後円部先端に向かって緩く下降する。前方部側面テラスは傾斜に沿うが、後円部テラスは水平に近づける工夫がみられる。前方部頂面から後円部頂面にいたる斜面は、葺石を施さない斜道となる。斜道は３段斜面葺石面よりも一段高く、側縁は葺石面から短く立ち上がる石積みを施す。後円部前面斜道（隆起斜道）の調査例は少なく、今後の調査・研究の指針となるであろう。

（2）埴輪

墳丘基底面、１・２段のテラス、墳頂面の４段に巡る円筒埴輪列が確認された。埴輪列には普通円筒・朝顔形のほか、鰭付の円筒・朝顔形埴輪が使用され、鰭付埴輪の比率は３～４割程度である。埴輪列内の原位置を留める埴輪も基部以上を欠き、器種ごとの樹立位置は明らかにできなかった。一方、後円部～前方部頂面に壺形埴輪が配列された可能性が高いが、具体的な配置方法は不明である。なお円筒埴輪列に使用された埴輪総数は、約430本程度と推測される。

形象埴輪は原位置を留めるものは皆無だが、出土位置から配置のおおよそが推測された。後円部頂の円形壇上に家形７個体と、断定は保留するが盾形・囲形・短甲形が配置された可能性が高い。また前方部頂平坦面上に靱形２個体と家形１個体、前方部頂の平坦面端部に家形１個体の配置が想定された。こうした形象埴輪の構成と配置方法は、古墳ごとの個性を除けば、三重県石山・岡山県金蔵山・兵庫県行者塚など、中期初頭を前後する古墳との類似性が顕著である。

第４章２は、円筒埴輪の型式学的位置を前期末とし、埴輪の諸特徴から畿内の製品をモデルに製作された可能性を示唆する。また埴輪に精粗の二種があるものの全体的に均質的なつくりから、整った製作体制がとられたことを指摘する。

（3）横穴式石室

後円部最上段に築造された横穴式石室は、地山整地面から掘削された大型墓壙内に築造され、墳丘上から石室内部に出入りするための竪坑状墓道をともなう。石室は今山産出の玄武岩割石を使用して構築され、前方部正面に向かって開口する。前庭部を除く石室全長は4.0m、玄室は幅2.45～2.7m、奥行き3.4mの長方形プラン、前壁中央の下位に接続する羨道部は幅・長さとも0.6m、高さ1.35mときわめて短小・小型である。玄室・羨道の壁面と天井石内面は全面にわたって赤色顔料が塗布される。また玄室の奥壁と側壁に、「突起石」と呼ぶ壁面から突出する石材が配列される。

日本列島の他地域に先行して出現した北部九州の横穴式石室受容過程は、佐賀県谷口・福岡県老司古墳３号石室を経て鋤崎において定型化を果たしたとみられる（第４章４）。谷口と老司、老司と鋤

崎のあいだに未見の石室が介在する可能性もあるが、谷口～鋤崎にいたる石室形態・構造の変化方向は動かないであろう。また、鋤崎の横穴式石室と等しい形態・構造属性を共有する石室は、九州中北部に広く分布する。鋤崎式と呼ぶ石室群は副葬品や埴輪・土師器から近接した築造年代が推測され、九州中・北部の首長墳を中心に採用された横穴式石室の最古段階に位置付けられる（第４章４）。

（４）玄室内の棺配置と副葬品

玄室床面に配置された３つの棺と、各棺にともなう副葬品がほぼ原位置をとどめた状態で検出された。棺の数と石室入口部で確認された３回の閉鎖行為が一致し、石室内埋葬遺体数が確定した。

玄室内に配置された埋葬棺はいずれも据付けの棺である。奥壁沿いの１号棺は箱形石棺、右側壁沿いの２号棺は箱形埴棺と仮称した特異な棺、左側壁寄りの３号棺は箱形木棺である。１号棺は石室構築と同時に配置された可能性が高い。２・３号棺は埋葬時に搬入ないし組立て可能だが、おそらく築造当初から、２棺の配置も予定されていたとみられる。こうした棺の配置は肥後型横穴式石室の「コ」字形屍床配置の源流をなすものであろう。

３基の埋葬棺にともなう副葬品は、鏡・武器・工具・農具を主体とし、装身具の玉は１号棺のみに限られる。鏡は舶載鏡２面、仿製鏡４面、各棺に１～２面がともなう。第４章６は、鏡の棺内頭部配置が２号棺の１面のみにすぎないことから、伝統的な鏡観念の変質を想定している。羨道入口端の双頭龍文鏡は、予定された被葬者の最終埋葬に際して、辟邪の意義を認めて置かれたものであろうか。

副葬武器には、前期に多い素環頭鉄刀、中期初頭前後を副葬端緒とする鉄鉾・蕨手刀子・長方板革綴短甲などがある。長方板革綴短甲は最古型式に属すものとみられる（第４章９）。また鉄鉾・蕨手刀子は第４章７が述べるように列島最古段階にさかのぼる副葬事例であろう。

（５）付属埋葬施設

墳丘基底面・墳丘中位のテラス・前方部頂面の３個所から埴輪棺３基と小石棺１基が検出された。発掘調査の範囲が限られているため、他にも未検出の付属埋葬施設が遺存する可能性を残す。

埴輪棺と小石棺は副葬品をもたず、人骨も遺存していない。これらが改葬墓でなければ、被葬者は乳・小児と推測される。横穴式石室に埋葬された被葬者との関係は不明だが、その近親者であった可能性が高い[1]。

２　古墳の評価と歴史的意義

（１）築造時期

古墳の築造時期は、遺体に添えた副葬品だけでなく、墳形や埴輪、埋葬儀礼に使用された土師器なども考慮する必要がある。古墳時代を通じて首長墳は生前築造の可能性があり、とくに横穴式石室の採用以降は留意すべきであろう。

樹立埴輪は第４章２が指摘するように前期末段階の様相を示す。埋葬儀礼に使用された土師器はいずれの埋葬にともなったものか断定できないが、須恵器出現期の土師器よりも１～２型式ほど先行する（第４章３）。一方、棺にともなう副葬品構成と内容は中期初頭に特徴的な色彩がつよい（第４章７・９）。鋤崎のモデルとなった前期後葉以降の畿内の埴輪は地域差が顕著となり、古い要素が残存する傾向がある。前方後円墳集成編年[2]の10期区分でいえば４期の後半に、古墳時代を11期に区分した和田編年[3]では４期末～５期初頭に位置付けられる。暦年代観はなお不確定だが、４世紀後葉とみておきたい。

（２）被葬者の性別と被葬者選択原理

横穴式石室内に埋葬された被葬者は３体とみて間違いない。なかでも１号棺の被葬者は女性の可能

性がきわめて高い（第４章７）。玉飾りＡ・Ｂ群が遺体の頸左右に、銅釧が手首近くに着装されたと仮定すると、被葬者は身長140cm代の小柄な体躯が想定される。また2号棺被葬者も女性の可能性を排除できない。３号棺の被葬者は短甲の保有からみて男性であろう（第４章７）。

これらの被葬者の関係は人骨が未検出のため具体的な議論できない。ただ、５世紀後葉以前の同一古墳複数埋葬の場合、被葬者の関係はキョウダイ原理が一般的とする論説(4)にしたがえば、女性首長とそのキョウダイが候補となる。しかし、在地性の乏しい埋葬施設の出現には首長間の姻戚関係を契機とする場合も予想される。被葬者のなかに、他地域から嫁した女性や婿入りした男性が含まれる場合も考慮する必要があろう。３体の埋葬順序は、一般的にみれば、中心棺の１号棺を初葬、２・３号棺を追葬とするべきであろうが、断定するだけの根拠を見いだすことは難しい。

複数埋葬を前提とする横穴系墓室の場合、中国漢代では夫婦合葬が原則(5)である。詳細不明な高句麗・百済でも有力首長墳では夫婦合葬例が多いとみられる。これに対して、鋤崎をはじめとする九州の初期横穴式石室には、しばしば２体以上の被葬者が収容可能な棺や屍床が配置されている。

第４章７は中期初頭～前葉の首長墳にみられる３棺併葬事例を挙げる。主丘部への複数埋葬は前期後葉以降から増加傾向にあり、九州の導入期横穴式石室の被葬者選択は、こうした伝統的な埋葬原理の延長線上に行われた可能性がある。言い換えれば、横穴系墓室本来の夫婦合葬という埋葬原理を十分に受容したとは言い難い側面をもつ。

（３）横穴式石室導入の背景

鋤崎古墳の築造時、朝鮮半島で横穴系墓室が一般化し始めていたのは高句麗だが、百済でも石村洞古墳群の王墓に横穴式石室を採用した可能性が高い。近年、確実に漢城期にさかのぼる横穴式石室が韓国内で相次いで発見されている(6)。しかしこれらの資料のなかに、鋤崎古墳横穴式石室の直接的な祖型を見出すことは難かしい。九州中北部で定形化した横穴式石室は、高句麗ないし百済の石室を祖型としながら、独自色の強い形態・構造に改変した可能性を考慮すべきかもしれない。

鋤崎古墳に先行して、谷口・老司古墳築造時に朝鮮半島の横穴式石室に接触した可能性がある（第４章４）。これらはいずれも玄界灘に面した地域の盟主墳であり、弥生時代から朝鮮半島諸地域と積極的な交流をもったと予想される。それぞれの古墳被葬者は、弥生時代以降の交渉を継続し、加耶・百済・新羅・栄山江流域など広範囲の首長層と交渉をもったと思われる(7)。

文献に記された朝鮮関係記事は、ヤマト王権の複雑な対外政策の一半を反映しよう。ヤマト王権の三国諸勢力への対応に、前代からの交渉パイプを培った九州北部首長層が果たした役割は大きい。鋤崎の被葬者も九州北部勢力の一員として、ヤマト王権の対外交渉に参画した人物像が想定される。

九州中北部に登場した横穴式石室は鋤崎式として定着し、その後の主要墓制として確立した。しかし、古墳時代後半期の墓制として広く一般化するには、王権中枢による本格的な採用までの約１世紀の時間を要した。この二元的な墓制のあり方をどのように理解するのか、今後の課題である。

（柳沢　一男）

【註】

(1)清家章 1999「古墳時代周辺埋葬墓考」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室

(2)広瀬和雄 1990「畿内大型古墳の編年」『前方後円墳集成』中国・四国編、山川出版社

(3)和田晴吾 1987「古墳時代の時代区分をめぐって」『考古学研究』第34巻第２号

(4)田中良之 1995『古墳時代親族構造の研究』柏書房

(5)黄暁芬 2000『中国古代葬制の伝統と変革』勉誠社

(6)朴淳發 2001『漢城百済の誕生』書景文化社（ソウル）

(7)日韓交渉考古学研究会 1997「[共同研究] 古墳時代日韓交渉の考古学的研究（上）」『古文化談叢』第39集

Sukizaki kofun

Sukizaki kofun,which is located in the earstern end of Itoshima plain facing to Genkai Sea of the northern Kyusyu,is a Keyhole-shaped mounded tomb. The Fukuoka City Board of Education excavated during three consecutive years from 1991 to 1993.

It was built on the edge of a low hill of 30 meters high. The mound is 62 meters in length, and the rear part of the mound is 36 through 38 meters in diameter and about 6 meters in height. The front part is approximately 22 meters in width,27 meters in length, and 2.6 meters in height. The mound has three terraces at both the rounded rear and squared front parts. On the top of the rear part of the mound,it has a low elevated circle of 20 centimeters in height and 10 meters in diameter. The slope of the mound are paved with stones. A row of cylindrical clay figures(Haniwa) stood around a terrace on the top of the mound, two terraces on the slope, and also on the foot of the tomb. In addition, the house-shaped clay figures were placed on the circular platform which was built on the top of the rear part of the mound. We can guess that the nambers of Haniwa which were used to the rows of cylindrical clay figuresre are 430.

The main burial of this kofun is a chamber room with an entrance built in the rear mound. Four graves such as the Haniwa coffins and the small sarcophagus were buried around the mound as the additional graves. This corridor-style stone chamber room is a very important, because it is one of the oldest specimens for this type of grave built in Japan.

The chamber room constructed in the method of corbelling slabs in a large rectangular pit of 8 meters one side. The chamber room was composed of the main chamber where the dead was placed in and the short-small passageway to the chamber. In front of it, the vertically- built entrance passage was connected to the surface of the mound and to the forecourt.

The entrance was closed with the flat stone which size was 1.6 meters in height, 1 meters in width, and 10 centimeters in thickness. The passage was filled with earth. We guess that the size of the main chamber room was 3.6meters in depth, 2.4-2.7meters in width, and about 2 meters in height. Its ceiling was caved in, because corbelling from the side wall was too narrow to step up, and its celing stones fell down. In the main chamber room,a stone sarcophagus (No.1) and a clay coffin (No.2) and a wooden coffin(No.3) were placed on three spots.

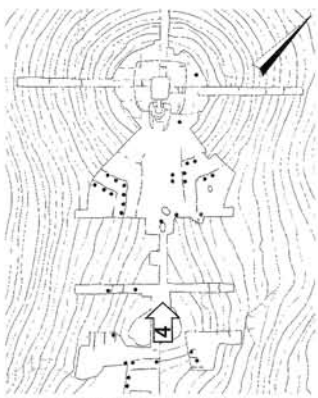
No.1 stone sarcophagus is 2.6 meters in length, 0.6 throuh 0.7 meters in width, and 0.2 through 0.4 meters in height. It was divided into two sections by a stone; one is for the dead and another is for offerings.The interior floor is covered with the red iron oxide of 1 through 2 centimeters in thickness. The dead completely decaded, but one iron sword, one vertically-oriented comb and many jaspers as the accessories were discovered. Two bronze mirrors,several iron weapons and several iron needles were discovered in the section for the mortuary objects.

No.2 clay coffin is size was 2 meters in engtth, 0.6 meters in width, and 0.3 meters in height. The interior floor was covered with the red iron oxide of 1 through 2 centimeters in thickness. The dead decayed and remained nothing. A bronze mirror was placed near the head. Objects discovered outside the coffin are one bronze mirror,two iron swords, one iron sickle, one iron axe, and one needle.

No.3 wooden coffin is 2.2 meters in length, 0.6 through 0.7 meters in width and the height was unknown. The dead decayed and one iron sword was discovered inside of the coffin. One bronze mirror, one iron axe and one cuirass were placed outside of it.

The burial mound, the discovered Haniwas and the artifiacts indicate that Sukizaki kofun was built in the late fourth century. The corridor-style stone chamber room used for burial is the oldest one in Japan. It seems that this style appeared under the influence from Korean peninsula; Baeche or Koguryo in the period of the Three kingdoms. When we consider the burial ceremony and the international relations aroud Japan(Wa) at that time, Sukizaki kofun is one of very important specimens.

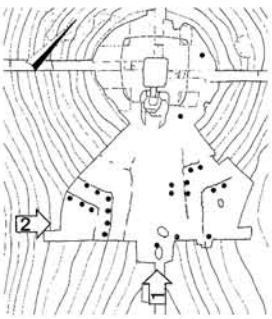
図　版



古墳遠景と墳丘

1.古墳遠景（空中写真・北から）
2.古墳遠景（西から）
3.古墳遠景（南西から）
4.古墳墳丘（前方部から後円部をみる：南東から）

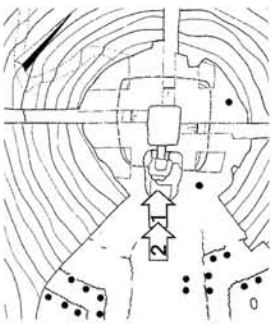
図版 2



墳丘の調査

1.くびれ部～後円部
（E２・W２・K区）の
葺石・埴輪・付属埋葬棺
の検出状況（南から）

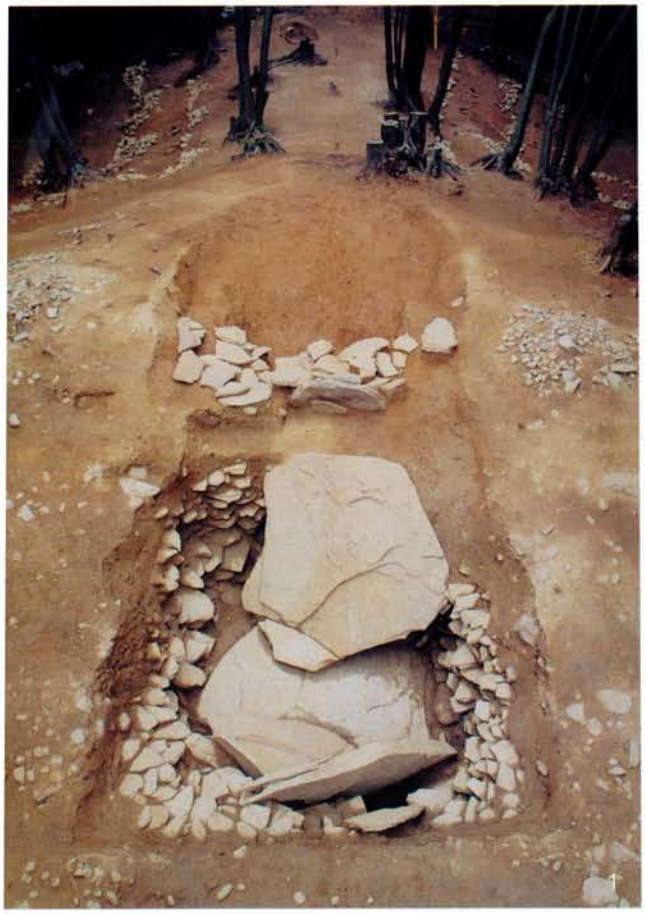
2.くびれ部（W２区）
調査区全景（南西から）

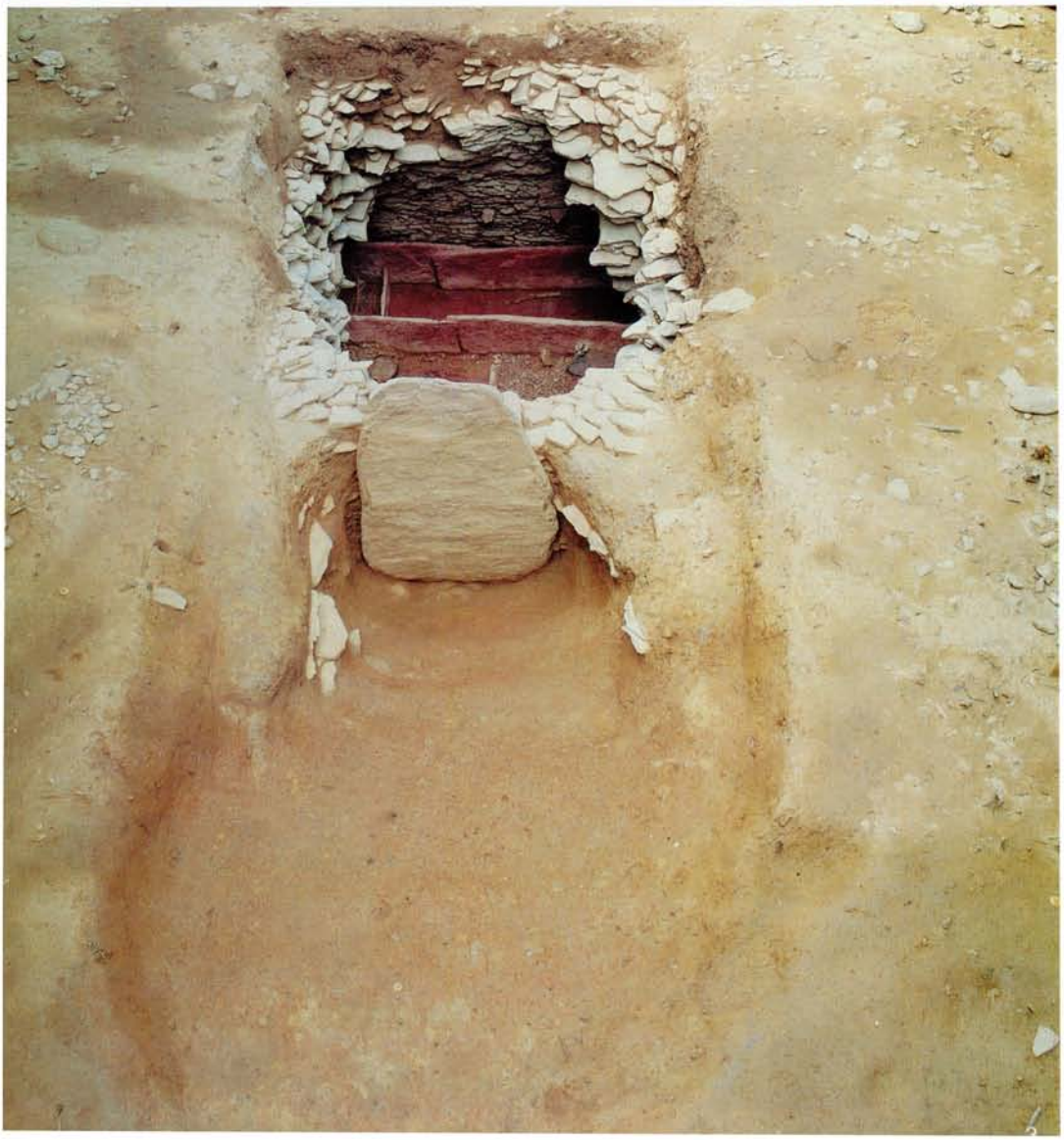


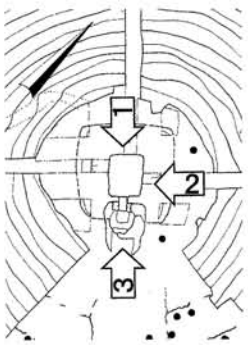
後円部頂面と
横穴式石室の調査

1.後円部頂面の石敷面と
　中央部の窪み（南東から）
2.横穴式石室と
　墓壙検出状況(南東から)

図版 4

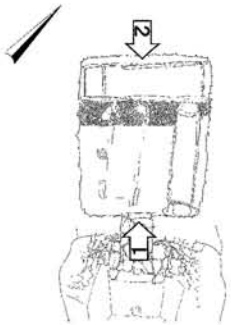






横穴式石室の調査

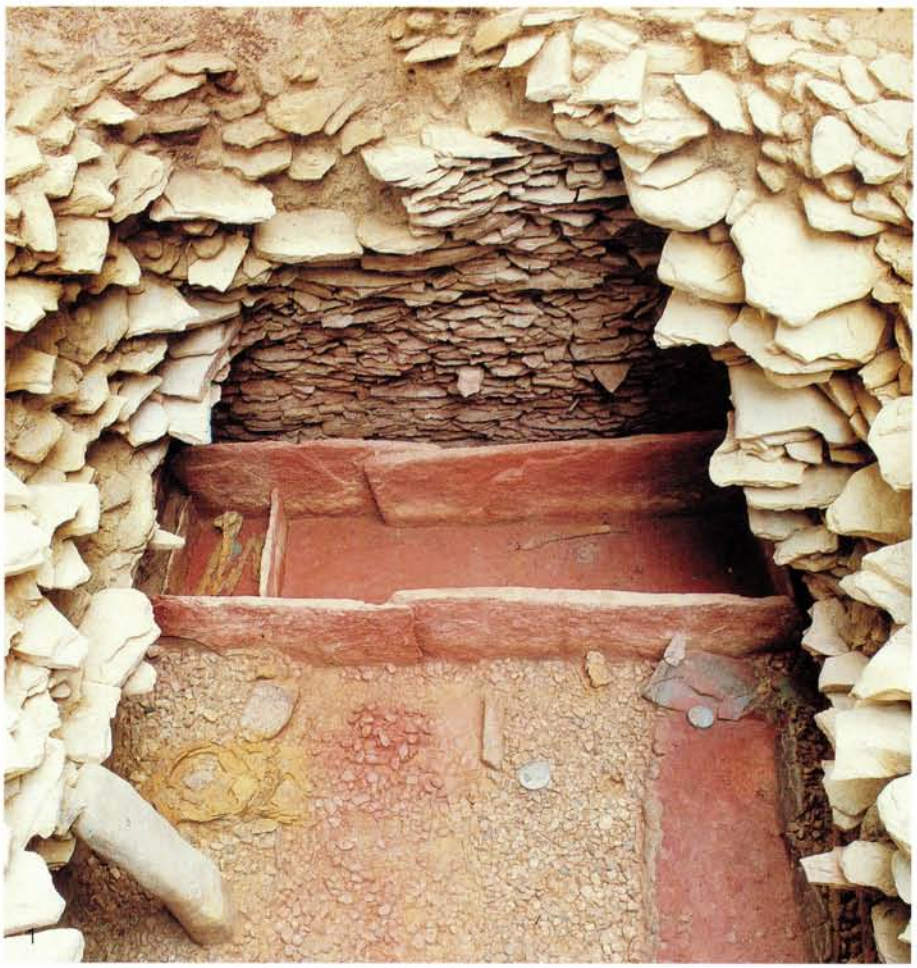
1.玄室天井部の崩壊状況（北西から）
2.玄室天井部の崩壊状況（北東から）
3.3次埋葬（最終埋葬）にともなう
墓道と横穴式石室（南東から）

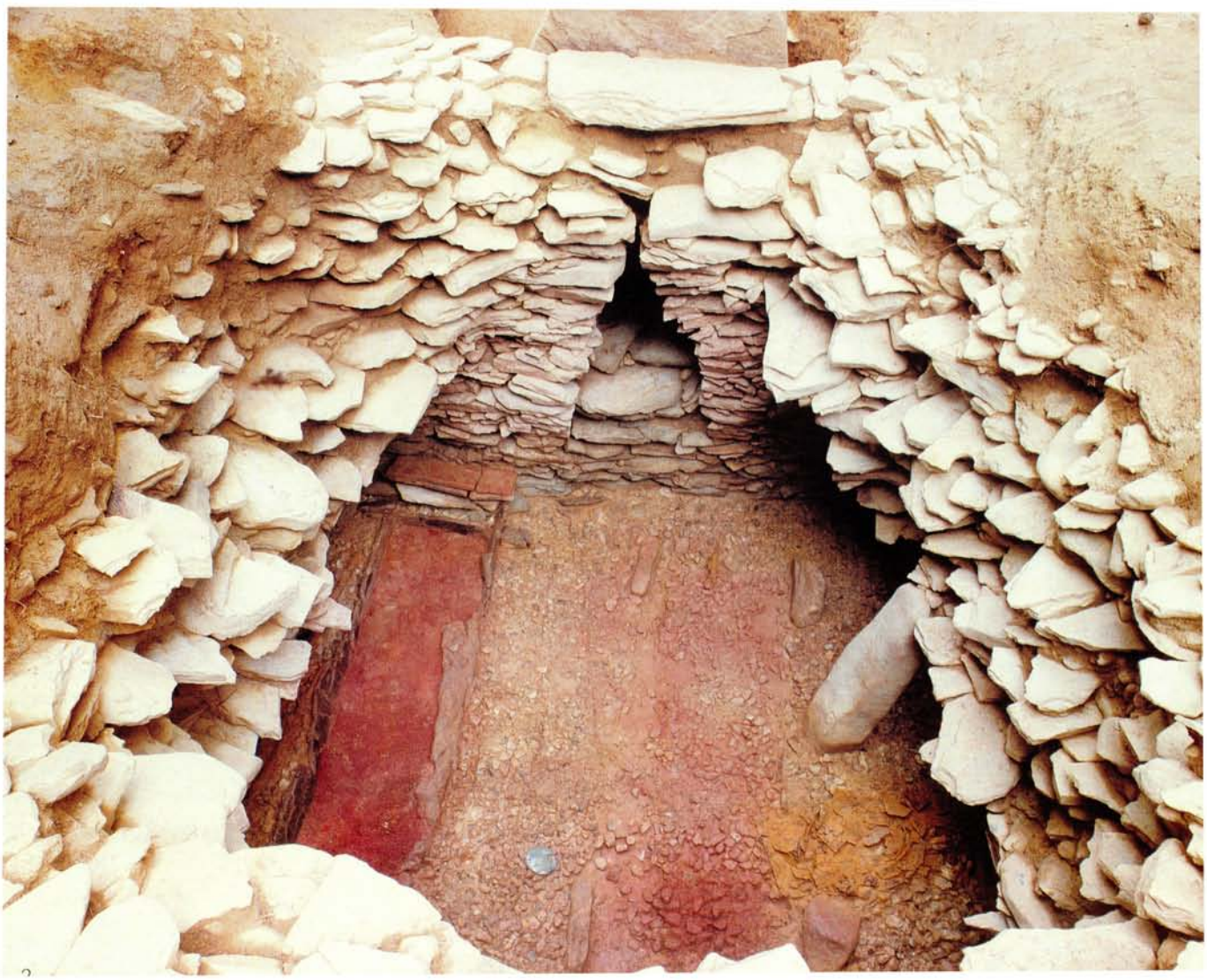


横穴式石室内遺物出土状況

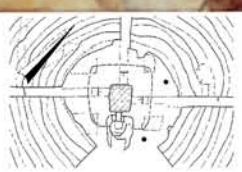
1.玄室北半部の棺と遺物
出土状況（南東から）

2.玄室南半部の棺と遺物
出土状況（北西から）

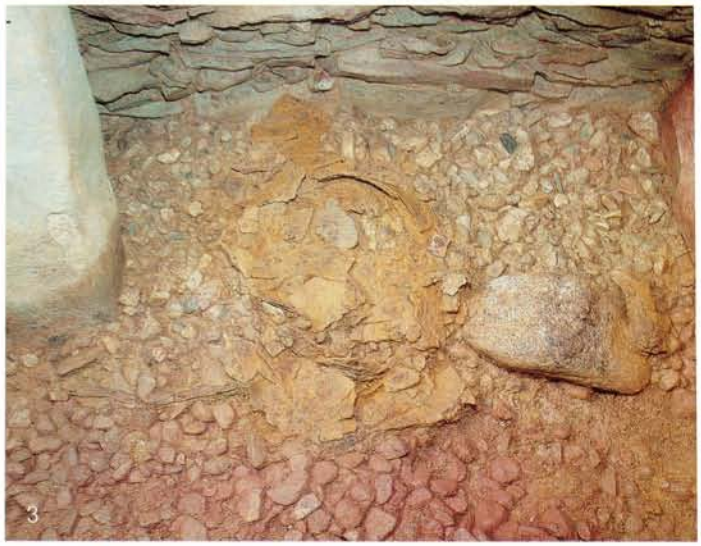


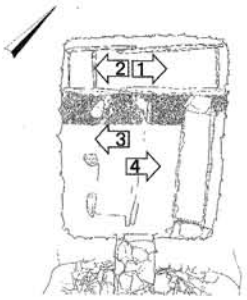


図版 6



玄室内の棺と遺物の出土状況（上から）

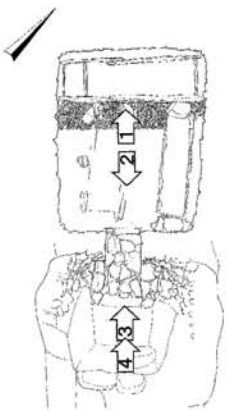




玄室内の棺と遺物の出土状況

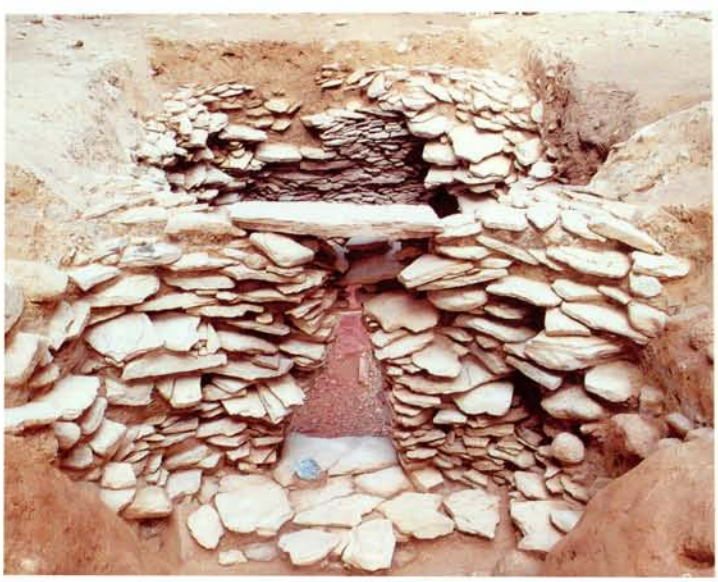
1.主室内副葬品出土状況（南西から）
2.副室の遺物出土状況（北東から）
3.短甲出土状況（北東から）
4.2号棺全景（南西から）

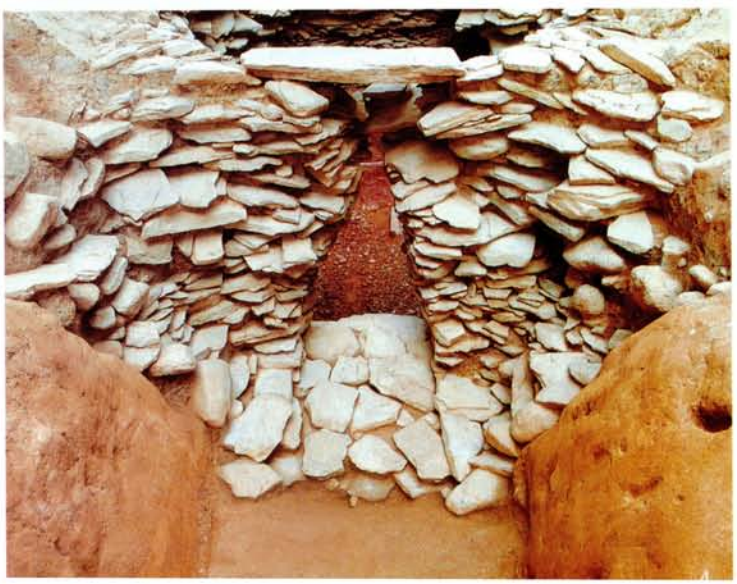
図版 8

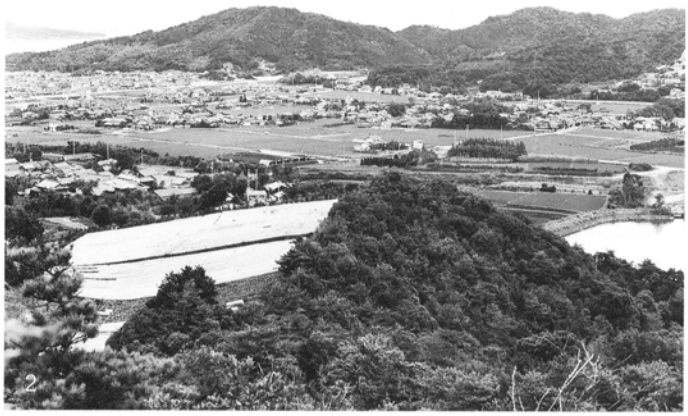


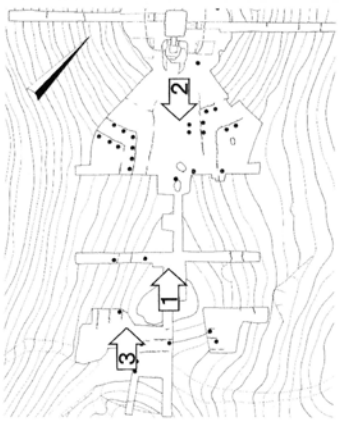
横穴式石室の構造

1.玄室奥壁（南東から）
2.玄室前壁（北西から・２次埋葬床面）
3.前庭部と石室（２次埋葬床面・南東から）
4.前庭部と石室（１次埋葬床面・南東から）



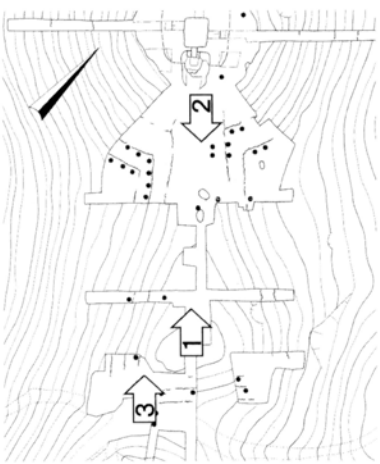






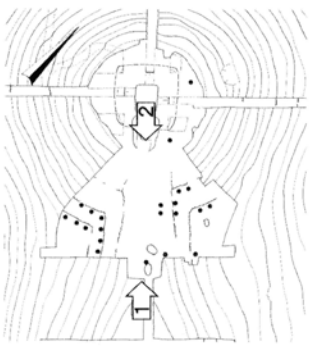
古墳遠景

1.古墳遠景（空中写真・北から）
2.古墳遠景（南西から）
3.古墳遠景（西から）
4.古墳遠景（北東から）



調査前墳丘

1.前方部から後円部を見る（南東から）
2.後円部から前方部を見る（北西から）
3.前方部前面と西側面（南から）



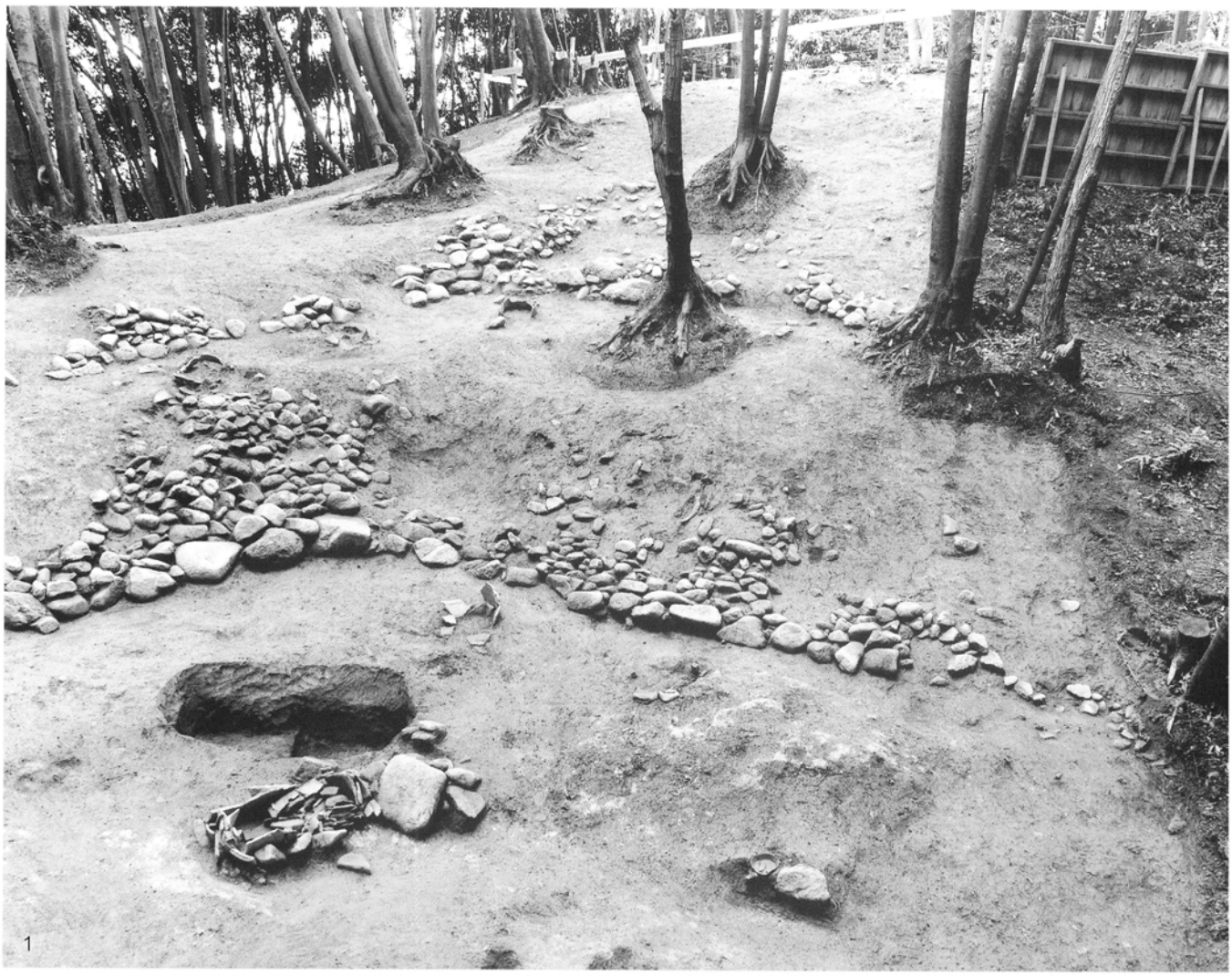
墳丘の調査 1

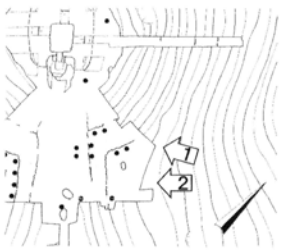
1.後円部とくびれ部
（南東から）

2.くびれ部と前方部頂面
（北西から）

墳丘の調査２：後円部斜面

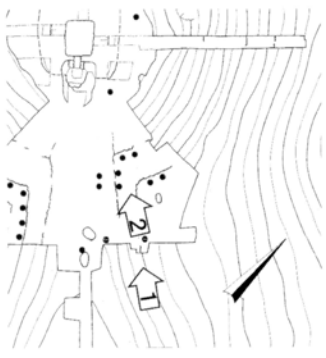
1.E１区全景（北西から）
2.E１区３段斜面葺石（北から）
3.E１区２段斜面葺石（北から）
4.E１区１段斜面葺石（北から）
5.N１区全景（北東から）
6.N１区１段斜面葺石（北から）
7.W１区全景（南東から）
8.W１区３段斜面葺石（南東から）
9.W１区３段斜面葺石（南から）
10.W１区２段斜面葺石（南東から）
11.W１区２段斜面葺石（南から）
12.W１区１段墳丘基底整地面（西から）





墳丘の調査３：東くびれ部
（Ｅ２区－１）

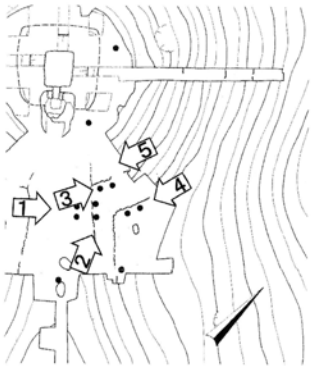
1.北半部遠景（南東から）
2.南半部遠景（東から）



墳丘の調査４：東くびれ部
（Ｅ２区－２）

1.前方部側面と後円部の葺石
（南東から）

2.くびれ部から後円部斜面の
葺石と埴輪（南から）



墳丘の調査５：東くびれ部
（Ｅ２区－３）

1.くびれ部折角の葺石と埴輪
（西から）

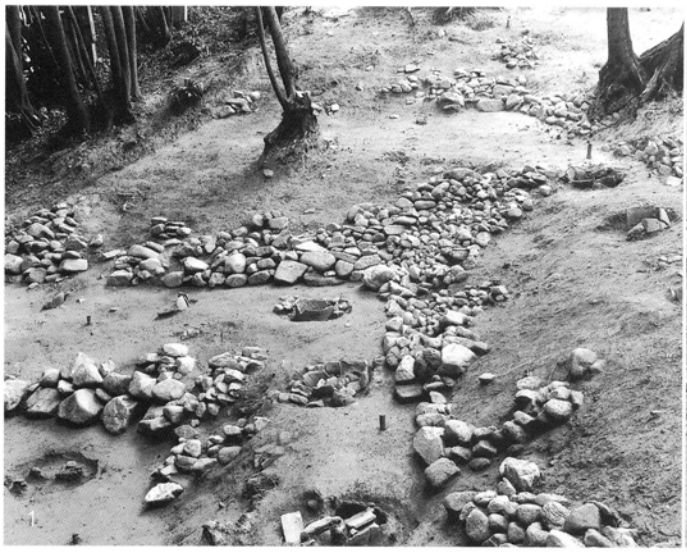
2.前方部２段テラスの埴輪遺存
（南東から）

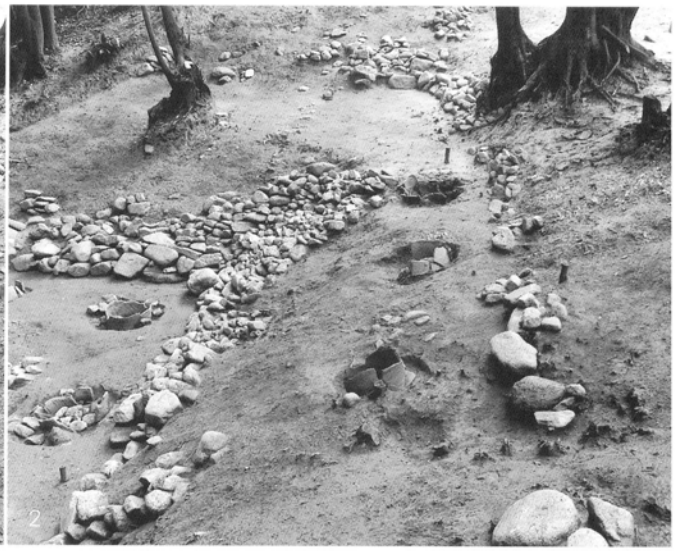
3.後円部３段テラスの埴輪遺存
（南から）

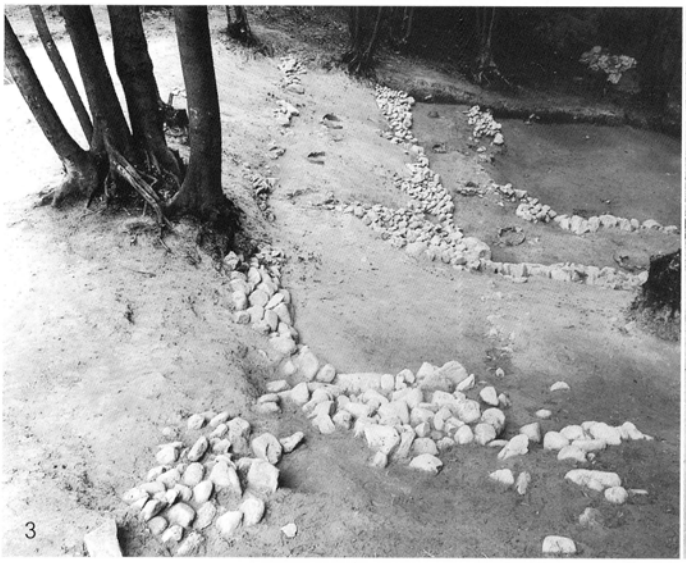
4.後円部１段テラスの埴輪遺存
（北から）

5.後円部前面斜道の葺石遺存
（北東から）

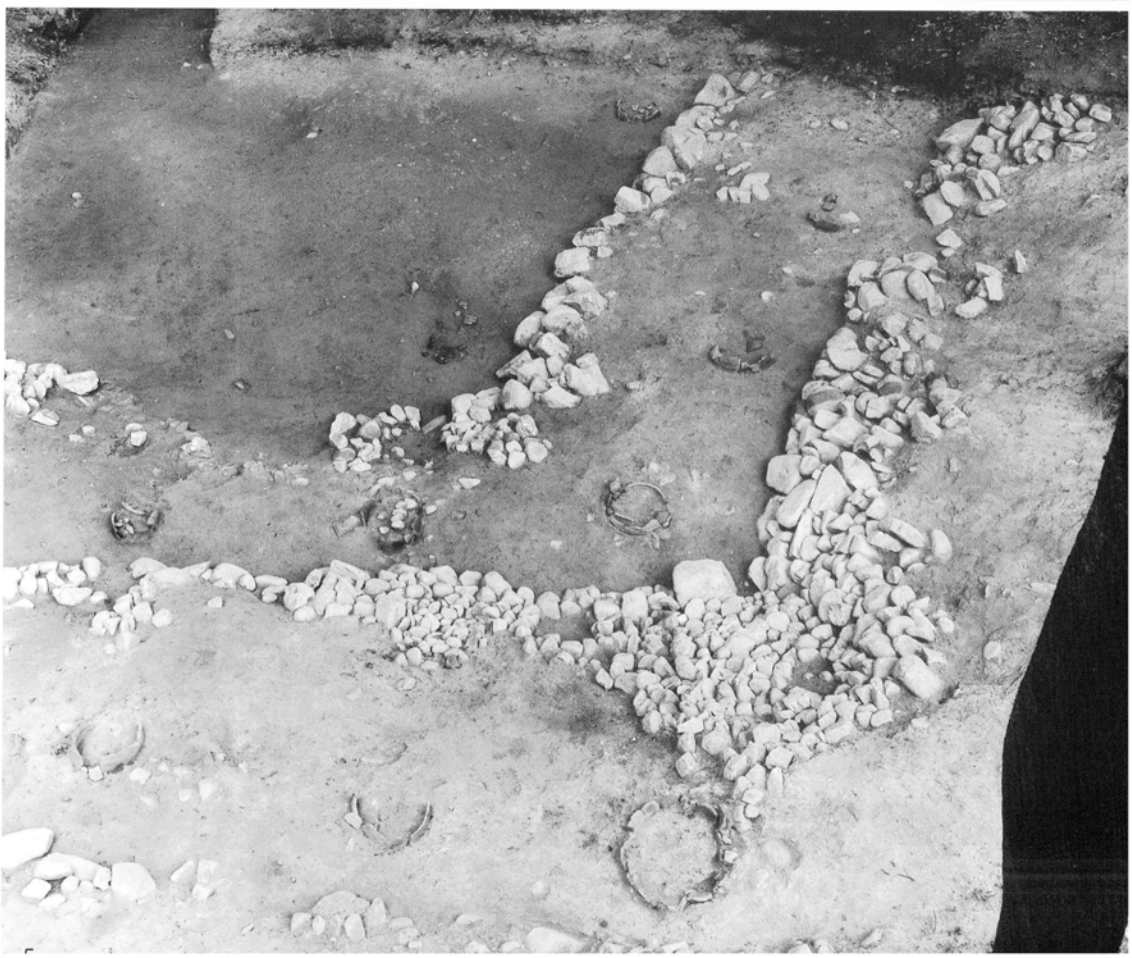
墳丘の調査６
：西くびれ部（Ｗ２区－１）
1.Ｗ２区全景（南から）
2.Ｗ２区全景（南東から）


1


2


3

4

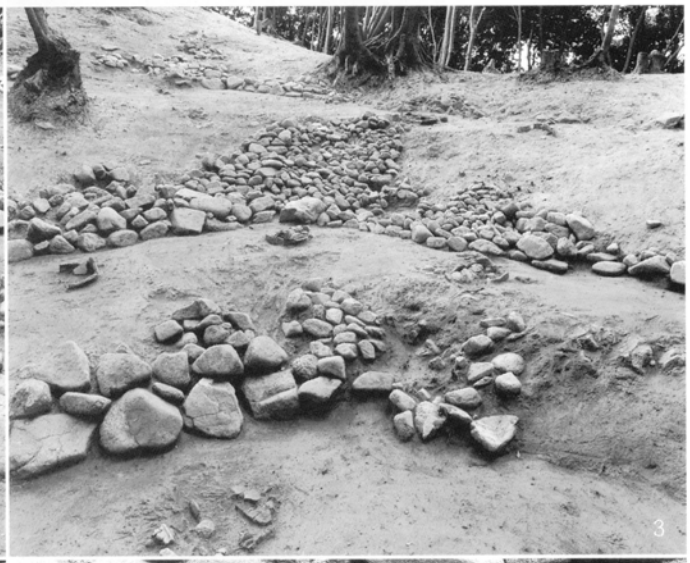

5

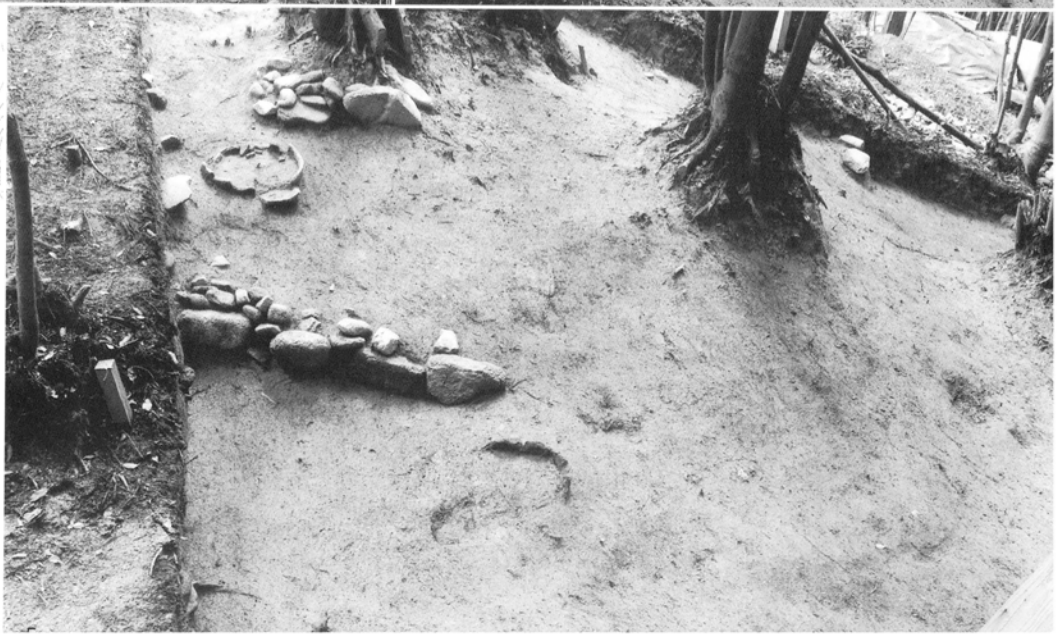
墳丘の調査７：西くびれ部
（Ｗ２区－２）

1.１段斜面葺石と埴輪（南東から）
2.２段斜面葺石と埴輪（南東から）
3.折角部の葺石遺（北から）
4.前方部側面１・２段斜面の
葺石と埴輪（北西から）
5.折角部の葺石と埴輪（東から）

墳丘の調査８：西くびれ部
（Ｗ２区－３）

1.墳丘基底面の埴輪と
２段斜面の葺石（西から）
2.１段テラスの埴輪と２段斜面の
葺石（西から）
3.折角部の葺石と埴輪（南から）
4.折角部の２段斜面葺石（南から）
5.埴輪基部の埋め込み状況(西から)

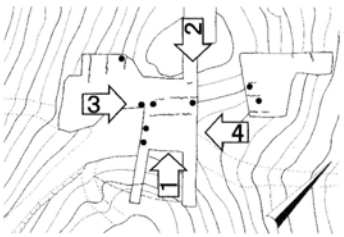




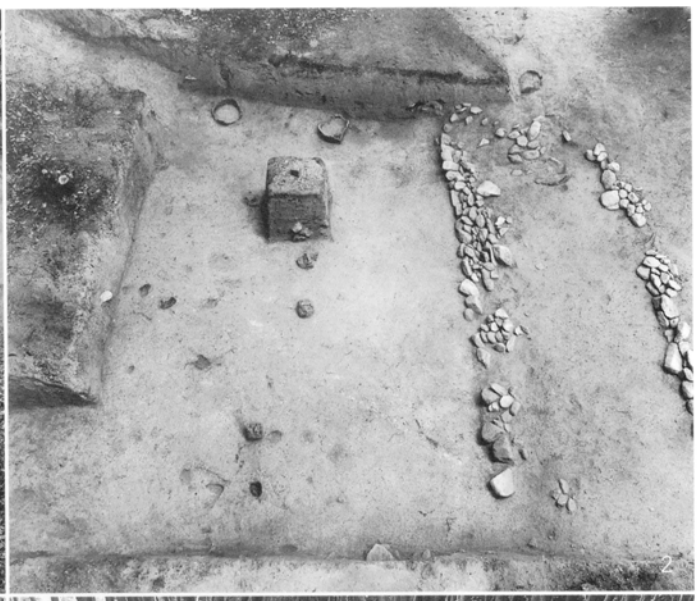
墳丘の調査９：前方部側面

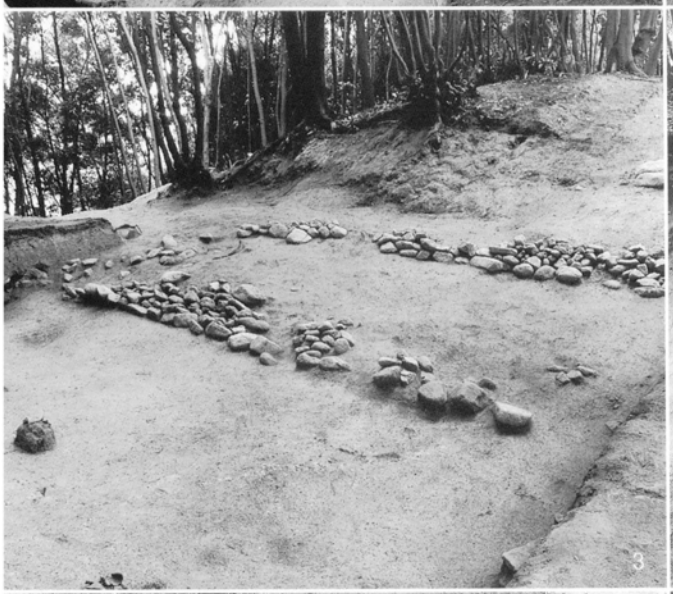
1.E３区全景（北東から）
2.E３区１・２段斜面葺石とテラス（北から）
3.W３区全景（南西から）
4.E４区前方部側面の１・２段斜面葺石（南東から）
5.E４区前方部前面の葺石と埴輪（南東から）

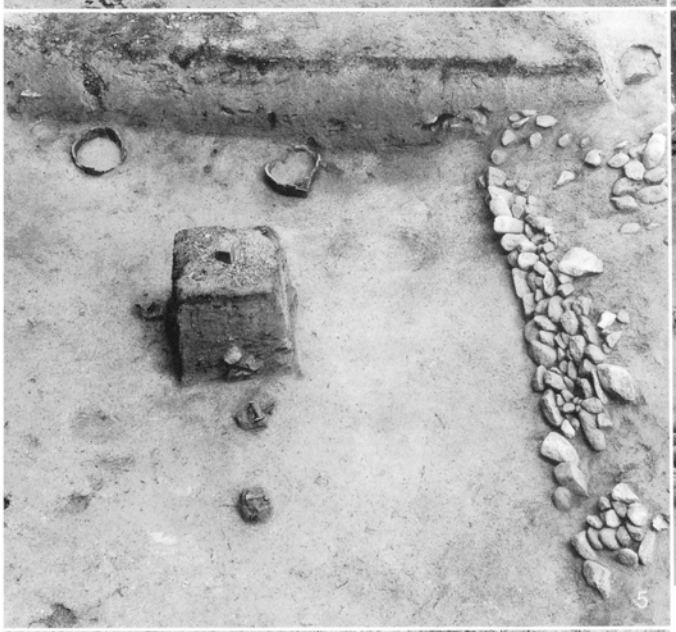
墳丘の調査10：前方部隅角（W４区）
1.調査区全景（南東から）
2.前方部側面の葺石と埴輪（西から）
3.前方部側面の葺石と埴輪（南東から）

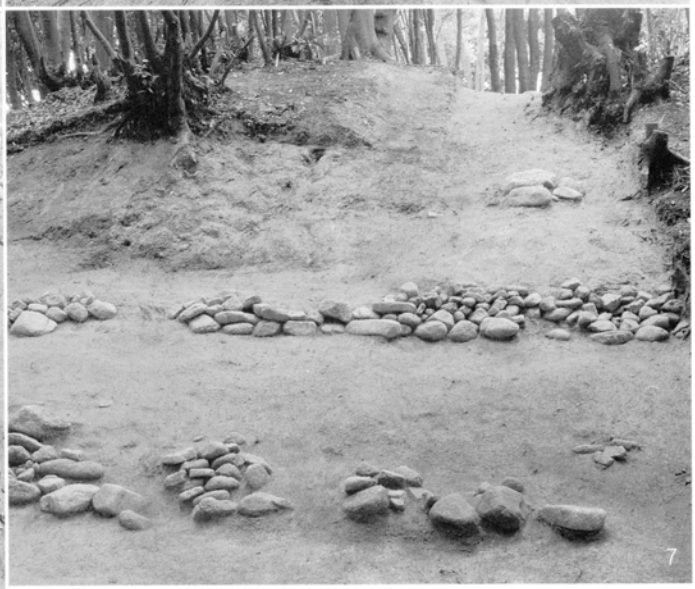


墳丘の調査11：前方部前面（S区－1）
1.調査区全景（南東から）
2.調査区全景（北西から）
3.前面のテラスと葺石（南西から）
4.丘陵切断状況（北東から）



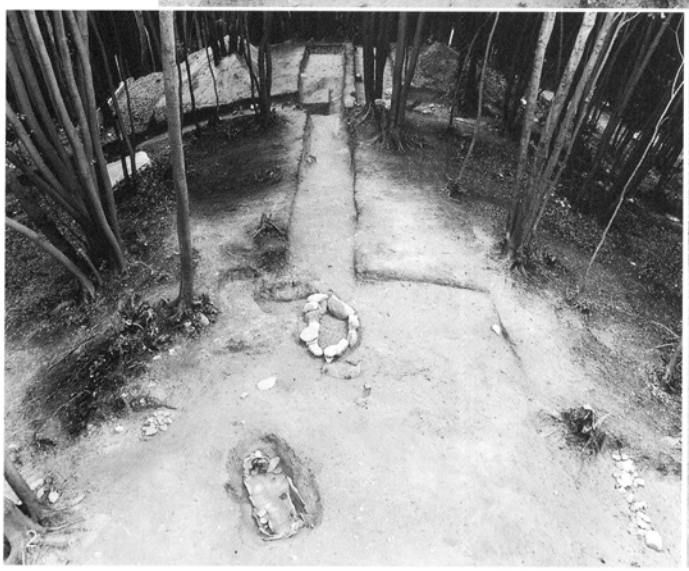


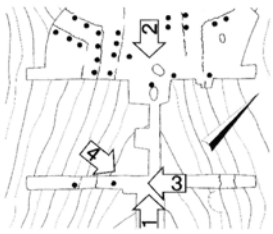




墳丘の調査12：前方部前面
（S区－2）

1.西隅角の墳丘流出状況（南から）
2.丘陵切断部の埴輪配列（北東から）
3.1・2段テラスと葺石（東から）
4.1～3段斜面の葺石（南から）
5.丘陵切断部の埴輪配列と土師器の出土状況（北東から）
6.土師器の出土状況（北から）





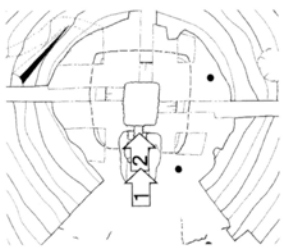
墳丘の調査13：前方部頂面（B・C区）

1.B・C区全景（南西から）

2.B・C区全景（北東から）

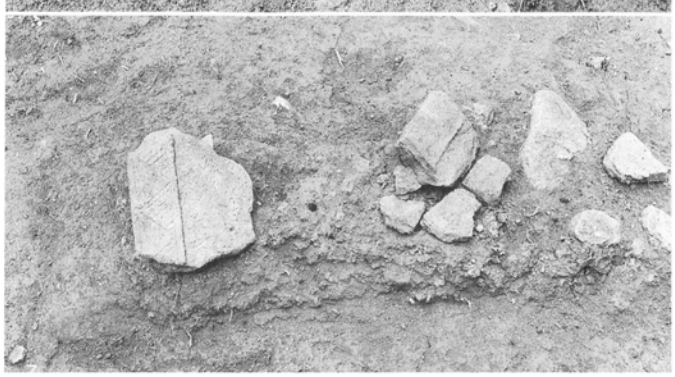
3.C区　　遺構７検出状況（北東から）

4.C区　　遺構７調査状況（北西から）



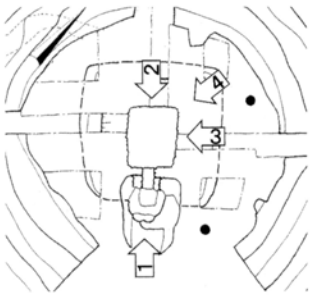
墳丘の調査14：後円部頂面
（K区－1）

1.石敷面全景（南東から）
2.中央部の窪みの前面に散乱する
玄武岩割石（南東から）



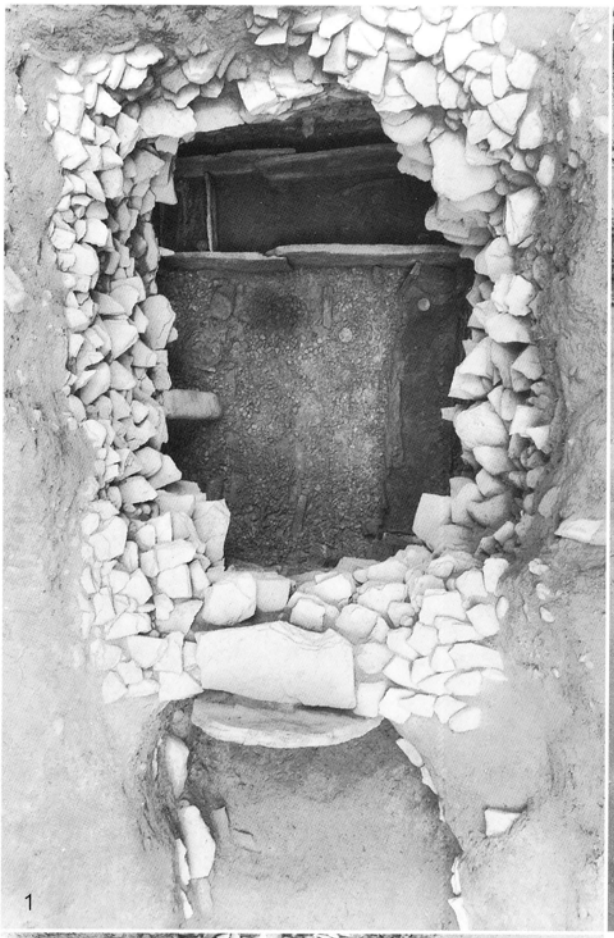
墳丘の調査15：後円部頂面
（K区－2）

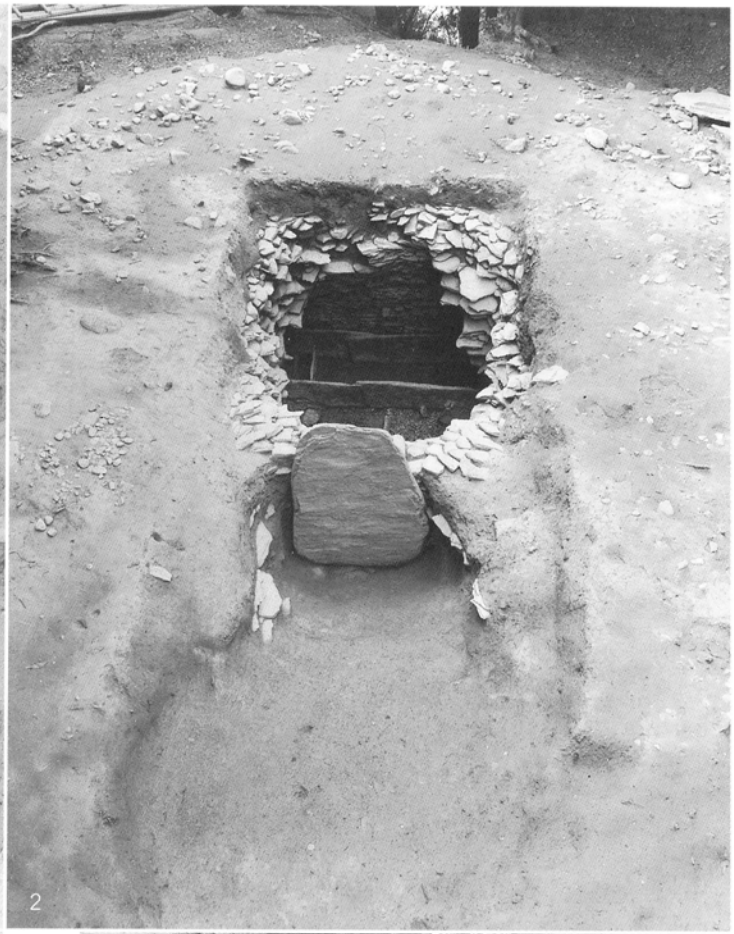
1.中央部の落ち込み状況（東から）
2.玄武岩割石の立石上端部検出状況（北から）
3.頂面端部埴輪出土状況（南東から）
4.頂面端部埴輪出土状況（北西から）
5.頂面端部埴輪出土状況（南から）
6.頂面端部埴輪出土状況（東から）
7.家形埴輪の出土状況（西から）

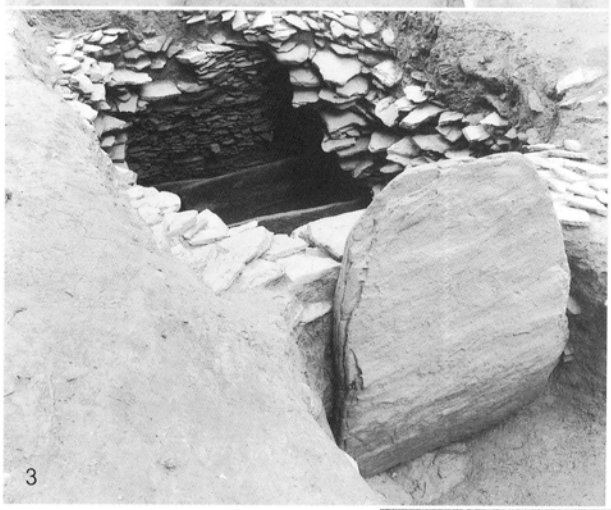


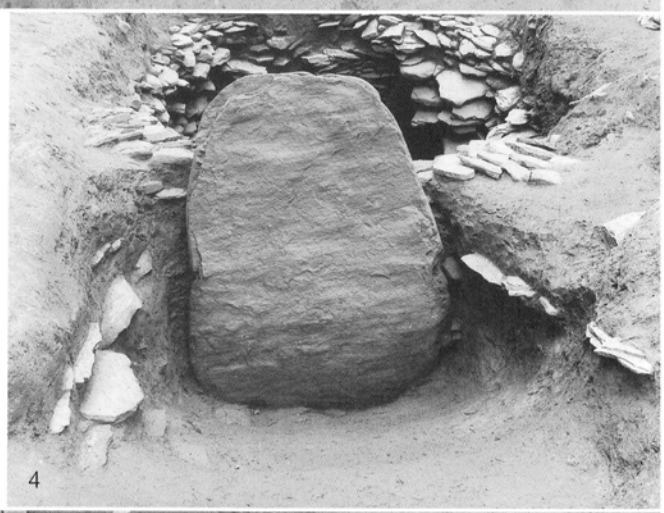
横穴式石室の調査１：天井石崩落状況

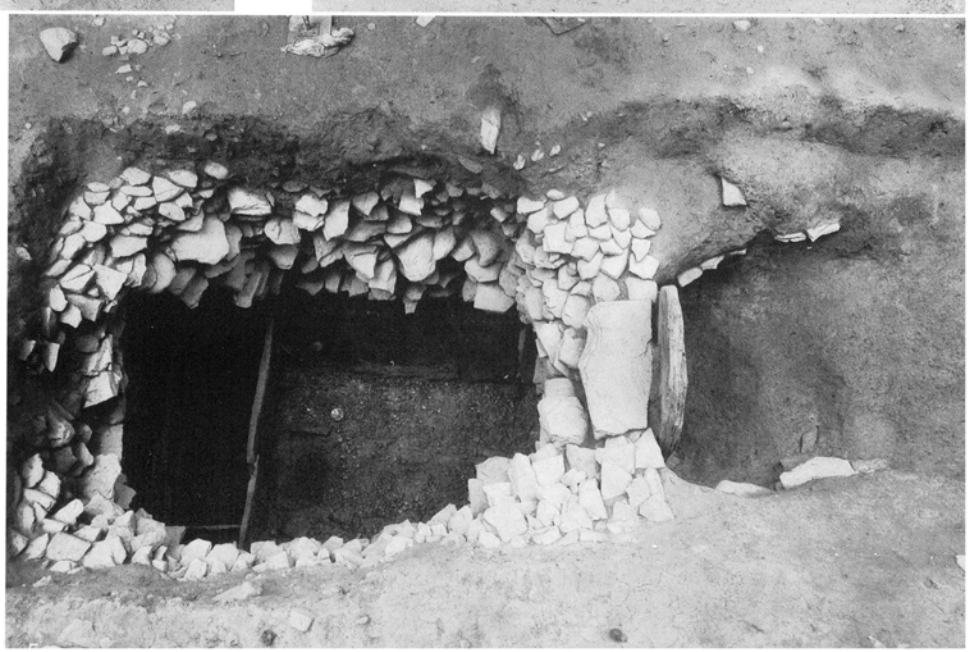
1.３次墓道と玄室天井部崩壊状況（南東から）
2.３次墓道と玄室天井部崩壊状況（北西から）
3.玄室天井部崩壊状況（東から）
4.玄室天井部崩壊状況（北から）
5.天井石石材


1


2

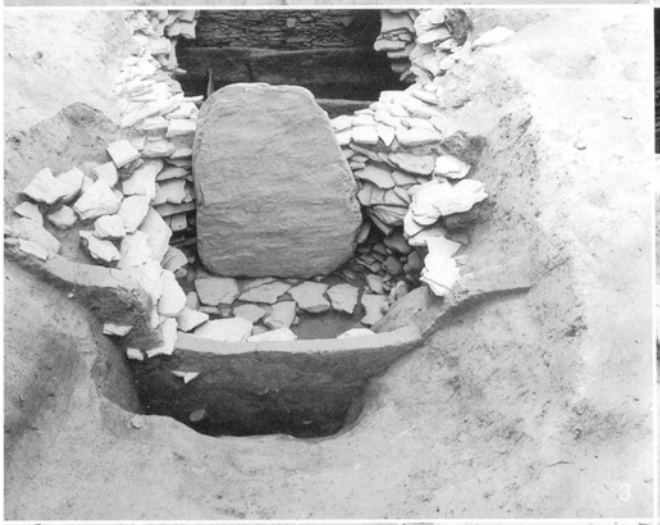

3

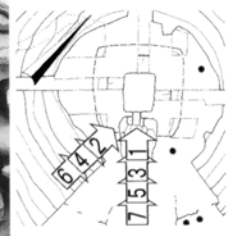

4


5

横穴式石室の調査２：３次埋葬墓道

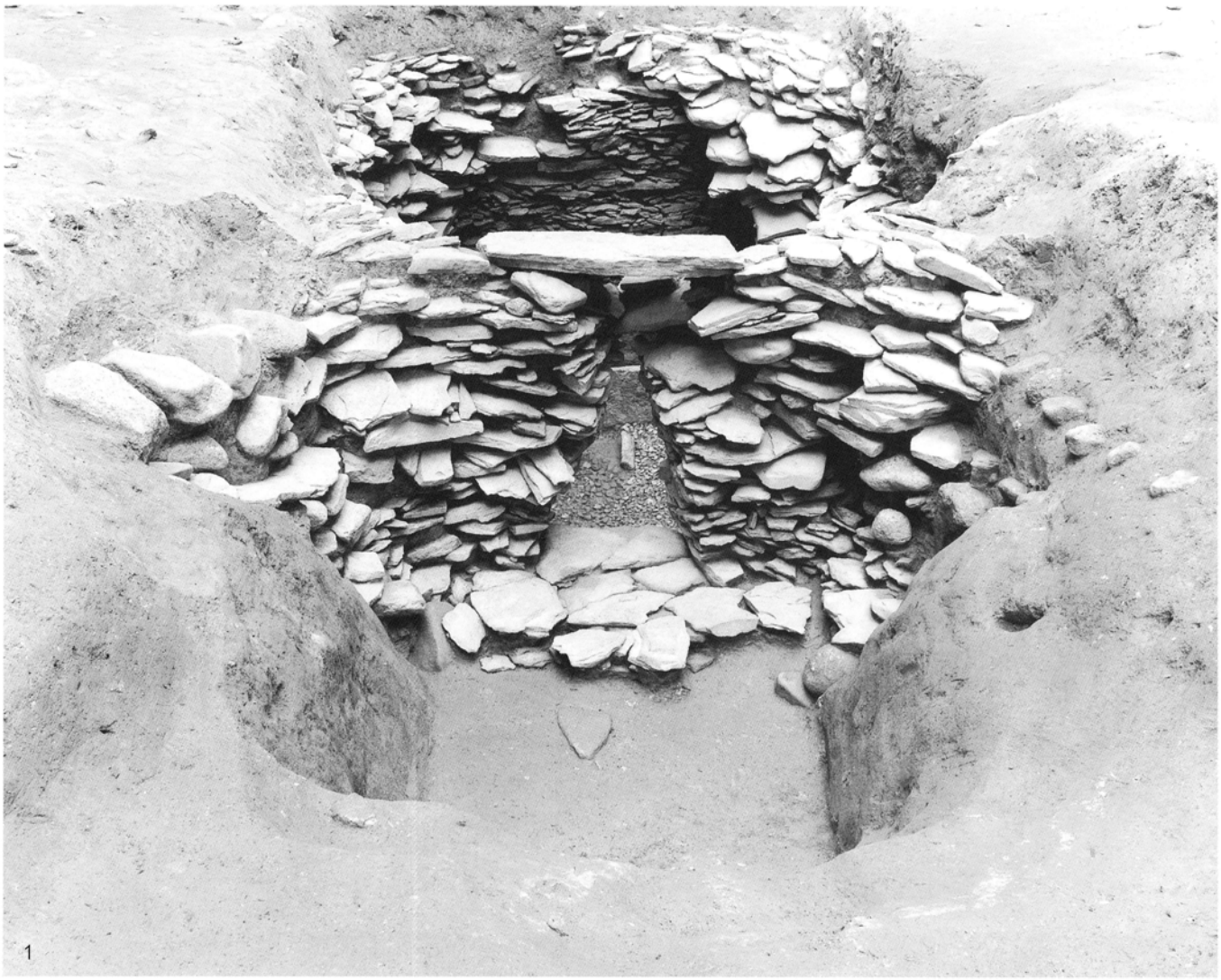
1.石室と墓道（上から）
2.３次墓道と閉塞板石（南東から）
3.閉塞板石配置状況（南から）
4.閉塞板石配置状況（南東から）
5.石室と墓道（南西上部から）



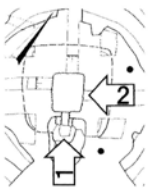


横穴式石室の調査３：竪坑状墓道の調査

1.墓道埋土発掘状況－１（南東から）
2.　〃　（南から）
3.墓道埋土発掘状況－２（南東から）
4.　〃　（南から）
5.閉塞板石露出状況（南東から）
6.閉塞板石露出状況（南から）
7.閉鎖板石除去状況（南東から）



1

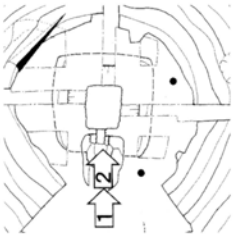


2

横穴式石室の調査 4：
2 次埋葬墓道

1 .竪坑状墓道の2次埋葬面（南東から）
2 .石室と竪坑状墓道（南西から）

1

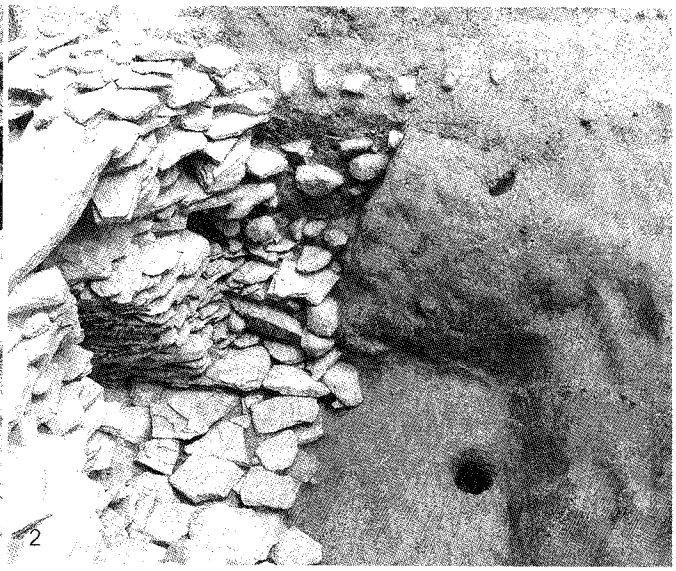


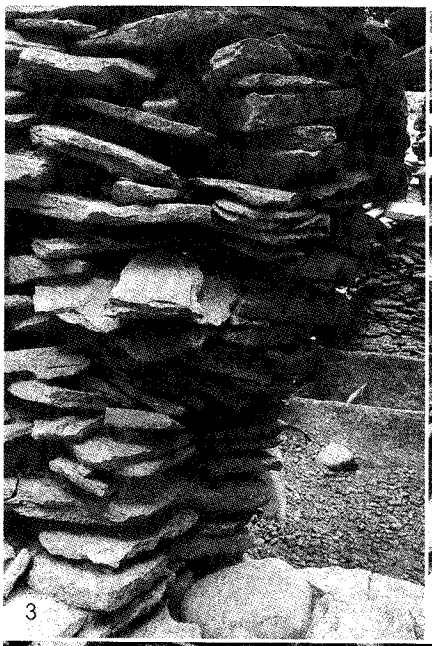
横穴式石室の調査５：１次埋葬墓道

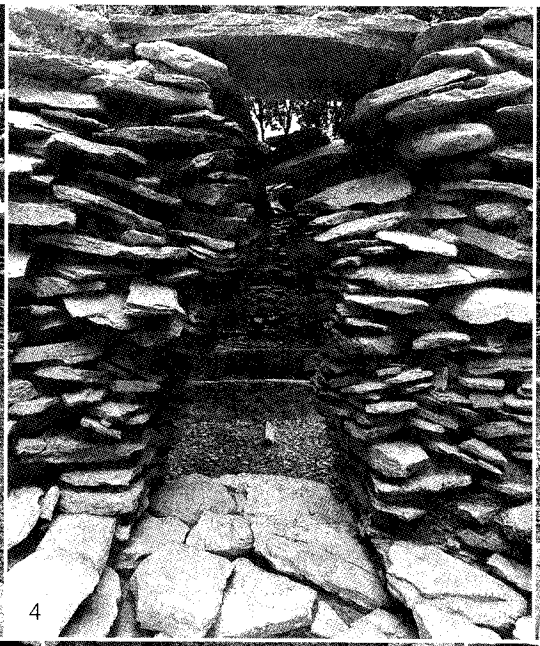
1.竪坑状墓道の１次埋葬面と石室
（南東から）

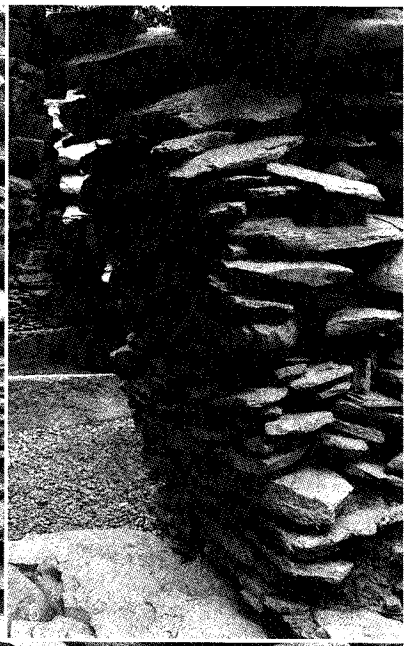
2.前庭と羨道入口部（南東から）

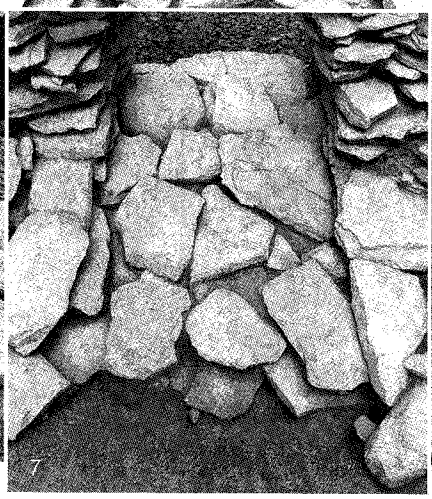
2

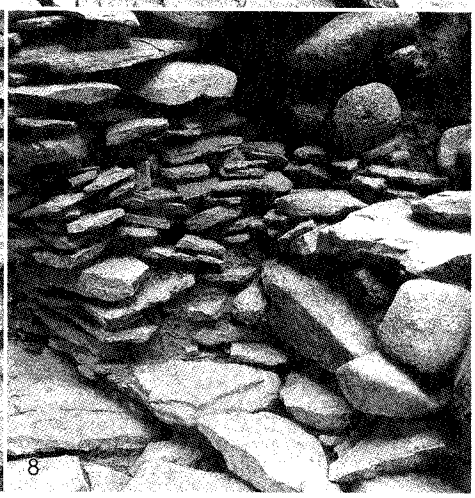






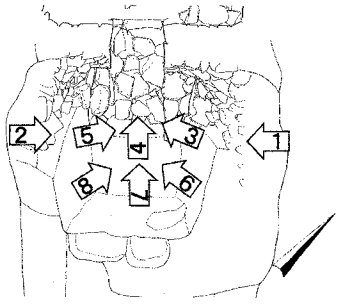


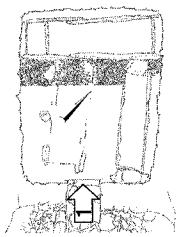




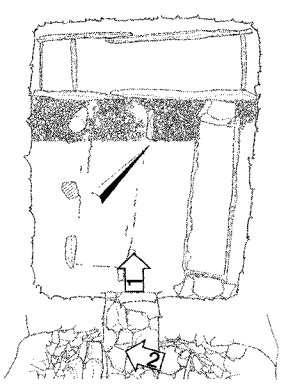
横穴式石室の調査６：１次埋葬墓

1.竪坑状墓道と前庭部（東から）
2.竪坑状墓道と前庭部（西から）
3.羨道左側壁（東から）
4.羨道正面（南東から）
5.羨道右側壁（西から）
6.前庭部左側面下部（東から）
7.羨道～前庭部床面敷石（南東から）
8.前庭部右側面下部（西から）



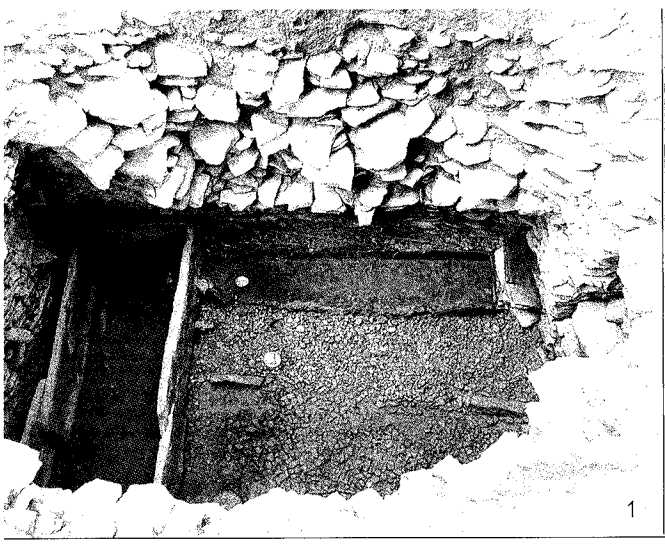


横穴式石室の調査７：遺物出土状況ー１
遺物出土状況（南東から）



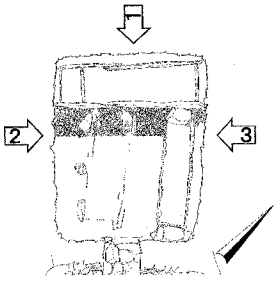
横穴式石室の調査８：遺物出土状況－２
1.遺物出土状況（上から）
2.羨道入口端部出土の双頭龍文鏡（東から）

図版 34


1

2

3

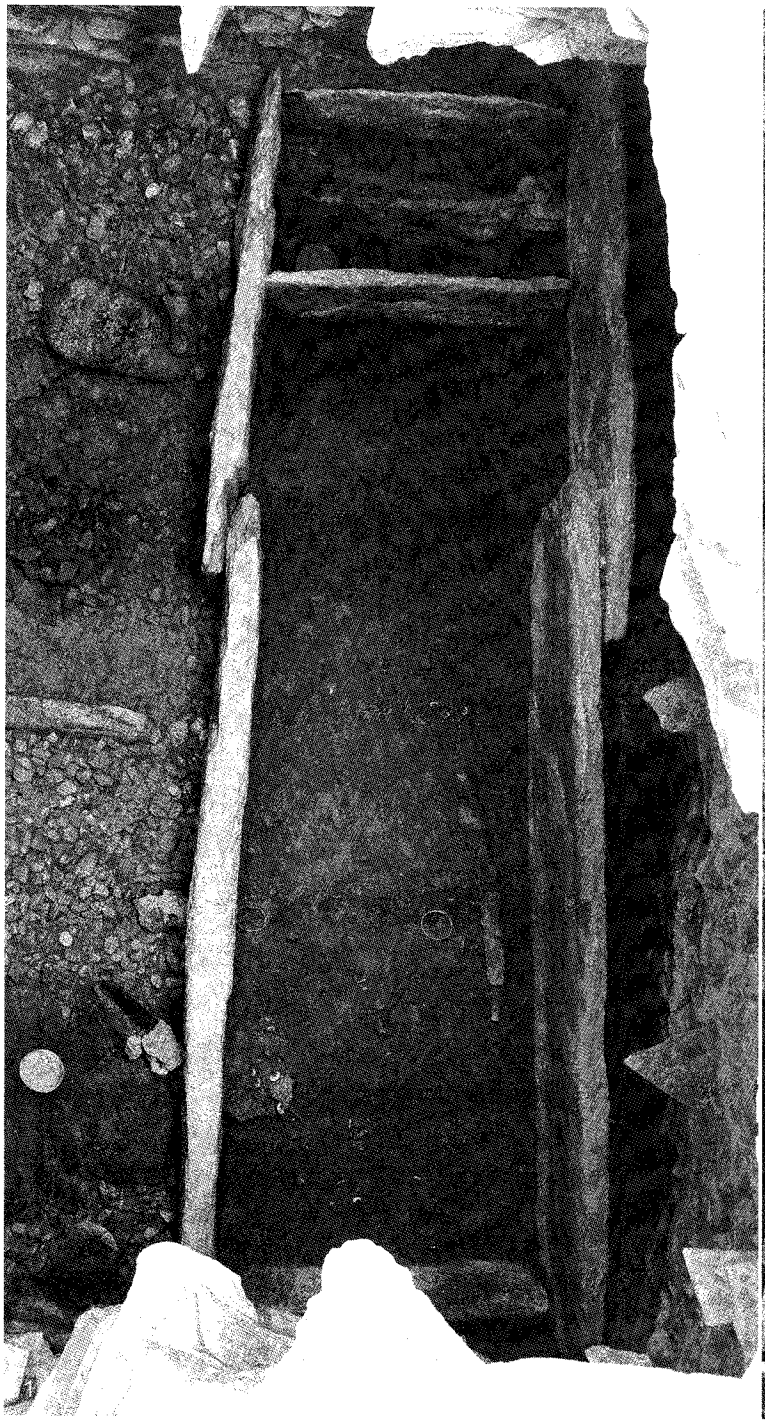


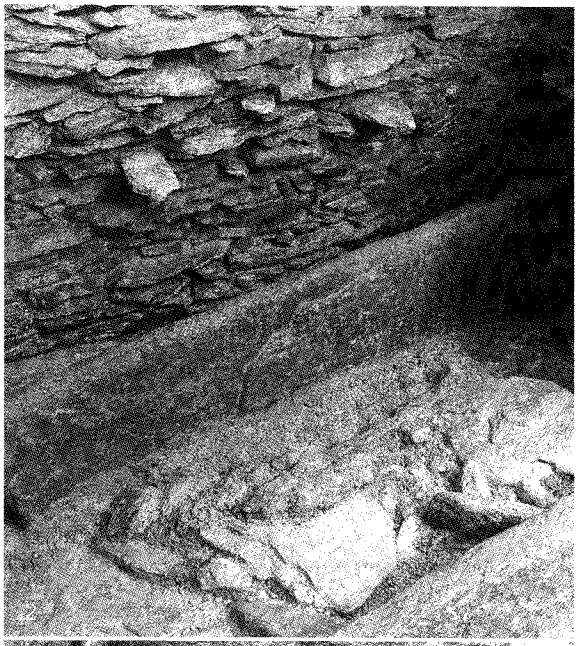
横穴式石室の調査９：遺物出土状況－３

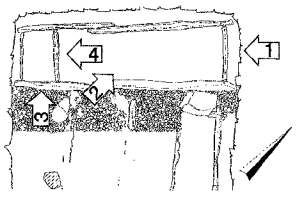
1.遺物出土状況（北東から）

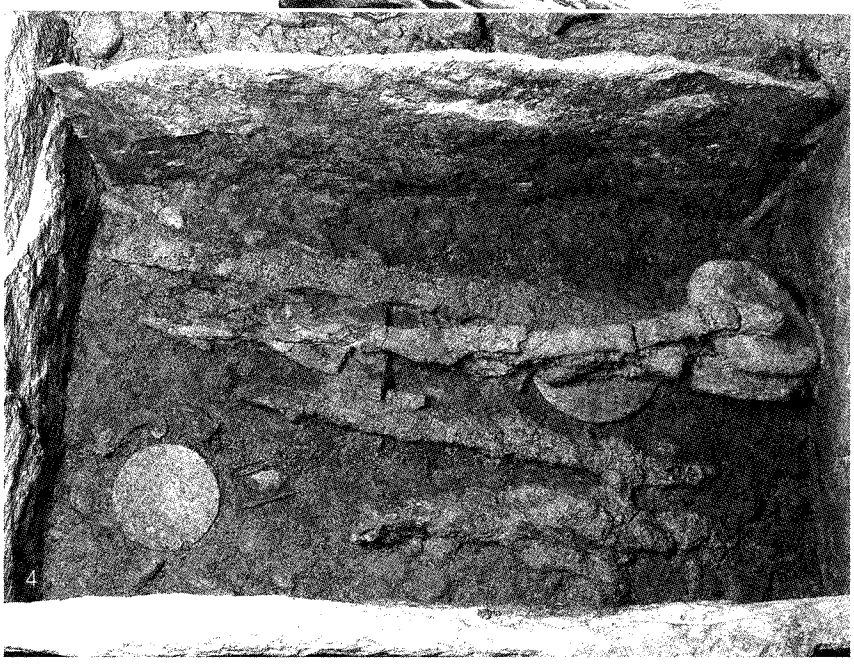
2.遺物出土状況（南西から）

3.遺物出土状況（北西から）



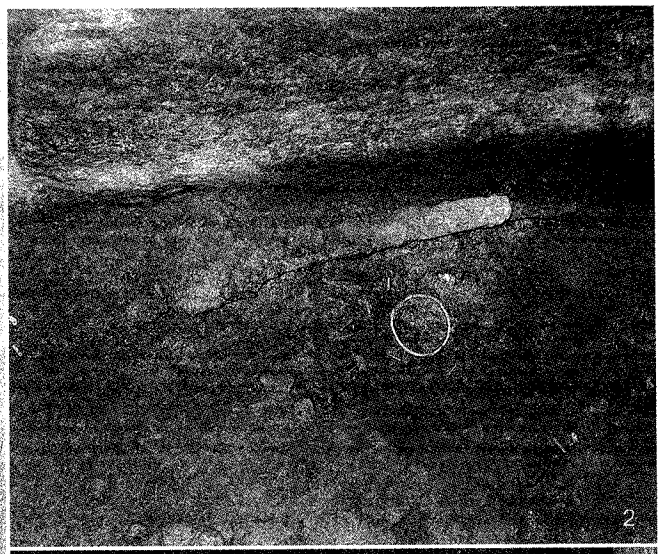


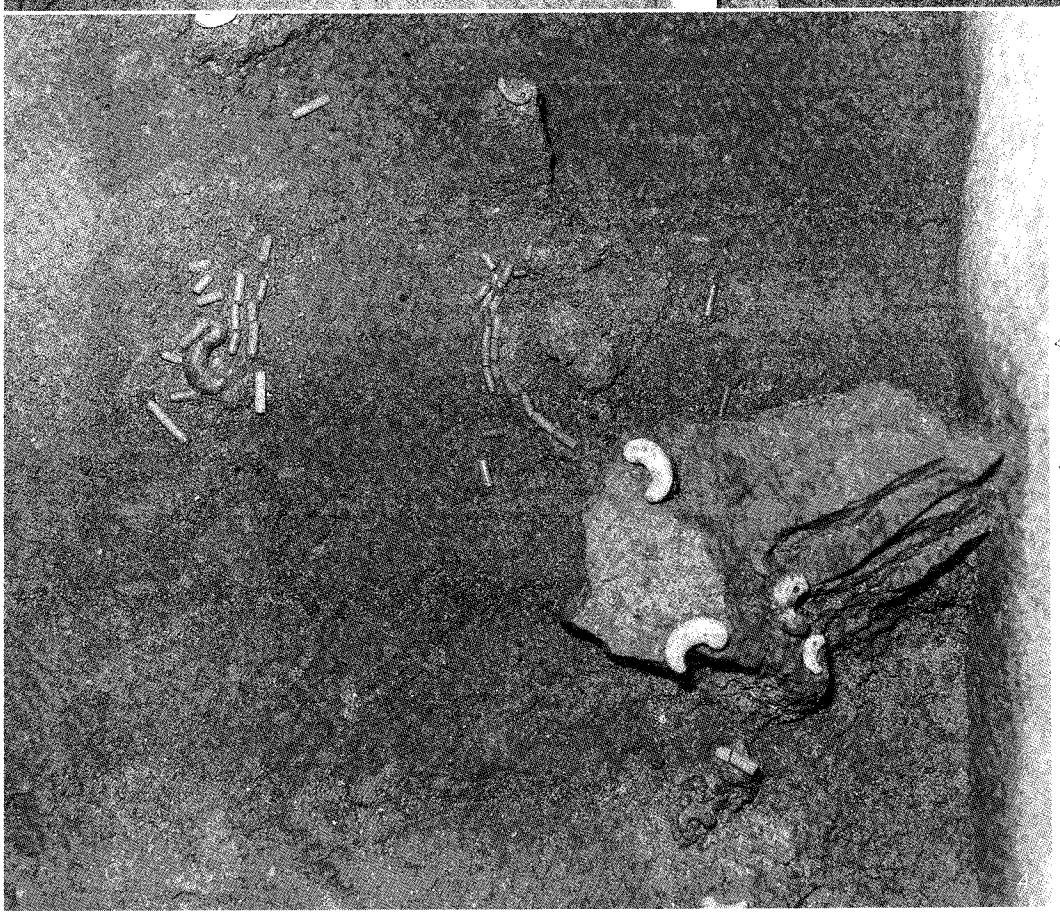


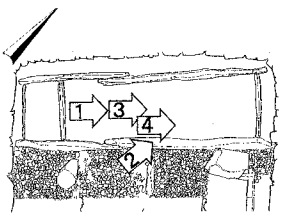


横穴式石室の調査10：１号棺－１

1.１号棺全景（上から）
2.調査中出土の素環頭鉄刀（南から）
3.副室の遺物出土状況（南東から）
4.副室の遺物出土状況（北東から）







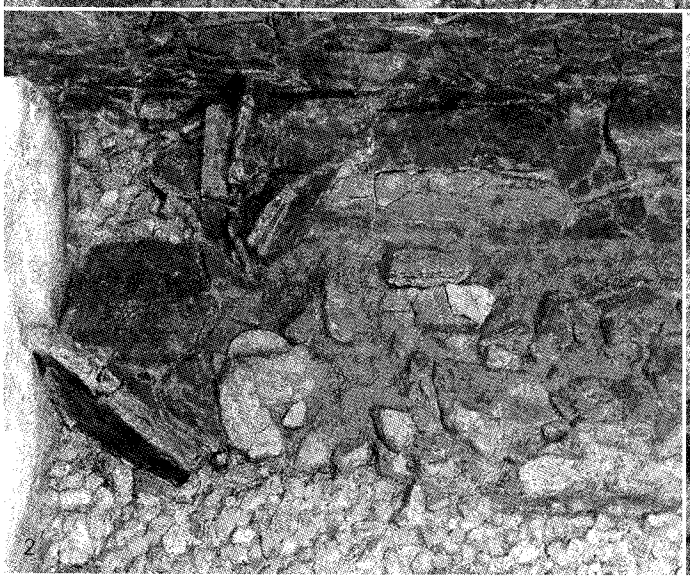
横穴式石室の調査11：１号棺－２

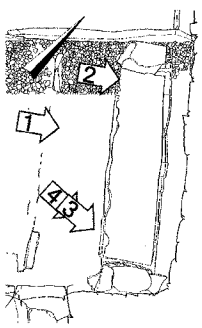
1.主室内副葬品出土状況（南西から）

2.鉄剣・銅釧・竪櫛の出土状況（南東から）

3.銅釧と玉Ｃ・Ｄ群出土状況（南西から）

4.玉Ａ・Ｂ群出土状況（南西から）





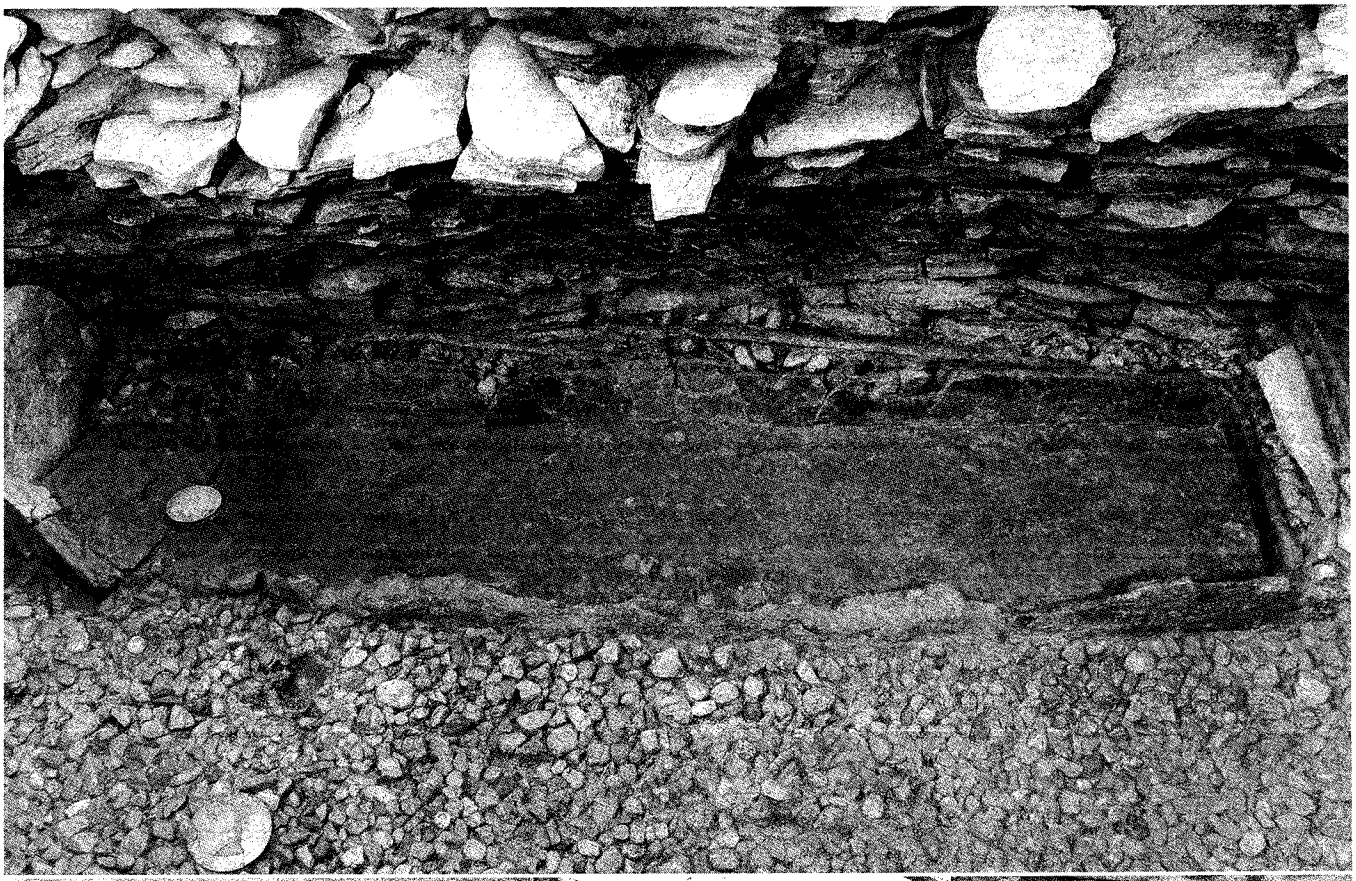
横穴式石室の調査12：２号棺－１

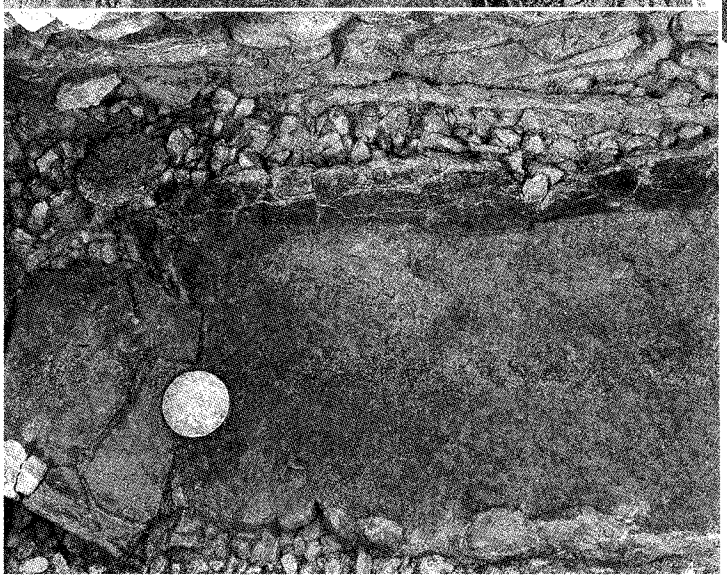
1.２号棺検出状況（南西から）

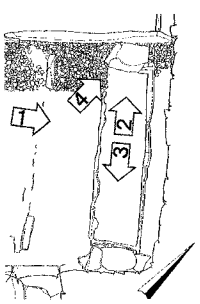
2.北小口部　（南西から）

3.南小口外方の埴質板　（西から）

4.南小口部　（西から）







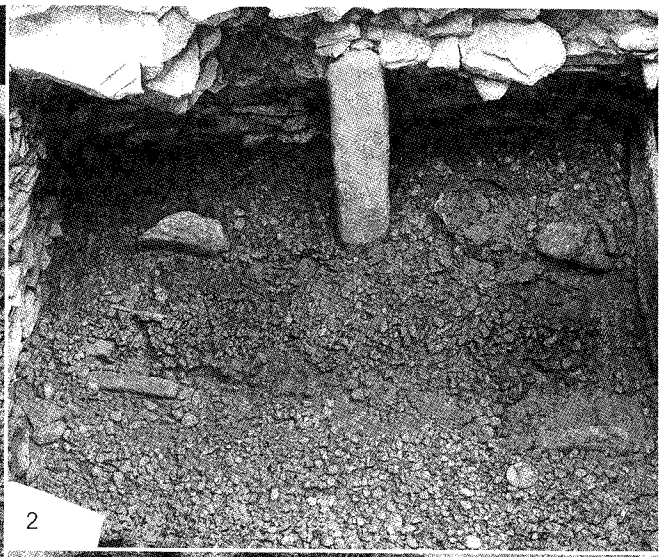
横穴式石室の調査13：２号棺－２

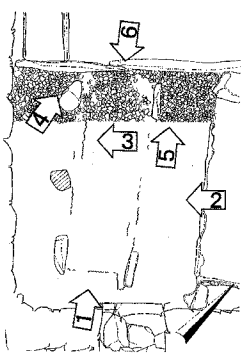
1.２号棺全景（南西から）

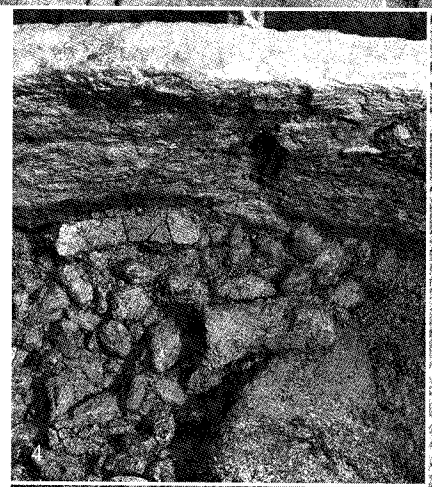
2.棺内北小口部の鏡と棺外出土遺物
（南東から）

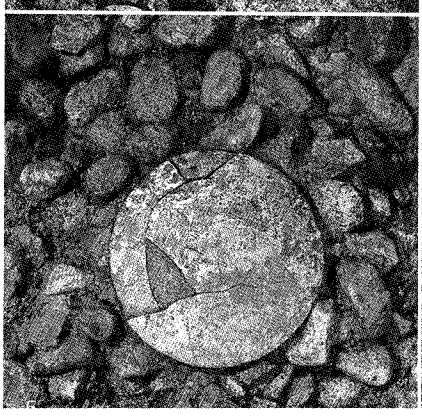
3.棺内北小口部の鏡と棺外出土遺物
（南西から）

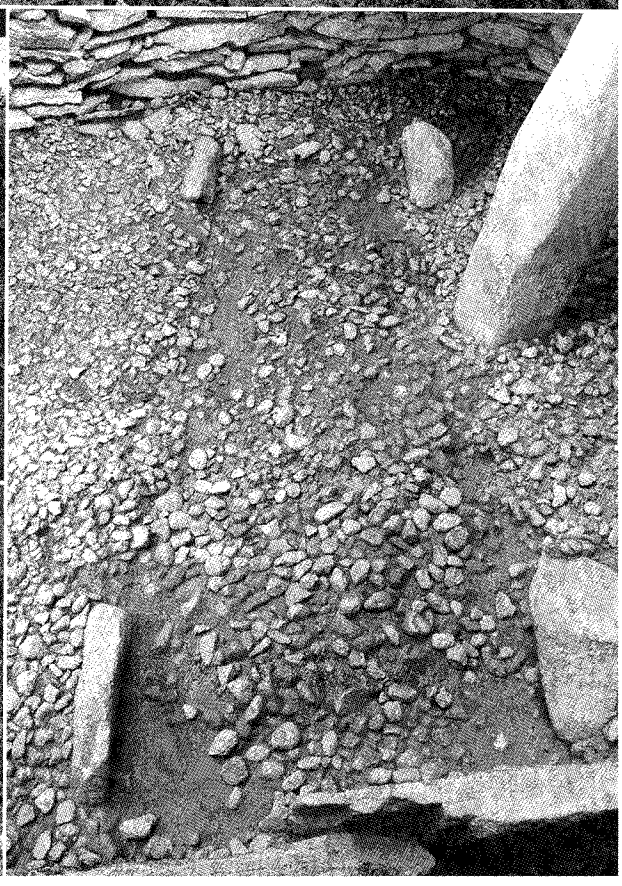
4.棺内南小口と棺外出土遺物
（北西から）





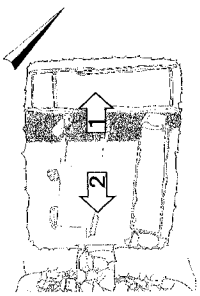




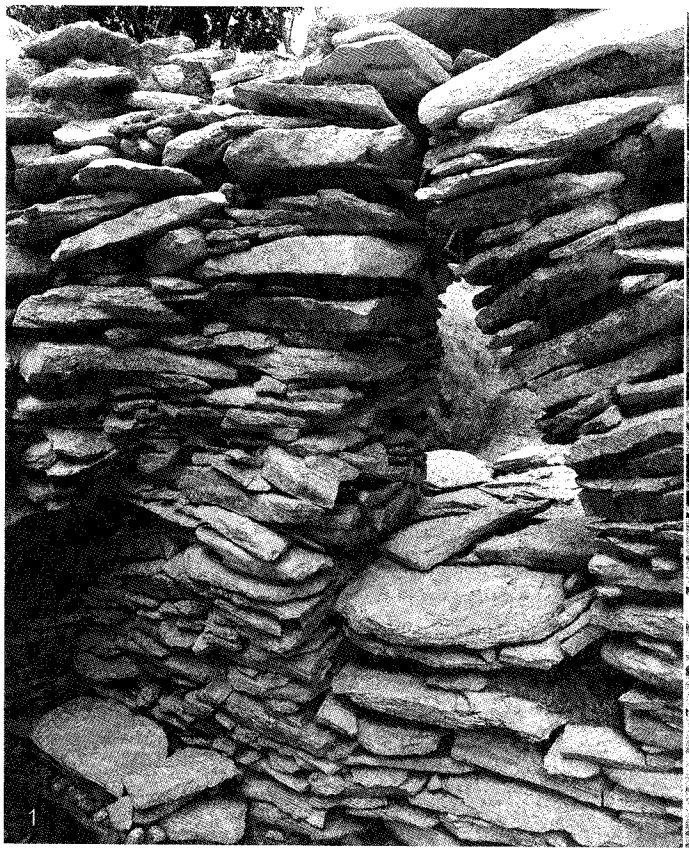


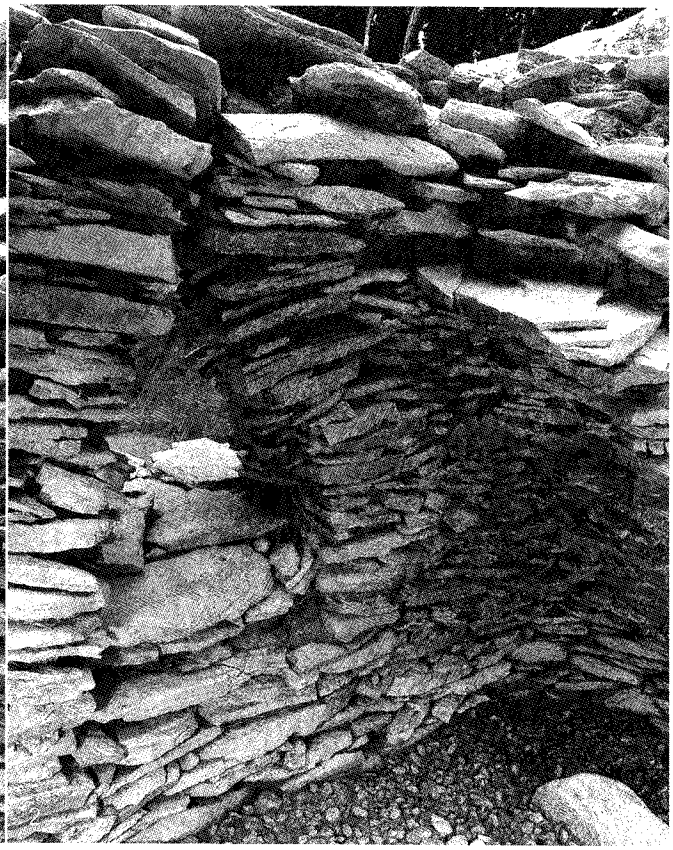
横穴式石室の調査14：３号棺

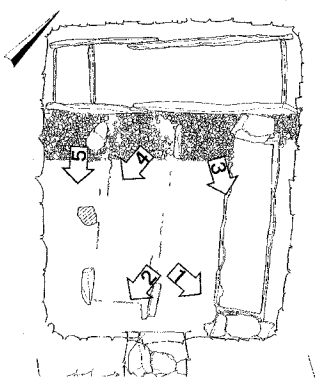
1.全景（上から）
2.全景（北東から）
3.短甲出土状況（北東から）
4.棺外出土遺物（鉄斧・鎌）南東から
5.棺外出土遺物（四獣鏡）南東から
6.全景（北西から）

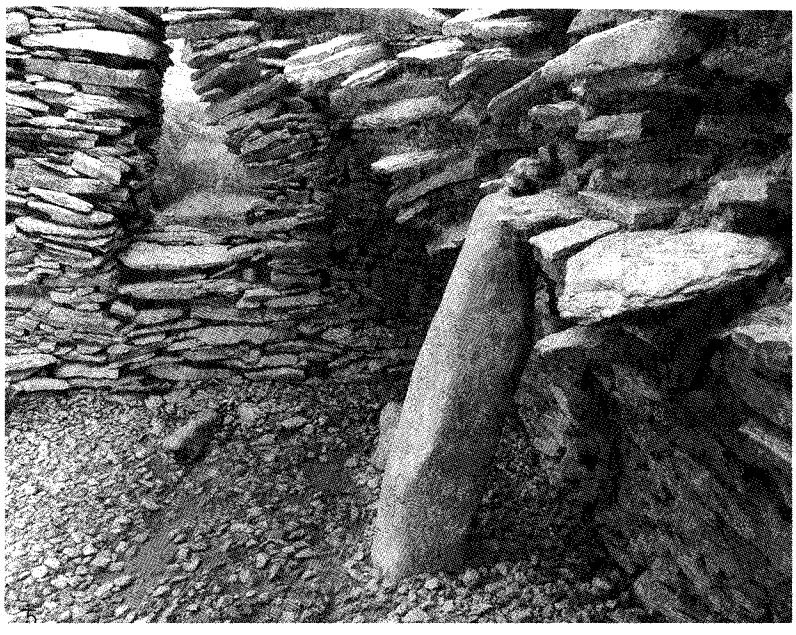


横穴式石室の調査15：石室の構造－1
1.玄室奥壁（南東から）
2.玄室前壁・羨道（北西から）



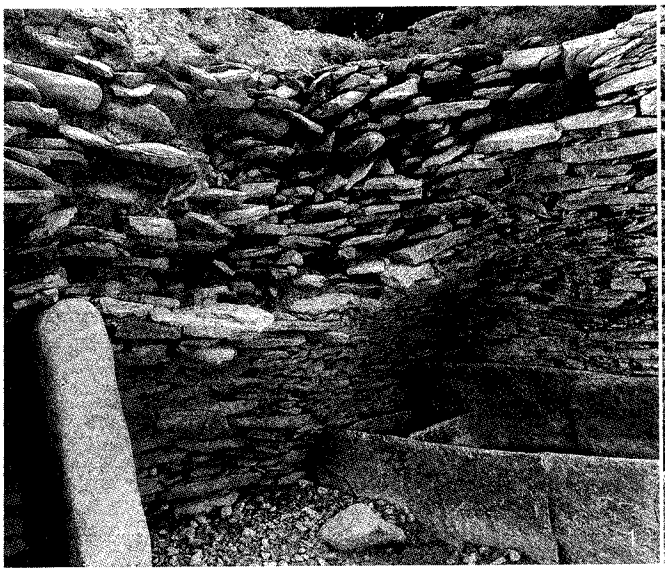


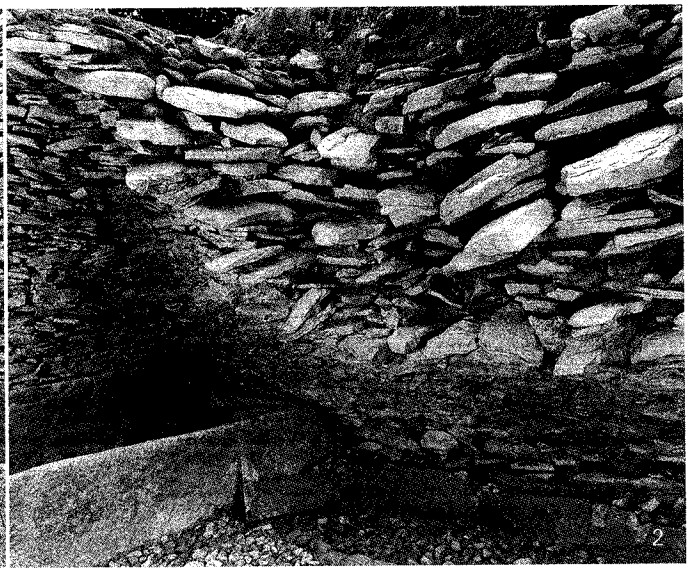


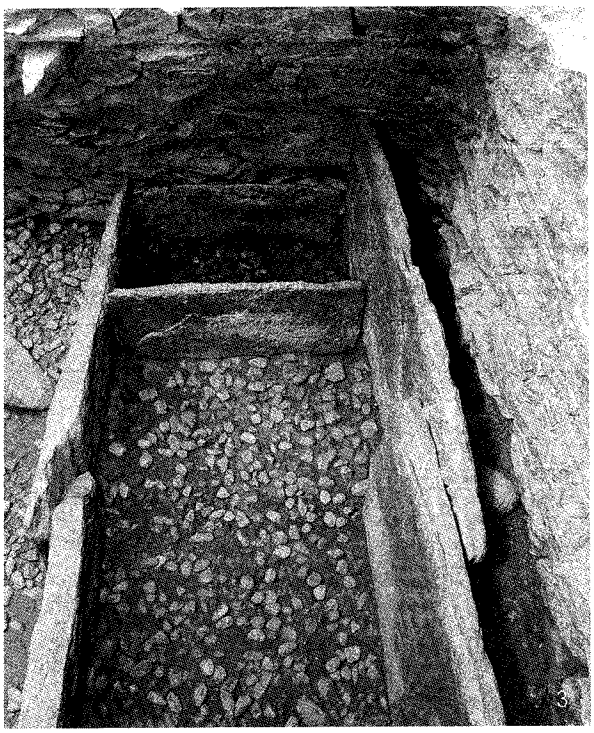


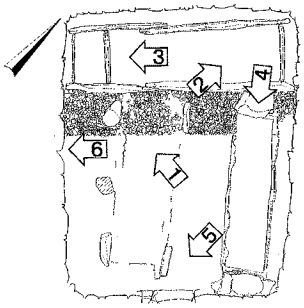
横穴式石室の調査16：
石室の構造－2

1.玄室前壁と羨道右側壁（西から）
2.玄室前壁と羨道左側壁（北から）
3.玄室左側壁と前壁隅角（西から）
4.玄室右側壁と前壁隅角（北から）
5.玄室左側壁の支柱石と突起石
（北西から）



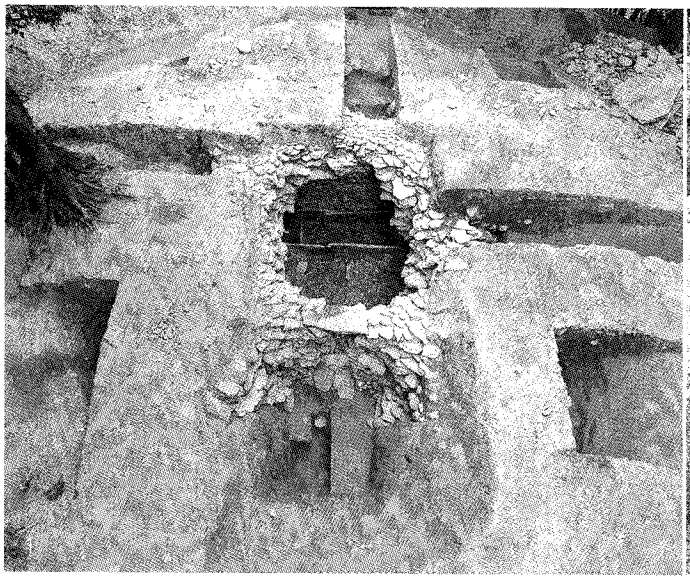


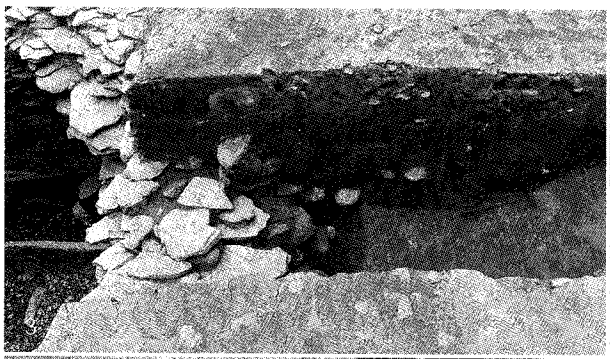


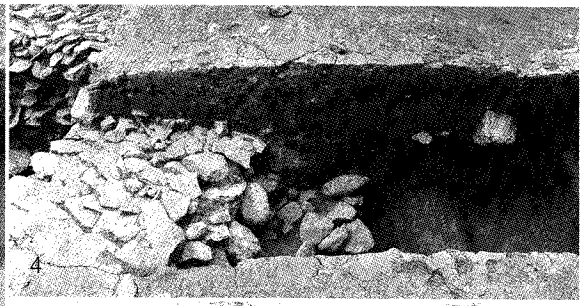


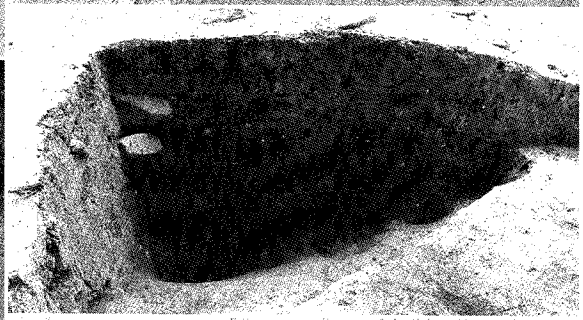
横穴式石室の調査17：石室の構造－3

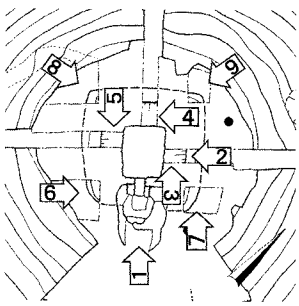
1.玄室左側壁と奥壁隅角（東から）
2.玄室右側壁と奥壁隅角（南から）
3.1号棺床面下小礫面（北東から）
4.2号棺床面下小礫面（北西から）
5.玄室床面下構造（主軸方向サブトレンチ）北から
6.玄室床面下構造（断面C－Dサブトレンチ）北から





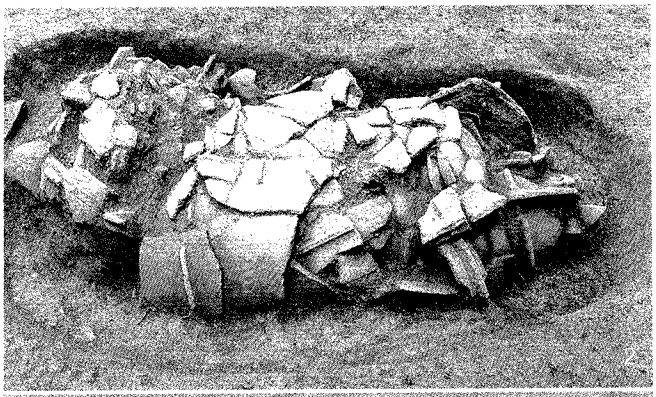


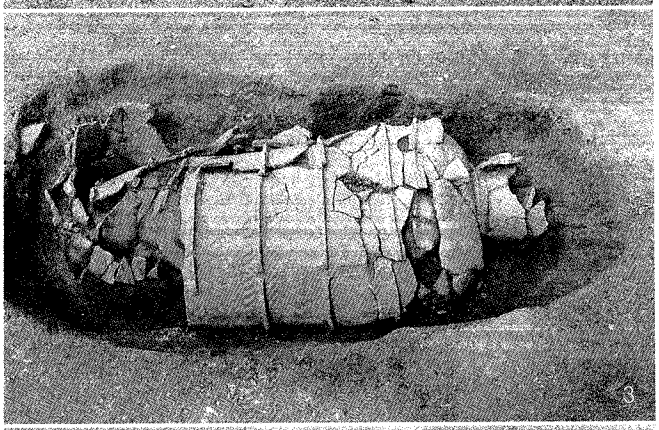


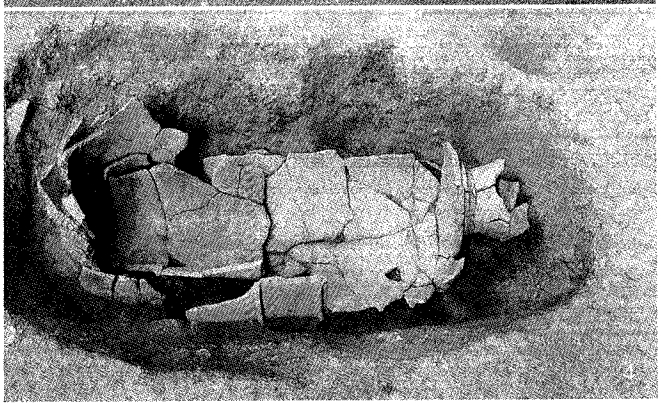


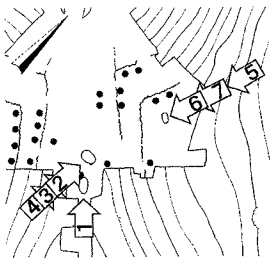
横穴式石室の調査16：石室墓壙の調査

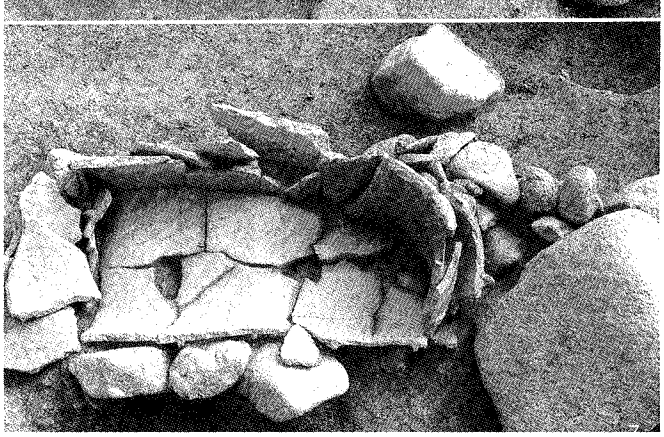
1.墓壙確認調査区全景（南東から）
2.墓壙と裏込め（北東から）
3.Eトレンチ（南東から）
4.Nトレンチ（北東から）
5.Wトレンチ（北西から）
6.W１ａトレンチ　（南西から）
7.E１ａトレンチ　（南東から）
8.W１ｂトレンチ（西から）
9.E１ｂトレンチ（北から）

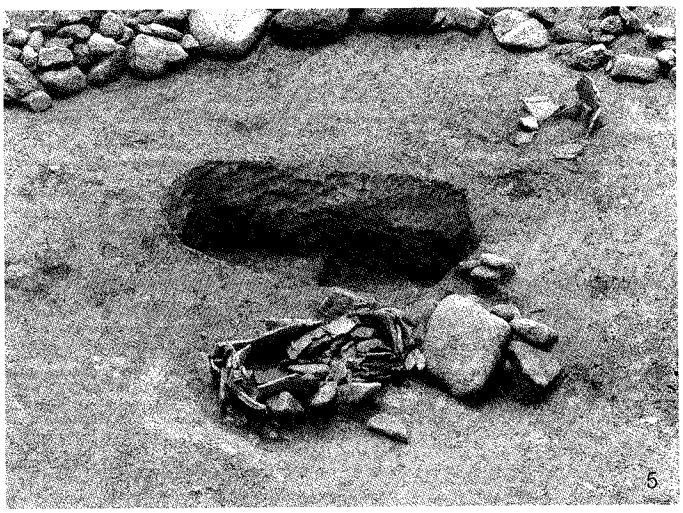






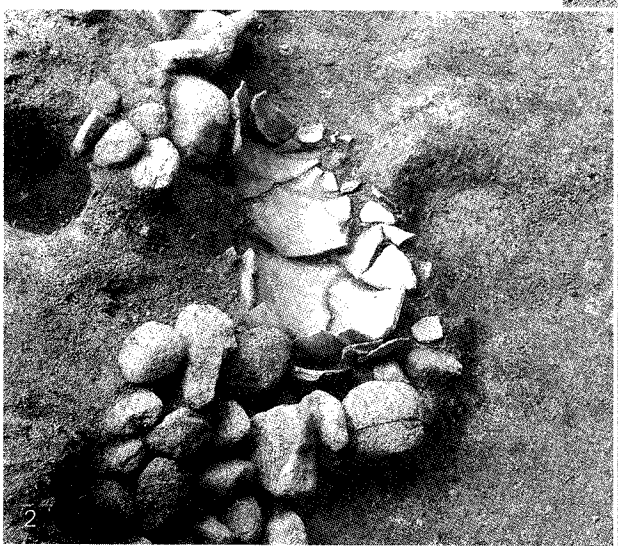


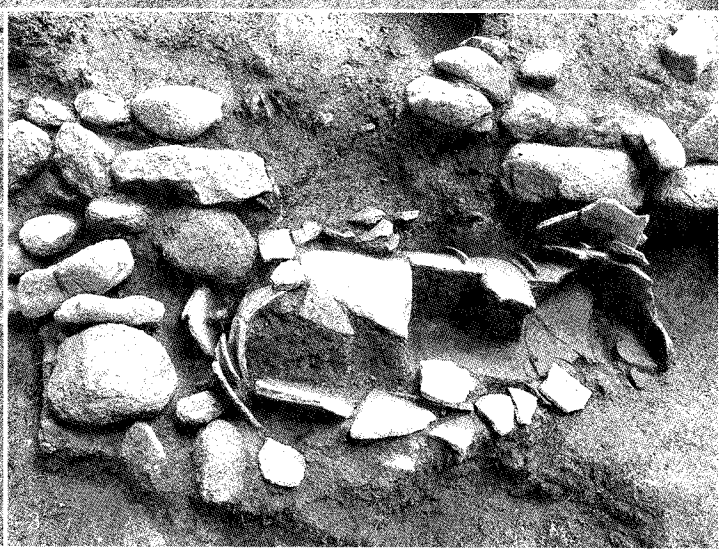


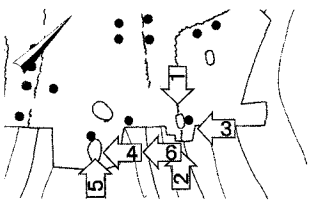


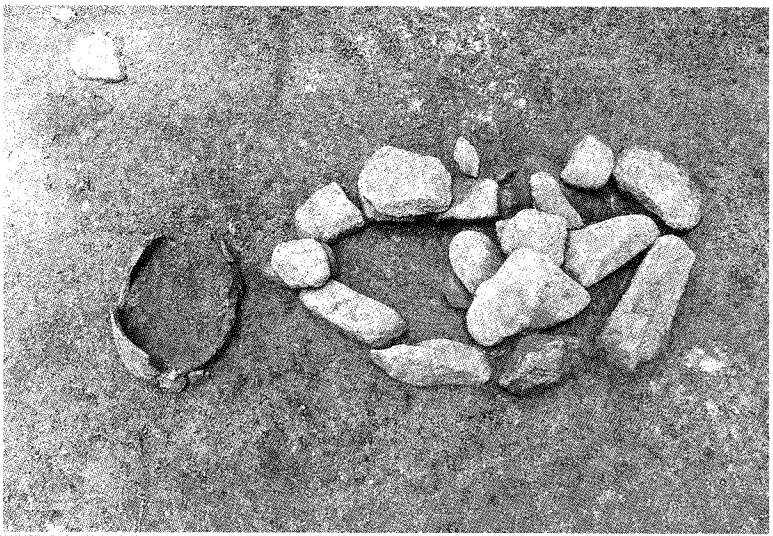
付属埋葬施設の調査 1

1 .埴輪棺 2 と小石室 5 検出状況（南西から）
2 .埴輪棺 2 検出状況 (南西から)
3 .埴輪棺 2 棺本体確認状況 (南西から)
4 .埴輪棺 2 完掘状況 (南西から)
5 .埴輪棺 3 焼土壙 6 出土状況 (東から)
6 .埴輪棺 3 検出状況 (東から)
7 .埴輪棺 3 完掘状況 (東から)



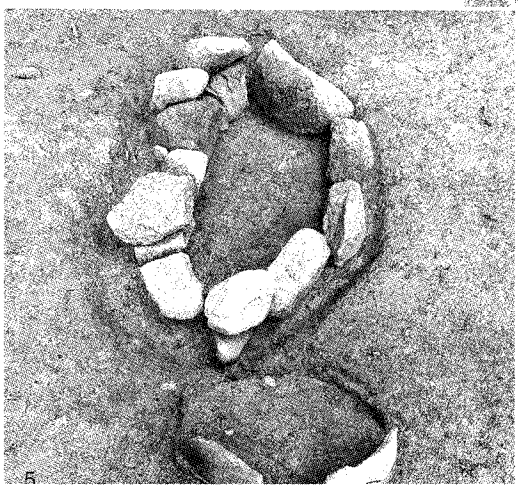


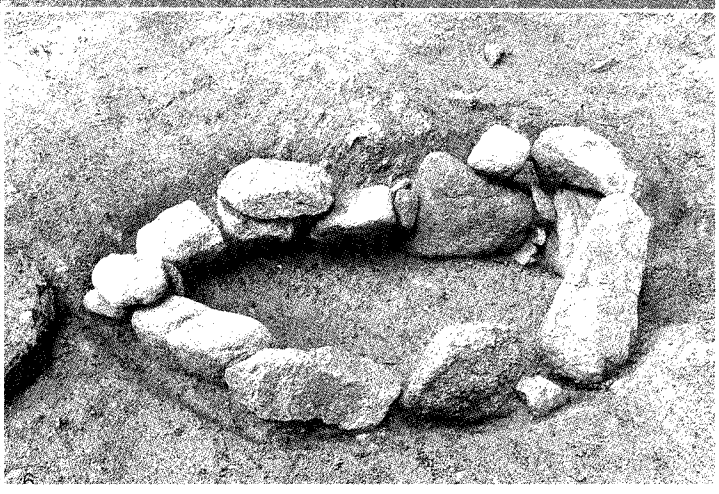




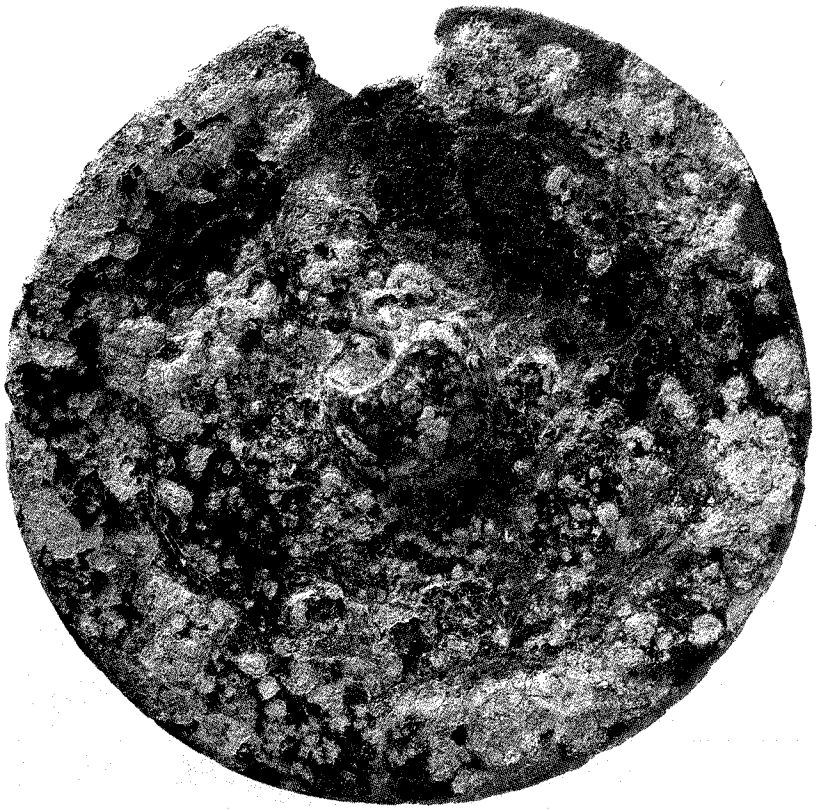
付属埋葬施設の調査２

1.埴輪棺４検出状況 (北西から)
2.埴輪棺４ 完掘状況(東から)
3.埴輪棺４ 検出状況(南東から)
4.楕円形埴輪37と小石棺検出状況（南西から）
5.小石棺完掘状況（南東から）
6.小石棺完掘状況（北東から）





1　内行花文鏡　31　〈２号棺棺外〉　　径14.8 cm

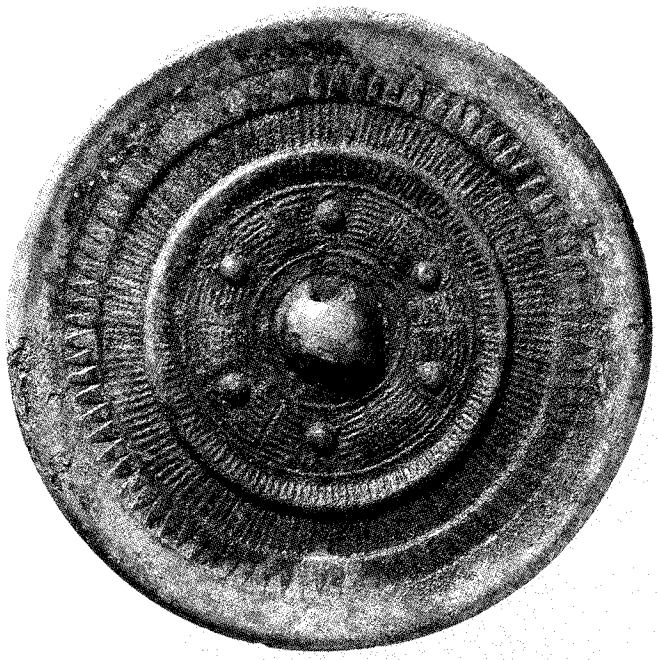


2　双頭龍文鏡　45　〈羨道床面〉　　径11.8 cm

鏡（１）

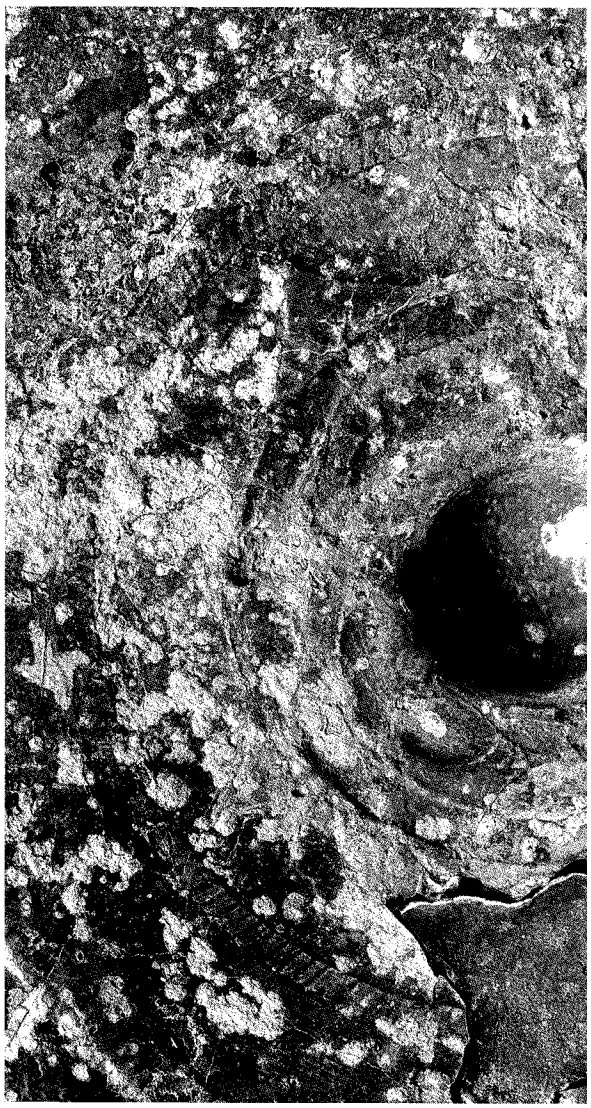
1　四獣鏡　28　〈1号棺副室〉　径11.8cm

2　四獣鏡　38　〈3号棺棺外〉　径11.5cm



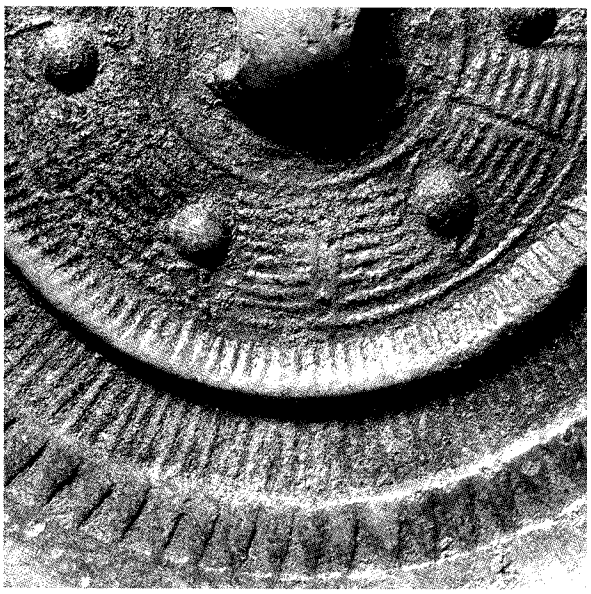
1　捩文鏡　30　〈2号棺棺内〉　　径9.7cm

2　珠文鏡　27　〈1号棺副室〉　　径9.3cm

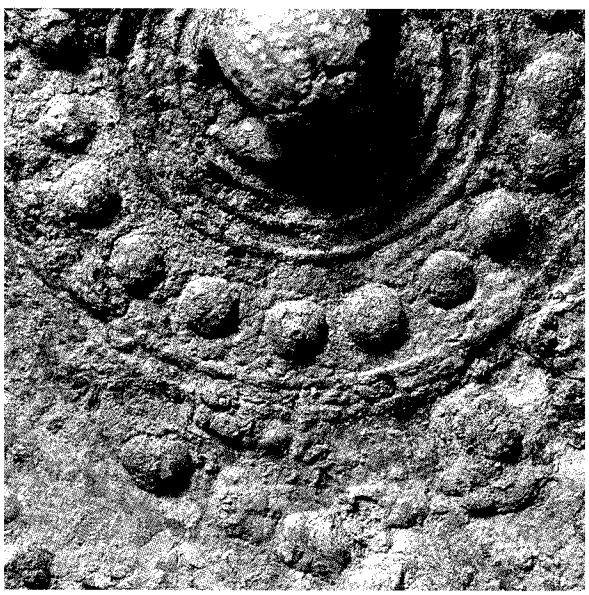


1　内行花文鏡　31　細部

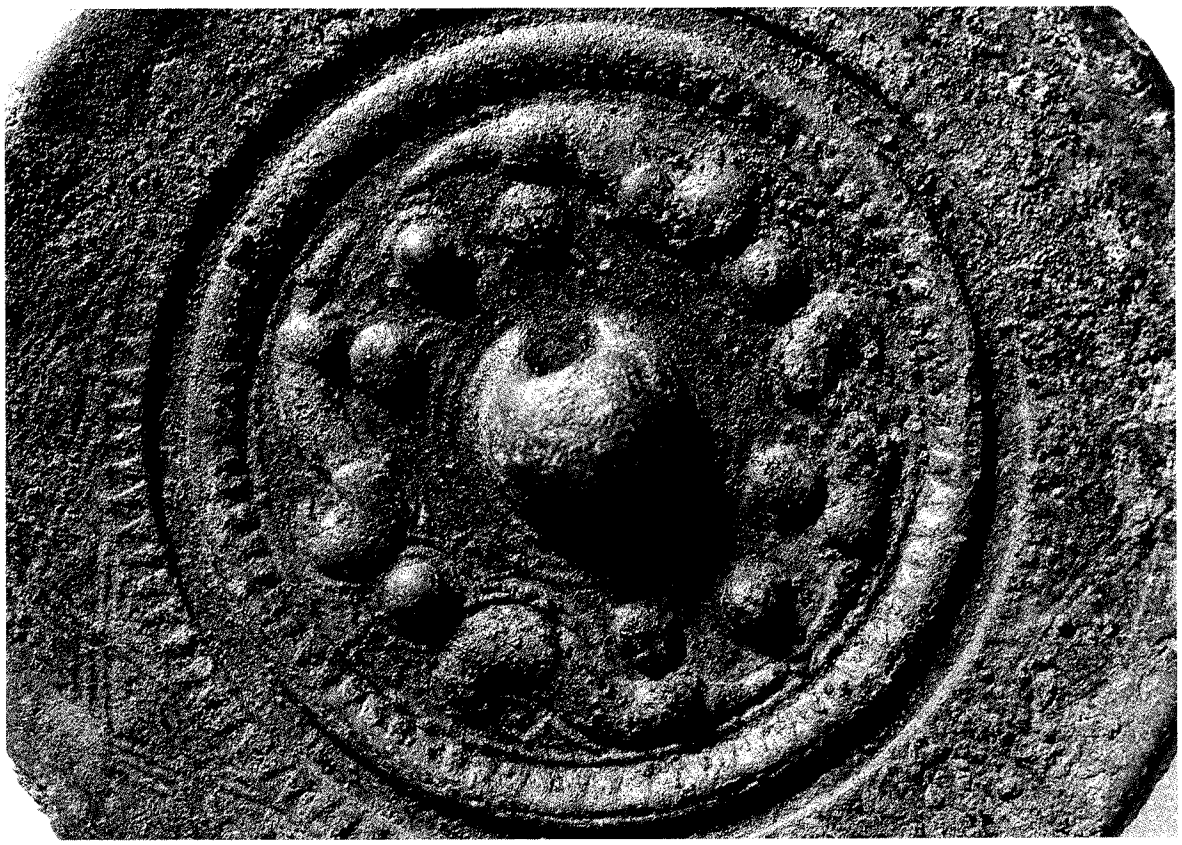
2　双頭龍文鏡　45　細部



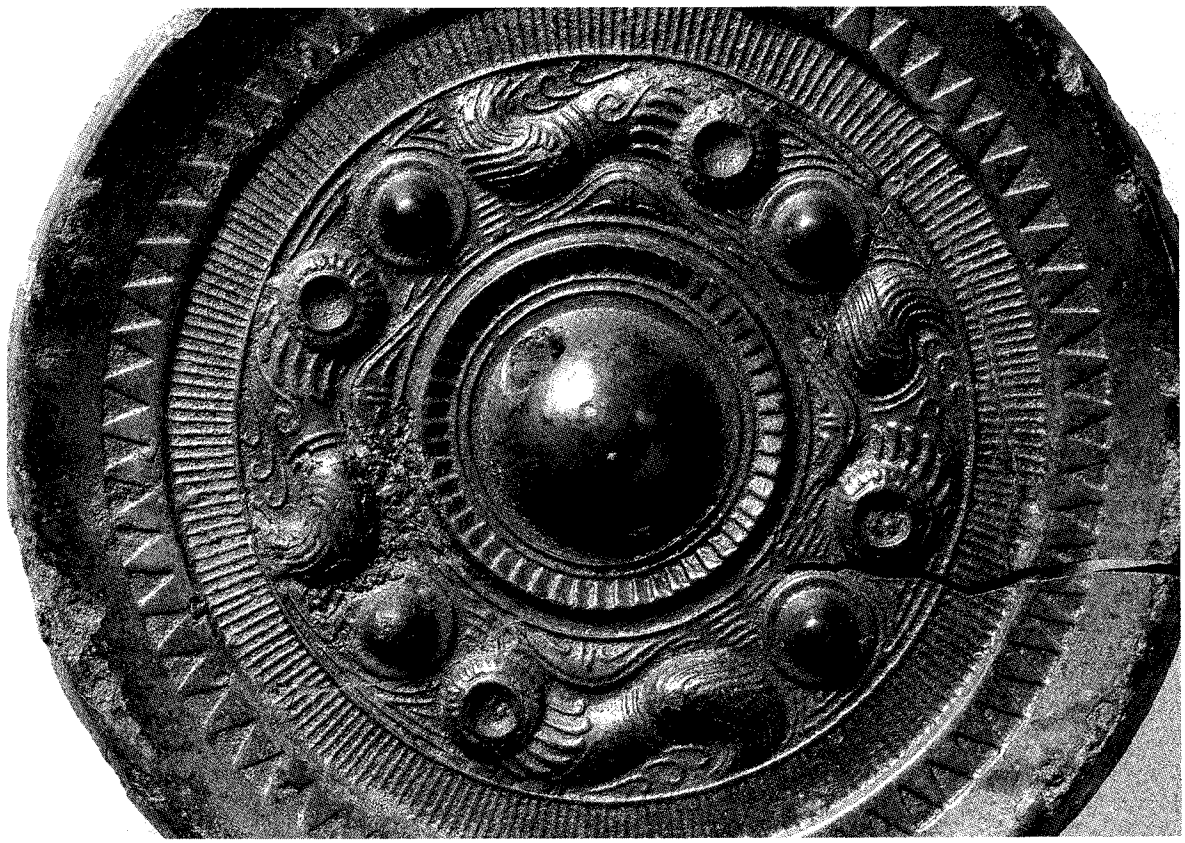
3　捩文鏡　30　細部



4　珠文鏡　27　細部

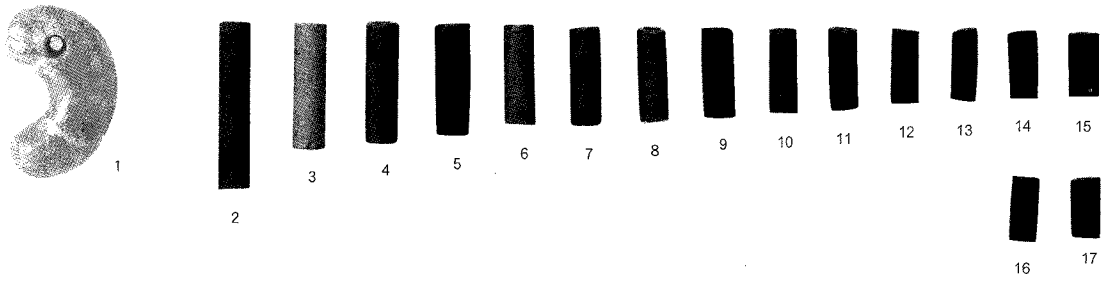


1　四獣鏡　28

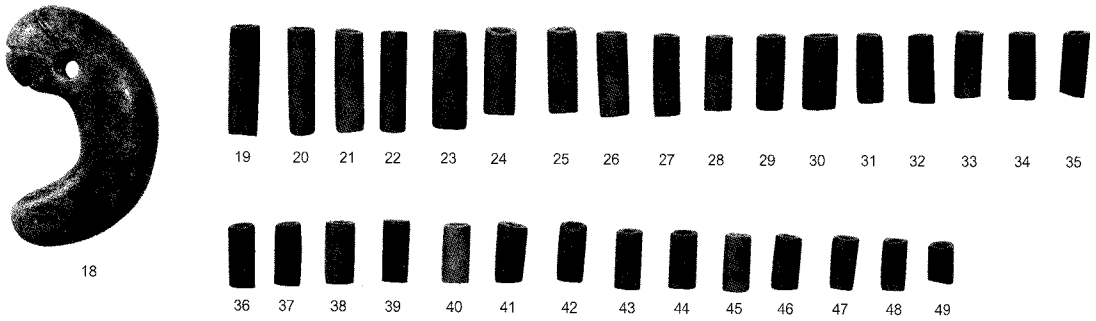


2　四獣鏡　38

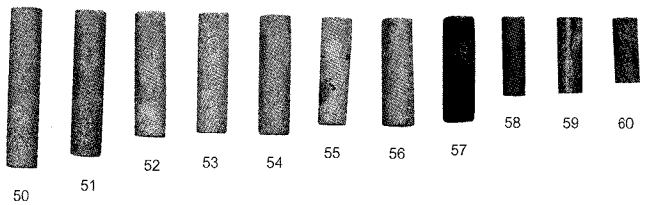
A群



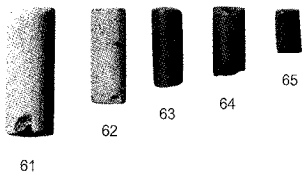
B群



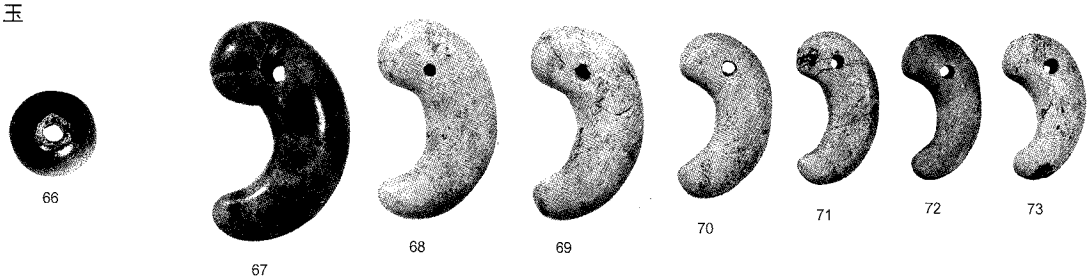
C群



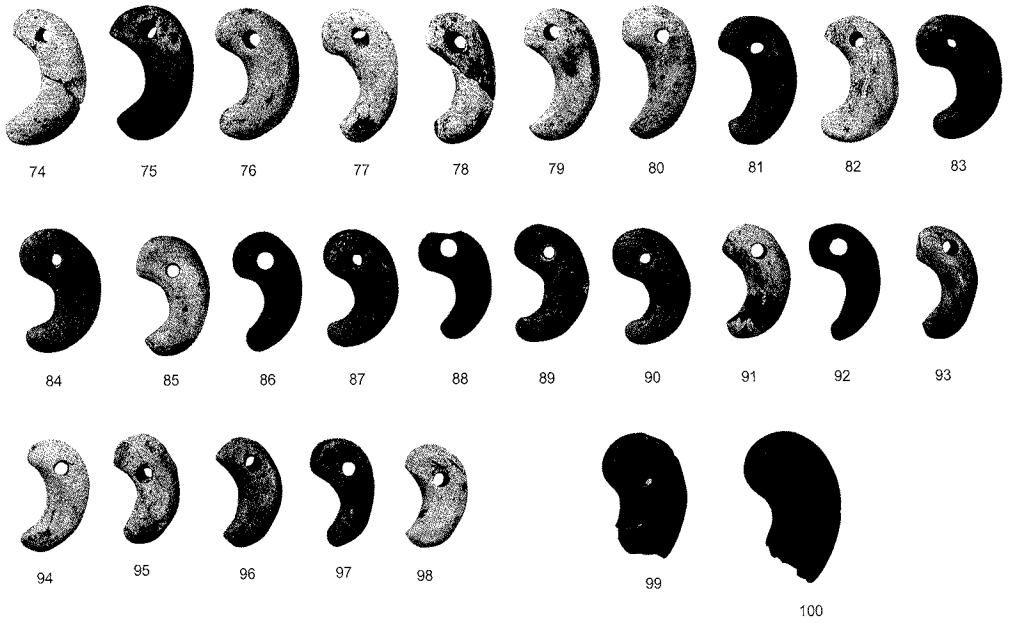
D群



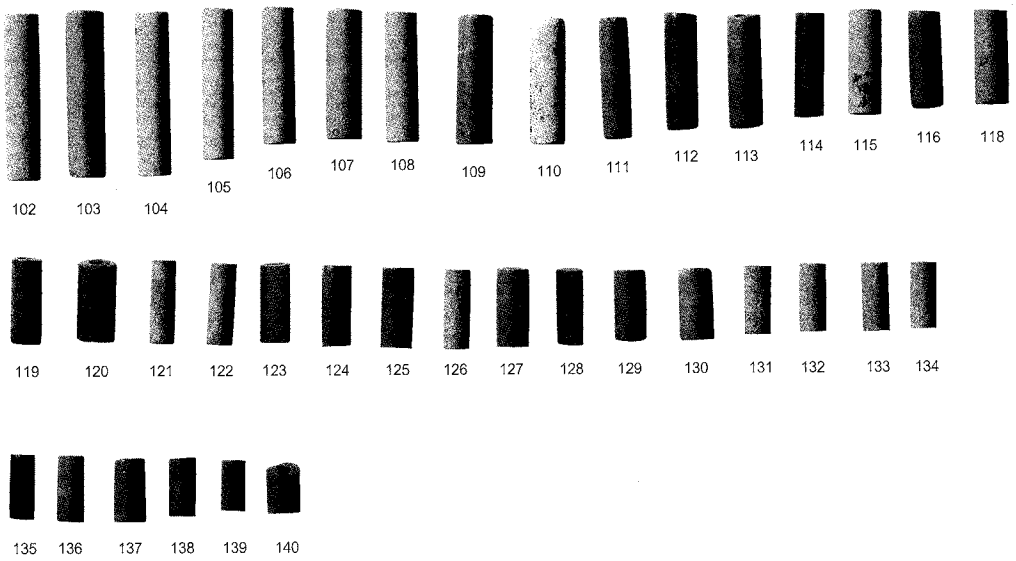
丸玉・勾玉



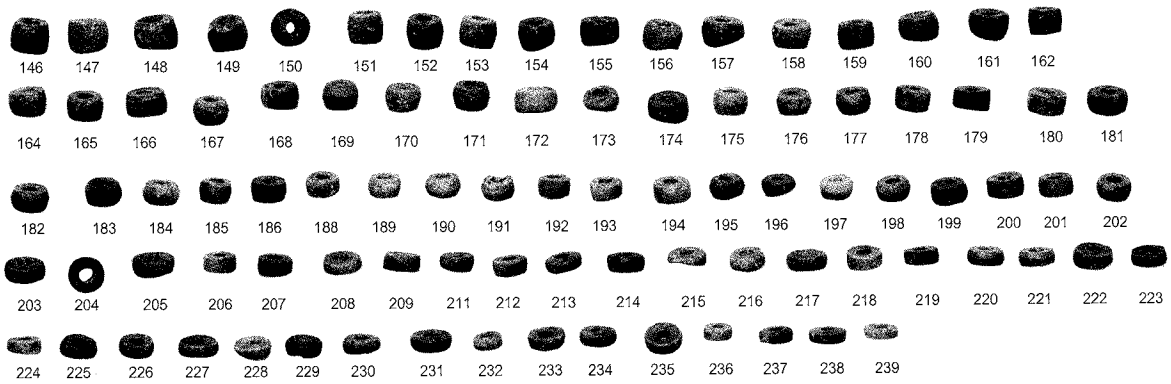
玉類（1）


74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

管玉（群外）


102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140

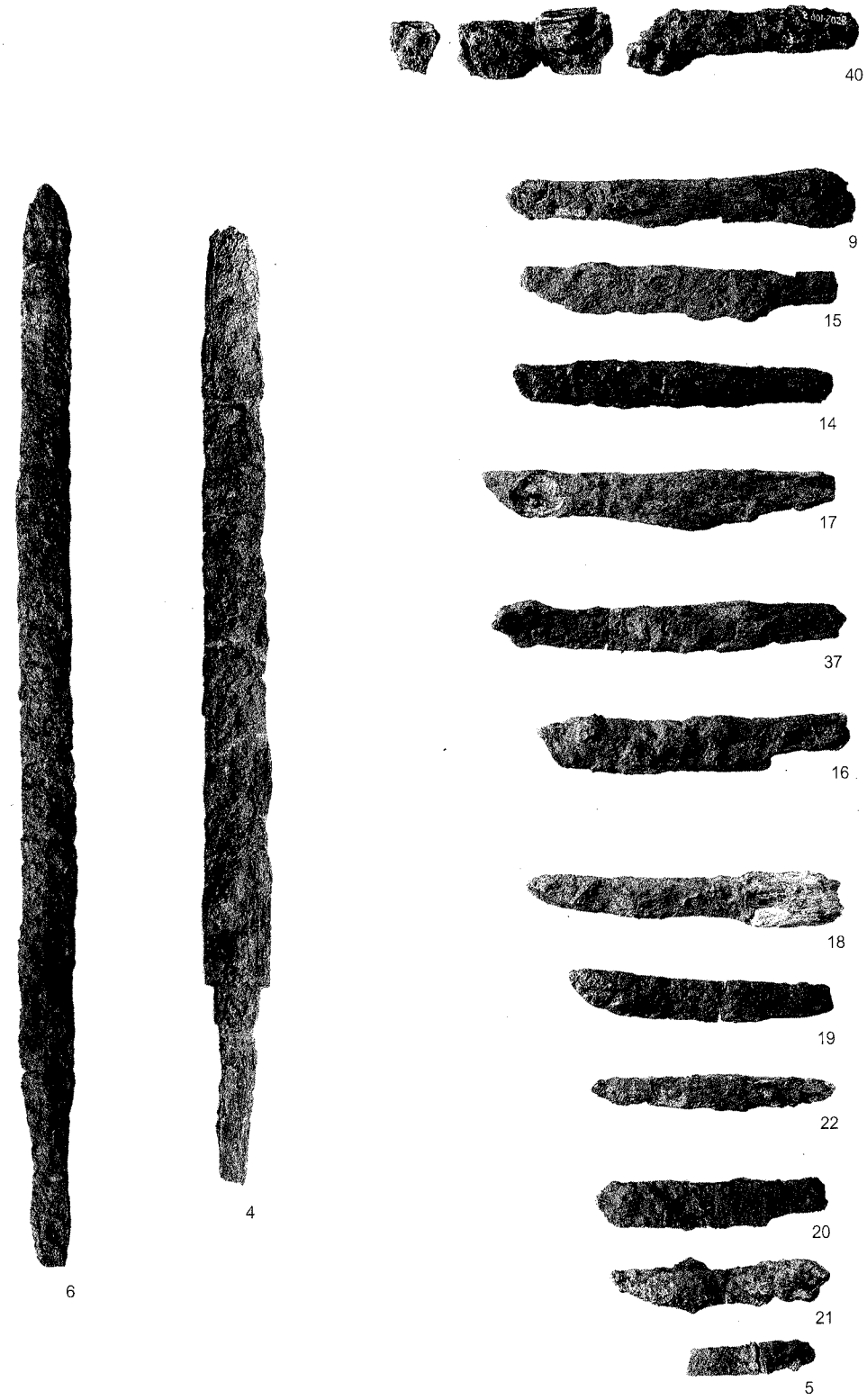
臼玉


146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239

玉類（２）

鉄器（1）

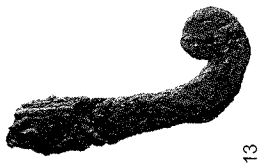
図版　54



鉄器（２）

11

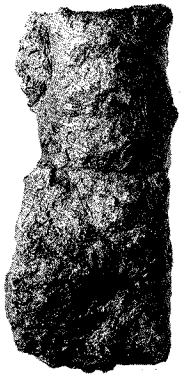
12


13

26

41

35


42

36

23

34

46

24

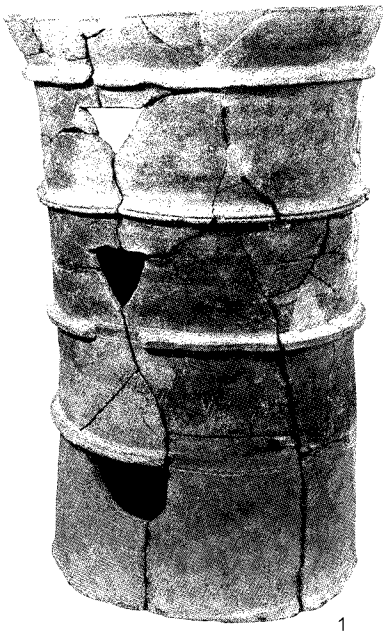
25

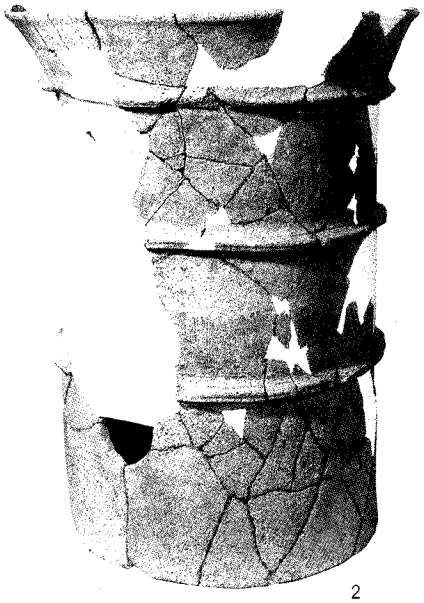
43

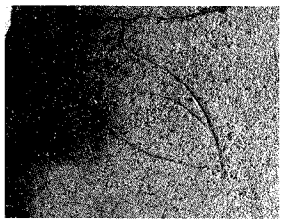
鉄器（３）

44

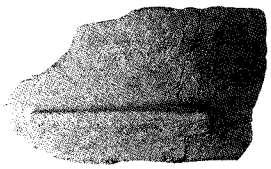
短甲

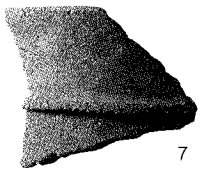

1


2


2（線刻）

5


6


7

8

9

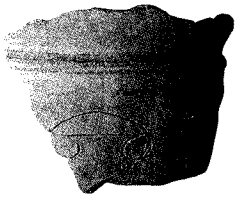
10

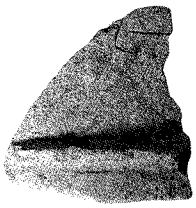
13

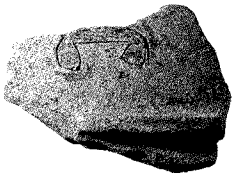
24

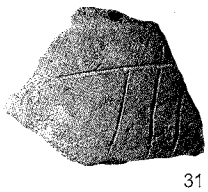
26

27


28

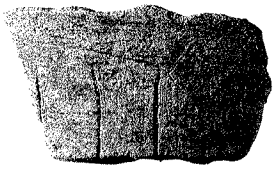

29


30

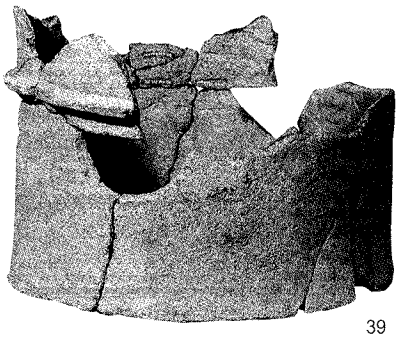

31

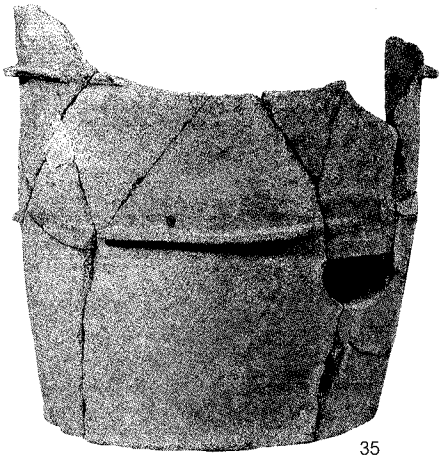
32

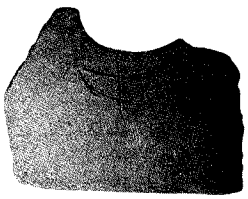
埴輪（1）

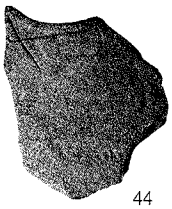

33

34


39


35


43


44

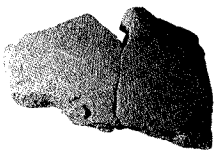
46

45

47

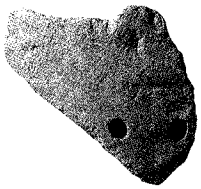
埴輪（２）

50



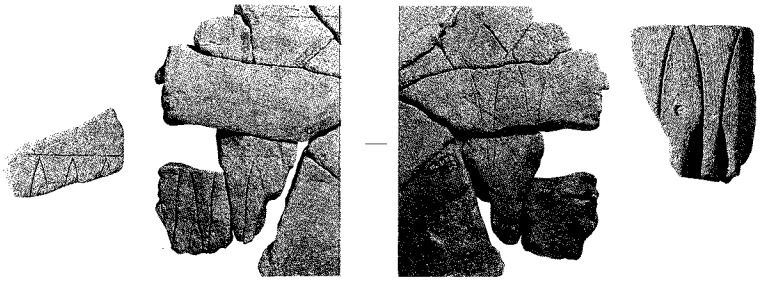
53

55



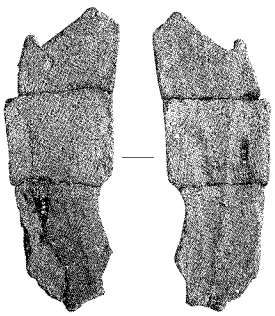
57

59



59（細部）

60



61

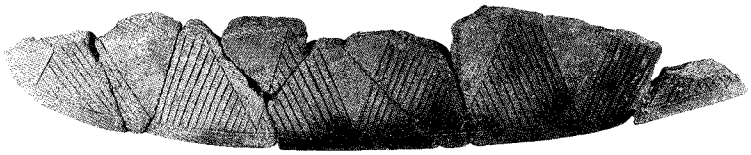
62

63

64

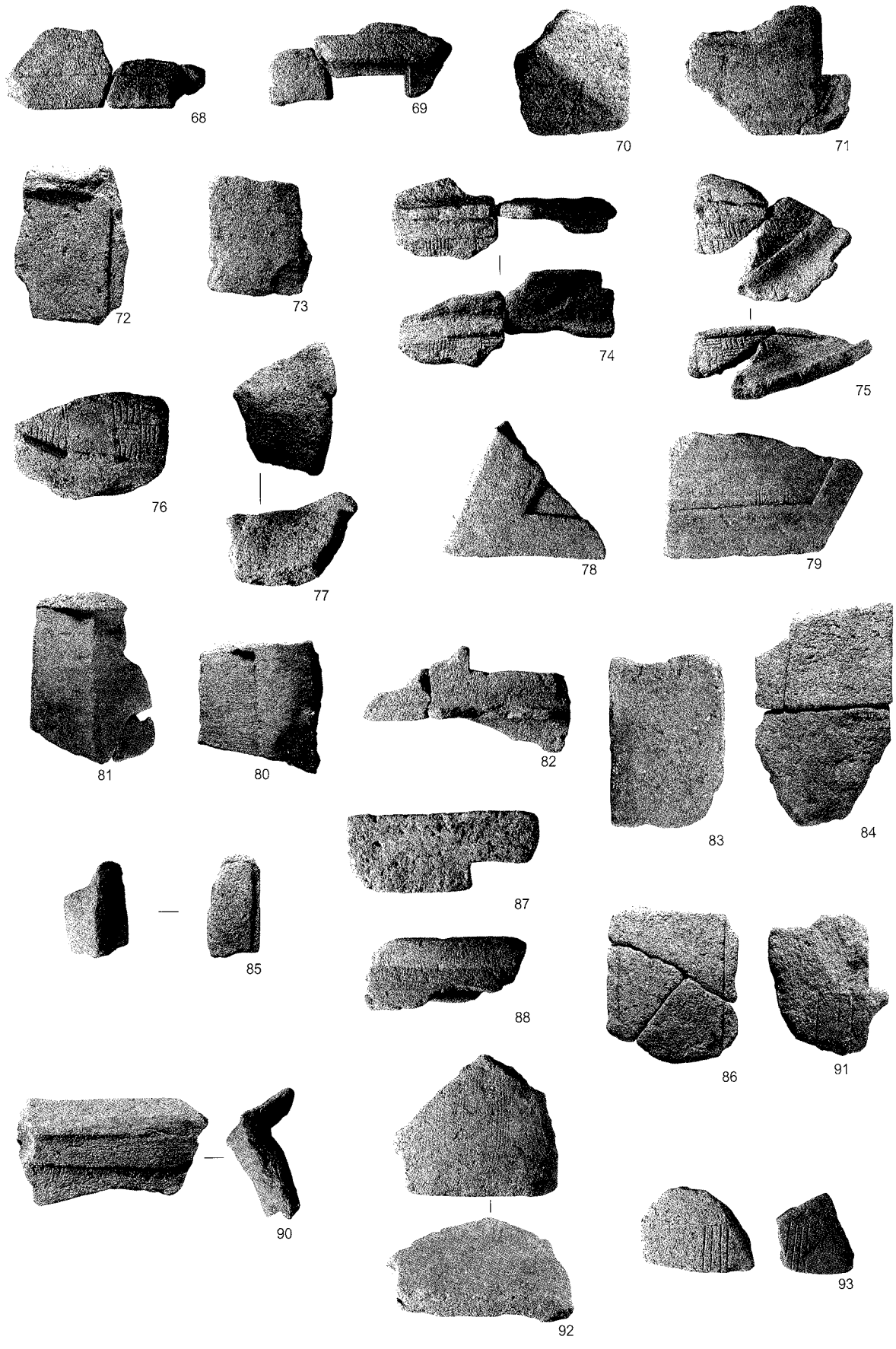
65

66



67

埴輪（3）

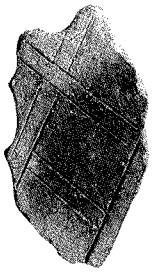

68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
81
80
82
83
84
87
85
88
86
91
90
92
93

埴輪（４）

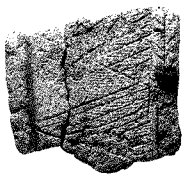
94

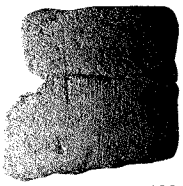
95

97

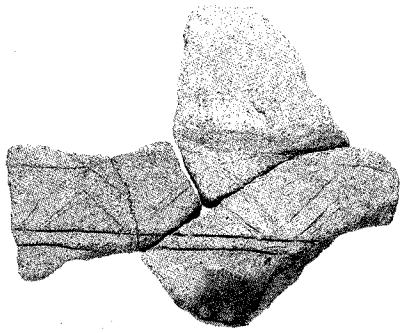


98


99


100

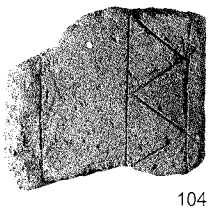
101



105

102

103


104

5

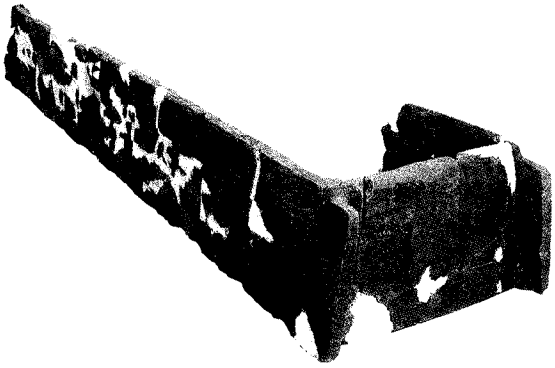
6

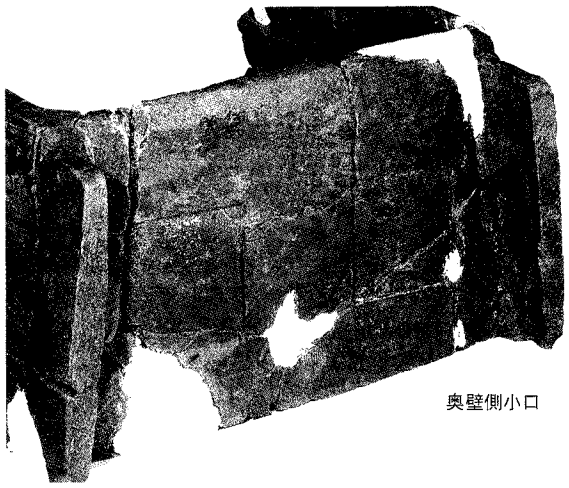
2

21

22

埴輪（５）・土師器

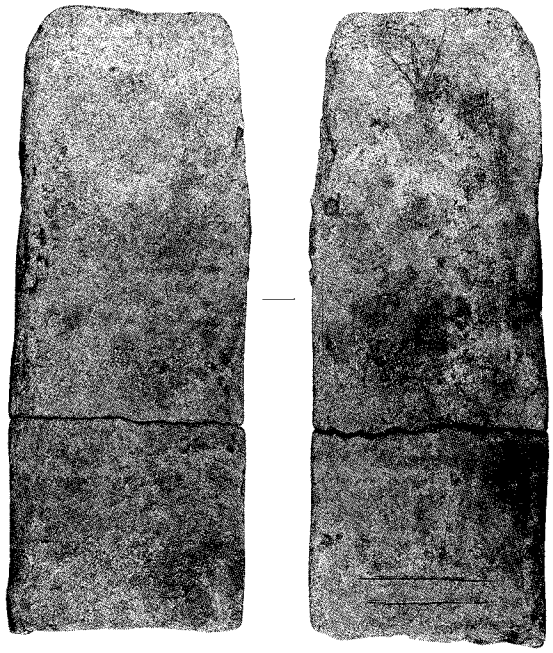




奥壁側小口

2 号棺

47



48

2 号棺・土製板

報告書抄録

ふりがな	すきざきこふん
書名	鋤崎古墳
副書名	－1981～1983年調査報告－
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第730集
編著者名	杉山富雄・柳沢一男・森下章司・橋本達也・鈴木一有・加藤一郎・比佐陽一郎・久住猛雄・片多雅樹
発行機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神1-8-1　TEL 092-711-4667
発行年月日	2002（平成14）年３月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
すきざき 鋤崎古墳	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 にしくいまじゅくあおき 西区今宿青木	130	00872	33° 34' 20"	130° 17' 20"	19821101 ～ 19821230 19830717 ～ 19831202	661	重要遺跡確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
すきざきこふん 鋤崎古墳	古墳	古墳時代前期末～中期初頭	前方後円墳 横穴式石室１ 埴輪棺３ 小石棺１	銅鏡５、玉240、長方板革綴短甲１鉄剣２、鉄刀６鉄鉾２、刀子14針５、土師器など埴輪（円筒・朝顔形・壷形、鰭付円筒・朝顔形。各種の形象埴輪）	墳長62mの前方後円墳。埋葬施設は後円部最上段の横穴式石室のほか、墳丘上から埴輪棺３、小石棺１。横穴式石室内は未掘状態で検出。円筒埴輪列、形象埴輪の樹立状況が判明。

鋤崎古墳

－1981～1983年調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第730集

2002年（平成14年）３月29日

編集・発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印　　刷　井上印刷株式会社
福岡市博多区千代4-10-25

鋤崎古墳

SUKIZAKI TUMULUS

Excavations and Studies of
Keyhole-Shaped mounded tomb
in Imajuku, Fukuoka

福岡市埋蔵文化財調査報告書第730集

2002

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY
JAPAN
March 2002

福岡市教育委員会